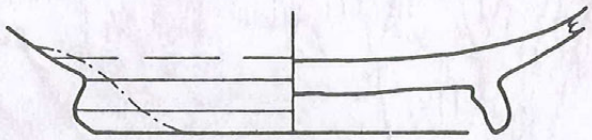
長野県木曽郡三岳村

小島（おじま）遺跡

―中山間総合整備事業＜木曽中部地区＞に伴う発掘調査報告書―



2003.9

長野県木曽地方事務所
三岳村教育委員会

長野県木曽郡三岳村

小島（おじま）遺跡

— 中山間総合整備事業＜木曽中部地区＞に伴う発掘調査報告書 —

2003.9

長野県木曽地方事務所
三岳村教育委員会

小島遺跡遠景－王滝川を挟んだ対岸より

小島遺跡遠景－遺跡が広がる中・上位段丘

SK527打製石斧出土状態

SB15出土墨書土器

序

御嶽山への登山客で賑わった夏も過ぎ、御嶽の里三岳村もいよいよ実りの秋を迎えようとしております。

この度三岳村では県営中山間総合整備事業(木曽中部地区)により、水田及び畑の土地改良を目的とした小島地区のほ場整備を実施することとなり、関係機関と協議の上、同地区の小島遺跡に眠る埋蔵文化財を記録保存するための発掘調査を行うこととなりました。

教育委員会では発掘調査及び整理作業の技術指導を木曽広域連合に委託し、その作業にあたっては(社)木曽シルバー人材センター、又、地元の皆さんの多大なるご協力を得ることができました。

その結果、縄文時代から平安時代までの集落跡が発掘され、その中から多くの土器や石器、特徴あるカマド跡や墨書土器などが出土しました。これらは当時の集落の変遷を今日に伝える貴重な資料であり、記録として後世に残すため、この調査報告書を刊行しましたので、是非ご高覧いただきたいと思います。

本調査にご協力いただきました木曽広域連合、(社)シルバー人材センターをはじめ、多くの皆様方に心より感謝を申し上げ、はじめの言葉と致します。

平成１５年９月

三岳村教育委員会
教育長　梶　原　隆　彦

例　　言

1　本書は中山間総合整備事業〈木曽中部地区〉の実施に伴う長野県木曽郡三岳村小島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業は、三岳村教育委員会が木曽地方事務所の委託を受けて実施した。三岳村教育委員会では『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』に基づき、木曽広域連合に調査指導を委託した。これを受けて木曽広域連合では、長野県教育委員会の指導のもと発掘調査に係る技術指導を㈶長野県埋蔵文化財センターに、整理作業の一部を㈱東京航業研究所に委託して業務を遂行した。

3　調査は平成13年度に試掘調査を、翌14年度より本発掘および基本的な整理作業を実施し、平成15年度に発掘調査報告書の作成ならびに刊行を行った。

4　調査にあたっては、以下の諸作業をそれぞれの事業者に委託して行った。
試掘・表土除去：白澤建設・大林工業㈱　各種測量業務：㈲奥原測量設計事務所　復原土器実測：㈱シン技術コンサル　石器実測・属性評価：㈱アルカ　自然科学分析：パリノ・サーヴエイ㈱

5　発掘調査および整理に際し、以下の諸氏、諸機関より御指導と御協力を賜った。（順不同、敬称略）
出口一治　南村敏夫　西村千早　大島聡　木下宏　下平利夫　下畑重一　巾兼義　武居一三　小島勝彦　田上金松　下田弘美　佐倉厚志　安斎正人　神村透　桐原健　佐々木藤雄　嶋本慶子　周東一也　樋口昇一　百瀬長秀　山村貴輝　山本典幸　長野県教育委員会　長野県埋蔵文化財センター　岐阜県文化財保護センター　塩尻市教育委員会　㈳木曽シルバー人材センター　㈱東京航業研究所

6　発掘調査および整理作業の参加者は、以下のとおりである。
安江さつえ　石山知恵子　石山元久　上田みどり　上ノ原順一　大島文雄　大屋美代子　大洞和子　荻村クマ　小野美江子　外戸悦子　栢木大和　梶原由美　上出サダ子　上村たけ子　上村由美子　輿寛夫　小林佳奈子　斉藤圭永子　下出芳夫　下出秀夫　下野信弘　下野戸邦子　下畑清志　下本巌　下本和代　正沢尊春　鈴木壮六　田上斎　高桑俊雄　田代みね　出口一治　中田兼男　中田利子　中谷賢一　中村すぎ　野村辰雄　橋渡喜代子　畑口正一　原敏雄　半場けさ　藤原芳子　古野信夫　松本み江　丸山博次　南村美千代　村田静江　村田良雄　森口てる子　保田かつ子　山崎定雄　和田智幸　和出よ志子

7　本書の執筆は第Ⅰ章第１・２節を畑中弥寿之が、それ以外を三原良文と今井千恵が共同で行い百瀬忠幸が加筆した。第Ⅲ章に㈱アルカ、第Ⅴ章にパリノ・サーヴェイ㈱の原稿をそれぞれ掲載した。

8　本遺跡出土資料および図面類等は三岳村教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構全体図１：500　竪穴住居跡１：60　炉址等１：30　掘立柱建物跡１：60　土坑１：20、１：40　焼土址１：40　柵列状遺構１：80　遺物集中区１：80　性格不明遺構１：400　縄文土器１：４、１：６　拓本１：３　灰釉陶器等１：３　鉄器等１：３　石器類１：２、１：４（砥石）、１：８（台石等）

2　遺構実測図中のレベル値は海抜高を、方位は真北を示す。

3　遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

4　遺構実測図中のスクリーントーンは焼土化範囲または焼土の堆積・炭化物範囲を、遺物実測図中のスクリーントーンは黒色処理または付着物・摩滅範囲を、同断面図の墨塗りは須恵器であることを示す。

目　　次

序
例　言
凡　例
第Ⅰ章　調査の概要……1
第1節　調査に至る経緯……1
第2節　調査体制と経過……1
第3節　調査と記録の方法……3
第4節　基本層序……3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……7
第1節　遺跡の立地と自然環境……7
第2節　遺跡を取巻く歴史環境……7
第Ⅲ章　原始時代の遺構と遺物……10
第1節　遺　　構……10
1）竪穴住居跡……10
2）掘立柱建物跡……22
3）土　　坑……27
4）焼 土 跡……48
5）遺物集中区……50
6）性格不明遺構……52
第2節　遺　　物……54
1）土　　器……54
2）土 製 品……59
3）石　　器……76
第Ⅳ章　古代～中・近世の遺構と遺物……121
第1節　遺　　構……121
1）竪穴住居跡……121
2）掘立柱建物跡……139
3）柵列状遺構……139
4）土　　坑……143
第2節　遺　　物……148
1）遺構内出土遺物……148
2）遺構外出土遺物、鉄製品等……156
第Ⅴ章　自然科学分析……158
第1節　土器の胎土分析・X線回折分析……158
第2節　黒曜石の産地同定分析……166
第Ⅵ章　成果と課題……170
写真図版
あとがき
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　基本土層断面図……4
第２図　調査区とグリッドの設定　……5・6
第３図　小島遺跡の位置と周辺の遺跡……8
第４図　原始時代の遺構分布図……11
第５図　SB６実測図　……12
第６図　SB８実測図　……13
第７図　SB９・12実測図　……15
第８図　SB10・11・13実測図　……17
第９図　SB14実測図　……19
第10図　SB22・23実測図　……21
第11図　SB23出土磨痕礫・台石　……23
第12図　SB25実測図　……23
第13図　ST２実測図　……24
第14図　ST３・５実測図　……25
第15図　ST４実測図、出土遺物　……26
第16図　土坑の時期別・形態別分布図　……28
第17図　SK実測図（１）……31
第18図　SK実測図（２）……32
第19図　SK実測図（３）……34
第20図　SK実測図（４）……37
第21図　SK実測図（５）……38
第22図　SK実測図（６）……40
第23図　SK出土磨痕礫　……40
第24図　SF実測図、出土磨痕礫　……49
第25図　SQ１実測図　……50
第26図　SQ２実測図　……51
第27図　SX１分布範囲及び微細図　……53
第28図　時期別遺物垂直分布図……53
第29図　出土土器（１）……60
第30図　出土土器（２）……61
第31図　出土土器（３）……62
第32図　出土土器（４）……63
第33図　出土土器（５）……64
第34図　出土土器（６）……65
第35図　出土土器（７）……66
第36図　出土土器（８）……67
第37図　出土土器（９）……68
第38図　出土土器（10）……69
第39図　出土土器（11）……70
第40図　出土土器（12）……71
第41図　出土土器（13）……72
第42図　出土土器（14）……73
第43図　出土土器（15）……74
第44図　出土土器（16）、土製品　……75
第45図　SB９（縄文前期末葉）出土石器　……94
第46図　SB９（縄文前期末葉）出土石器　……95
第47図　SB８（縄文中期中葉）出土石器　……96
第48図　SB８（縄文中期中葉）出土石器　……97
第49図　SB８（縄文中期中葉）出土石器　……98
第50図　SB14（縄文中期中葉）出土石器　……99
第51図　SB14（縄文中期中葉）出土石器……100
第52図　SB14（縄文中期中葉）出土石器……101
第53図　SB14（縄文中期中葉）出土石器……102
第54図　SB14（縄文中期中葉）出土石器……103
第55図　SB14（縄文中期中葉）出土石器……104
第56図　SK・ST（縄文中期中葉）出土石器　……105
第57図　SQ１（縄文中期中葉）出土石器……106
第58図　SK出土石器（縄文後期）……106
第59図　遺構外出土石器（縄文晩期－弥生）……107
第60図　SB９（縄文前期末葉）出土石器実測図……108
第61図　SB９～12（縄文前期末葉）出土石器実測図…109
第62図　SK153（縄文前期末葉）出土石器実測図　……109
第63図　SQ２（縄文前期末葉）出土石器実測図……109
第64図　SB８（縄文中期中葉）出土石器実測図……110
第65図　SB８（縄文中期中葉）出土石器実測図……111
第66図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図……112
第67図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図……113
第68図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図……114
第69図　SB22・23（縄文中期中葉）出土石器実測図…115
第70図　SK（縄文中期中葉）出土石器実測図……115
第71図　SK・遺構外出土石器実測図……116
第72図　石器の使用痕写真　……119
第73図　古代・中世の遺構分布図　……122
第74図　SB１・２実測図……123
第75図　SB３・５実測図……125
第76図　SB４・７実測図……127
第77図　SB15実測図……129
第78図　SB16実測図……130
第79図　SB17実測図……131
第80図　SB18遺物・礫出土状況……133
第81図　SB18実測図……134
第82図　SB19実測図……136
第83図　SB20・24実測図……137
第84図　ST１、SA１～４実測図　……140
第85図　SA５～８実測図……142
第86図　SK実測図（１）……144
第87図　SK実測図（２）……145
第88図　SK実測図（３）……147
第89図　出土遺物（１）……149
第90図　出土遺物（２）……150
第91図　出土遺物（３）……151
第92図　出土遺物（４）……152
第93図　出土遺物（５）……154
第94図　出土遺物（６）……155
第95図　出土遺物（７）－　中・近世の焼物　……156
第96図　出土遺物（８）－　銭貨　……156

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

本書に所収する小島遺跡の発掘調査は、長野県木曽郡三岳村小島地区において、水田ならびに畑の土地改良を目的とした県営中山間総合整備事業（木曽中部地区）が計画され、平成14年度から実施されることになったため関連して行われた。

事業対象の小島地区内には小島遺跡が周知の遺跡として登録されていたことから、長野県教育委員会・木曽地方事務所土地改良課・三岳村教育委員会の３者で協議を行い、事前の調査を行うこととなった。平成13年度に試掘による分布調査を行った結果、事業地内に埋蔵文化財の分布が確認されたため、事業実施前に発掘調査による記録保存が必要と判断した。

事業予定地内の試掘調査および包蔵地の発掘調査にあたっては、木曽地方事務所と三岳村のあいだで埋蔵文化財発掘（試掘）調査業務に関する委託および受託契約を結び、三岳村教育委員会が実施した。

三岳村は、『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』に基づいて、木曽広域連合と発掘調査指導委託契約を締結した。一方、木曽広域連合では長野県教育委員会の指導に準拠しつつ、発掘調査の技術指導業務を㈶長野県埋蔵文化財センターに、報告書作成業務の技術支援を㈱東京航業研究所にそれぞれ委託した。

以上の経緯のもと、小島遺跡に対する試掘から本発掘、整理と報告書刊行に至る一連の調査が行われた。

第２節　調査体制と経過

試掘調査および本発掘調査、整理作業から発掘調査報告書の発刊に至る経過は、以下に掲げるとおりである。年度を追って概略を記す。

平成13（2001）年度　試掘調査（試掘調査対象面積：46,000㎡）

調査期間　平成13年８月20日～平成13年11月30日（現場・整理作業）

調査体制　事　務　局　三岳村教育委員会
梶原隆彦（教育長）
竪道和巳（教育次長）
畑中弥寿之（社会教育係）
小島宗徳（社会教育指導委員）
学術担当者　百瀬忠幸（木曽広域連合）

調査経過　７月12日　県教育委員会へ記録保存の意見書提出
７月30日　木曽広域連合と発掘調査指導委託協議
８月６日　木曽地方事務所へ埋蔵文化財試掘調査業務受託経費の提示
８月10日　試掘調査について地権者を含めた関連機関による保護協議
８月10日　木曽広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託契約を締結
８月20日　木曽地方事務所と埋蔵文化財試掘調査業務委託契約を締結
８月28日　第１次試掘調査（～30日）

10月22日　第２次試掘調査（～23日）
10月26日　木曽広域連合から結果報告書の提出
11月16日　試掘調査の結果と事業計画についての関係者協議

平成14（2002）年度　発掘調査（調査面積：13,335㎡）

調査期間　平成14年６月11日～平成15年３月31日（現場・整理作業）

調査体制　事　務　局　三岳村教育委員会
梶原隆彦（教育長）
竪道和巳（教育次長）
畑中弥寿之（社会教育係）
小島宗徳（社会教育指導委員）
学術担当者　百瀬忠幸（木曽広域連合）
技術指導者　㈶長野県埋蔵文化財センター（指導担当：廣田和穂、調査員：贄田明）

調査経過　３月28日　木曽地方事務所へ埋蔵文化財発掘調査業務受託経費の提示
４月10日　文化庁、県教委へ国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請
４月15日　木曽地方事務所と埋蔵文化財試掘調査業務委託契約を締結
６月１日　木曽広域連合と調査指導委託協議
６月４日　発掘調査の事業計画について関係者協議
６月11日　木曽広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託契約を締結
～　発掘調査（～12月６日）
～　整理作業（～３月31日）
11月20日　木曽地方事務所と埋蔵文化財発掘調査業務委託変更契約の締結
１月14日　文化庁へ国宝重要文化財等保存整備費補助金変更申請
２月３日　木曽広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託変更契約を締結

平成15（2003）年度　報告書作成

作成期間　平成15年４月30日～平成15年９月30日

作成体制　事　務　局　三岳村教育委員会
梶原隆彦（教育長）
田口俊久（教育係長）
畑中弥寿之（社会教育係）
学術担当者　百瀬忠幸（木曽広域連合）
技術支援者　㈱東京航業研究所（支援担当：三原良文、今井千恵）

作成経過　４月24日　木曽広域連合と報告書作成指導委託協議
４月24日　木曽地方事務所へ発掘調査報告書作成業務受託経費の提示
４月30日　木曽地方事務所と発掘調査報告書作成指導業務委託契約の締結
４月30日　木曽広域連合と報告書作成指導委託契約締結
５月６日　木曽地方事務所と発掘調査報告書作成業務委託契約の締結
９月30日　調査報告書発刊

第３節　調査と記録の方法

調査の開始にあたり、地元教育委員会に事業者および長野県教育委員会を交えた３者による保護協議において、面的な本調査の実施を必要とする旨が確認された範囲、すなわち試掘調査の結果から遺構と遺物の遺存が認められ、かつ工事を施工するうえで遺跡の保護が困難と判断された区域を調査区と定めた。同区域における調査範囲のまとまりごとにⅠ～Ⅳ区という調査区名称を付与し、Ⅳ区からⅠ区へと順を追って、記録保存を目的とした今回の緊急発掘調査を進めた（第２図）。

発掘に際しては、国土地理院の平面直角座標に準拠した基準点（第Ⅷ系原点、Ｘ＝0.0000・Ｙ＝0.0000の第３象限内にある区切りのいい任意のＸ・Ｙ座標）をもとに、調査区全体を網羅する８×８ｍグリッドを設定した。各グリッドには、北西隅を起点として東西方向にアルファベトのＡ～Ｘを、南北方向に算用数字の１～27の文字をそれぞれ与え、測量および遺物取上げ等の基準として用いた。よって、本文中に記載の座標値およびグリッド名称はすべてこの表記に準拠している。

発掘作業は重機による表土層の除去から開始し、以降、人力により遺構検出と掘削、遺構精査と記録等の調査を行った。表土層および遺構の掘削に際しては、技術指導担当者の不手際により検出面や遺構の把握、遺物包含層等の調査に充分な配慮が払われなかった可能性があり、報告書の作成時において検証不可能な混乱を残した点は否めない。出土遺物については、全点記録および層位別取上げを原則とした。

測量図等の作成は上述のグリッドを基準として手実測および航空測量を併用して行った。記録にあたっては遺跡記号として「ＭＯＪ」を、遺構記号として次の略称を用い、記号ごと検出順に番号を付した。

遺構記号　ＳＢ：約３ｍ以上の方形、円形、楕円形等を呈する定型的な掘り込み。
ＳＴ：ピット状の土坑が一定間隔で並び、その配置が方形、長方形等となるもの。
ＳＫ：ＳＢより規模が小さな掘り込み。土坑。
ＳＦ：熱により焼土化した範囲が単独で面的に広がるもの。
ＳＡ：ピット状の土坑が直線的に並び、一連の構造物またはその一部と認められるもの。
ＳＱ：遺物が一定の纏まりをもって集中的に出土し、その範囲が周囲と峻別できるもの。
ＳＸ：性格が明らかでない不特定な遺構。本遺跡では不整形な掘り込み群を総称した。

第４節　基本層序

本遺跡は次章で述べるとおり、木曽川の支流である王滝川に面する河岸段丘上に立地している。岩盤の上に厚く堆積した砂礫層が永年の侵食作用を受けて段丘地形を形成し、その上部を二次的な堆積を含めたローム層（黄褐色土層）が覆って基盤土となる。段丘は現状３段が確認でき、それぞれを上位段丘・中位段丘・下位段丘として認識した。中位段丘はさらに比高約１ｍの小段差によって、上段と下段とした２つの地形面に分けられる。調査により確認された基本的な層序の在り方は、以下に示すとおりである。

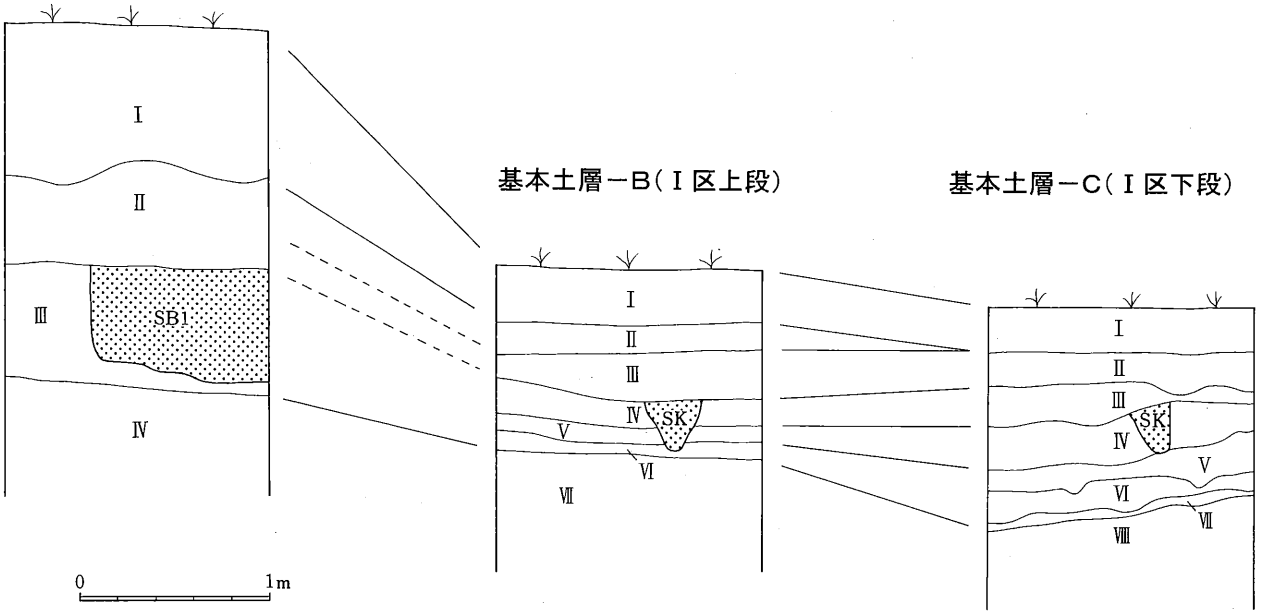
基本土層　Ａ（Ⅳ区北壁部）

Ⅰ層　現耕作土

Ⅱ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）粘性・しまりなし。約10㎜大の小礫を多く含む。下部に平安時代遺物を包含する。

Ⅲ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）粘性・しまりなし。約10㎜大の小礫を多く含む。

基本土層－A(Ⅳ区北壁)



第１図　基本土層断面図

Ⅳ層　黄褐色土（10ＹＲ５／６）粘性あり、しまりなし。約10㎜大の小礫と10～50㎝大の角礫を多く含む。混礫ローム層。

基本土層　Ｂ（Ⅰ区上段）

Ⅰ層　現耕作土

Ⅱ層　灰褐色土（10ＹＲ４／１）粘性・しまりあり。約５㎜大の小礫含む。旧水田土壌。

Ⅲ層　黒褐色土（7.5ＹＲ３／１）粘性・しまりあり。Ⅳ層に比べやや赤みを帯びる。粗粒砂を少量含む。

Ⅳ層　黒色土（10ＹＲ２／１）しまり弱く、粗い白色砂粒を約10％含む。縄文時代中期の遺物を包含。

Ⅴ層　黒色土（10ＹＲ２／１）粘性なし。Ⅳ層に比べしまりがあり、粗い白色砂粒を約30％含む。

Ⅵ層　黒色土（10ＹＲ２／３）粘性なし。しまりあり、粗い白色砂粒を約30％含む。

Ⅶ層　褐色土（10ＹＲ４／４）粘性なし。しまりあり、約１～５㎜大の砂礫を多く含む。

Ⅷ層　砂礫層。黄褐色土（10ＹＲ５／６）を混じえる。

基本土層　Ｃ（Ⅰ区下段）

Ⅰ層　現耕作土

Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ３／２）

Ⅲ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）粘性・しまりあり。やや赤みを帯び、白色砂粒・炭化物を一定量含む。縄文時代中期の遺物を包含する。

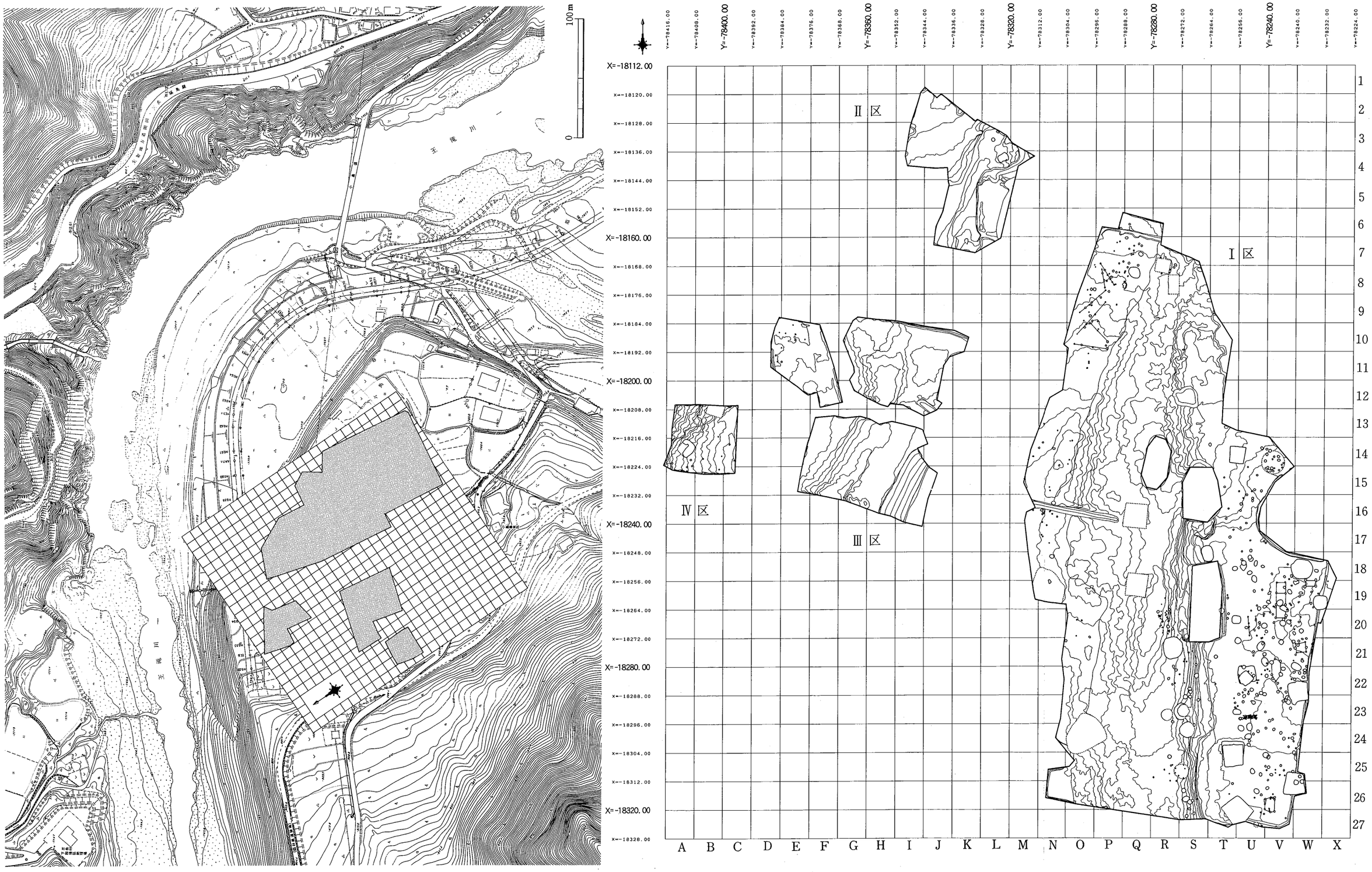
Ⅳ層　黒色土（10ＹＲ２／１）粗い白色砂粒を約20％含む。中～下部に縄文時代前期の遺物を包含する。

Ⅴ層　黒色土（10ＹＲ1.7／１）白色砂粒少なく、Ⅳ層に比べしまりが強い。

Ⅵ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）粗い白色砂粒を約５％含む。１～５㎝大の黒褐色土および黄褐色土ブロックが各30％程度混ざる。

Ⅶ層　鈍い黄褐色土（10ＹＲ４／３）粘性・しまりあり。粗い白色砂粒を含む。漸移層。

Ⅷ層　黄褐色土（10ＹＲ５／６）部分的に拳大～人頭大の礫を含む。



第２図　調査区とグリッドの設定

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地と自然環境

小島遺跡が所在する三岳村は、長野県の南西部を占める木曽郡のほぼ中央西寄りに位置する。長野・岐阜両県にまたがる霊峰御嶽山の山懐に擁かれた山村であり、木曽川によって開析された木曽谷を挟んで東に中央アルプスを望む。御嶽山麓には同山に源を発し、南北約100㎞にわたって細長くのびる木曽谷の中央付近で木曽川に合流する王滝川やその支流群による侵食作用で幾筋もの谷が形成され、複雑に入り組んだ襞状の地形が発達している。

三岳村は当にそうした御嶽山の山頂からその東側山麓にかけて広がる一帯を占めており、地形的には険しい岩場が連続する急峻な山岳部（標高1600m付近から上部）、森林と原野が続くなだらかな傾斜地形を見せる山地部（標高1200～1600m付近）、中・古生層の岩石を主とする基盤が永い年月の風化作用や浸食作用によって谷状の起伏を発達させた山麓部（標高1200m以下）に大別されている。

村内に残された遺跡の殆どは山麓部にあって、王滝川やその支流の流域に発達した河岸段丘上に主な占地の場を求めている。『三岳村誌　下巻』歴史編の記述によれば、「狭い段丘ではあるが、生活・生産の場として、まさにしがみつくようにして利用されていたことをその分布状況から知ることができる」と言えよう。また、このような生活適地は、平坦地の限られる山間部においてしばしば見られる在り方と同様に、現在に生きる人々にとっても格好の居住地区ともなっている。

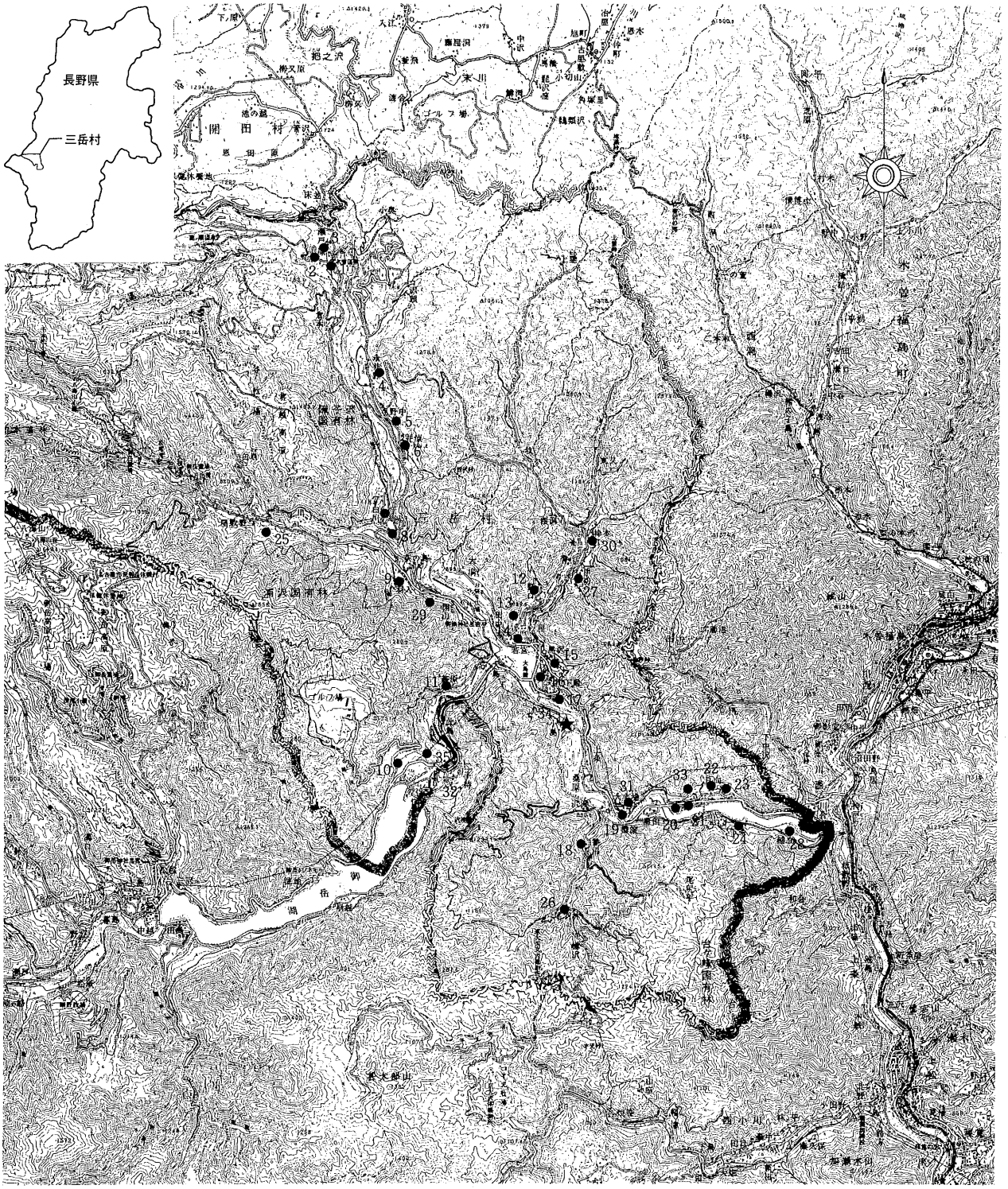
今回、埋蔵文化財発掘調査の対象となった小島遺跡もまた、王滝川流域に形成された河岸段丘上に立地する。王滝川が蛇行して急に向きを変える地点の右岸、東に向かって突き出すように形成された舌状の段丘地形を呈する部分に遺跡は形成されている。同地点の地形は大きく上位・中位・下位と３段の段丘面を有し、遺跡の広がりは中位段丘から上位段丘にかけて認められる。とりわけ、小規模な比高差を伴う２枚の平坦面によって構成される中位の段丘面が遺跡の主要な分布域となっており、20,000㎡を越える平坦部のほぼ全面にわたって縄文時代および平安時代を主とする遺跡が展開している。各段丘および平坦面は、東側を向く縁辺部が微高地状に高まる一方、段丘崖下が谷状にやや低まる形状をみせる。竪穴住居跡や土坑などによって構成される各期の集落は前者に居住の場を求める傾向を示し、その結果として、段丘縁辺部に竪穴住居跡など主要な遺構群が集中する様相を呈する。

両段丘の標高は上位段丘面が790～793m、中位段丘面が779～780mであり、現在の王滝川からの比高差は概ね28mならびに17mを測る。

第２節　遺跡を取巻く歴史環境

三岳村内には、縄文時代～平安時代、中・近世にかけての遺跡が多数確認されており、その数は現在までのところ35遺跡を数える。発掘調査がなされた事例が少なく、詳細を知れる遺跡は限られるものの、縄文時代と平安時代の遺跡が主体を占めている。この傾向は木曽郡下全体に共通した在り方であり、とりわけ縄文時代中期の遺跡がのべ21遺跡と多数を数える点も、大小の水系に沿った狭小な段丘上に分布する立地性向とともに、周辺地域の様相と一致する。

村内では旧石器時代に遡る遺跡は今のところ発見されていないが、縄文時代では少数ながらも中学校附



1 瀬戸原１遺跡	2 瀬戸原２遺跡	3 瀬戸原開拓地遺跡	4 永井野遺跡	5 野中遺跡
6 井原遺跡	7 白川１遺跡	8 白川２遺跡	9 羽入遺跡	10 和田遺跡
11 薮原遺跡	12 野口遺跡	13 三ッ屋遺跡	14 若宮遺跡	15 合戸遺跡
16 中学校附近遺跡	17 下殿遺跡	18 殿屋敷遺跡	19 大半場遺跡	20 日陰瀬遺跡
21 下村遺跡	22 日向遺跡	23 田口遺跡	24 下条遺跡	25 大沢遺跡
26 尾羽林遺跡	27 中切遺跡	28 越立遺跡	29 栩山遺跡	30 枠本遺跡
31 学校附近遺跡	32 黒瀬遺跡	33 田屋遺跡	34 小島遺跡	35 和田トリデ遺跡

第３図　小島遺跡の位置と周辺の遺跡

近遺跡や瀬戸ノ原２遺跡・野中遺跡など、さらに今回の発掘調査で明らかとなった本遺跡例を含めて、草創期～早･前期遺跡の存在が確認されており、古くから人々の営みが繰り広げられていたことが分かる。

続く縄文時代中期になると遺跡数が飛躍的に増加する。三岳村における埋蔵文化財調査の歴史上、大きな成果をもたらした若宮遺跡や村内ではかつて無い規模の発掘調査となった本遺跡など、郡下全体のなかでも比較的大きな遺跡も残される。若宮遺跡第２号住居址から出土した釣手土器は、底部に小孔が穿たれるなど類例に乏しい特徴をもっており、村の指定文化財に登録されている。

後・晩期では、木曽郡下はもとより長野県下においても遺跡数が激減することが知られている。しかし、三岳村内では本遺跡も含めて10遺跡以上が確認されているなど全遺跡数に占める比率は高く、比較的高密度に当該期の遺跡が分布していると言えるかもしれない。

縄文時代に次ぐ弥生時代に残された遺跡は、前期に属する野中遺跡と日陰渕遺跡などを除いてごく限られたものとなり、現在の三岳村内に人々が暮した痕跡は希薄となる。ただし、今回の小島遺跡の調査で表面採集資料１点のみではあるものの弥生時代後期の土器が確認され、今後の調査の進展によっては人々の継続的な生活の痕跡を示す遺跡が発見される可能性も低くはないと思われる。古墳時代および奈良時代の遺跡は、小島遺跡に近い山腹から出土した鉄鏃に古墳時代の遺物である可能性が指摘されている以外、現在のところ断片的な資料すらも欠いている。

村内に遺跡が数多く遺され、人々の営為が再び活発になるのは平安時代の一時期からであり、これまでに小島遺跡や平成９・10年度の発掘調査により20軒近い竪穴住居跡が確認された日向遺跡を含めて12遺跡以上の存在が知られている。９世紀中頃以降と推定される突如とした遺跡の増加は、木曽郡下さらには長野県下にも共通して見られる事象であり、『三岳村誌』に述べられているように「これは新たな開拓が進められ、それまで荒地だった地域を開拓し、生産域を拡大させていったため」と考えられている。このような人々の営みは、当時の政治的・社会的な状況を背景とした出来事であったと言え、本遺跡の該期集落もまた、そうした時代背景のもとに成立し消長した可能性が高い。上述の日向遺跡に程近い三尾阿弥陀堂には、平安時代の作といわれる「木造阿弥陀如来座像」（県有形文化財指定）が安置され、今も厚い信仰を集めている。

鎌倉時代以降、中・近世の遺跡は野口遺跡や下村遺跡など少数にとどまっているが、村内には木曽氏に関連する伝承や遺址が少なからず認められる。小島遺跡もそのひとつであり、同地籍には木曽氏の家臣であった小島氏が居館を構えていたとされる。また、『木曽旧記録』などによれば、天正10年（1582年）に織田信長方について武田勝頼の軍勢と戦った木曽家19代義昌の遺子、仙十郎義一（義通）が小島氏の庇護を受けて潜居した地とされ、遺跡が所在する地区内には木曽義昌の夫人であり武田信玄の三女、真理姫にゆかりのある石地蔵や五輪塔、長禄４年（1460年）の銘が刻まれた鰐口を所蔵する八幡社が残る。

小島の地名が文献上に初出するのは、天文23年（1554年）の御嶽神社本社棟札にある「三尾村之尾島」の記載とされる。これは“尾”のように突出した半島状の地形に由来したものなのか定かではないが、遺跡地の立地を見事に言い当てており、同地籍が“こじま”ではなく“おじま”と言い習わされている点からも興味深い。

＜引用・参考文献＞

青沼博之他　1988 『三岳村誌』下巻　三岳村誌編さん委員会

松原和也他　1999 『日向遺跡』 三岳村教育委員会

第Ⅲ章　原始時代の遺構と遺物

第１節　遺　　構

今回の発掘調査で出土した当該期の所産と考えられる遺構は、縄文時代の竪穴住居跡11軒（前期末葉５軒・中期中葉５軒・不明１軒）、掘立柱建物跡４棟（中期中葉～後・晩期）、焼土址６基、土坑270基以上、遺物集中区２箇所（前期末葉・中期中葉各１箇所）、性格不明遺構１箇所を数える。土坑については実数および時期比定に不明確な点を多く残すが、縄文時代前期末葉ならびに同中期中葉を主として、中期後葉～後・晩期にかけて断続的に営まれた集落遺跡としての様相が明らかとなった。しかし、これら遺構群は今回の調査範囲を越え、南東寄りの段丘縁辺部に向かってさらに展開していると推定され、遺跡の全体規模や集落形態、時期別の変遷過程などの実態解明については、今後の調査に委ねざるを得ない（第４図）。

以下、検出された遺構についての個別的な調査結果を記す。

１）竪穴住居跡

SB６（第５図、図版２）

位置　中位段丘面の上部平坦面山側のＩ区、Ｒ－８グリッドに位置する。近接してSK57が分布する。

形状　平面形は不整な楕円形を呈しており、長径357㎝、短径290㎝、床面積は8.08㎡を測る。長軸方向はＮ－50°－Ｗを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、残存部の最大壁高は14㎝を測る。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・赤色土粒を含む。）

第２層　暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける）

床面　地山の黄褐色土層中に作られていた。比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴　住居跡内より３個のピットが検出された。南壁から東壁寄りに位置しており、口径は20～25㎝、深さ11～12㎝を測る。

炉址　長軸線に沿った住居中央部から地床炉が検出された。長径44㎝、短径30㎝の不整楕円形を呈する。床面の一部が火熱により赤化しているが、掘り込みは認められない。

内部施設　認められなかった。

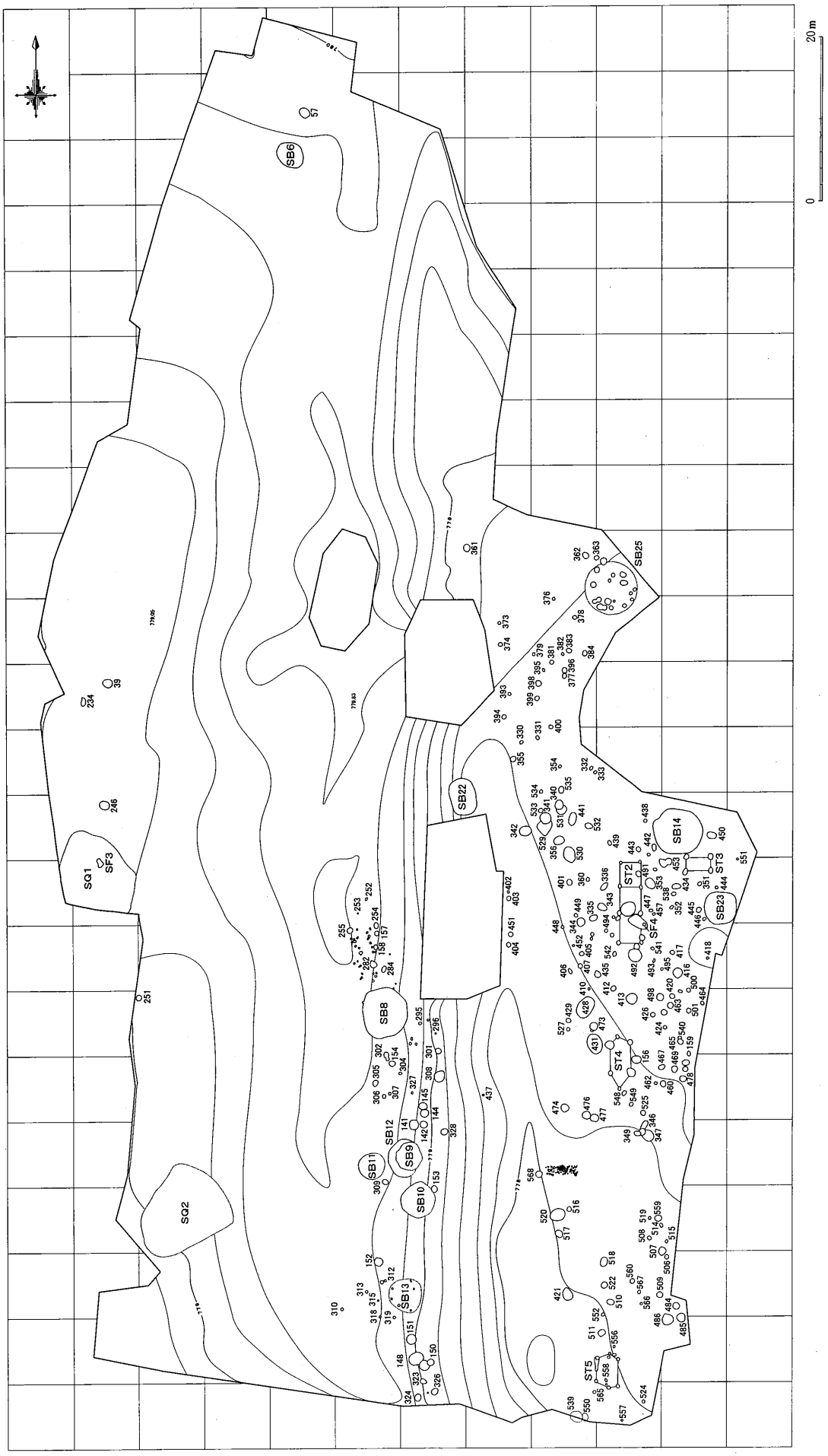
出土遺物　覆土中より凹石１点、磨石１点、剥片３点が出土した。

時期　覆土や住居の形状などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

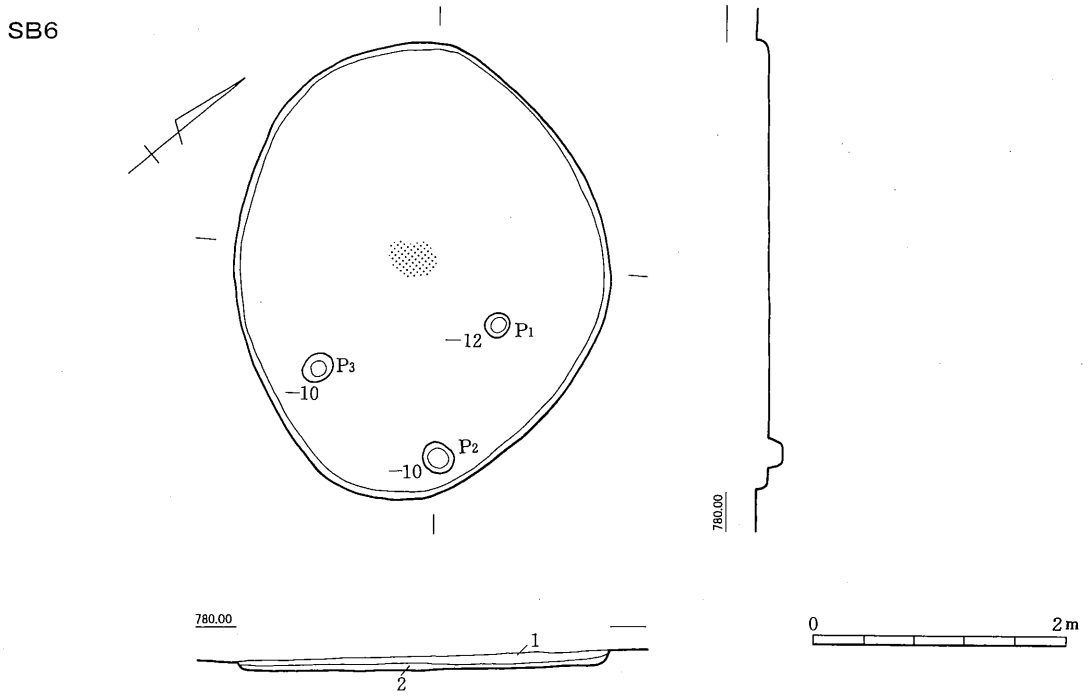
SB８（第６図、図版２・３）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端部のＩ区、Ｓ－21グリッドに位置する。南側にSB９～12がやや離れて分布する。

形状　いわゆる改築（拡張）住居例であり、新旧２軒の住居から構成される。平面形はいずれも不整な楕円形を呈する。新住居は長径600㎝、短径540㎝、床面積27.45㎡、旧住居は長径420㎝、短径330㎝、床面積11.51㎡を測り、長軸方向は新住居がＮ－９°－Ｗ、旧住居がＮ－７°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は新住居で30㎝、旧住居で11㎝を測る。



第4図　原始時代の遺構分布図（1：400）



第５図　SB６　実測図

覆土　５層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（堅くしまる。新住居覆土である。）

第２層　黒褐色土層（新住居炉内覆土であるが、焼土をほとんど含まない。）

第３層　黒褐色土層（黄褐色土ブロック含む。新住居の柱穴内覆土である。）

第４層　暗褐色土層（非常に堅くしまる。新住居の貼床内埋土である。）

第５層　暗褐色土層（旧住居の柱穴内覆土である。）

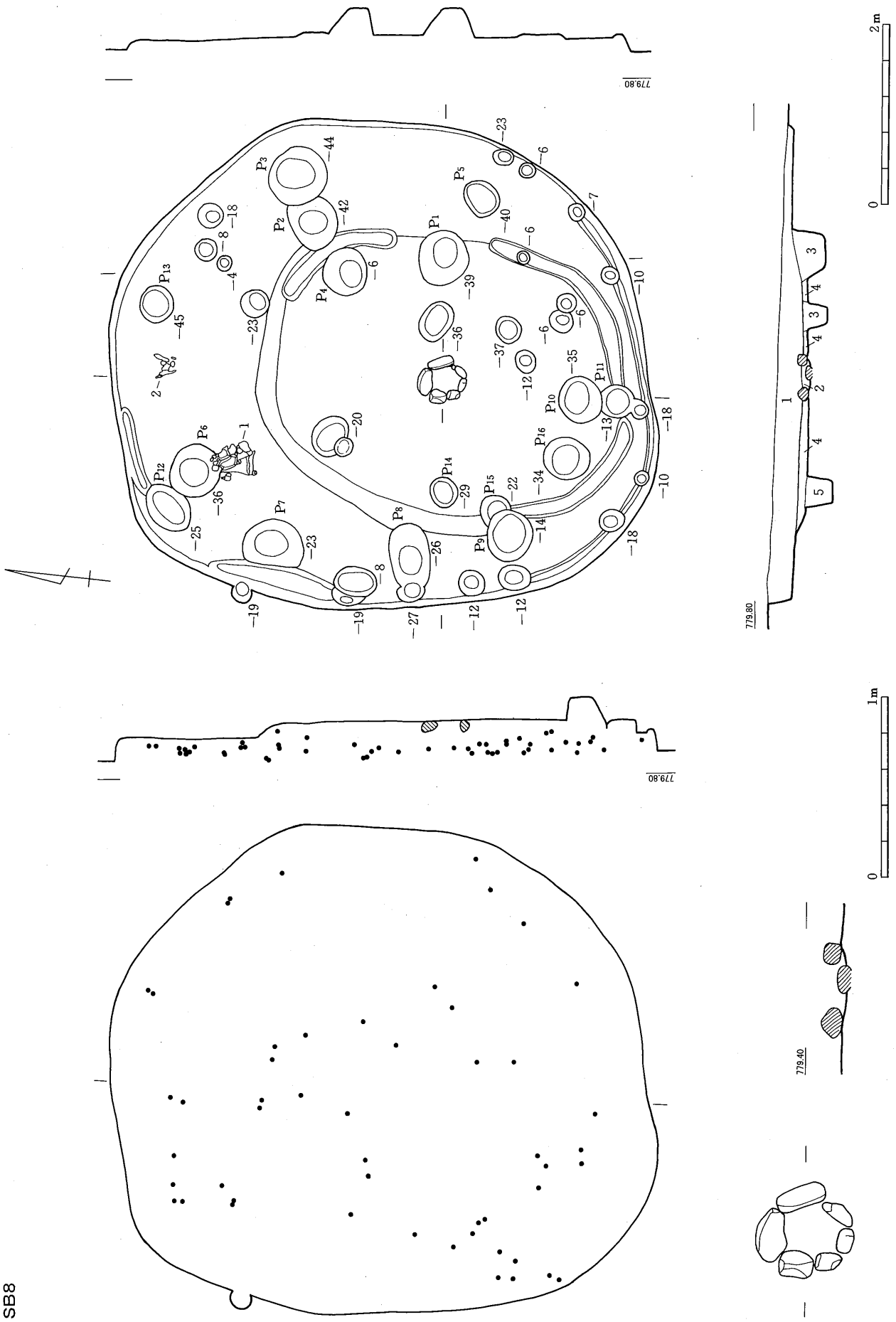
床面　旧住居の床面は地山の黄褐色土層中に作られており、やや起伏をもつ。新住居の床面も拡張部は地山の黄褐色土層中に作られているが、中央部～南側は旧住居を暗褐色土で埋め、貼床としている。周溝は新旧両住居で確認された。新住居の周溝は南側と西側および北側の一部で確認されており、幅10cm、深さ５cmほどを測る。旧住居の周溝は南側と北東側の一部で確認されており、幅15cm、深さ５cmほどを測る。

柱穴　住居内より合計32個のピットが検出された。このうち新住居では、壁面に沿って配列されたＰ１～３・５～10・12などが口径40～70cm、深さ14～42cmと比較的大形であることから、本址に伴う主柱穴と推測される。また旧住居では、西壁に沿って配列されたＰ14～16は口径35～50cm、深さ20～34cmと大形であることから、本址に伴う主柱穴と推測される。

炉址　長軸線に沿った中央部やや南寄りから大小６個の礫を用いた石囲炉が検出された。長径55cm、短径50cmの楕円形を呈するが、明確な掘り込みは認められず、焼土の堆積も不明瞭であった。旧住居の炉址と重なり合うような位置にあるが、両者の関係は不明である。

内部施設　認められなかった。ただし、出土遺物の在り方から、規模・形状等は不明ながらも中期中葉末段階の遺構が覆土中に穿たれていた可能性が考えられる。

出土遺物　覆土上層より床面近くにかけて、中期中葉を主体として中葉末例を含む縄文土器80点余りと石器類が検出されている（第29図１～４、第33図25～34、第47～49・64・65図）。石器の内訳は打製石斧１点、磨製石斧１点、石鏃２点、石匙１点、台石１点、剥片・チップ類105点、磨痕礫１点である。


SB8
779.80
779.80
779.80
779.40
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
0
1m
0
2m

第6図　SB8　実測図

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、新道式～藤内式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB９（第７図、図版３）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端部のＩ区、Ｔ－23グリッドに位置する。南側に近接してSB10、西側に近接してSB11が分布する。西側でSB12を切る。

形状　調査時に壁面と床面の一部を壊してしまったが、平面形は不整な楕円形を呈するものと思われる。長径360cm、推定短径330cm、確認部の床面積は8.66m²を測る。長軸方向はＮ－７°－Ｅを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は11cmを測る。

覆土　５層に分けられる。第５層は掘り方内埋土にあたる。

第１層　黒色土層（粘性・しまりに欠け、柔らかい。径１cmほどの白色砂粒を含む。）

第２層　黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。炭化物・白色砂粒を含む。）

第３層　黒色土層

第４層　暗褐色土層（黒褐色土と黄褐色土が混合する。）

第５層　黄褐色土層（堅くしまる。黄褐色土ブロックと褐色土ブロックを主体とする。）

床面　黄褐色土ブロックと褐色土ブロックを用いて貼床面が形成されていた。非常に堅くしまる。

柱穴　住居内より合計11個のピットが検出された。全体の配列は不明瞭であるが、北壁際のＰ１・２と南壁際のＰ３・４は口径35～40cm、深さ24～51cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。

炉址　長軸線に沿った中央部から２基の埋甕炉が検出された。深さ20～35cmの掘り込み内にいずれも深鉢形土器の下半部が正位で埋設されている。焼土の堆積が認められる東寄りの炉址２に対し、西側の炉址１では炭化物の分布のみが認められた。

内部施設　住居中央部やや北寄りの床面上に磨痕礫１点が遺存していたことを除けば、明瞭な内部施設は認められなかった。

出土遺物　覆土第１層を中心に縄文土器190点余りと石器類が出土した（第29図５・６、第33・34図35～93、第45・46・60・61図）。土器は前期末葉、下島式～晴ヶ峰式土器を主体とするが、埋甕炉には北白川下層式土器などが使用されていた。石器の内訳は打製石斧４点、凹石２点、台石１点、石鏃６点、石匙１点、石錐３点、剥片・チップ類343点である。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉、下島式～晴ヶ峰式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB12に後続する。

SB10（第８図）

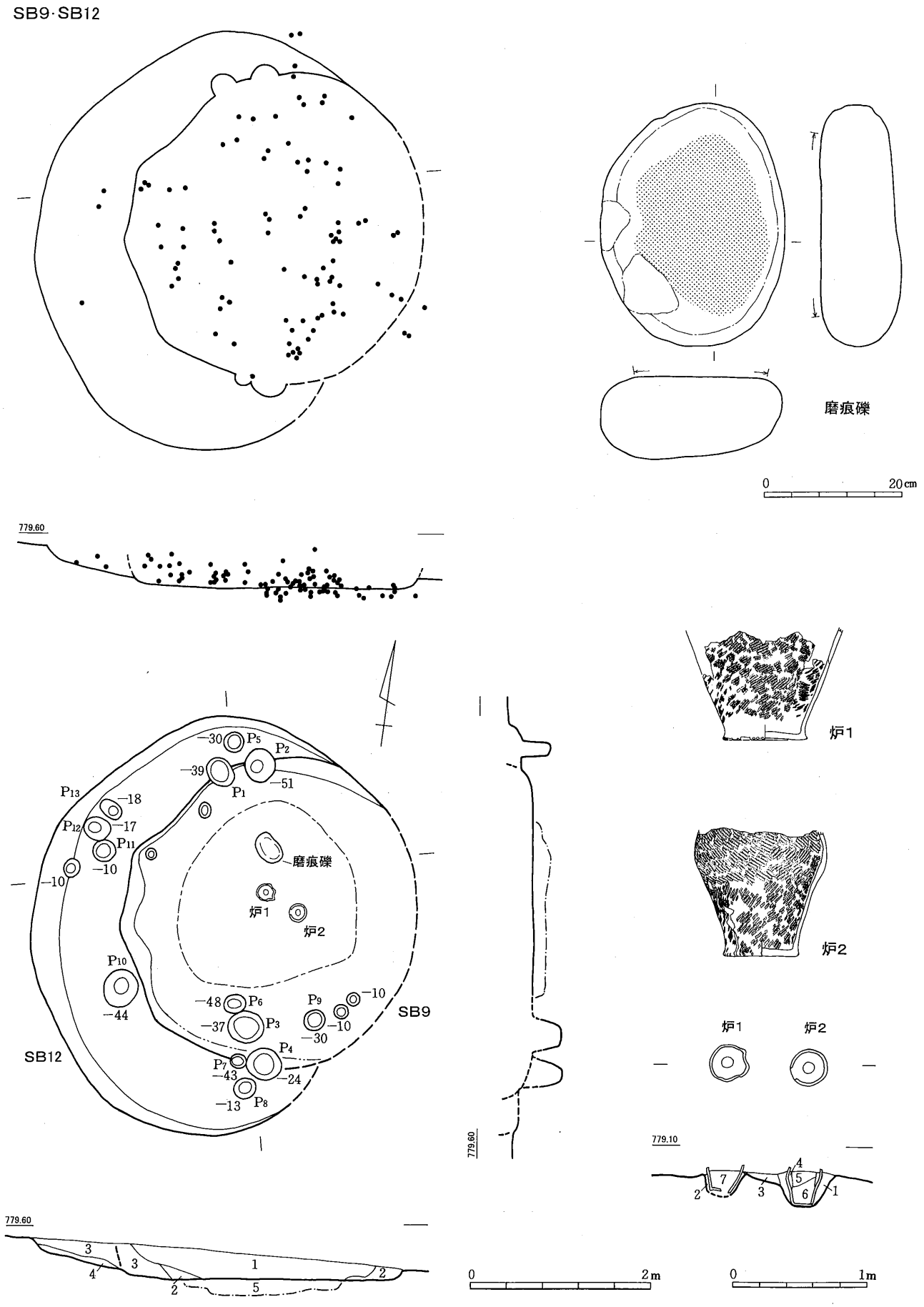
位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－24グリッドに位置する。北側に隣接してSB９・12が分布し、北東側にはSK153が一部重複するように近接する。

形状　東側四分の一ほどが削平されていたが、平面形は不整な円形ないし楕円形を呈すると思われる。推定長径440cm、推定短径420cm、確認部の床面積は14.09m²を測る。長軸方向はＮ－45°－Ｗを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、確認部の最大壁高は６cmを測る。

覆土　多量の白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

床面　調査時に床面を壊してしまったため、東西ベルトで床面を確認した。やや起伏をもち、硬化面は確認されなかった。

柱穴　住居内より４個のピットが検出された。小形で配列も不明瞭なものが大部分であり、口径25～50cm、



第7図　SB9・12　実測図

深さ11～16cmを測る。

炉址　長軸線に沿った中央部西寄りから地床炉が検出された。長径70cm、短径60cmの楕円形を呈する。焼土の堆積は薄く、掘り込みは確認できなかった。

内部施設　認められなかった。北東側に一部が重複して分布するSK153（第17図）は、本址に伴う貯蔵穴であった可能性が考えられるが、詳細は不明である。

出土遺物　覆土中より土器30点余り、石器３点が出土した（第34図94～103、第61図）。土器は前期末葉、下島式土器を主体とする。石器の内訳は石核１点、剥片２点である。

時期　縄文時代前期末葉、下島式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB11（第８図、図版３）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｓ－23グリッドに位置する。東側から南東側にかけてSB９・10・12が近接分布する。

形状　北側を除いて大きく削平されているが、平面形はほぼ円形を呈すると思われる。推定長径320cm、推定床面積8.34㎡を測る。残存部の最大壁高は６cmを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｗほどを示す。

覆土　粘性・しまりに欠ける黒褐色土が堆積していた。多量の白色砂粒を含む。

床面　調査時に床面を掘り抜いてしまったため、詳細は不明であるが、地山を床面にしていたものと思われる。

柱穴　住居内より２個のピットが検出された。口径16～32cm、深さ７～19cmを測る。

炉址　確認できなかった。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中と床面近くから土器30点余りと石器３点が出土した（第35図104～119、第61図）。土器は前期末葉下島式～晴ヶ峰式土器を主体とする。石器の内訳は打製石斧１点、剥片２点である。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉、下島式～晴ヶ峰式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB12（第７図、図版３）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端部のＩ区、Ｓ－23グリッドに位置する。東側をSB９に切られる。

形状　平面形は楕円形を呈すると思われる。長径460cm、推定短径360cm、確認部の床面積13.87㎡を測る。長軸方向はＮ－３°－Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、確認部の最大壁高は20cmを測る。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒色土層

第２層　暗褐色土層（黄褐色土を含む。）

床面　硬化面は認められないが、地山を床面にしており、東側に向かってやや傾斜する。

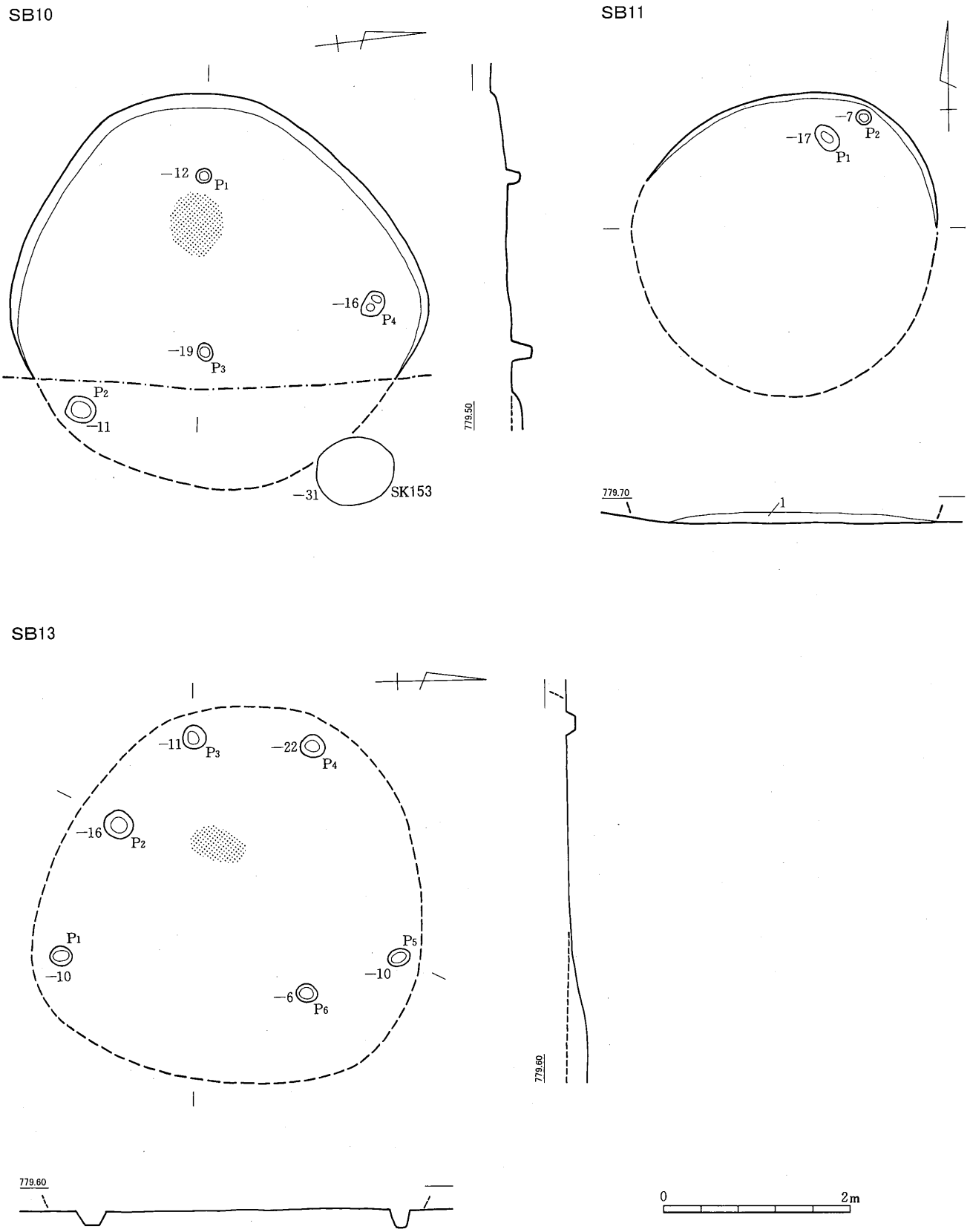
柱穴　住居内より７個のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、南西部のＰ10は口径40cm、深さ44cmを測り、主柱穴の可能性が考えられる。

炉址　認められなかった。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中より土器７点、石器20点が出土した（第35図120～123、第61図）。石器の内訳は石鏃１点、剥片19点である。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉、下島式～晴ヶ峰式期を中心とした時期



第8図　SB10・11・13　実測図

の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB９に先行する。

SB13（第８図、図版４）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端部のＩ区、Ｓ－25グリッドに位置する。北側にSB10が分布する。

形状　平面形は不整な円形を呈するものと思われる。推定長径410cm、推定短径400cm、推定面積13.37m²を測る。長軸方向はＮ－21°－Ｗである。壁の掘り込みは不明である。

覆土　ピット内より黒褐色土層が確認されただけである。

床面　地山の黄褐色土を床面にしていたものと思われる。

柱穴　住居内より６個のピットが検出された。口径20～30cm、深さ６～22cmを測る。主柱穴とするには小形であるが、壁面に沿って配列されており、本址に伴う壁柱穴であった可能性が強い。

炉址　住居中央部西寄りから地床炉が検出された。掘り込みは認められず、火熱でわずかに赤化していた。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SB14（第９図、図版４）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－18グリッドに位置する。南東側に近接してST３・SB23が分布する。

形状　平面形は不整な楕円形を呈する。長径610cm、短径550cm、床面積26.82m²を測る。長軸方向はＮ－87°－Ｗを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は34cmを測る。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の炭化物・白色砂粒を含む。）

第２層　暗褐色土層（やや粘性・しまりに欠けるが、比較的堅い。多量の炭化物・白色粒子、黄褐色土ブロックを含む。）

床面　地山の黄褐色土を床面にしており、全体に堅くしまる。西側を除いて周溝が巡っている。幅15～20cm、深さ10cmほどを測る。

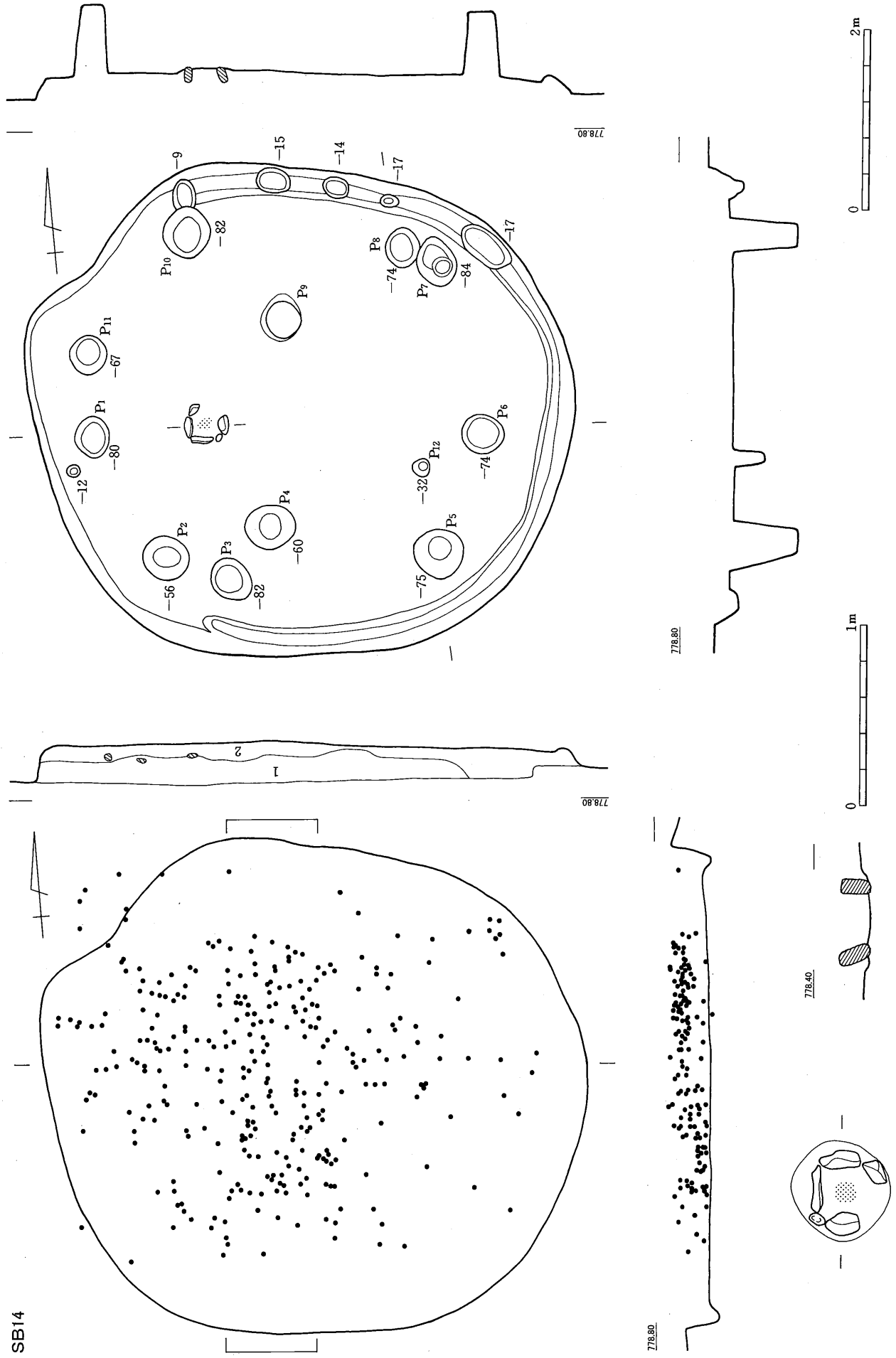
柱穴　住居内より18個のピットが検出された。壁面に沿って配列されたＰ１～８・10・11は口径35～55cm、深さ56～84cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。Ｐ12も小規模ながら床面下32cmと深い。

炉址　長軸線に沿った中央部西寄りから大小５個の礫を用いた石囲炉が検出された。長径48cm、短径44cmの長方形を呈する。断面は皿状に近く、５cmほど掘り込まれている。焼土・炭化物などの堆積は認められなかったが、中央部が火熱によりわずかに赤化していた。

内部施設　炉址の北東側に分布するＰ９は76cmと深く、断面が袋状を呈することから、屋内貯蔵穴であった可能性も考えられる。

出土遺物　覆土上層を中心として土器約800点、石器176点のほか、土器混和材と考えられる石塊１点が出土した（第30～32図７～22、第35～37図124～172、第50～55･66～68図）。土器は中期中葉終末例が主体を占め、中期中葉例も含まれる。石器の内訳は打製石斧12点、凹石５点、磨石３点、石皿１点、台石２点、石鏃４点、石錐１点、剥片類148点である。土器をはじめとする遺物の大半は住居西半部に集中しており、その下部には大小の礫が少なからず分布していることから、廃棄された可能性が強い。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、井戸尻Ⅲ式期終末段階からそれに後出


SB14
778.80
778.80
778.80
778.80
778.40
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
-9
-15
-14
-17
-17
-82
-74
-84
-67
-80
-12
-56
-82
-60
-75
-32
-74
1
2
0
1m
0
2m

第9図　SB14　実測図

する時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB22（第10図、図版４・５）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｕ－18グリッドに位置する。

形状　平面形は長楕円形を呈する。長径450cm、短径320cm、床面積は12.06㎡を測る。長軸方向はＮ－14°－Ｗを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は９cmを測る。

覆土　５層に分けられる。第４層は周溝内埋土、第５層は炉内埋土、第６～９層はピット埋土にあたる。

第１層　黒褐色土層（粘性をもつが、しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

第２層　黒褐色土層（粘性をもち、しまる。炭化物・黄褐色土ブロックを含む。）

第３層　黒褐色土層（黄褐色ブロックを含む。）

第４層　黒褐色土層（ややしまりに欠ける。）

第５層　黒褐色土層

第６層　黒褐色土層（黄褐色土粒を含む。）

第７層　黒褐色土層（黄褐色土ブロックを少量含む。）

第８層　黒褐色土層（黄褐色土粒をやや多く含む。）

第９層　暗褐色土層

床面　地山の黄褐色土を床面にしている。やや起伏をもつが、炉址の周辺では堅くしまる。幅15～20cm、深さ５cmの周溝が全周する。

柱穴　住居内より６個のピットが検出された。四隅に配置されたＰ１～４は口径30～45cm、深さ24～32cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。ピット内には黒褐色土や暗褐色土が堆積していた。南壁寄りのＰ５は口径65cm、深さ14cmの皿状を呈する。位置的にみて出入口部施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出ない。

炉址　長軸線に沿った中央部やや北寄りから石囲炉が検出された。長径42cm、短径38cmを測り、大小６個の礫が方形状に配列されている。深さ15cmほどの掘り方を若干埋め戻して皿状の炉底としている。焼土や炭化物の堆積は認められなかった。

内部施設　南壁際よりＰ６が検出された。長径100cm、短径70cm、深さ31cmと大形であるが、上部をＰ５に切られており、性格も不明である。

出土遺物　覆土下層より床面付近にかけて土器19点、石器19点が出土した（第37図173～177、第69図）。土器は中期前葉、新道式を主体としている。石器の内訳は磨石２点、台石１点、石皿１点、剥片15点である。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、新道式期を中心とする時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB23（第10図、図版５）

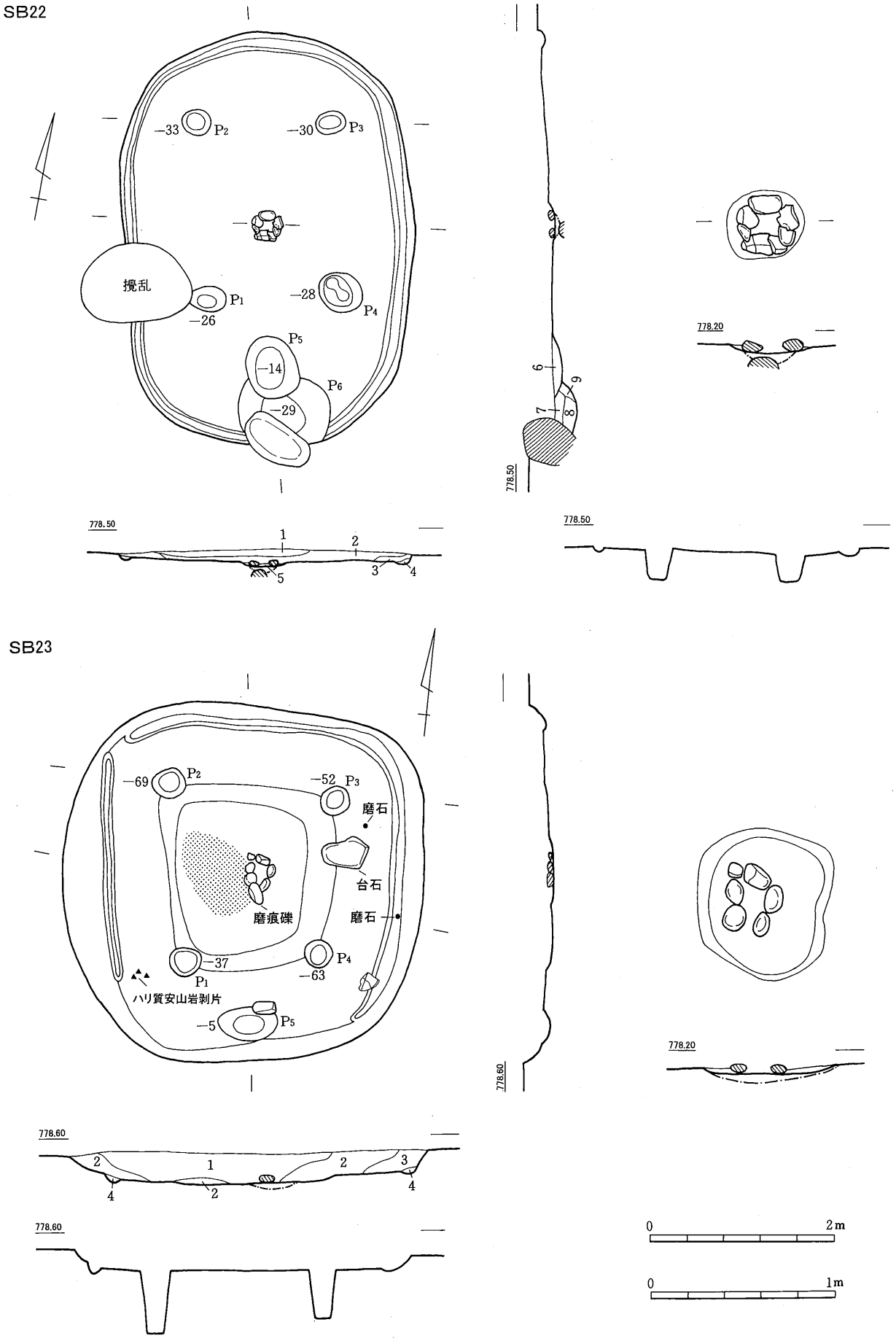
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－19グリッドに位置する。北西側に近接してST３・SB14が分布する。

形状　平面形は不整な隅丸方形を呈する。長径390cm、短径390cm、床面積は13.15㎡を測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は25cmを測る。

覆土　４層に分けられる。第４層は周溝内堆積土にあたる。

第１層　黒色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物を含む。）

第２層　黒褐色土層（粘性をもち、しまる。多量の赤色土粒・白色砂粒を含む。）



第10図　SB22・23　実測図

第３層　黒色土層（粘性をもつが、しまりに欠ける。赤色粒・白色砂粒を含む。）

第４層　黒褐色土層（しまりをもつ。多量の白色砂粒を含む。）

床面　地山の黄褐色土を床面にしている。中央部が方形状にわずかに凹んでいる。南側を除いて周溝が巡る。幅10～15cm、深さ５～10cmを測る。

柱穴　住居内より５個のピットが検出された。主柱穴と考えられるＰ１～４は口径30～35cm、深さ37～66cmを測り、中央部に広がる方形の凹みの四隅に配置されている。南壁際のＰ５は口径64cm、深さ５cmを測り、位置的にみて出入口部施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出ない。

炉址　長軸線に沿った中央部やや東寄りから石囲炉が検出された。長径40cm、短径34cmを測り、大小６個の礫を用いている。深さ15cmほどの掘り方を暗褐色土で埋め戻して皿状に凹む炉底とし、その内部に炉石を置き並べている。焼土や炭化物の堆積は認められなかったが、炉址の西側床面が火熱により赤化していた。炉址の南側に重なるように磨痕礫１点が遺存していた（第11図１）。

内部施設　東壁寄りのＰ３とＰ４に挟まれた位置から長径50cm、短径33cmを測る大形の礫が出土した。平坦な上面に磨痕が観察され、何らかの台石として使用された可能性が考えられる（第11図２）。

出土遺物　覆土上層を中心として土器14点、石器22点が出土した（第32図23、第37図178～183、第69図）。土器は中期中葉、藤内式を主体としている。23の浅鉢は床面より出土している。石器の内訳は磨石３点、台石１点、石錐１点、剥片15点、磨痕礫２点である。Ｐ１から南西壁付近にかけての床面には、ハリ質安山岩の剥片がまとまって遺存していた。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、藤内式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB25（第12図、図版５）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－22グリッドに位置する。

形状　調査時に上部を削平してしまったため、不明な部分が多いが、平面形は略円形を呈するものと思われる。推定長径660cm、推定短径600cm、確認部の推定床面積32.94㎡を測る。

覆土　確認できなかったが、ピット内には多量の白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

床面　確認できなかった。

柱穴　推定住居内より17個のピットが検出された。口径30～80cm、深さ６～42cmとバラエティーに富む。推定壁際に沿って配列される傾向をみせているが、規則性を欠く。

炉址　確認できなかった。

内部施設　確認できなかった。

出土遺物　推定住居範囲より土器10点余りが出土した（第38図184～188）。

時期　推定範囲内出土土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

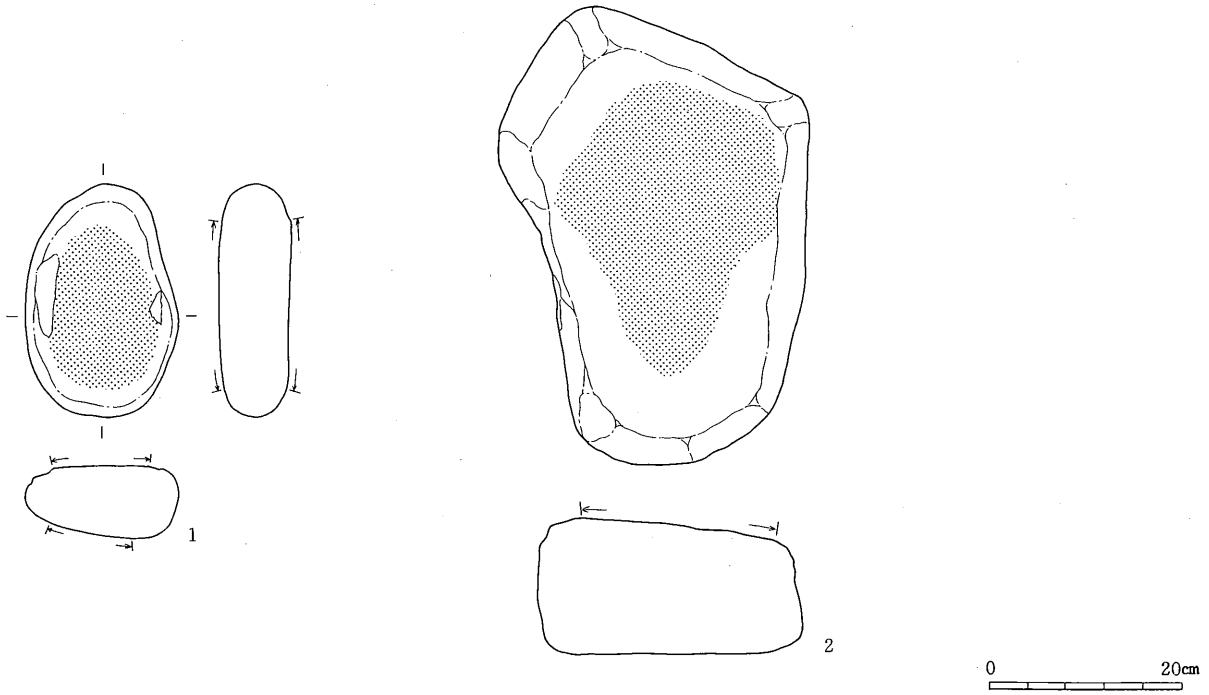
２）掘立柱建物跡

ST２（第13図、図版５）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｗ－19・20グリッドに位置する。ST３、焼土跡SF４がそれぞれ近接して分布する。

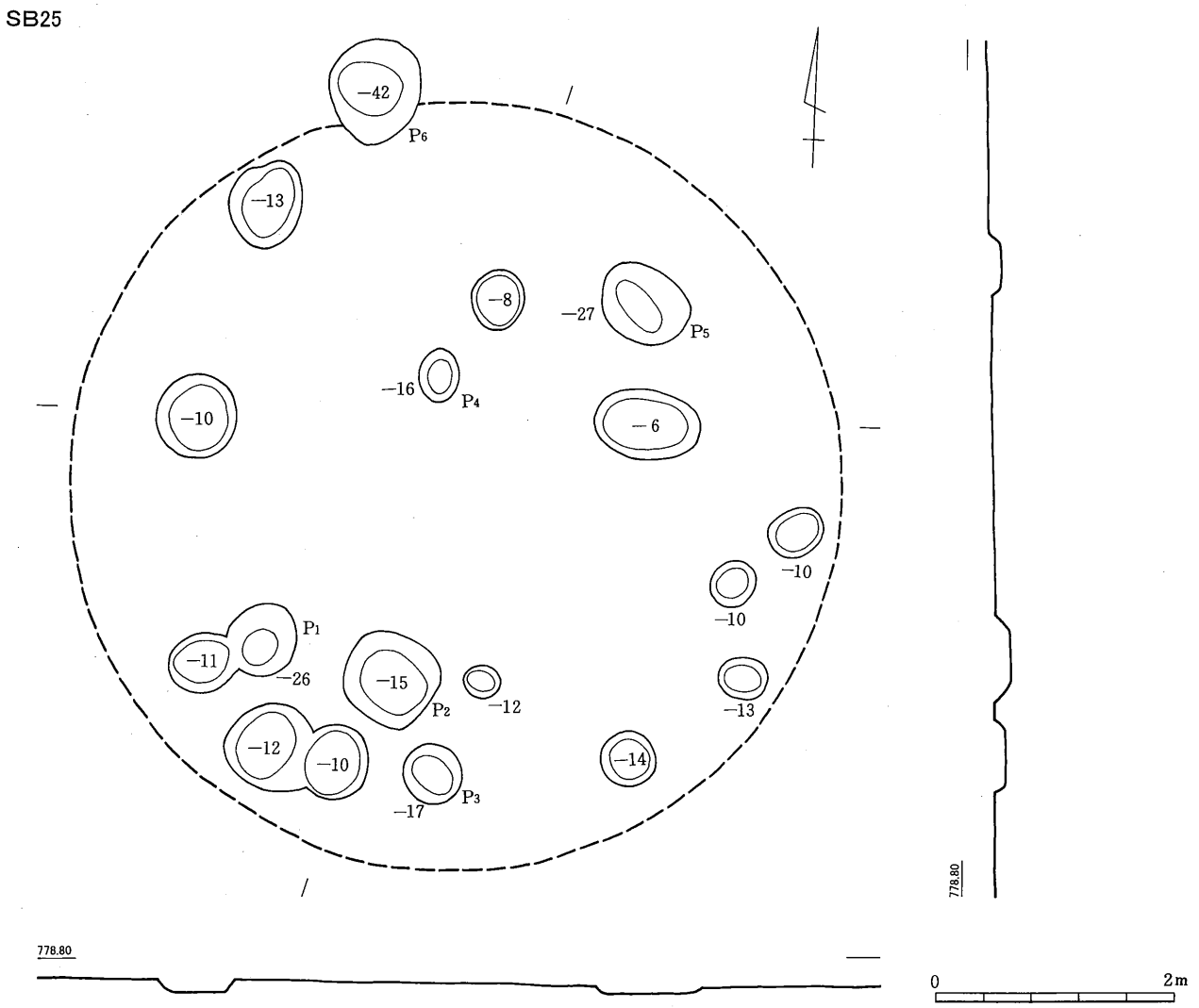
形状　平面形は１間×３間の建物跡と思われる。桁行1030cm、梁行326cm、柱穴間隔は棟側で310～350cm、妻側で280cmを測り、面積は33.6㎡である。長軸方向はＮ－１°－Ｗである。柱穴の平面形は円形もしくは

SB23

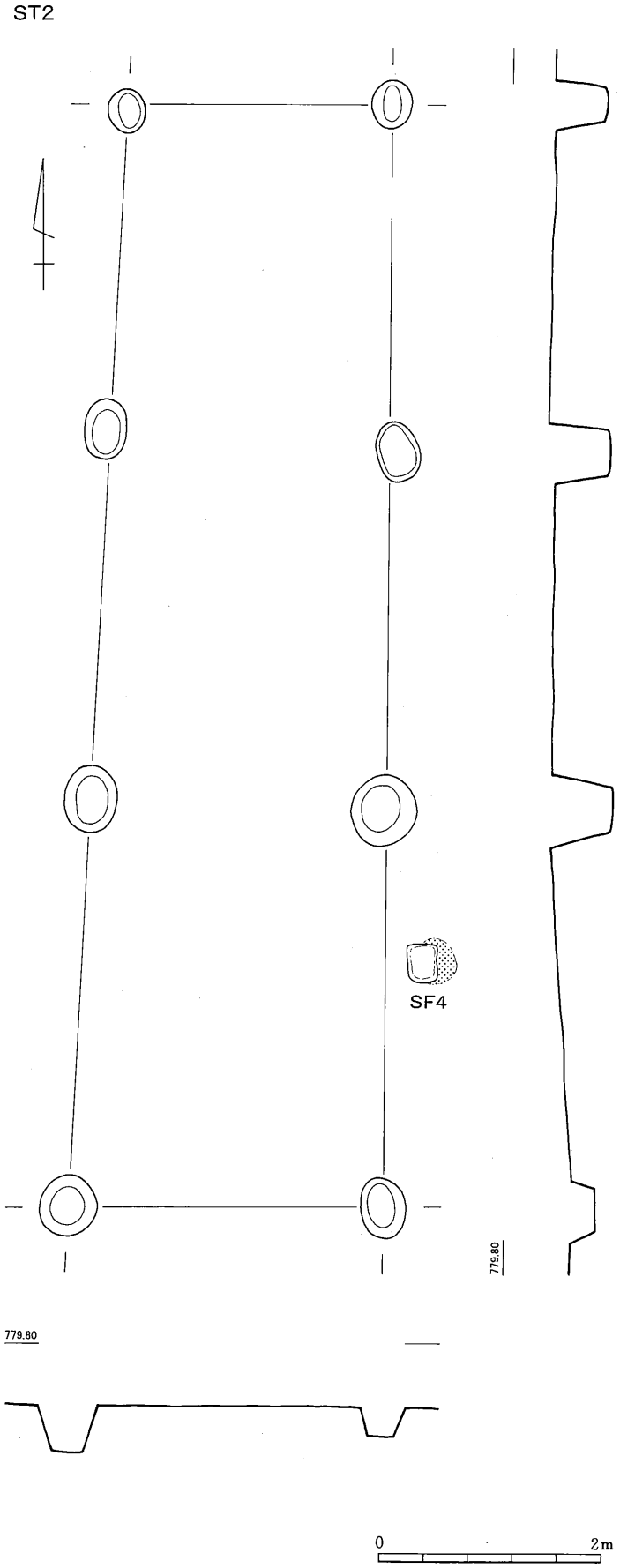


第11図　SB23出土磨痕礫（1）・台石（2）

SB25



第12図　SB25　実測図



第13図　ST２　実測図

楕円形を呈しており、口径は38～63cm、確認面からの深さは25～58cmを測る。

覆土　黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　ピットの一つから打製石斧１点が出土した（第56図322）。その他、遺構周辺から縄文時代中期中葉～後葉の土器が若干量出土している。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代中期中葉～後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ST３（第14図、図版５）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－19グリッドに位置する。ST２が近接して分布する。

形状　平面形は１間×１間の建物跡と思われる。桁行315cm、梁行210cm、柱穴間隔は棟側で315cm、妻側で210cmを測り、面積は6.6m²である。長軸方向はＮ－90°－Ｅである。柱穴の平面形はいずれも楕円形を呈しており、口径は58～85cm、確認面からの深さは21～41cmを測る。北東隅のピットにはテラス状の張り出しがあり、南西隅のピットも北辺が大きく張り出す。

覆土　黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方やST２との関連性から判断して、縄文時代中期中葉～後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ST４（第15図、図版５）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｗ－20・21グリッドに位置する。

形状　平面形は六角形を呈しており、１間×１間の棟持柱付き建物跡と思われる。桁行640cm、梁行240cm、柱穴間隔は棟側で370cm、妻側で240cmを測り、面積は8.9m²である。長軸方向はＮ－２°－Ｗである。柱穴の平面形

はいずれも楕円形を呈しており、口径は50～85cm、確認面からの深さは32～51cmを測る。棟持柱も平面形は楕円形を呈し、口径は45～53cmを測るが、確認面からの深さは８～10cmと浅い。なお、北西隅と南東隅のピットは上部が皿状に広がっており、後続して土坑が造られた可能性も考えられるが、断定できない。前者は長径115cm、短径100cm、深さ16cmを測り、斜めに立った状態の角柱状の礫や石皿に擬した可能性が考えられる安山岩円礫と彫刻石皿の破片（安山岩製、逆位遺存）が折重なって出土している。後者は長径115cm、短径85cm、深さ17cmを測り、長さ20cmほどの礫が出土している。

覆土　黒色土が堆積していた。

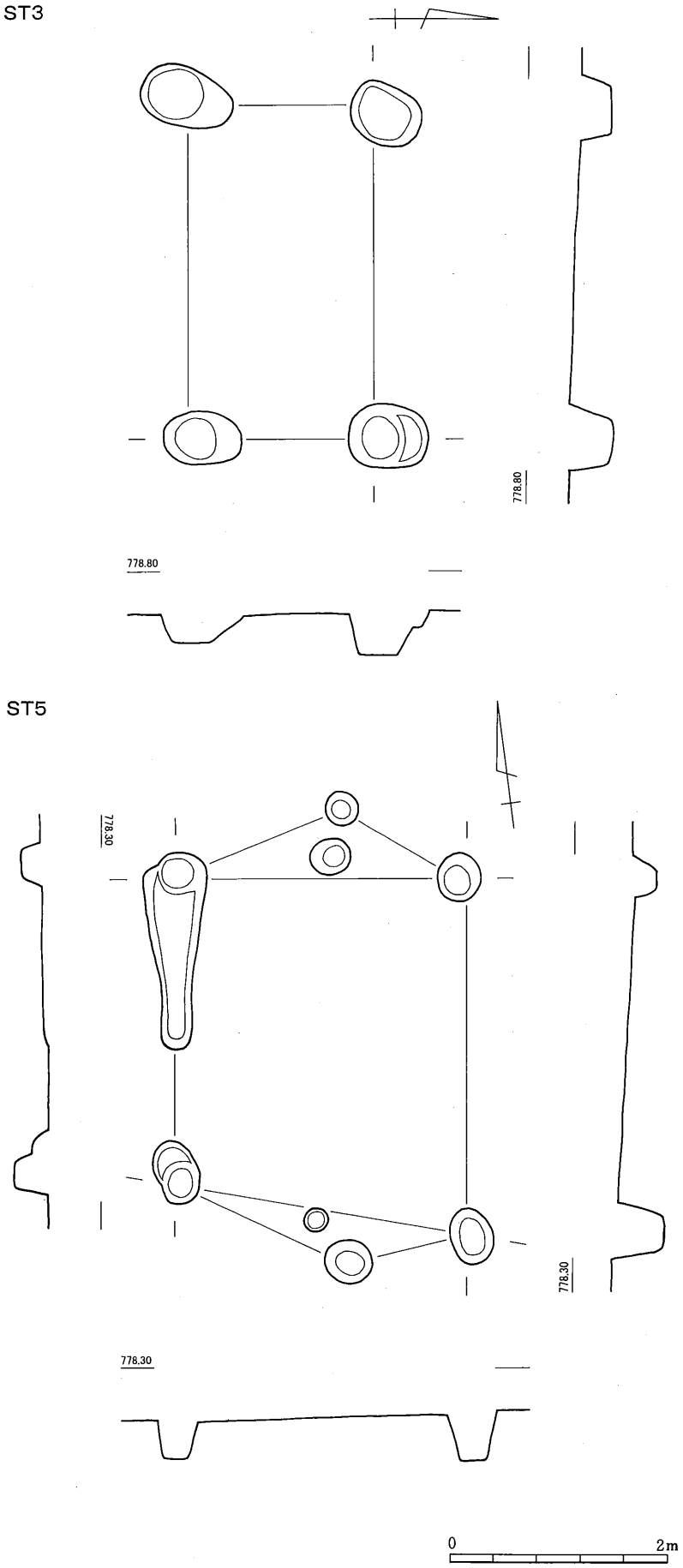
出土遺物　北西隅のピットから唐草文系土器の小片１点が出土した（第38図189）。

時期　伴出土器などから判断して、縄文時代中期後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ＳＴ５（第14図、図版６）

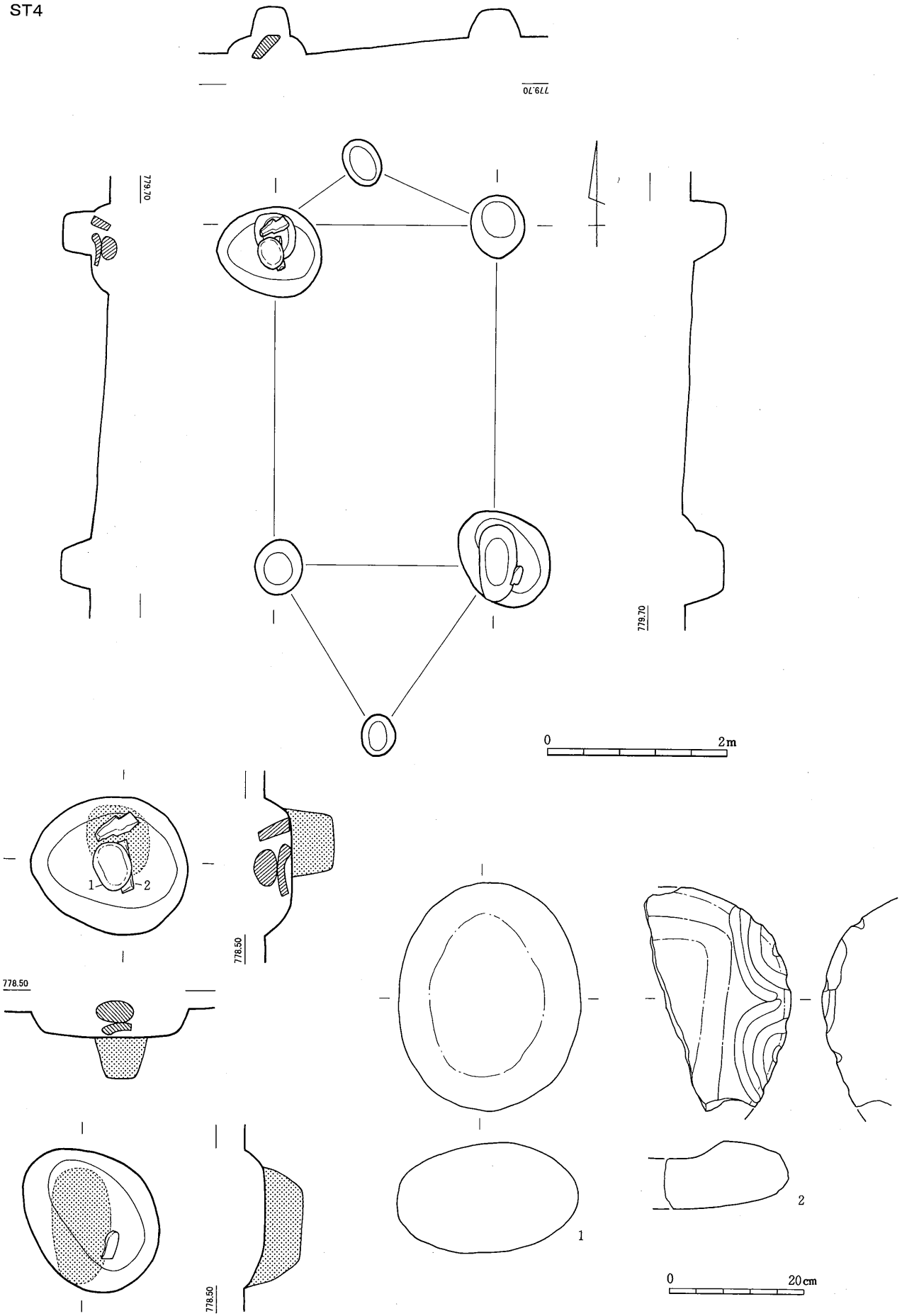
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｗ－26・27グリッドに位置する。

形状　１間×１間の棟持柱付き建物跡と思われ、平面形は六角形を呈する。桁行420cm、梁行265cm、柱穴間隔は棟側で330cm、妻側で265cmを測り、面積は8.7m²である。長軸方向はＮ－２°－Ｅである。柱穴の平面形はいずれも円形～楕円形を呈しており、口径は40～60cm、確認面からの深さは18～47cmを測る。棟持柱のピットも同規模である。南西隅のピットはテラスを有する。なお、北西隅のピットから南北軸線に沿って延びる溝が検出された。幅は最大で55cm、深さは８cmを測る。北西



第14図　ＳＴ３・５　実測図

ST4



第15図　ST４　実測図・出土遺物

ピットとの位置関係などから、本建物跡の周溝あるいは掘り方の一部と考えられる。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が高い。縄文時代晩期の包含層遺物と分布上の接点を有するが、関連性を含めて詳細な時期は不明である。

3）土　　坑

今回の発掘調査で出土した土坑は、ピット状のものから長径が200cmを越える大型のものまでを含んでおり、規模・形態ともに多様である。本来ならばそれらすべてを網羅して記述すべきであるが、ここでは紙数上の制約などから個別記載および個別説明については特徴的と思われる遺構に限定して行い（第17～23図）、他の大部分については一覧表の記載に譲ることとする（第1表）。

なお、一覧表に含まれる形態標記の分類基準は、古代以降の土坑も含め、以下のとおりである。

〈形態分類〉

・平面形　　Ⅰ－円形もしくは略円形を呈するもの。
　　Ⅱ－楕円形もしくはそれに近似する形を呈するもの。
　　Ⅲ－隅丸方形を呈するもの。
　　Ⅳ－定形を呈しない不整形なもの。

・断面形　　A－底面がやや丸みを帯び、壁が緩やかに立ち上がるもの。
　　B－底面が平らで、壁が急傾斜に立ち上がるもの。
　　C－底面が平らで、壁がほぼ垂直に立ちあがる円筒状のもの。
　　D－壁の中～下半部が下膨れ状に広がり、いわゆる袋状を呈するもの。
　　E－規模が比較的小さく、いわゆるピット状を呈するもの。

また、時期別・形態別の分布傾向については、第16図を参照されたい。ちなみに若干の所見を述べておくならば、前期末葉の所産と考えられる土坑が該期の竪穴住居跡に隣接して営まれる点が看取されるとともに、中期中葉～後葉の所産と考えられる土坑群の一部がⅠ区東側において弧状あるいは環状の分布を示す点などが注意される。とりわけ、後者において覆土中に径20cmを越える礫1個ないし複数を遺存させていた土坑が、上記の弧状あるいは環状の分布域の内部にほぼ限定的な分布をみせていることは、同礫に石皿に擬制して埋納された可能性を示す事例が含まれる点とともに、土坑群の性格を明らかにするうえで興味深い示唆を与えている。Ⅰ区南東部の南北に分かれて分布する晩期の土坑群も特徴的である。

以下、主要な土坑について個別的な説明を記す。

SK1（第17図）

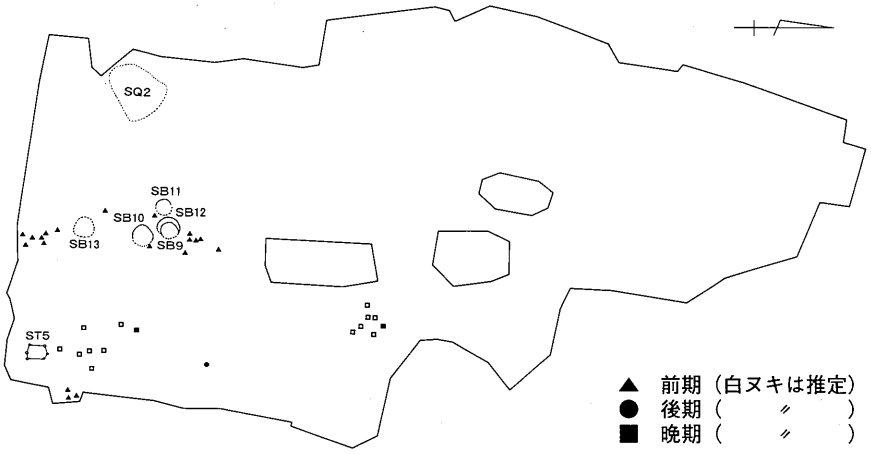
位置　上位段丘面のⅡ区、M－3グリッドに位置する。南側に近接してSK2が分布する。

形状　調査時点での記録に曖昧さを残すが、平面形は推定長径79cm、短径45cmの長楕円形を呈すると推測される。長軸方向はN－65°－Wである。壁面や坑底は不明瞭であるが、上部に小円礫が群在する。被熱痕や焼土の堆積は皆無であり、いわゆる集石遺構との関連など詳細は不明である。

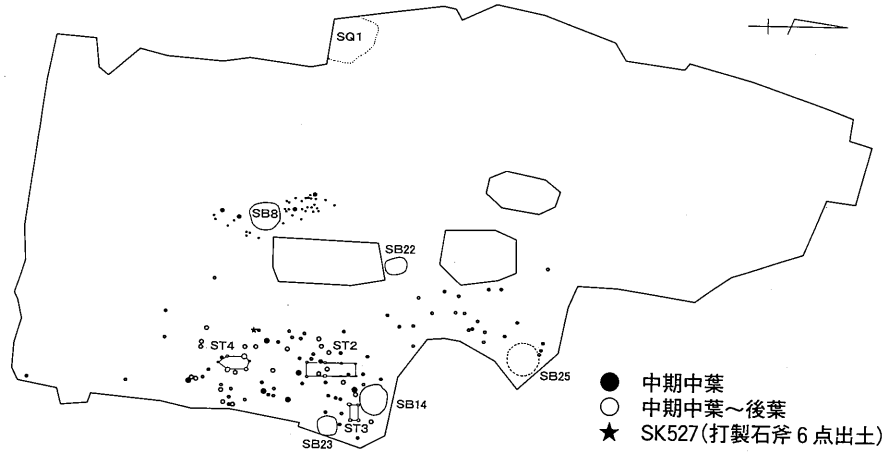
覆土　黒色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

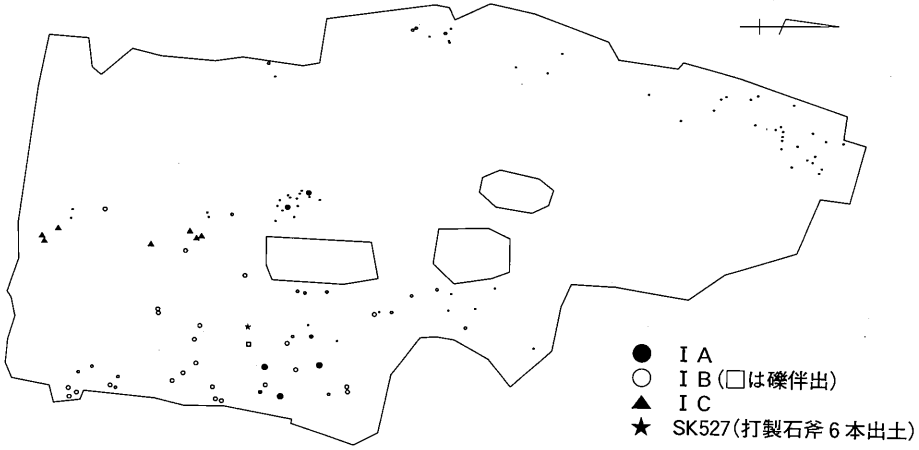
時期　覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



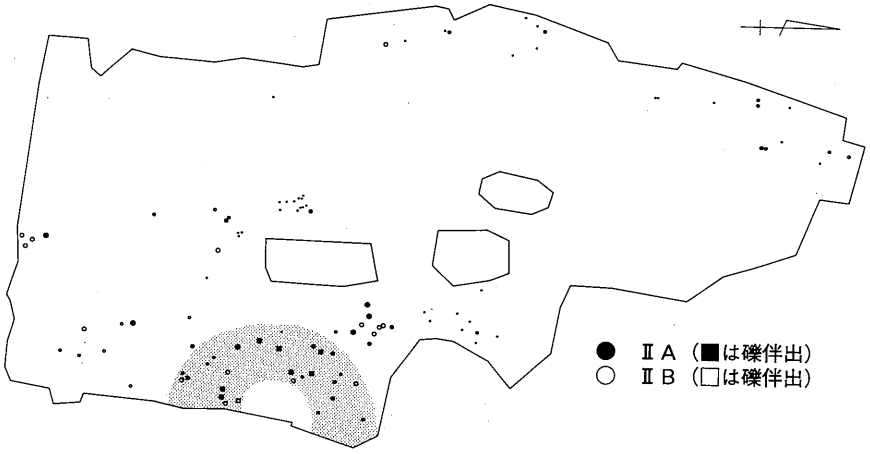
1. 縄文時代前期・後期・晚期の土坑（推定含む）



2. 縄文時代中期の土坑（推定含む）



3. 平面形態Ⅰを呈する土坑



4. 平面形態Ⅱを呈する土坑

0　50m

第16図　土坑の時期別・形態別分布図（１：1500）

SK141（第17図、図版６）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－23グリッドに位置する。南側に近接してSB９・10・11が分布する。

形状　平面形は長径116cm、短径110cm、深さ78cmの略円形を呈する。長軸方向はＮ－83°－Ｅである。断面は袋状に近く、中位でオーバーハングする。坑底はやや傾斜する。

覆土　７層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（しまりをもつ。白色砂粒を多く含む。）

第２層　黒褐色土層（第１層より白色砂粒を多く含み、明るい。）

第３層　暗褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第４層　暗褐色土層（黄褐色土ブロックを含む。）

第５層　黄褐色土層（多量の黄褐色土ブロックを含む。）

第６層　黒褐色土層

第７層　暗褐色土層

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK142（第17図、図版６）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－23グリッドに位置する。SK141の東側に近接する。

形状　平面形は長径83cm、短径82cm、深さ48cmの略円形を呈する。長軸方向はＮ－77°－Ｗである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK144（第17図）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－22グリッドに位置する。北側にSK145が近接する。

形状　平面形は長径103cm、短径93cm、深さ58cmの略円形を呈する。長軸方向はＮ－７°－Ｗである。断面は筒状に近く、坑底は起伏をもつ。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK145（第17図）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－22グリッドに位置する。南側にSK144が近接する。

形状　平面形は長径104cm、短径83cm、深さ59cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－89°－Ｗである。断面

は筒状に近く、坑底はやや傾斜する。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK148（第17図、図版６）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－26グリッドに位置する。SK149に東側を切られる。

形状　平面形は長径184cm、短径150cm、深さ32cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－57°－Ｅである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は丸みをもつ。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　覆土中より前期末葉土器２点、磨石１点が出土した（第38図190・191）。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK149に先行する。

SK149（第17図、図版６）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－26グリッドに位置する。西側でSK148を切り、北東側をＳＫ150に切られる。

形状　平面形は長径126cm、短径126cm、深さ34cmの円形を呈する。長軸方向はＮ－63°－Ｅである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　覆土中より前期末葉土器４点が出土した（第38図192～195）。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK150に先行し、SK148に後続する。

SK150（第17図）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－26グリッドに位置する。南西側でSK149を切る。

形状　平面形は長径78cm、短径61cm、深さ49cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－54°－Ｅである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土　２層に分けられる。

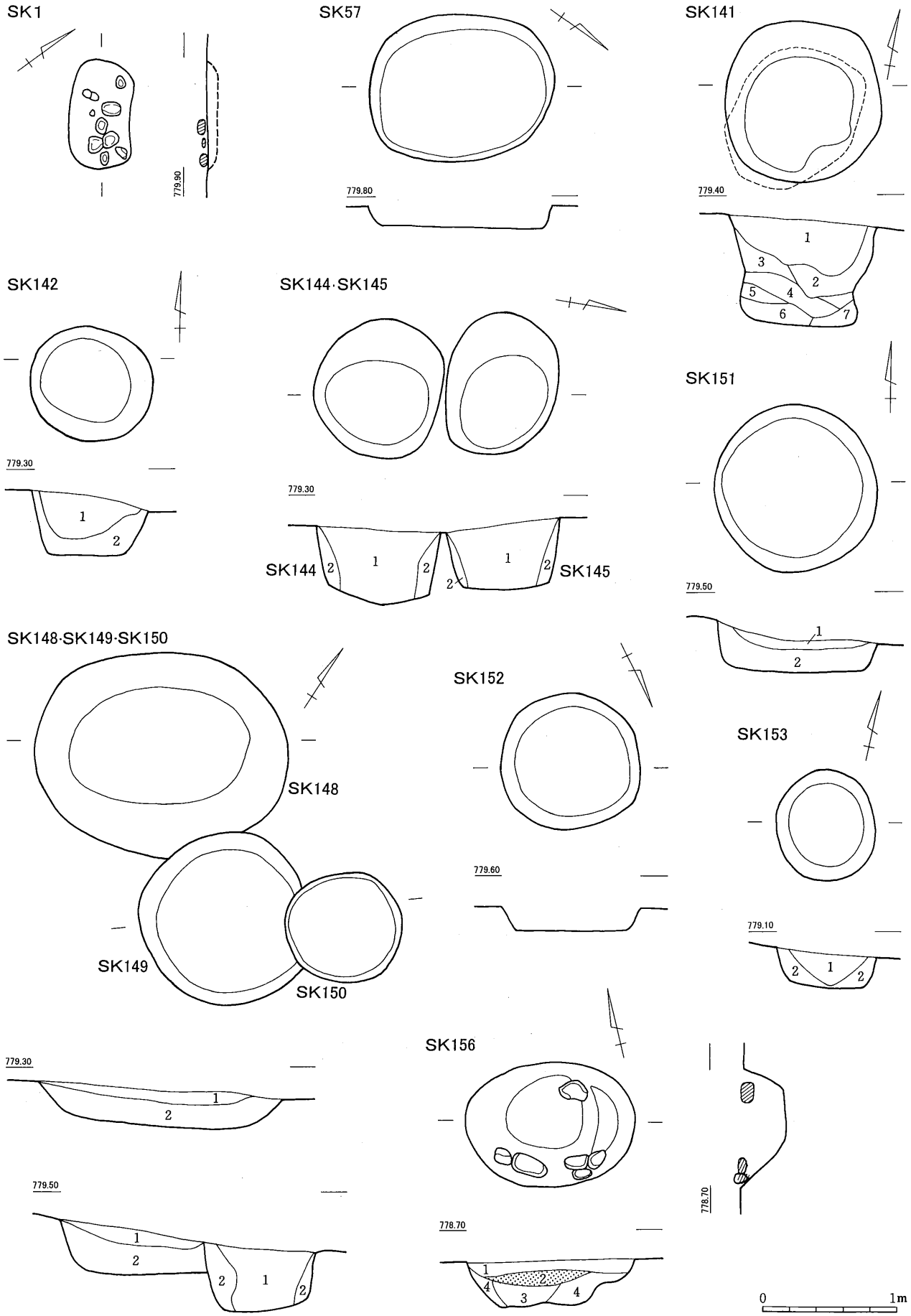
第１層　黒褐色土層　　第２層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　覆土中より前期末葉土器２点が出土した（第38図196・197）。

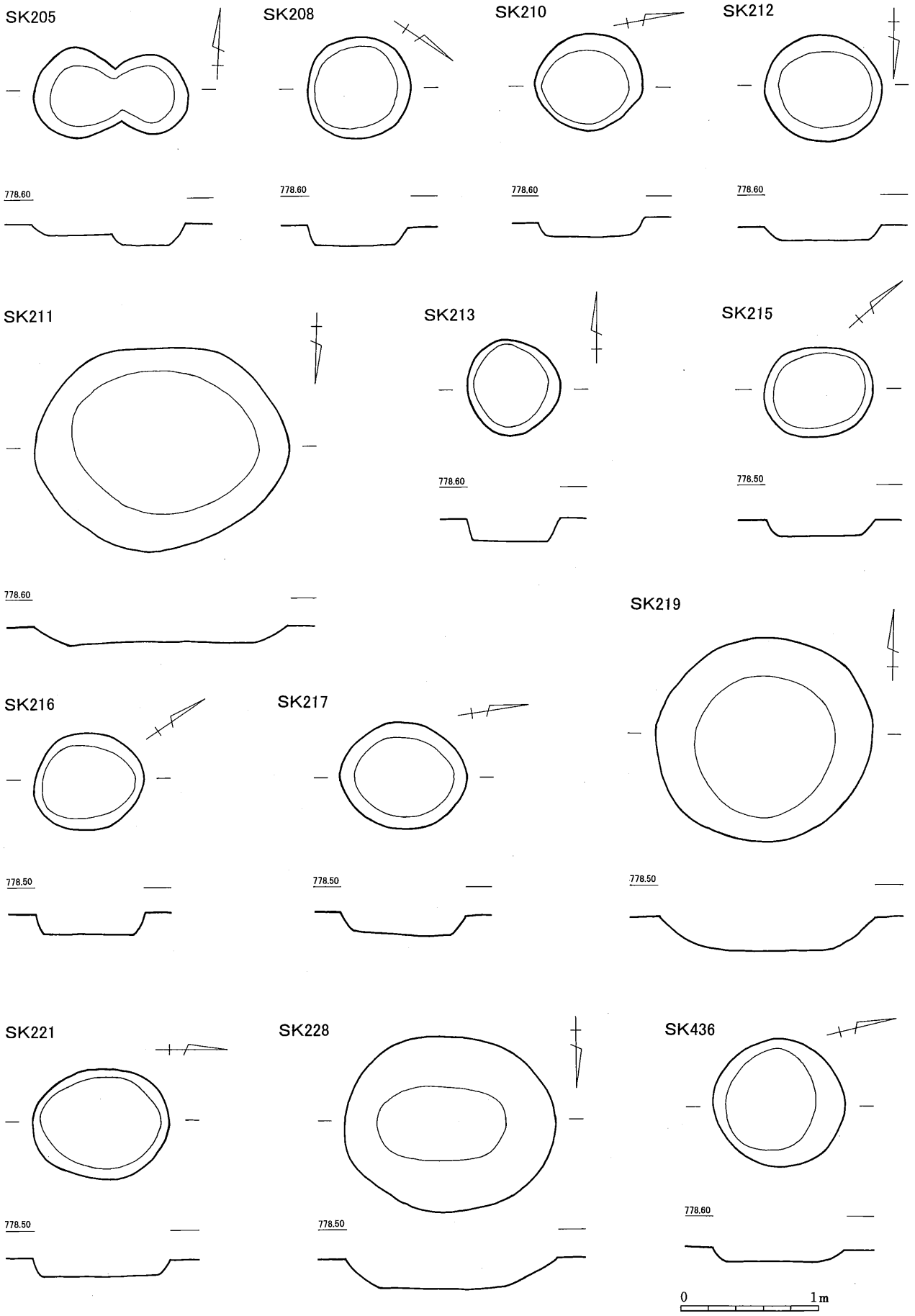
時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK149に後続する。

SK151（第17図、図版６）

位置　中位段丘面の上部平坦面先端のＩ区、Ｔ－26グリッドに位置する。南側にSK148が近接する。


SK1
779.90
SK57
779.80
SK141
779.40
1
2
3
4
5
6
7
SK142
779.30
1
2
SK144·SK145
779.30
SK144
SK145
1
2
SK151
779.50
1
2
SK148·SK149·SK150
SK148
SK149
SK150
SK152
779.60
SK153
779.10
1
2
779.30
1
2
779.50
1
2
SK156
778.70
1
2
3
4
778.70
0
1m

第17図　SK実測図（1）


SK205
SK208
SK210
SK212
SK211
SK213
SK215
SK216
SK217
SK219
SK221
SK228
SK436
778.60
778.50
0
1m

第18図　SK実測図（2）

形状　平面形は長径120cm、短径120cm、深さ29cmの円形を呈する。断面は筒状に近く、坑底はほぼ平坦である。

覆土　2層に分けられる。

第1層　黒褐色土層　　第2層　黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物　覆土中より前期末葉土器の小片2点が出土した。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK156（第17図、図版6）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－22グリッドに位置する。上面に礫が群集する。

形状　平面形は長径124cm、短径71cm、深さ34cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－84°－Wである。断面は擂り鉢状に近く、一端にテラスを伴う。坑底は起伏をもつ。

覆土　4層に分けられる。

第1層　黒褐色土層（しまりに欠ける。多量の炭化物・明黄褐色土ブロック、焼土粒を含む。）

第2層　明黄褐色土層（焼土を主体とする。）

第3層　黒褐色土層（しまりに欠ける。多量の炭化物・白色砂粒、焼土粒を含む。）

第4層　暗褐色土層（少量の白色砂粒・赤色粒を含む。）

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK340（第19図、図版6）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、V－18グリッドに位置する。南側でSK531を切る。

形状　平面形は長径118cm、短径100cm、深さ28cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－27°－Eである。断面は擂り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土　2層に分けられる。

第1層　黒褐色土層（やや柔らかい。少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第2層　黒褐色土層（やや堅い。少量の黄褐色土ブロックを含む。）

出土遺物　覆土中より晩期前～中葉の土器22点、打製石斧1点、剥片1点が出土した（第38図200～205、第58・71図335・336）。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代晩期前～中葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK531に後続する。

SK342（第19図、図版6）

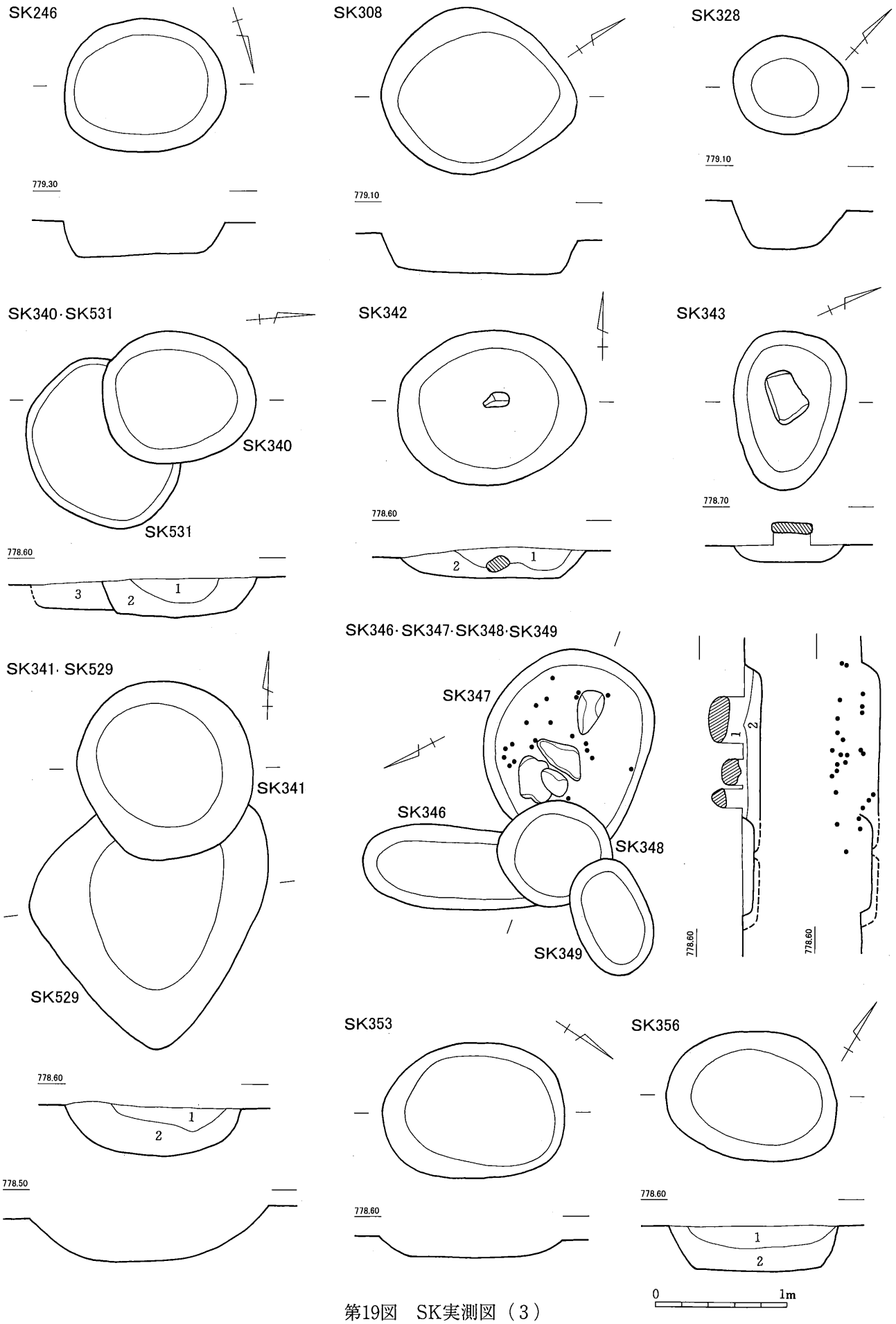
位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、U－18グリッドに位置する。

形状　平面形は長径143cm、短径117cm、深さ20cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－4°－Wである。断面は皿状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土　2層に分けられる。

第1層　黒褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第2層　黒褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）


SK246
779.30
SK308
779.10
SK328
779.10
SK340・SK531
SK340
SK531
778.60
3
2
1
SK342
778.60
2
1
SK343
778.70
SK341・SK529
SK341
SK529
778.60
1
2
778.50
SK346・SK347・SK348・SK349
SK347
SK346
SK348
SK349
1
2
778.60
778.60
SK353
778.60
SK356
778.60
1
2
0
1m

第19図　SK実測図（3）

出土遺物　覆土中より礫1点が出土した。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代晩期に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK343（第19図、図版6）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－19グリッドに位置する。上面に平石が分布していた。

形状　平面形は長径121cm、短径85cm、深さ20cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－70°－Wである。断面は皿状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土　黒褐色土が堆積していた。少量の褐色砂ブロックを含む。

出土遺物　覆土中より前期末葉土器1点、中期土器2点、打製石斧1点などが出土した（第39図209、第70図337・339）。前期末葉の土器は混入した可能性が強い。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して縄文時代中期中葉～後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SK347（第20図、図版7）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－23グリッドに位置する。西側でSK348に切られる。

形状　平面形は長径146cm、短径125cm、深さ30cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－47°－Wである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土　2層に分けられる。

第1層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。白色砂粒を含む。）

第2層　黒褐色土層（しまりをもつ。白色砂粒を含む。）

出土遺物　覆土第1層を中心に中期中葉最末段階の土器18点、剥片1点が出土したほか、礫4個が長軸上に並ぶように遺存していた（第38図206～208）。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代中期中葉でも最も新しい段階の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK348に後続する。

SK413（第20図）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－21グリッドに位置する。

形状　平面形は長径129cm、短径128cm、深さ13cmの略円形を呈する。長軸方向はN－51°－Eである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物　覆土中より礫1点が出土した。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK431（第20図）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－21グリッドに位置する。中央部近くをSK171に切られる。

形状　平面形は長径247cm、短径178cm、深さ17cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN－26°－Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

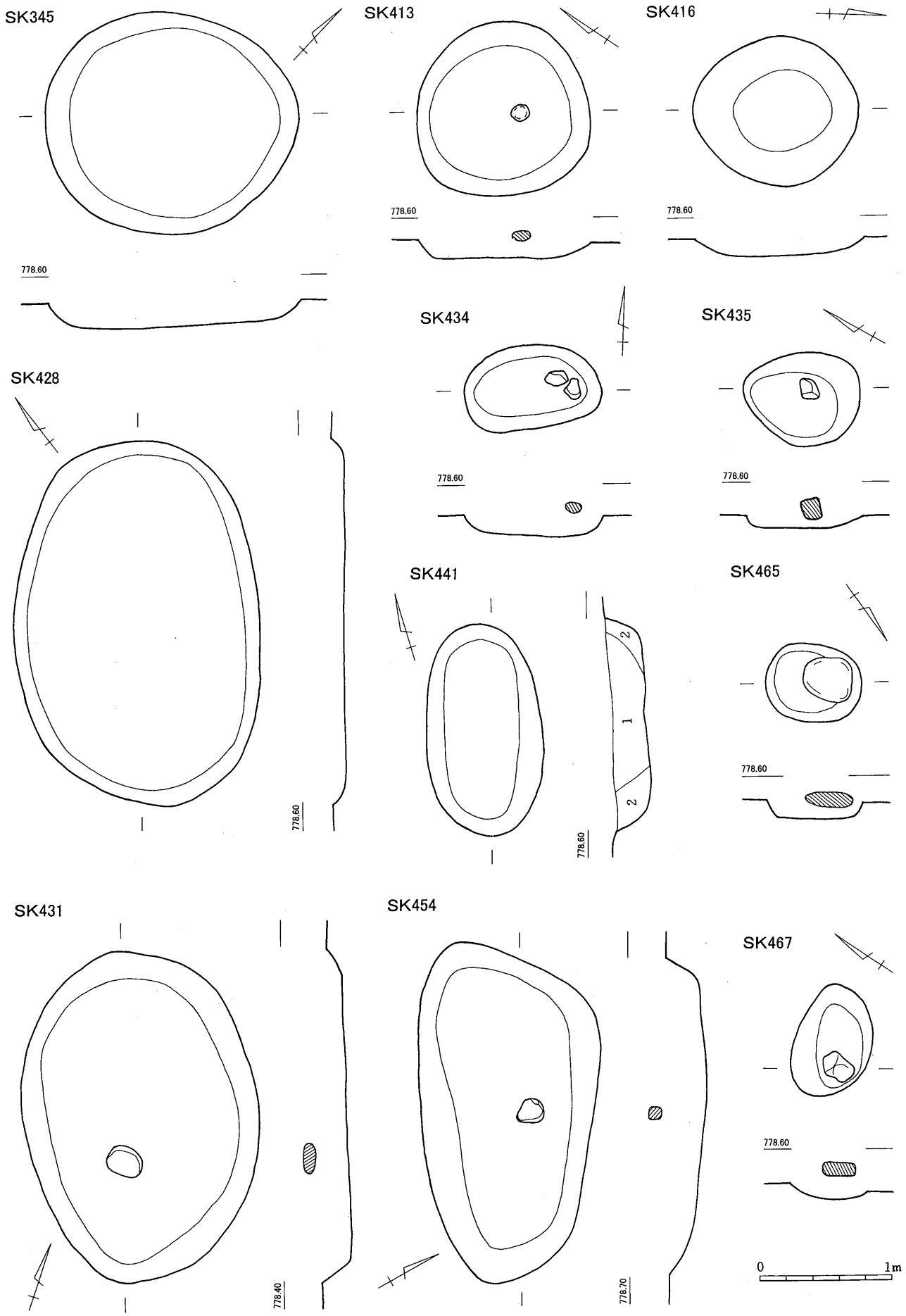
出土遺物　覆土中より、石皿に擬制した可能性が考えられる磨痕礫１点（第23図１）が出土した。
時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK171に先行する。

SK434（第20図、図版７）
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－19グリッドに位置する。
形状　平面形は長径104cm、短径64cm、深さ11cmの長楕円形を呈する。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。
覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。
出土遺物　覆土中より礫２点が出土した。
時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

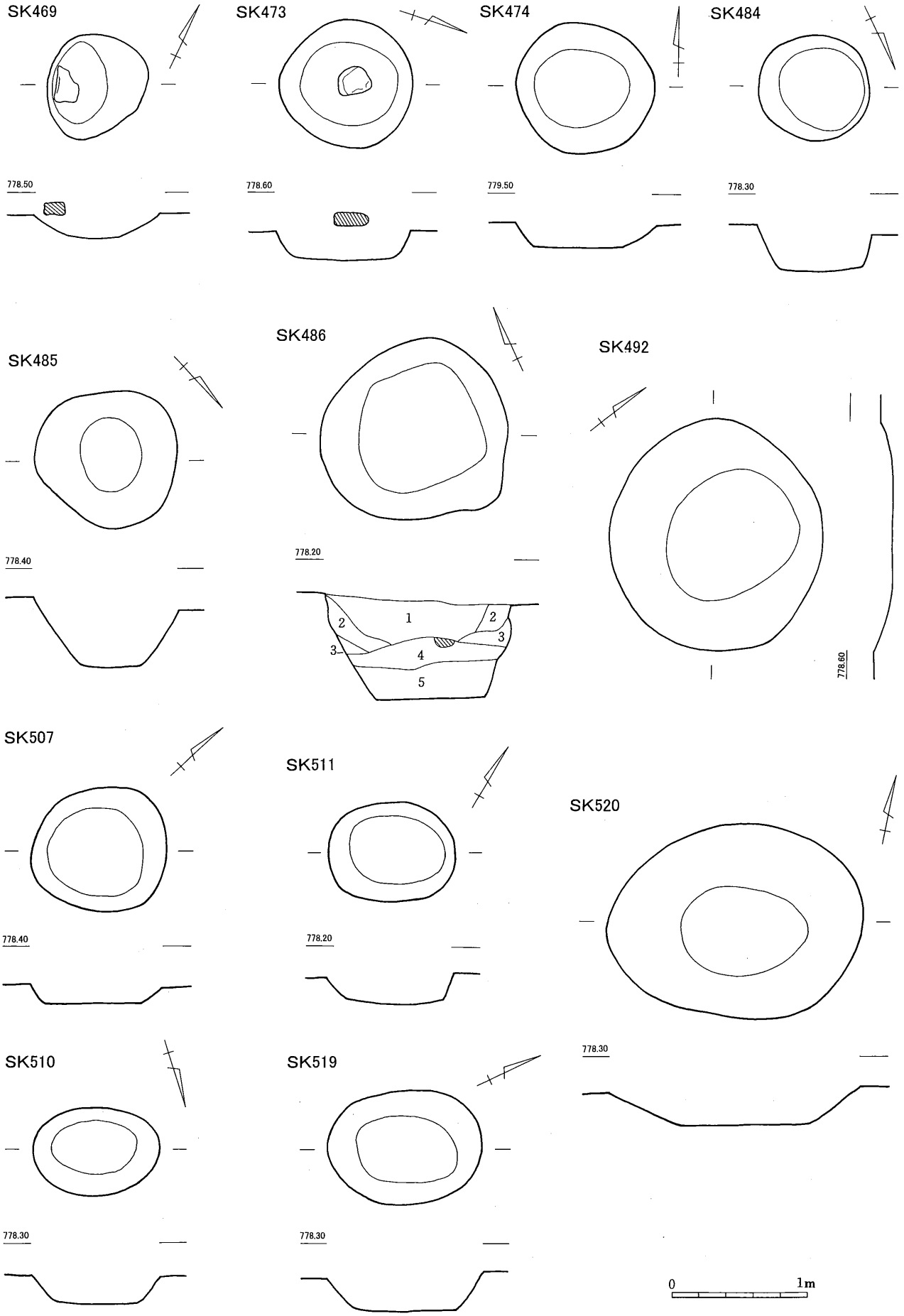
SK454（第20図）
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｗ－19グリッドに位置する。南東端近くをSF４に切られる。
形状　平面形は長径240cm、短径132cm、深さ31cmの長楕円形を呈する。長軸方向はＮ－53°－Ｗである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。
覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。
出土遺物　覆土中より大型礫１点が出土した。
時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSF４に先行する。

SK465（第20図）
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－21グリッドに位置する。北側でSK540を切る。
形状　平面形は長径71cm、短径58cm、深さ13cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は平坦である。
覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。
出土遺物　覆土中より、敲打による加工痕を有し石皿に擬制して埋納された可能性が考えられる礫１点（第23図２）、目的剥片１点（第56・70図676）が出土した。
時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK540に後続する。

SK473（第21図、図版７）
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｗ－21グリッドに位置する。南西側でSK497を切る。
形状　平面形は長径99cm、短径96cm、深さ23cmの略円形を呈する。長軸方向はＮ－18°－Ｗである。断面は擂り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。
覆土　黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。
出土遺物　覆土中より偏平礫１点が出土した。
時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK497に後続する。


SK345
778.60
SK413
778.60
SK416
778.60
SK434
778.60
SK435
778.60
SK428
778.60
SK441
2
1
2
778.60
SK465
778.60
SK431
778.40
SK454
778.70
SK467
778.60
0
1m

第20図　SK実測図（4）


SK469
778.50
SK473
778.60
SK474
779.50
SK484
778.30
SK485
778.40
SK486
778.20
1
2
2
3
3
4
5
SK492
778.60
SK507
778.40
SK511
778.20
SK520
778.30
SK510
778.30
SK519
778.30
0
1m

第21図　SK実測図（5）

SK486（第21図、図版７）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－25グリッドに位置する。SB16に切られる。

形状　平面形は長径139cm、短径133cm、深さ77cmの不整な円形を呈する。長軸方向はＮ－68°－Ｗである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は平坦である。

覆土　５層に分けられる。

第１層　黒褐色砂質土層（しまりに欠ける。多量の白色砂粒、炭化物を含む。）

第２層　黒褐色土層（多量の炭化物を含む。）

第３層　黒褐色土層（多量の炭化物・白色砂粒を含む。）

第４層　黒褐色土層（しまりをもつ。多量の炭化物を含む。）

第５層　暗褐色土層（黄褐色土ブロック・黒褐色砂質ブロックを含む。）

出土遺物　覆土中より前期末葉土器２点、礫多数が出土した（第39図214・215）。

時期　伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB16に先行する。

SK527（第22図、口絵２）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－21グリッドに位置する。

形状　平面形は長径85cm、短径80cm、深さ41cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－31°－Ｗである。断面は擂り鉢状に近く、坑底はやや傾斜をもつ。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色砂質土層（小量の褐色砂ブロックを含む。）

第２層　黒褐色土層（堅くしまる。）

出土遺物　確認面より２点、覆土上層より４点、合計６点の打製石斧が出土した（第56・70図348～353）。いずれも水平の状態で重なり合うような形で検出されており、人為的に埋納された可能性が強い。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK531（第22図）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－18グリッドに位置する。北側でSK340に切られる。

形状　平面形は長径134cm、短径117cm、深さ10cmの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－80°－Ｅである。断面は擂り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土　暗褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

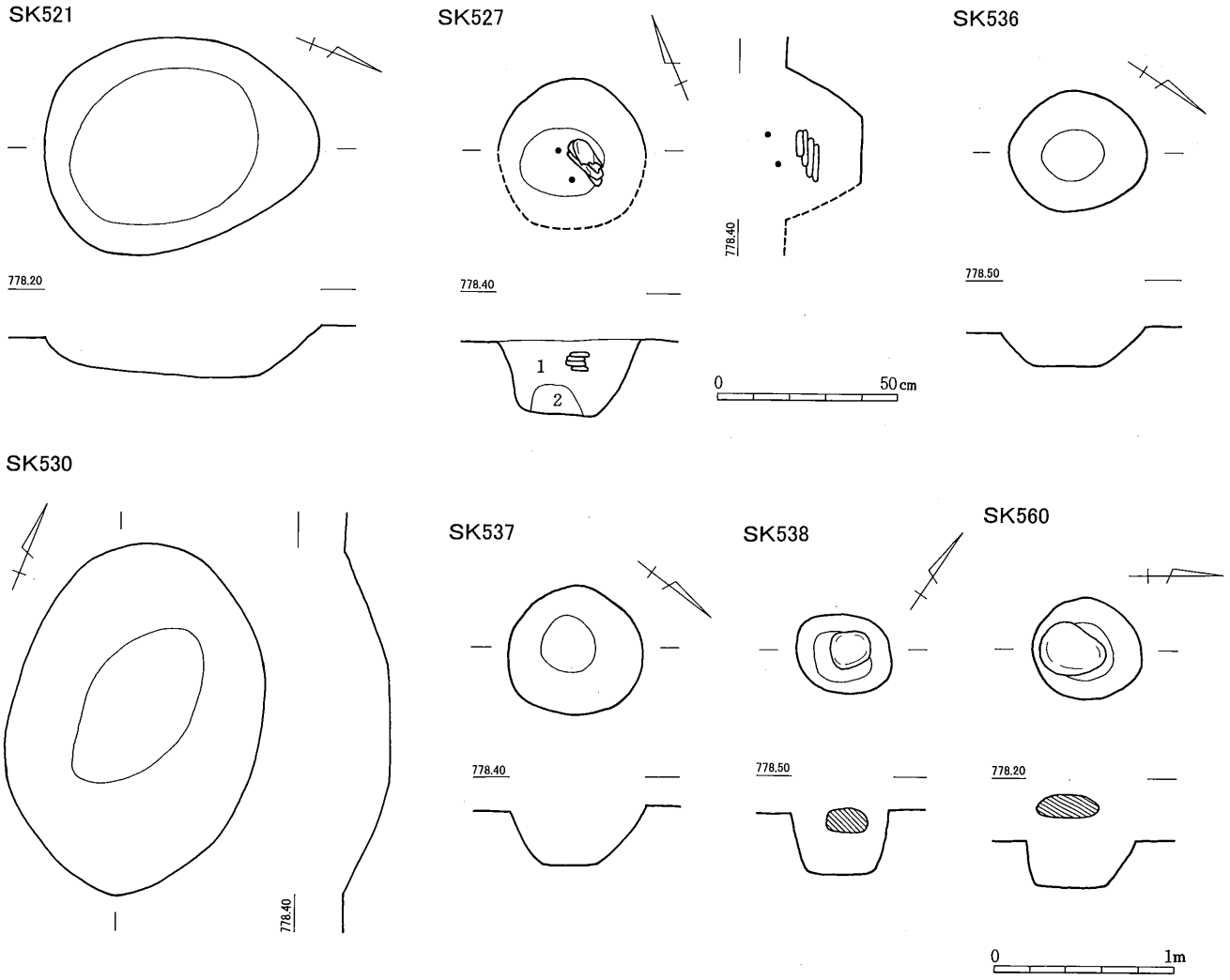
時期　覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK340に先行する。

SK538（第22図、図版７）

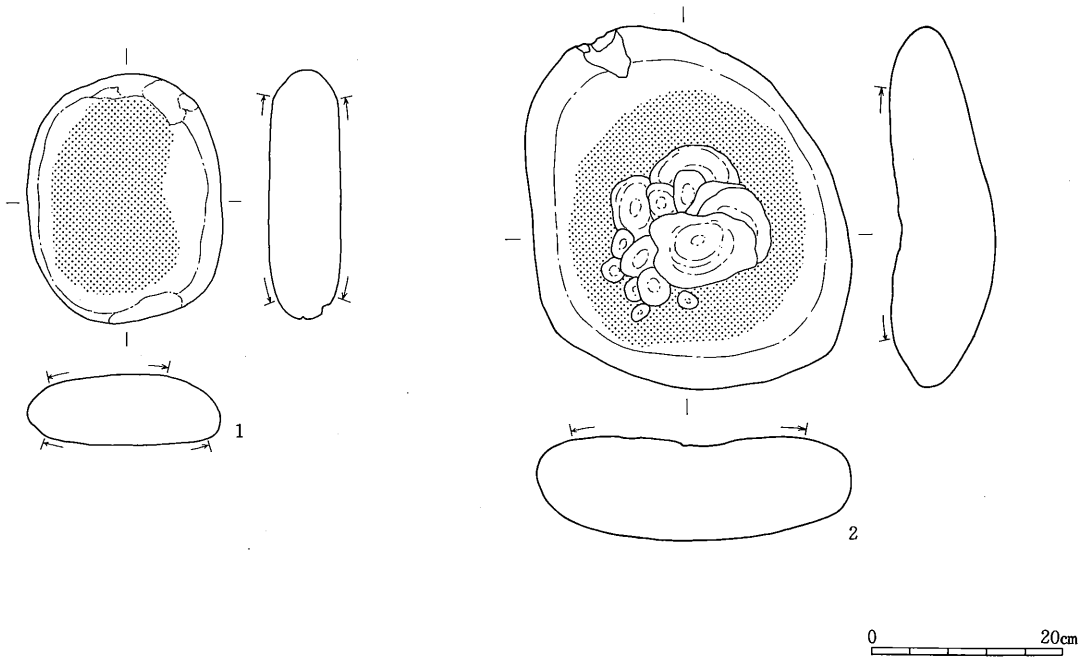
位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－19グリッドに位置する。

形状　平面形は長径53cm、短径46cm、深さ36cmの略円形を呈する。長軸方向はＮ－54°－Ｅである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土　暗褐色土が堆積していた。褐色砂ブロックを含む。



第22図　SK実測図（6）



第23図　SK出土磨痕礫（1－SK431、2－465）

出土遺物　覆土上面より石皿に擬制した可能性が考えられる礫1点が出土した。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK560（第22図）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－25グリッドに位置する。

形状　平面形は長径61cm、短径57cm、深さ25cmの略円形を呈する。長軸方向はN－4°－Eである。断面は擂り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土　暗褐色土が堆積していた。白色砂粒・赤色土粒を含む。

出土遺物　覆土上面より石皿に擬制した可能性が考えられる礫1点が出土した。

時期　覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して、縄文時代晩期に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

第1表　土坑一覧表（平安時代ほか含む）

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模（cm）		覆土	遺物		切り合い関係	軸方位	備考
						長径×短径	深さ		土器類	石器類			
1	Ⅱ区	M3	縄文？	Ⅱ	A	79×45		黒色土				N65W	小礫多数
2	Ⅱ区	M3	縄文？	Ⅰ	B	99×95	7	黒色土				N11E	
4	Ⅳ区	B15	平安？	Ⅱ	E	41×33	13	3／3暗褐色土					
5	Ⅳ区	B15	平安？	Ⅱ	E	44×33	25	3／3暗褐色土					
6	Ⅳ区	B14	平安？	Ⅰ	E	50×46	20	3／3暗褐色土					
14	Ⅲ区	F10	不明	Ⅰ	A	46×39	13	黒褐色土					
15	Ⅲ区	F10	不明	Ⅰ	E	119×123	29	黒褐色土				N86E	
17	Ⅲ区	E11	不明	Ⅱ	E	46×29	22	黒褐色土					
19	Ⅲ区	E11	不明	Ⅰ	E	47×45	18	黒褐色土					
22	Ⅳ区	B14	平安？	Ⅰ	E	42×37	14	2／2黒褐色土					
27	Ⅳ区	D14	平安？	Ⅱ	E	44×32	15	2／2黒褐色土					
40	Ⅰ区	Q6	不明	Ⅰ	A	57×56	15	黒褐色土					
41	Ⅰ区	R6	不明	Ⅱ	B	54×46	26	黒褐色土					
47	Ⅰ区	Q7	不明	Ⅱ	E	42×36	18	黒褐色土					
48	Ⅰ区	Q7	不明	Ⅰ	A	44×43	11	黒褐色土					
49	Ⅰ区	R7	不明	Ⅱ	B	86×67	22	黒褐色土				N87E	
50	Ⅰ区	R7	不明	Ⅱ	A	44×34	22	黒褐色土					
51	Ⅰ区	R7	不明	Ⅰ	A	53×46	12	黒褐色土					
52	Ⅰ区	R7	不明	Ⅰ	A	48×47	12	黒褐色土					
53	Ⅰ区	R7	不明	Ⅰ	A	48×38	12	黒褐色土					
55	Ⅰ区	R7	不明	Ⅰ	E	42×40	17	黒褐色土		磨石1			
57	Ⅰ区	R7	縄文？	Ⅱ	C	139×108	16	黒褐色土				N42W	
58	Ⅰ区	R7	不明	Ⅱ	A	65×56	16	黒褐色土					
59	Ⅰ区	R7	不明	Ⅰ	A	58×52	14	黒褐色土					
65	Ⅰ区	P8	不明	Ⅱ	B	73×49	13	黒褐色土				N27W	
66	Ⅰ区	P8	不明	Ⅱ	B	89×85	13	黒褐色土				N33W	
72	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅰ	A	55×52	18	黒褐色土					
73	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅰ	A	48×44	13	黒褐色土					
76	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅰ	A	54×52	14	黒褐色土					
84	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅱ	B	87×107	16	黒褐色土			SK85と切合う	N54E	
85	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅰ	B	73×75	16	黒褐色土			SK84と切合う	N31E	
88	Ⅰ区	Q8	不明	Ⅰ	A	52×48	11	黒褐色土					
89	Ⅰ区	R8	不明	Ⅱ	E	48×39	17	黒褐色土					
103	Ⅰ区	P9	不明	Ⅰ	A	68×62	13	黒褐色土					

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm) 長径×短径	深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
106	Ⅰ区	P 9	不明	Ⅱ	A	49×40	10	黒褐色土					
109	Ⅰ区	Q 9	不明	Ⅱ	E	52×45	23	黒褐色土					
112	Ⅰ区	Q 9	不明	Ⅰ	A	41×37	11	黒褐色土					
114	Ⅰ区	P10	不明	Ⅰ	E	55×51	23	黒褐色土					
122	Ⅰ区	Q10	不明	Ⅰ	A	46×40	14	黒褐色土					
127	Ⅰ区	P11	不明	Ⅰ	A	40×32	13	黒褐色土					
131	Ⅰ区	N14	不明	Ⅱ	A	49×46	11	黒褐色土					
132	Ⅰ区	O14	不明	Ⅱ	B	53×37	19	黒褐色土					
133	Ⅰ区	O14	不明	Ⅱ	A	81×50	19	黒褐色土					
134	Ⅰ区	O14	不明	Ⅱ	A	51×36	13	黒褐色土					
141	Ⅰ区	T23	前期末？	Ⅰ	D	110×116	78	複層				N83E	
142	Ⅰ区	T23	前期末？	Ⅰ	B	82×83	48	複層				N77E	
144	Ⅰ区	T22	前期末？	Ⅰ	C	103×93	58	複層				N 7 W	
145	Ⅰ区	T22	前期末？	Ⅱ	C	104×83	59	複層				N89W	
146	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅲ	A	124×209	15	複層	土師器甕片 1			N 9 E	墓の可能性
147	Ⅰ区	V21	平安？	Ⅰ	A	89×87	12	3／1黒褐色土				N16E	墓の可能性
148	Ⅰ区	T26	前期末	Ⅱ	A	184×150	32	複層	前期末 2	磨石 1	SK149に切られる	N57E	
149	Ⅰ区	T26	前期末	Ⅰ	C	126×126	34	複層	前期末 4		SK148を切る・150に切られる	N63W	
150	Ⅰ区	T26	前期末	Ⅰ	C	78×61	49	複層	前期末 2		SK149を切る	N54E	
151	Ⅰ区	T26	前期末？	Ⅰ	C	120×120	29	複層					
152	Ⅰ区	S25	前期末？	Ⅰ	B	103×100	21	2／2黒褐色土		凹石 1・磨石 1		N65W	
153	Ⅰ区	T24	前期末	Ⅰ	C	84×72	29	複層	前期末 2	石鏃 1・剥片 5		N20W	
154	Ⅰ区	S22	中期中葉	Ⅱ	A	80×64	7	2／2黒褐色土	中期中葉 4			N85W	
155	Ⅰ区	U23	平安？	Ⅱ	B	224×149	52	複層			SK199を切る	N82E	
156	Ⅰ区	W22	中期中~後？	Ⅱ	B	124×71	34	複層				N84W	焼土と集礫
157	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅰ	C	57×54	6	3／2黒褐色土・白色砂粒多		打斧 1		N10E	
158	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅱ	B	56×47	13	3／2黒褐色土・白色粒多		磨石 1		N14W	
159	Ⅰ区	X21	中期中~後？	Ⅱ	A	60×40	8	複層				N 7 W	焼土
160	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅱ	A	94×65	20	3／2黒褐色土・白色砂粒				N86W	
161	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅰ	E	44×42	11	2／1黒色土					
162	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅱ	A	60×53	10	2／1黒色土					
163	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅰ	B	158×152	26	3／2黒褐色土・白色砂粒				N46E	
165	Ⅰ区	V20	平安？	Ⅱ	E	42×30	16	2／1黒色土					
166	Ⅰ区	W20	平安？	Ⅱ	B	131×100	10	3／2黒褐色土・白色砂粒				N46W	
167	Ⅰ区	W20	平安？	Ⅱ	A	98×75	12	3／2黒褐色土・白色砂粒				N54W	
168	Ⅰ区	V21	平安？	Ⅱ	B	89×67	13	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK428を切る	N 2 E	
170	Ⅰ区	V21	平安？	Ⅰ	A	108×100	17	3／2黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る	N75E	
171	Ⅰ区	W21	平安？	Ⅱ	E	43×34	10	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK431を切る		
173	Ⅰ区	W21	平安？	Ⅱ	A	302×191	25	3／2黒褐色土・白色砂粒				N63W	
174	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	E	48×45	11	3／2黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る		
177	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	A	85×81	14	3／2黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る	N90E	
184	Ⅰ区	W22	平安？	Ⅰ	A	99×85	10	3／2黒褐色土・白色砂粒				N 7 W	
185	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	A	71×64	15	3／2黒褐色土・白色砂粒				N24W	
186	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	E	42×36	12	3／2黒褐色土・白色砂粒					
187	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	A	67×62	12	3／2黒褐色土・白色砂粒				N41W	
189	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅱ	B	97×81	18	3／2黒褐色土・白色砂粒				N43E	
190	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	B	57×55	13	3／2黒褐色土・白色砂粒				N 3 W	
191	Ⅰ区	V22	平安？	Ⅰ	B	78×68	10	3／2黒褐色土・白色砂粒				N 3 W	
194	Ⅰ区	W22	平安	Ⅱ	B	76×56	18	3／2黒褐色土・白色砂粒	灰釉陶器 1			N50W	
195	Ⅰ区	W22	平安？	Ⅰ	B	76×72	28	3／2黒褐色土・白色砂粒				N30W	
197	Ⅰ区	U23	平安？	Ⅰ	E	49×46	12	3／2黒褐色土・白色砂粒					
199	Ⅰ区	U23	平安？	Ⅰ	E	39×40	14	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK155に切られ、SK198と切合う		
200	Ⅰ区	V23	平安？	Ⅰ	B	70×64	6	3／2黒褐色土・白色砂粒				N37E	
203	Ⅰ区	V23	平安？	Ⅰ	A	107×98	26	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK202と切合う	N55W	
204	Ⅰ区	V23	平安？	1	B	68×66	10	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK205と切合い、SK568を切る	N55W	
205	Ⅰ区	V23	平安？	Ⅰ	B	56×54	16	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK204と切合う	N39W	
206	Ⅰ区	V24	平安？	Ⅱ	A	218×149	15	3／2黒褐色土・白色砂粒				N 3 W	

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm) 長径×短径	規模 (cm) 深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
207	Ⅰ区	V23	平安？	Ⅰ	A	58×52	11	3／2黒褐色土・白色砂粒					
208	Ⅰ区	W23	平安？	Ⅰ	B	77×75	15	3／2黒褐色土・白色砂粒				N44W	
209	Ⅰ区	W23	平安？	Ⅰ	E	54×50	10	3／2黒褐色土・白色砂粒					
210	Ⅰ区	W23	平安？	Ⅰ	B	78×72	15	3／2黒褐色土・白色砂粒				N10E	
211	Ⅰ区	V24	平安？	Ⅱ	A	186×148	12	3／2黒褐色土・白色砂粒				N90E	
212	Ⅰ区	V24	平安？	Ⅰ	B	84×78	9	3／2黒褐色土・白色砂粒				N33W	
213	Ⅰ区	V24	平安？	Ⅰ	B	70×71	17	3／2黒褐色土・白色砂粒				N48W	
214	Ⅰ区	W24	平安	Ⅰ	A	62×57	12	3／2黒褐色土・白色砂粒					
215	Ⅰ区	W24	平安？	Ⅱ	B	79×65	12	3／2黒褐色土・白色砂粒				N47E	
216	Ⅰ区	W24	平安？	Ⅱ	B	80×71	19	3／2黒褐色土・白色砂粒				N31E	
217	Ⅰ区	W24	平安？	Ⅱ	B	93×78	16	3／2黒褐色土・白色砂粒				N6E	
218	Ⅰ区	W24	平安？	Ⅱ	E	79×44	28	3／2黒褐色土・白色砂粒					
219	Ⅰ区	V25	平安？	Ⅰ	A	159×150	26	3／2黒褐色土・白色砂粒			SK518を切る	N45W	
220	Ⅰ区	V25	平安？	Ⅰ	A	54×47	23	3／2黒褐色土・白色砂粒					
221	Ⅰ区	V25	平安？	Ⅰ	A	102×85	13	3／2黒褐色土・白色砂粒				N3W	
226	Ⅰ区	U26	平安？	Ⅰ	E	60×59	23	3／2黒褐色土・白色砂粒					
228	Ⅰ区	V26	平安？	Ⅱ	A	155×126	23	3／2黒褐色土・白色砂粒				N55W	
229	Ⅰ区	V26	平安？	Ⅰ	B	59×60	12	3／2黒褐色土・白色砂粒					
230	Ⅰ区	V26	平安？	Ⅰ	E	37×33	12	3／2黒褐色土・白色砂粒					
231	Ⅰ区	W26	平安？	Ⅱ	E	55×47	15	3／2黒褐色土・白色砂粒					
233	Ⅰ区	O16	平安？	Ⅰ	A	66×63	17	3／2黒褐色土			SK234を切る		
234	Ⅰ区	O16	縄文？	Ⅱ	B	106×59	13	2／1黒色土・白色粒10%			SK233に切られる	N3W	
235	Ⅰ区	O16	平安？	Ⅱ	A	45×39	10	3／2黒褐色土					
240	Ⅰ区	O16	縄文？	Ⅰ	E	43×40	18	2／1黒色土・白色砂粒10%					
243	Ⅰ区	O17	縄文？	Ⅰ	B	35×32	11	2／1黒色土・白色砂粒10%					
246	Ⅰ区	O18	縄文？	Ⅱ	B	127×103	28	2／1黒色土・白色砂粒10%				N76W	
250	Ⅰ区	P20	縄文？	Ⅱ	A	61×43	19	2／1黒色土・白色砂粒10%					
251	Ⅰ区	O21	縄文？	Ⅰ	B	68×66	33	2／1黒色土・白色砂粒10%				N8E	
254	Ⅰ区	S19	中期中葉？	Ⅱ	A	73×50	6	3／2黒褐色土・白色砂粒多				N8W	
255	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅰ	A	76×66	13	3／2黒褐色土・白色砂粒多				N42E	
273	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅱ	C	45×34	28	3／2黒褐色土・白色砂粒多			SK274と切合う	N63E	
282	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅰ	A	85×79	24	3／2黒褐色土・白色砂粒多			SK281と切合う	N56W	
284	Ⅰ区	S20	中期中葉？	Ⅱ	B	83×51	18	3／2黒褐色土・白色砂粒多				N19E	
295	Ⅰ区	T21	中期中葉？	Ⅱ	E	41×33	27	2／2黒褐色土					
299	Ⅰ区	T21	中期中葉？	Ⅱ	E	36×26	19	2／2黒褐色土		磨石1			
301	Ⅰ区	T21	前期末？	Ⅰ	B	72×68	23	2／2黒褐色土				N47W	
302	Ⅰ区	S22	中期中葉？	Ⅰ	B	66×59	12	2／2黒褐色土			SK303と切合う	N14W	
303	Ⅰ区	S22	中期中葉？	Ⅱ	B	52×42	10	2／2黒褐色土			SK302と切合う	N7W	
305	Ⅰ区	S22	中期中葉？	Ⅱ	B	79×62	15	2／2黒褐色土				N72W	
306	Ⅰ区	S22	中期中葉？	Ⅰ	A	50×44	11	2／2黒褐色土					
308	Ⅰ区	T22	前期末？	Ⅱ	B	149×127	24	2／2黒褐色土				N28E	
309	Ⅰ区	S23	前期末？	Ⅱ	B	75×55	24	2／2黒褐色土				N63W	
310	Ⅰ区	S25	前期末？	Ⅱ	E	41×35	15	2／2黒褐色土					
311	Ⅰ区	S25	前期末？	Ⅰ	E	46×40	15	2／2黒褐色土					
323	Ⅰ区	T26	前期末？	Ⅱ	B	84×60	20	2／2黒褐色土				N80W	
324	Ⅰ区	T27	前期末？	Ⅱ	B	88×77	13	2／2黒褐色土				N4E	
326	Ⅰ区	T27	前期末？	Ⅱ	B	89×73	19	2／2黒褐色土				N30E	
328	Ⅰ区	T23	前期末？	Ⅰ	B	87×74	33	2／2黒褐色土				N57E	
330	Ⅰ区	U17	中期中～後？	Ⅱ	B	46×36	23	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
331	Ⅰ区	V17	中期中～後？	Ⅱ	A	96×41	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N34W	
332	Ⅰ区	V17	中期中～後？	Ⅱ	E	51×37	34	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
333	Ⅰ区	V17	中期中～後？	Ⅱ	E	42×34	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
334	Ⅰ区	W18	中期中～後？	Ⅰ	E	37×35	10	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm) 長径×短径	規模 (cm) 深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
335	Ⅰ区	V19	中期中~後?	Ⅱ	B	103×71	30	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N68E	
336	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	A	119×61	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N45W	
340	Ⅰ区	V18	晩期	Ⅱ	B	118×100	28	複層	晩期　22	打斧1・剥片1	SK531を切る	N27E	
341	Ⅰ区	V18	晩期？	Ⅰ	B	137×134	30	複層			SK529を切る	N20E	
342	Ⅰ区	U18	晩期？	Ⅱ	A	143×117	20	複層				N4W	
343	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	A	121×85	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期2	打斧1・剥片1		N70W	覆土中に石
344	Ⅰ区	V19	中期中~後?	Ⅰ	A	106×98	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N4E	
345	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅰ	A	188×155	17	不明				N49E	
346	Ⅰ区	W23	中期？	Ⅱ	A	143×62	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK348に切られる	N25E	
347	Ⅰ区	W23	中期中葉	Ⅱ	B	146×125	30	複層	中期中葉18	剥片1	SK348に切られる	N47W	
348	Ⅰ区	W23	中期？	Ⅰ	B	76×80	9	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK348に切られ346・347を切る	N43W	
349	Ⅰ区	W23	中期？	Ⅱ	B	90×58	10	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK348を切る	N86W	
350	Ⅰ区	X18	中期中~後?	Ⅱ	A	118×79	8	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N78W	
351	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅱ	E	54×43	15	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
352	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅱ	E	52×32	17	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
353	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	A	138×102	11	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N32W	
354	Ⅰ区	V17	中期中~後?	Ⅱ	B	42×33	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
355	Ⅰ区	U17	中期中~後	Ⅰ	B	72×70	17	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
356	Ⅰ区	V18	晩期？	Ⅱ	B	128×98	30	複層				N62E	
360	Ⅰ区	V19	中期中~後?	Ⅰ	A	47×42	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
361	Ⅰ区	U14	中期中~後?	Ⅱ	A	92×68	15	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
362	Ⅰ区	V14	中期中~後?	Ⅱ	A	84×69	9	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
363	Ⅰ区	V14	中期中~後?	Ⅰ	A	56×53	7	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
373	Ⅰ区	U15	中期中~後?	Ⅰ	A	40×39	10	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
374	Ⅰ区	U15	中期中~後?	Ⅱ	A	54×47	8	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
376	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅰ	E	37×36	17	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
378	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅱ	A	52×76	8	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
379	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅰ	A	38×35	10	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
381	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅱ	A	59×48	20	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
382	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅱ	E	40×34	28	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
383	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅱ	B	69×56	46	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
384	Ⅰ区	V15	中期中~後?	Ⅱ	A	88×56	10	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
393	Ⅰ区	U16	中期中~後	Ⅰ	A	42×39	16	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
394	Ⅰ区	U16	中期中~後	Ⅰ	B	54×50	15	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
395	Ⅰ区	V16	中期中~後	Ⅱ	E	44×26	18	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
396	Ⅰ区	V16	中期中~後	Ⅰ	B	66×62	35	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
397	Ⅰ区	V16	中期中~後	Ⅱ	A	63×52	13	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
398	Ⅰ区	V16	中期中~後	Ⅱ	A	75×55	20	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
399	Ⅰ区	V16	中期中~後	Ⅰ	A	56×51	15	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					
400	Ⅰ区	V16	中期中~後?	Ⅱ	A	52×43	12	3／2黒褐色土・白色砂粒多い					

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm) 長径×短径	規模 (cm) 深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
401	Ⅰ区	V19	中期中~後?	Ⅱ	B	77×65	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N24W	
402	Ⅰ区	U19	中期中~後?	Ⅱ	E	34×27	24	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
403	Ⅰ区	U19	中期中~後?	Ⅰ	B	57×53	27	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
404	Ⅰ区	U20	中期中~後?	Ⅰ	B	59×56	30	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
405	Ⅰ区	V20	中期	Ⅰ	B	65×54	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期1			N89W	
406	Ⅰ区	V20	中期中~後?	Ⅱ	A	71×41	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N26W	
407	Ⅰ区	V20	中期中~後?	Ⅰ	E	60×57	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
412	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅰ	E	74×70	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
413	Ⅰ区	W21	中期中~後?	Ⅰ	A	129×128	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N51E	
414	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅰ	E	50×47	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
416	Ⅰ区	X20	中期中葉	Ⅰ	A	125×113	12	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期中葉1			N35W	
417	Ⅰ区	X20	中期中~後?	Ⅰ	E	60×51	18	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
420	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅰ	B	63×57	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N47W	
424	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅰ	E	49×45	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
426	Ⅰ区	W21	中期中~後?	Ⅰ	E	57×53	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
428	Ⅰ区	V21	中期	Ⅱ	A	273×118	5	2／1黒色土・白色砂粒20%含	中期1		SK168に切られる	N36E	
429	Ⅰ区	V21	中期中~後?	Ⅰ	B	65×53	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N10E	
431	Ⅰ区	W21	中期中~後?	Ⅱ	A	247×178	17	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%		磨痕礫1	SK171に切られる	N26W	
434	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅱ	A	104×64	11	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N83W	覆土中に石
435	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅱ	A	88×72	9	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N29W	覆土中に石
436	Ⅰ区	U21	平安	Ⅰ	B	97×95	12	2／3黒褐色砂質黄褐色土ブロック10%	灰釉陶器1			N16E	
438	Ⅰ区	W18	中期中~後?	Ⅰ	E	43×42	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
439	Ⅰ区	W18	中期中~後?	Ⅱ	E	62×41	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
441	Ⅰ区	V18	晩期？	Ⅱ	B	159×87	27	複層				N16E	
442	Ⅰ区	W18	中期中~後?	Ⅱ	B	88×48	11	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N4W	
443	Ⅰ区	W18	中期中~後?	Ⅱ	E	64×54	18	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
444	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅰ	E	39×34	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
445	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅱ	B	62×56	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N36E	
446	Ⅰ区	X19	中期中~後?	Ⅱ	E	47×34	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
447	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	E	47×36	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
448	Ⅰ区	V20	中期中~後?	Ⅰ	A	35×37	10	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
449	Ⅰ区	V19	中期中~後?	Ⅰ	E	46×40	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
450	Ⅰ区	V20	中期中~後?	Ⅰ	E	47×42	17	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
451	Ⅰ区	U20	中期中~後?	Ⅰ	B	62×57	31	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N60W	
453	Ⅰ区	X19	中期中~後	Ⅰ	B	73×82	24	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%			SK456と切合う	N75E	
454	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	A	240×132	31	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%		擬石皿1	SF4に切られる	N53W	覆土中に石
455	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	E	47×34	15	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
456	Ⅰ区	W19	中期	Ⅰ	B	94×102	15	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期1		SK453と切合う	N75E	

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm) 長径×短径	規模 (cm) 深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
458	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅰ	E	38×35	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
459	Ⅰ区	W19	中期中葉	Ⅱ	A	64×46	10	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期中葉1			N45E	
460	Ⅰ区	W22	中期中~後?	Ⅰ	B	76×70	8	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N15W	
462	Ⅰ区	W22	中期中~後?	Ⅱ	E	51×35	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
463	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅰ	B	72×72	8	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N38W	
464	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅱ	E	51×41	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
465	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅱ	B	71×58	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%		擬石皿1・剥片1	SK540を切る	N60W	
466	Ⅰ区	X21	中期中	Ⅱ	B	80×68	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期1			N65W	覆土中に石
467	Ⅰ区	W22	中期中~後?	Ⅱ	A	82×57	9	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N54E	覆土中に石
469	Ⅰ区	X22	中期中~後?	Ⅱ	A	73×76	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N60E	覆土中に石
471	Ⅰ区	X22	中期中~後?	Ⅱ	B	91×70	20	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
472	Ⅰ区	X22	中期中~後?	Ⅰ	B	67×64	9	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
473	Ⅰ区	W21	中期中~後?	Ⅰ	B	99×96	23	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK497を切る	N18W	覆土中に石
474	Ⅰ区	V22	中期中~後?	Ⅰ	B	105×97	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期1			N61E	
476	Ⅰ区	V22	中期中~後?	Ⅰ	B	105×96	19	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N87E	
477	Ⅰ区	V22	中期中~後?	Ⅱ	A	106×90	15	複層				N81W	
478	Ⅰ区	X22	中期中~後?	Ⅰ	B	82×73	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N72W	
484	Ⅰ区	X25	前期末?	Ⅰ	B	80×80	38	2／1黒色土			SB16に切られる	N63W	
485	Ⅰ区	X25	前期末?	Ⅰ	B	105×102	40	2／1黒色土			SB16に切られる	N37W	
486	Ⅰ区	X25	前期末	Ⅰ	B	139×133	77	複層	前期末2		SB16に切られる	N68W	
489	Ⅰ区	V20	中期中~後?	Ⅱ	E	45×32	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
491	Ⅰ区	W19	中期中~後?	Ⅱ	B	78×63	13	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	前期末2	剥片1		N39W	
492	Ⅰ区	W20	中期中葉	Ⅱ	A	174×157	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	中期中葉6		SK537を切る	N57W	
493	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅱ	E	52×23	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
494	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅰ	E	44×42	38	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
495	Ⅰ区	W20	中期中~後?	Ⅰ	E	38×35	21	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
497	Ⅰ区	V21	中期中~後?	Ⅰ	E	36×35	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK473に切られる		
498	Ⅰ区	W21	中期中~後?	Ⅰ	B	92×86	15	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N32W	
499	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅱ	E	52×33	18	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
500	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅰ	E	51×48	18	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
501	Ⅰ区	X21	中期中~後?	Ⅱ	E	65×57	34	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
506	Ⅰ区	X25	縄文	Ⅰ	E	53×52	36	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
507	Ⅰ区	W24	縄文	Ⅰ	B	101×94	14	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%				N37E	
508	Ⅰ区	W24	縄文	Ⅰ	B	51×44	11	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N43W	
509	Ⅰ区	W25	縄文	Ⅰ	B	77×72	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SB16に切られる	N80W	
510	Ⅰ区	W25	晩期?	Ⅱ	B	89×66	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N75W	
511	Ⅰ区	W26	晩期?	Ⅱ	B	96×76	24	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%				N58E	
514	Ⅰ区	W24	縄文	Ⅱ	E	51×35	25	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
515	Ⅰ区	X24	縄文	Ⅱ	E	43×34	28	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
516	Ⅰ区	V24	晩期	Ⅰ	B	63×56	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	晩期1			N12E	

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模（cm）長径×短径	規模（cm）深さ	覆土	遺物 土器類	遺物 石器類	切り合い関係	軸方位	備考
517	Ⅰ区	V24	晩期？	Ⅱ	B	101×81	17	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N52W	
518	Ⅰ区	W25	晩期？	Ⅱ	B	116×84	27	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%			SK219に切られる	N20E	
519	Ⅰ区	W24	縄文	Ⅱ	E	40×32	24	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
520	Ⅰ区	V24	縄文	Ⅱ	A	191×148	28	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%				N79E	
521	Ⅰ区	V25	晩期？	Ⅱ	B	156×120	27	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N11W	
522	Ⅰ区	W25	晩期？	Ⅰ	A	79×77	19	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%				N46W	
523	Ⅰ区	W26	縄文	Ⅱ	E	38×32	42	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
524	Ⅰ区	W27	中期中～後	Ⅰ	E	40×37	37	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
525	Ⅰ区	W22	中期中～後？	Ⅰ	E	65×62	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
527	Ⅰ区	V21	中期中～後？	Ⅰ	B	43×40	41	複層		打斧6本埋納		N31W	
529	Ⅰ区	V18	縄文	Ⅱ	A	146×182	38	3／3暗褐色土			SK341に切られる	N83E	
530	Ⅰ区	V18	縄文	Ⅱ	A	196×144	29	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N23W	
531	Ⅰ区	V18	縄文	Ⅱ	B	134×117	10	3／3暗褐色土			SK340に切られる	N80E	
532	Ⅰ区	V18	晩期？	Ⅱ	A	104×69	31	3／3暗褐色土				N75W	
533	Ⅰ区	V18	中期中～後？	Ⅰ	A	57×53	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N46E	
534	Ⅰ区	V17	中期中～後？	Ⅰ	B	45×41	8	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N2E	
535	Ⅰ区	V17	中期中～後？	Ⅱ	A	83×64	9	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N7E	
536	Ⅰ区	W20	縄文	Ⅱ	B	79×68	23	3／3暗褐色土				N35W	
537	Ⅰ区	W20	縄文	Ⅰ	B	76×74	30	3／3暗褐色土			SK492に切られる	N31W	
538	Ⅰ区	X19	中期中～後？	Ⅰ	B	53×46	36	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N54E	覆土中に石
539	Ⅰ区	V27	縄文		B	149×－	80	複層			平面は破壊		
540	Ⅰ区	X21	中期中～後？	Ⅰ	E	46×40	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%			SK465に切られる		
541	Ⅰ区	W20	中期中～後？	Ⅰ	E	45×47	15	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
542	Ⅰ区	W20	中期中～後？	Ⅱ	E	63×50	16	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
548	Ⅰ区	W22	後期	Ⅱ	B	66×44	14	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%	後期5			N40E	
549	Ⅰ区	W22	中期中～後？	Ⅱ	E	55×42	22	2／2黒褐色土・褐色砂ブロック10%					
552	Ⅰ区	W25	縄文	Ⅱ	E	45×32	26	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
553	Ⅰ区	W26	縄文	Ⅱ	E	52×31	14	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
558	Ⅰ区	W26	縄文	Ⅱ	E	42×25	20	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
559	Ⅰ区	W24	縄文	Ⅱ	B	89×75	41	3／3暗褐色土・白色砂粒・赤色粒					
560	Ⅰ区	W25	晩期？	Ⅰ	B	61×57	25	3／3暗褐色土・白色砂粒・赤色粒				N4E	上部に石
561	Ⅰ区	V27	平安	Ⅰ	E	42×37	20	2／1黒色土	土師器坏1				
562	Ⅰ区	V27	平安？	Ⅰ	E	52×47	13	2／1黒色土					
565	Ⅰ区	V27	縄文	Ⅰ	E	42×37	31	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
566	Ⅰ区	W25	縄文	Ⅰ	B	35×32	6	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%				N3E	上部に石
567	Ⅰ区	W25	縄文	Ⅰ	E	45×41	13	2／2黒褐色土・黄褐色ブロック10%					
569	Ⅰ区	V23	縄文	Ⅰ	E	90×74	28	3／1黒褐色土・黄褐色土ブロック10%					

注：編集上の都合により、長径と短径の和が70cm以下のSK、切り合い等により規模・形態が不明確なSKについては、一覧表から削除してある。詳細は、本文ならびに時期別・形態別分布図を参照。

4）焼土跡

SF１（第24図、図版７）

位置　上位段丘面の先端部に近いⅡ区、M－４グリッドに位置する。SF２・６が近接して分布する。

形状　長径295cm、短径190cmの不整な楕円形の範囲に厚さ20cmにわたって分布する。出土層位は基本土層ＢのⅣ層に対比される黒色土中である。２ヶ所の被熱面を中心に焼土が広がっており、掘り込み等は認められなかった。

出土遺物　認められなかった。

時期　確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF２（第24図）

位置　上位段丘面の先端部に近いⅡ区、M－３グリッドに位置する。SF１・６が近接して分布する。

形状　長径340cm以上の不整形の範囲にわたって分布する。出土層位は基本土層ＢのⅣ層に対比される黒色土中である。３ヶ所の被熱面を中心に焼土が広がっており、調査時の所見によれば西端部付近で検出された被熱面には掘り込みを伴っていたと考えられる。

出土遺物　認められなかった。

時期　確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF３（第24図）

位置　中位段丘面の上部平坦面のⅠ区、O－18グリッドに位置する。下部より遺物集中区SQ１が検出されている。

形状　長径105cm、短径70cmの不整な楕円形の範囲に、厚さ10cmにわたって分布する。出土層位は基本土層ＢのⅣ層である。調査時の層位記録が曖昧であり、性格およびSQ１との関係は不明である。

出土遺物　認められなかった。

時期　確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して、縄文時代のなかでも中期中葉以降に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF４（第24図、図版７）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－20グリッドに位置する。掘立柱建物跡ST２のほぼ軸線上に分布しており、やや位置をずらして下部より土坑SK454が検出されている。

形状　径約35cmの略円形の範囲にわたって分布する。出土層位は基本土層ＣのⅢ層中である。

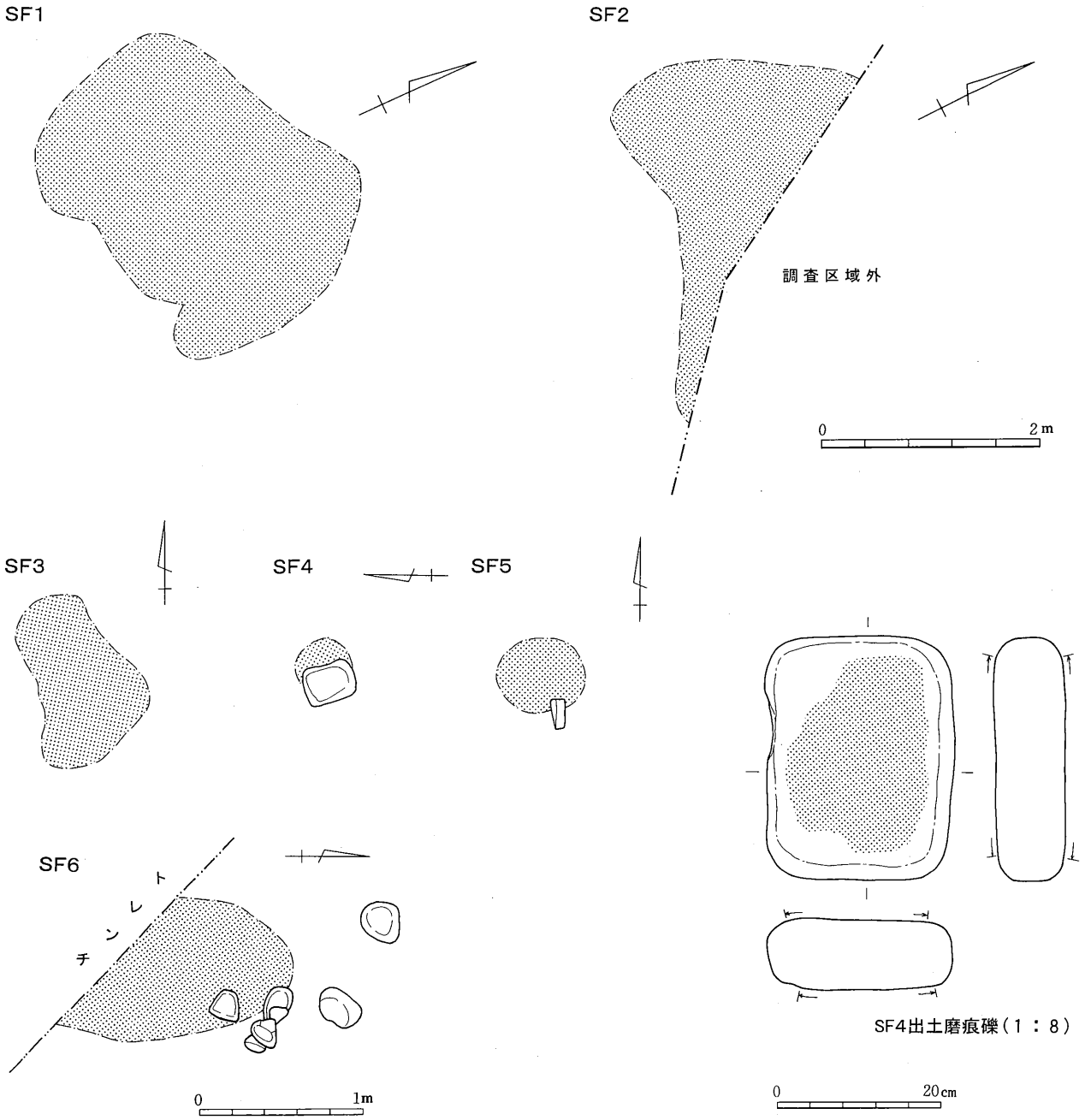
出土遺物　焼土面の直上より長さ32cm、幅23cmの磨耗痕のある礫１点が出土した。

時期　確認面および周辺における土器や土坑群の出土状況などから判断して、縄文時代中期中葉～後葉の時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SF５（第24図）

位置　上位段丘面の東側緩斜面のⅣ区、B－14グリッドに位置する。

形状　長径約55cm、短径48cmの略円形の範囲に分布する。出土層位は基本土層ＡのⅢ層である。焼土面に接して礫が直立するように分布する。



第24図　SF実測図、出土磨痕礫

出土遺物　上面付近から灰釉陶器の底部片１点（虎渓山１号窯～丸石２号窯式）が出土した。

時期　周辺出土の遺物から平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF６（第24図）

位置　上位段丘面の先端部に近いⅡ区、Ｌ－７グリッドに位置する。SF１・２が近接して分布する。

形状　南側をトレンチにより破壊されているが、長径150cm以上、短径約90cmの楕円形の範囲に厚さ12cmにわたって分布する。出土層位は基本土層ＢのⅣ層に対比される黒色土中である。焼土面からわずかに浮いた状態で、径15～25cmほどの礫がまとまって出土した。

出土遺物　認められなかった。

時期　確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えら

れるが、正確な時期は不明である。

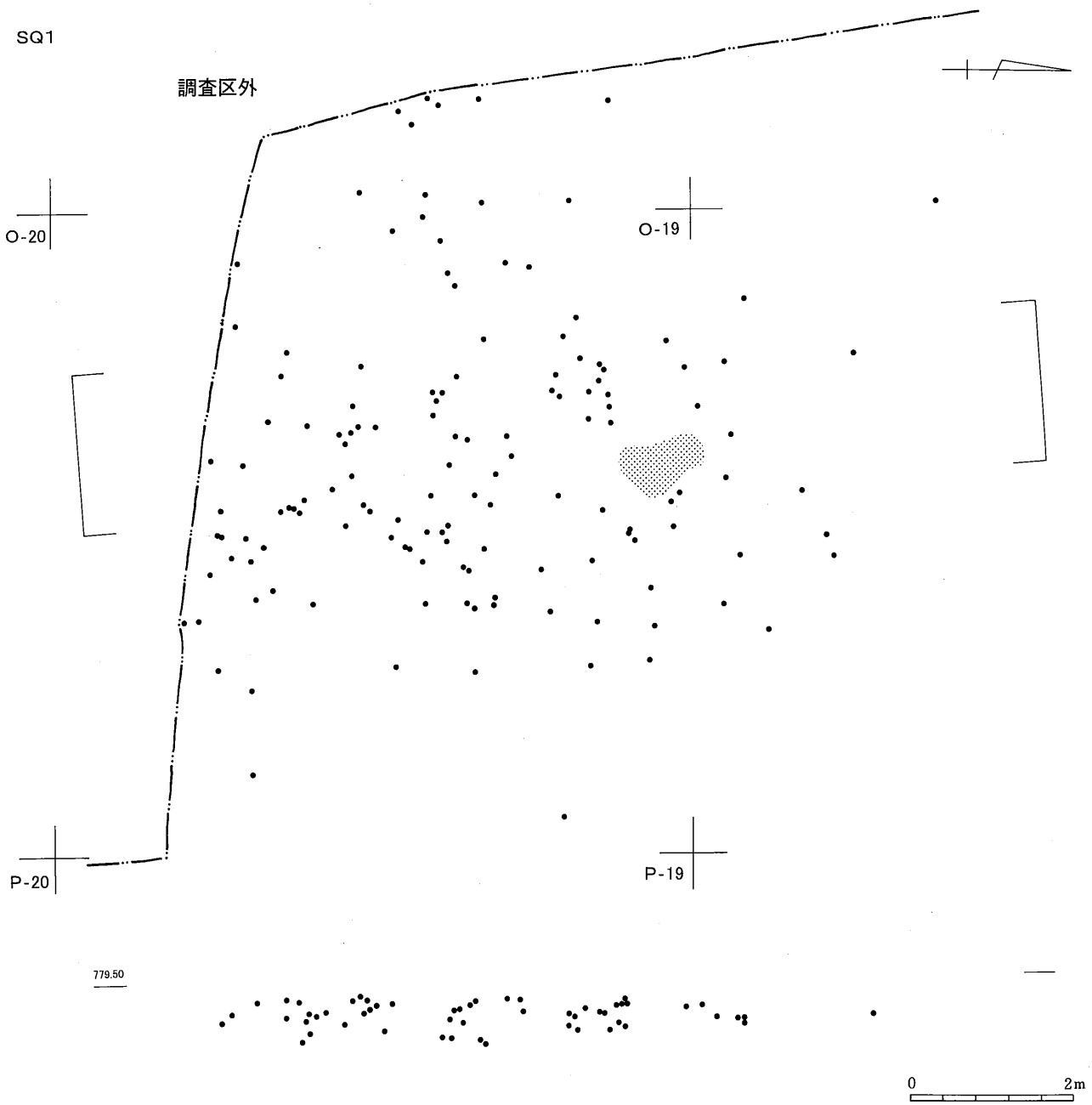
5）遺物集中区

SQ１（第25図）

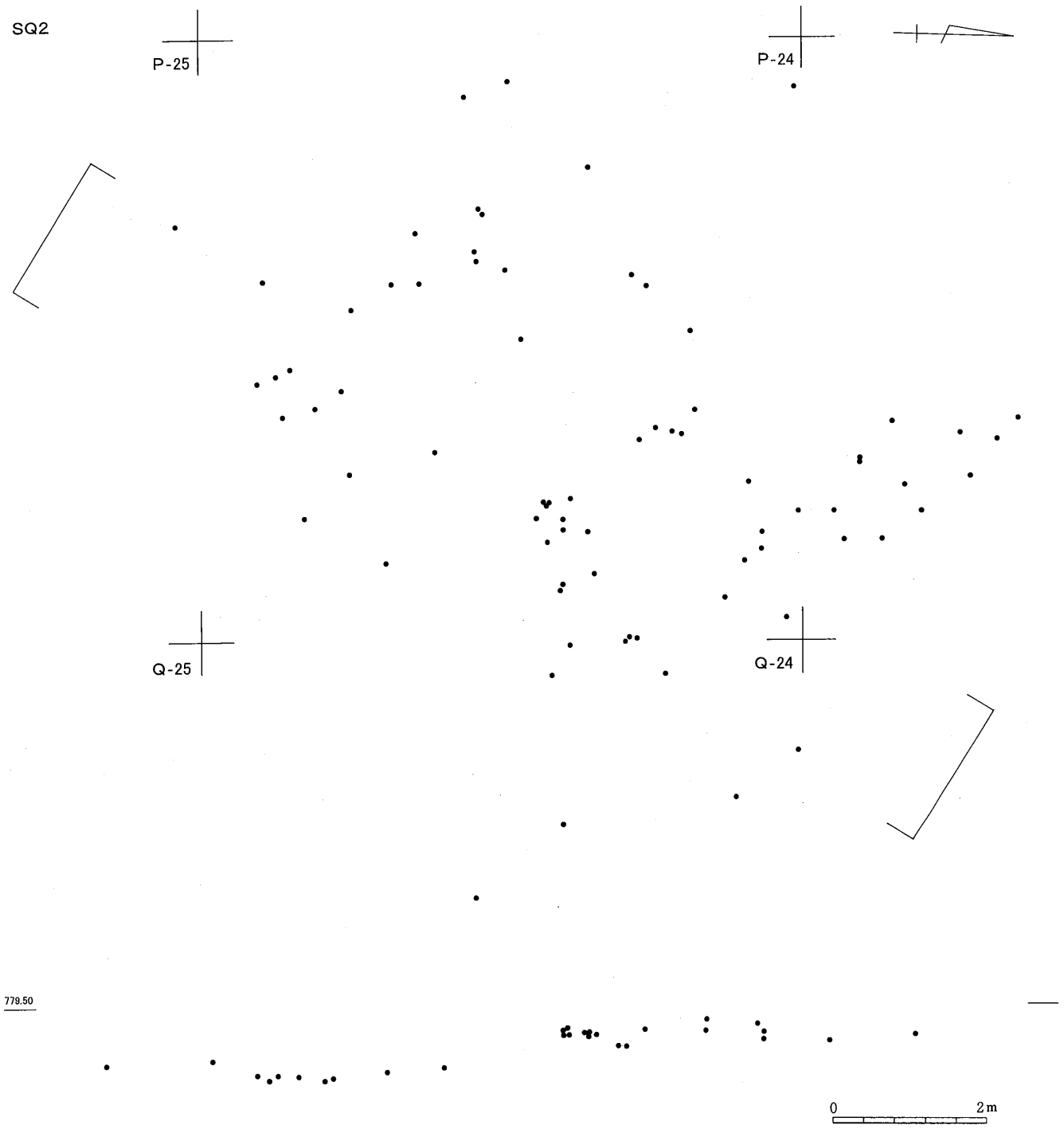
位置　中位段丘面の上部平坦面の山側谷地形部、Ⅰ区、O－19グリッドに位置する。中央部上面付近にSF３が重複して分布する。

形状　長径550cm、短径400cmほどの不整な楕円形の範囲に、厚さ25cmにわたって311点の遺物がまとまった分布をみせる。出土層位は土層BのⅣ層～Ⅴ層上部である。集落から離れた西側谷地形部に位置しており、遺物廃棄場所であった可能性が強い。SF３との関係については調査記録が曖昧なため不明。

遺物構成　縄文時代中期中葉末段階の土器を主体に前期末葉の土器がわずかに含まれる（第39・40図226



第25図　SQ１実測図



第26図　SQ２実測図

～246)。大部分が破片での出土であり、完形に近い例はまったくみられない。その他、打製石斧４点、両極石器１点、石錐２点、石鏃１点、石匙１点、刃器などを伴う。

時期　縄文時代中期中葉でも最末段階の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SQ２（第26図）

位置　中位段丘面の上部平坦面山側の谷地形部、Ⅰ区、Ｐ－23グリッドに位置する。

形状　長径570cm、短径550cmほどの不整な方形の範囲に、厚さ30cmにわたって222点の遺物がややまとまった分布をみせる。出土層位は土層ＢのⅣ層であり、湧水が認められる段丘崖下へ向かう南東側に下降する

ように分布する点が注意される。SQ１に比べると集落に近接した場所に位置するが、地形的にみて同じく遺物廃棄場所であった可能性が強い。また、湧水との関連も考慮される。

遺物構成　土器はいずれも縄文時代前期末葉のものであり、ほぼすべてが小破片で占められている。在地的な土器が主体をなすものの、関西系の鷹島式に比定される土器が含まれており、土器の並行関係や地域間交流を考えるうえで注目される（第32図24、第40･41図247～302）。これら土器に伴って、打製石斧１点、削器１点、刃器３点などが出土している（第63図373・376～380）。

時期　縄文時代前期末葉の時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

６）性格不明遺構

SX１－人為的な掘削痕跡（第27・28図、図版７）

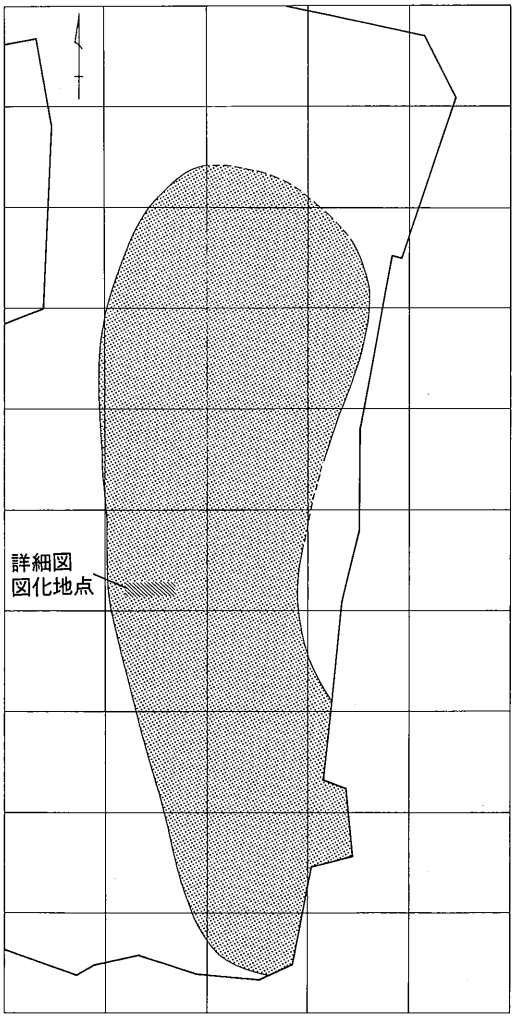
位置　中位段丘の東側、下段平坦面とした地区の西南寄りＶ～Ｘ－19～27グリッドにかけて存在する。

検出　Ｉ区南東部に相当する谷状にやや低まった箇所に、南北約65m、東西約20mの弧状に広がる範囲として検出された。同範囲として調査した面積は推定部分も含めて約100㎡を測るが、北東および南東の弧状端部は調査区域外へ延びている可能性が高く、実面積はさらにひろがると考えられる。平面的な観察所見によれば、基本層序ＣのⅢ層に対応する層位の撹乱土の広がりとして認められ、Ｖ層上面付近での下部調査では、不規則に連続する不整形な掘り込みが部分的に記録されている。また、土層断面図からは、基本層序ＣのⅣ層およびＶ・Ⅵ層の上部を撹乱して掘り込まれた土層＝Ⅲ'層（10ＹＲ３／１・黒褐色土。しまり悪く、Ⅱ層土ブロックおよびⅥ～Ⅷ層土を母材とすると推定される黄褐色土ブロックが混合する。）の堆積が厚さ20～30㎝にわたって確認できる。上下層が混交し、部分的にⅣ層が残存する状況などは、自然的要因による撹乱結果とするよりは、人為的営為によって形成された痕跡である可能性を示している。

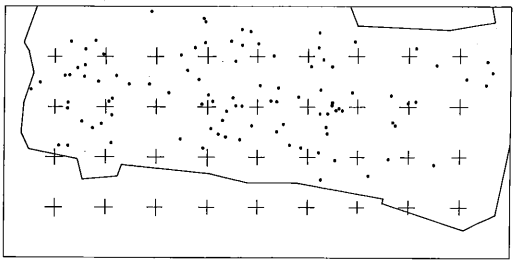
所見　微視的で詳細な調査記録に乏しく断片的な所見が残されているのみであり、断定的な判断を下すには至らないものの、上記した検出状況などからすれば、本址が人為的な掘削行為の結果として残された可能性は高いと思われる。その根拠の一つを提供する在り方として、打製石斧の出土傾向が注目される。図中に示したとおり、打製石斧は本址の確認範囲周辺にほぼ収斂される集中的な出土分布を示し、同石器の土掘り具としての機能的側面を合わせて考慮するならば、打製石斧を用いた道具によって掘削された蓋然性がまず考慮される。また、同区域には細片化した土器しか分布せず、石器類の出土も打製石斧の128点に対して石鏃１点、磨石・凹石７点、石皿小片１点のみと打製石斧が圧倒的な出土比率を占め、単なる包含層とは考え難い選択性と特異性が認められることも、その見方を補強するデータを提供している。

本址の性格については、自然科学等に基づく分析または客観的な記録を欠いており、詳細は不明と言わざるをえないが、集落形成に伴う開墾・整地の痕跡などである可能性が指摘できるとともに、竪穴住居跡など主要な遺構が検出されない居住域の外縁部という「場」、さらに土壌が厚く乾燥度が比較的弱い谷状低位部に重なるように広がっている点に目を向けるならば、食用またはその他有用植物の生産に係る管理・採取、あるいは栽培痕跡である可能性についても排除しえないと考えられる。

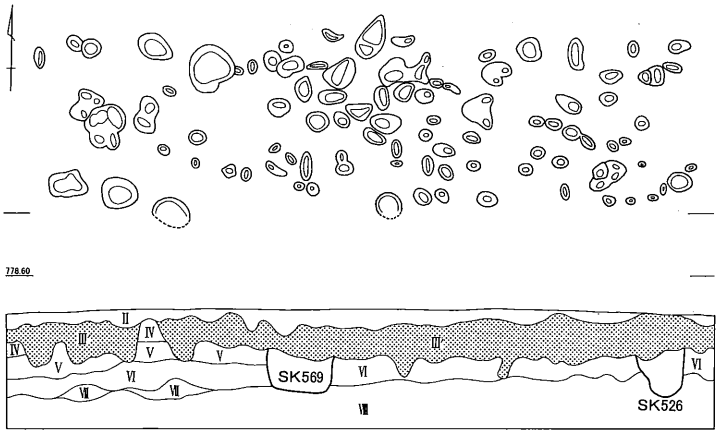
時期　平安時代の遺物を包含する上部層に覆われていることから縄文時代の所産と判断される。また、縄文時代のなかでも前期末葉の遺物包含層を掘り込んでいることから、消去法的な推測ながらも同期以降、晩期までの範囲に限定することが出来そうである。さらに分布範囲内の遺物垂直分布傾向（第28図）によれば、中期中葉以前の遺物が垂直方向に広く拡散しているのに対して、後・晩期の遺物が中期のものと狭いレンジを共有しつつも水平方向の位置を比較的保っていることが看取でき、この点からも中期中葉～後・晩期に形成された可能性が考えられる。時間幅をさらに限定することには一定の困難が伴うが、中期中葉～後葉と推定された土坑群および後葉の所産と考えられる掘立柱建物群との重複、打製石斧の形態的



人為的掘削痕跡範囲

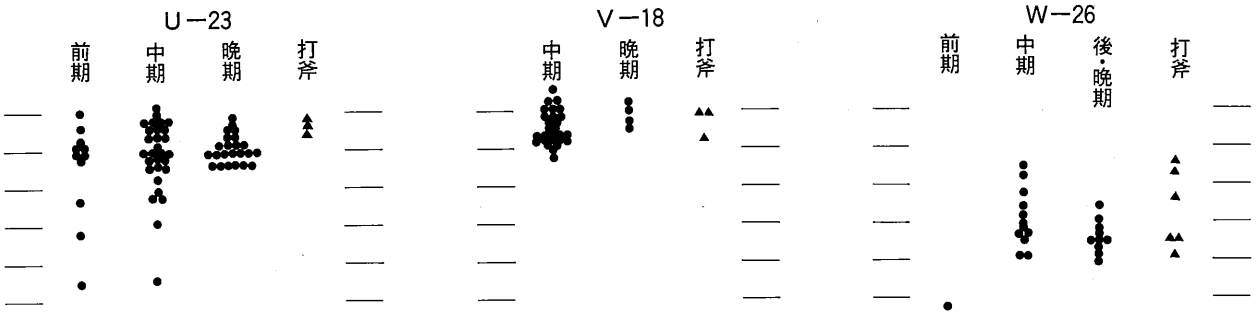


打製石斧出土分布



微細図及び土層断面図　0　1m

第27図　ＳＸ１分布範囲（推定含む）及び微細図（部分）



第28図　時期別遺物垂直分布図

特徴ならびに分布特性、すなわちＩ区北西部に偏在して出土し縄文時代晩期～弥生時代にかけての石器と分析された身厚・幅広の安山岩製撥型打製石斧（第59・71図参照）が本址周辺では出土しておらず、中期の遺構に伴出したものと形態と石材を同じくする打製石斧が分布していたことを考慮し、中期後葉以降～後期、隣接して遺構が出土した晩期中葉頃までの時間幅を推定しておきたい。

第2節　遺　　物

1）土　　器

以下、抽出・図化した個体について、出土遺構および区域別に個別的な説明を記す。

SB８（第29図１～４、第33図25～34）

１は床面付近から出土した深鉢形土器。口縁部に１単位のカリ首状の中空突起と３単位のヒダ状突起を有し、胴上半は横位の、下半部は縦位構成のモチーフを描く。眼鏡状突起を伴う隆帯文の脇に連続爪形文を多用するほか、玉抱き三叉文や波状沈線文、縦・横位の短沈線充填文などが付される。２は胎土に金雲母をやや多く含み、暗灰褐色を呈する薄手・堅致な作りの深鉢形土器。横位にめぐる圧痕隆帯により区画された口縁下および胴中位にはペン先状工具による連続刺突文が多用され、胴下半には半裁竹管状工具による並行沈線で平出Ⅲ類Ａ系土器に近似したモチーフが描かれる。３・４はともに覆土からの出土であるが、後者は薄手・堅致の器体や文様・モチーフの特徴などからいわゆる下伊那型櫛形文土器と考えられる。25～27は１と同種の破片。30は横位区画内に斜行沈線文を充填する個体。山形の波状口縁をなす33と薄手・堅致の作りで胴括れ部に「Ｖ」字状と考えられるキザミ目隆帯文が付された34は、４と同様に井戸尻Ⅲ式でも新しい段階の土器であり、他の伴出遺物と時期を大きく異にする。

SB９（第29図５・６、第33・34図35～93）

５・６はそれぞれ炉１、炉２の炉体として用いられていた土器。両者はやや張り出す底部にキザミ目をめぐらす点で共通するが、胎土・整形・施文などに特徴的な差異も認められる。前者は胎土に石英粗粒を多く含み、明るい茶褐色を呈する。内面に指頭状圧痕が著しく残り、外面には単節斜縄文が比較的硬くなった器面に浅くやや粗雑に施文される。後者は胎土に白色砂粒などを多く含み、色調は暗～くすんだ灰褐色を呈する。前者に比べてナデ調整が進み、外面には比較的軟らかな状態の器面に異なる原体でやや粗雑な羽状縄文が深めに施される。北白川下層Ⅲ式に並行する東海系および関西系土器と考えられる。

35は重弧状の結節浮線文が施された個体。36・37は半裁竹管状工具による条線文を地文としてヘラ切り浮線文などが貼付されるもの。38～47は同様の条線地文を矢羽状などに施し、ボタン状の貼付け文や半裁竹管状工具による平行沈線文が幾何学状に付加される。48～55は半裁竹管状工具による平行半隆起線で重弧状・対弧状のモチーフを描く一群。56にはさらに平行半隆起線に直行するヘラ切り施文が加えられる。57～59は同一個体と推定される土器であり、隆帯により加飾された山形の口縁を有する。鍔状に肥厚した口縁下を三角形印刻文を伴う結節沈線文で埋め、胴部には凹線に縁取られた平行半隆起線文が施される。

60～69は羽状あるいは斜状縄文が施文されるもので、胎土・調整などの特徴から６と同種に数えられる。また、やや薄手の作りで斜縄文を主とする78～93は、同様の特徴から５に類する一群に含められる。70・71は縄文を地文として、72は地文を伴わずに結節浮線文が施されるもの。口縁端部に縄文施文が及ぶ73は、口縁下に数条めぐらした粘土紐を偏平に潰すように縄文が施される。１および78～93などと同種の口縁部破片と考えられる。74･77は縄文を地文として、75･76は素文上に粘土紐が数条単位で貼付されるもの。剥落した77は不明であるが、74にはその上部に縄文が施文される。口縁端部にはキザミ目がめぐる74・76・77は、胎土・調整などの特徴から６などと同種の口縁部破片と考えられる。ひときわ細い粘土紐が用いられた75は、その上部が押圧されて弱いミミズ腫れ状を呈する。

SB10（第34図94～103）

94は粗い条線文を地文として重畳する曲線的な結節浮線文が施された個体であり、大きく波状の口縁を

なす。95・96は同様の地文のうえに半裁竹管状工具による平行半隆起線文やボタン状の貼付けが行われるもの。97は上部に矢羽状、下部に「X」字状の平行沈線文を地文としたうえに、縦・横位のヘラ切り浮線文とボタン状の貼付け文を加える。98～103は半裁竹管状工具による平行半隆起線で文様が描かれる一群であり、103には横帯する矢羽状モチーフが認められる。

SB11（第35図104～119）

104～112は半裁竹管状工具による平行半隆起線による施文を特徴とするもの。104は山形の高い波状口縁をなし、波頂部に平行する山形のモチーフなどが描かれる。106～110などは弧状・環状モチーフなどの一部と考えられる。111・112は同一個体。端部を外側に肥厚させた大形波状口縁の土器であり、太めの半裁竹管を用いた平行半隆起線文を深く明瞭に施文するとともに、抉られたような凹線を連弧状などに加えている。

113はやや薄手の作りの土器であり、単節斜縄文が粗く施文される。破片上部が鋭く屈曲し鉢形を呈する可能性もあるが、全体形状は不明である。胎土・焼成などの特徴はSB９－５などに類似する。114は単節羽状縄文の地文上にボタン状の貼付けが付加される。115・116は浅く不明瞭な縄文を地文として、ソーメン状の細い粘土紐を貼り付けるもの。粘土紐の上部は連続する押圧により弱いミミズ腫れ状を呈する。117～119は縄文のみ確認できるものであり、斜縄文を丁寧に横帯施文している。胎土・焼成などの特徴から104～112などに伴う縄文施文土器と考えられ、０段多条の施文原体を用いている可能性が高い。

SB12（第35図120～123）

120は半裁竹管状工具による条線文を地文として、重弧状もしくは双環状をなす結節浮線文が施されるもの。121は半裁竹管状工具による平行半隆起線が空白部を残して施文される。122･123は縄文施文のみ確認できる胴部破片。

SB14（第30～32図７～22、第35～37図124～172）

７は屈曲してやや膨らみをもつ口縁下に三叉文などを伴う文様帯を有する。無文部を残す胴部には２条単位の隆帯を垂下させる。８・９は波状口縁櫛形文土器に分類される個体であり、櫛形文が付けられた10･11･20はこれらと同種の胴～底部と考えられる。12～15は粘土紐により「U」字状あるいは重弧状のモチーフが描かれる一群であり、キャリパー状に括れる胴中位には櫛形文を伴う。18は口縁下を無文、同部を縄文施文とする深鉢形土器であり、頸部に波状隆帯文を１条めぐらす。胎土に金雲母などを多く含み、唐草文系土器群の初期に特徴的に組成する土器の一つである。21は浅鉢形土器の底部破片であり、内面に赤彩が残る。やや厚くこびり付いた様子から、塗彩されたものではなくパレット的な使用が推定される。22は良く精製された白味を帯びた胎土を有し、丁寧な器面調整が加えられている。口縁端部の文様などを含め、北陸系の鉢形土器と考えられる。

124～129は混入品と考えられる一群であり、本址の時期に先行する。124は波状沈線文や連続刺突文などが用いられ、中期前葉の斜行沈線文土器に対比されよう。125～129はキャタピラ文が多用されるもので、中期中葉藤内Ⅰ式段階の土器に位置づけられる。130～137は平縁あるいは山形突起を有する口縁部破片などであり、口縁下に横帯する文様帯が施されると考えられる。中期中葉井戸尻Ⅲ式の特徴を色濃くとどめている。138・139は口縁下に施された刺突文を特徴とするもの。140・141は円筒状の器形を呈すると推定される土器であり、器面を半裁竹管による縦位平行沈線文で埋める。142～150は波状口縁櫛形文土器に含まれると考えられる一群。８・９と同様、波頂部が丸みを帯びる点に特徴をもつ。151～157は口縁下に縦位あるいは梯子状に粘土紐を貼り付けたもので、12～15と同種の土器に比定される。158は突起状の結節部をもつ３本１組の隆帯文を垂下させ、器面を半裁竹管による縦位平行沈線文で埋める土器であり、中期後葉へ継続する要素を備えている。162・163は縄文施文を特徴とする粗製的な土器と考えられる。

164～167は関西系船元式土器との関連が推定される土器。164は肥厚した波状の口縁を有するもので、条線文を地文として細いキザミ目隆帯区画や爪形状の刺突文が施される。165～167は縦位に施された細線隆帯文間に、歯数３本ほどの櫛歯状工具による条線文が加えられる。168～171は半裁竹管状工具による断面カマボコ状の半隆起線でモチーフが描かれる。胎土・調整などの特徴が23と共通し、北陸系の土器と推定される。172は口縁下に渦巻き隆帯文をもち、中期後葉の在地化した加曽利Ｅ系土器と思われる。

SB22（第37図173～177）

173は横帯する三角形区画文と隆帯脇への三角状連続刺突文施文を特徴とする胴部破片。174の隆帯脇にはキャタピラ文が見られる。175～177は半裁竹管状工具による平行沈線文でモチーフが描かれる。文様および薄手・堅致の作り、胎土の特徴などから平出Ⅲ類Ａ土器に比定される。

SB23（第32図23、第37図178～183）

23は床面から出土した屈曲部に偏平な押圧隆帯をめぐらす浅鉢形土器。178は緩やかな波状口縁をなし、口縁下に連弧状と思われる隆帯文や小さな円形刺突文などを施す。179は頸部に押圧隆帯をめぐらす縄文施文の土器。182・183は平出Ⅲ類Ａ土器に比定される。

SB25（第38図184～188）

184～186は同一個体。単節斜縄文を地文として、押圧隆帯などによる区画とそれらに沿う三叉文を伴う沈線でモチーフを構成する。187はパネル状の区画文が施された胴部破片。188は条線施文の土器。中期中葉藤内式土器の一群であろう。

ＳＴ４（第38図189）

189は突起状にせり上がる腕骨文を伴う３本１組の隆帯文を垂下させ、地文に綾杉状沈線文を施文する土器。中期後葉唐草文系土器に比定される。

SK出土土器（第38・39図190～225）

190は半裁竹管状工具による平行半隆起線で文様が描かれた波状の口縁部破片。191は単節斜縄文が施された胴部破片。ともに前期末葉の土器と考えられる。

192・193・195は半裁竹管状工具による平行半隆起線で、羽状あるいは弧状・レンズ状などのモチーフが描かれるもの。194は78～93などに類似する縄文施文土器。すべて前期末葉の土器と考えられる。

196・197も半裁竹管状工具による平行半隆起線で帯状あるいは三角状の文様が描かれるものであるが、部分的に空白部を残して施文する点に特徴を有する。ともに前期末葉の土器と考えられる。

198・199は同一個体。後者の頸部には偏平な粘土紐が１条めぐり、上部へ縄文が施文される。前者には輪積み痕が顕著に残り、撚りの太い無節斜縄文が粗く施文される。中期前～中葉の土器であろう。

200は２個１対の小突起をもつ平縁の土器であり、弧状および帯状の沈線文間に列点状刺突文が施される。胴部には入組み状の沈線文が施される可能性が考えられるが、小破片のため確認には至らない。胎土に粗い白色砂粒を多く含み、器面はナデ調整にとどまる。201は三叉文を取入れた曲線的な沈線モチーフと磨消し縄文の手法を特徴とする胴部破片。明茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。202～205は深鉢および鉢形土器の無文胴部破片。202には縦位の擦痕が残るが、横方向の弱いミガキが加えられた205など外面を中心として丁寧な器面調整が行われる。胎土に石英や雲母など鉱物質に富む砂粒を含み、全体に硬質な作りの土器である。200・201の文様要素などから、これらは晩期前～中葉の土器と考えられる。

206は胴中位にキザミ目隆帯による櫛形文をもつ深鉢形土器。207･208は同種の口縁部破片と推定されるもの。文様・モチーフの特徴などから、中期中葉のなかでもその最末期の土器に比定される。

209は縦位沈線文が引かれた胴部破片であり、中期中葉の土器と考えられる。210は無文の胴部破片。胎土・調整などの特徴から、中期中葉の土器と推定される。211は内湾する無文の口縁部破片であり、中期

中葉でも新しい段階の土器と思われる。212は丸く張り出す中空突起であり、SB８－１とほぼ同時期の個体と考えられる。213は表面の剥落が著しく詳細は不明であるが、中期の土器の一部と思われる。

214は単節縄文を地文として、結節状の突帯文および棒状工具による押圧突帯文が施されるもの。器厚５㎜と薄手の作りであり、内面には横方向の丁寧なナデつぶし調整が行われている。215は半裁竹管状工具による平行半隆起線文を空白部を残して施文するもの。ともに前期末葉の土器である。

216は外反する口縁下を無文とし、頸部にめぐらした数条の沈線間に列点状刺突文を加える。胎土に川砂様の粗砂を含み、色調は明褐色。外面の一部に赤色塗彩の痕跡が残る。施文の特徴から、200と同時期にあたる晩期前～中葉の土器と考えられる。217は78などと同じ前期末葉の土器で、混入であろう。

218は口縁端部に連続爪形文がめぐる土器。219は隆帯脇にペン先状工具による楔形の連続刺突文を施す。220の底部破片を含め、中期中葉でもSB８出土土器の主体をなす部分と同時期のものであろう。

221～225は同一個体。朝顔形に開く器形の深鉢と考えられ、口縁に小突起をもつ。突起下に円形刺突文、口縁下に１条の沈線を施し、胴部にはキザミ目隆帯文と沈線文を縦位構成に施文する。内面に横方向の丁寧なナデつぶし調整が行われ、比較的堅致な作り。後期前半、堀之内１式に並行する土器であろう。

SQ１（第39・40図226～246）

226は半裁竹管状工具による平行半隆起線文を空白部を残して施文する。227は肥厚した口縁下を無文帯とし、以下に横および波状に結節浮線文を施すもの。228は外面を無文とし、外反する口縁内面に３条の結節浮線文をめぐらす。229は単節斜縄文を地文として、３条単位の結節浮線文を垂下させる底部破片。これらは前期末葉に比定される土器群であり、本址においては混入品と考えられる。

230・231は口縁下に横帯する文様を有すると推定される土器。232・233は波状口縁櫛形文土器の一部と考えられるもの、234～237は口縁下に細い粘土紐を弧状などに貼付するもので、それぞれSB８－８・９、同－12などに対比される。続く238・239はこれらの胴部破片であろう。241は外反する無文の口縁部と半裁竹管による縦位・横位の梯子状モチーフを特徴とする円筒状の胴部を有する。240・242も同種の土器であろう。243は縦位に施文された沈線文の一部に「ハ」の字状などの刺突文を加えるものであり、施文手法や石英などの鉱物質に富む胎土の特徴から、焼町類型に連なる系統の土器と考えられる。244は棒状工具による円形刺突文を満たした器面に、三角形連続刺突文を沿わせた隆帯懸垂文が付される。245・246は同一個体の土器と推定され、縄文を地文として列点文および縦・横位の沈線文が施される。胎土・焼成の特徴などから美濃地方の土器と考えられ、中期中葉でも最も新しい段階の土器群である。

SQ２（第32図24、第40・41図247～302）

24は上げ底状をなす底部の５箇所が突出し、各辺が内湾する五角形を呈する深鉢形土器。器面には下端部を除いて０段多条の縄文を幅広の条が縦位となるよう密接施文する。さらに底部の突出部から胴上部へ向かって「V」字形に白色粘土を塗布し、その上部に縄文を押捺施文している。外面明茶褐色、内面くすんだ灰褐色を呈し、胎土に粗い植物繊維と粗砂を多く含む。関西系鷹島式に比定される土器であろう。

247･248は肋骨状モチーフが描かれるもので、後者の中軸には２条のキザミ目隆線が垂下する。249は平行沈線を地文として棒状浮文を伴う。250～261は半裁竹管状工具による横～斜位の平行沈線を地文とするもので、250～253にはヘラ切り浮線文が、254には結節浮線文が貼付される。254・256・257にはボタン状貼付け文が付加される。263～266には半裁竹管状工具による条線を地文として、結節浮線文が環状あるいは三角状に施文される。267～282は半裁竹管状工具による平行半隆起線文でモチーフを描く一群。「X」字状あるいは双環状・レンズ状など形成し、279・280など空白部を効果的に配する個体もある。267～269・273は工具の幅が狭く施文が浅い点で他と区別され、文様にも画一性を欠くなど共通する特徴をもつ。

283～286・288～291は文様要素として抉られたような凹線文を多用するもの。283・287には結節状に押

し引かれた半隆起線文を伴う。292～294は太い結節浮線文を特徴とするもの。292は内面の口縁上端部にも１条がめぐり、293は単節斜縄文を地文とする。294には半裁竹管状工具による平行沈線文が伴うようであるが、小破片のため断定には至らない。295は縄文を地文として微隆起状の隆起線を横位多条にめぐらす個体。明るい褐色を呈し、器厚４～５㎜と薄手の作りである。296～302は縄文施文の土器であり、無節の301を除いて他はすべて単節縄文を用いる。総じて薄手の作りの個体が多い。

遺構外出土土器（第41～44図303～419）

前期末葉　303～307は半裁竹管状工具による平行沈線を地文とし、303にはヘラ切り隆線、304・305・307にはヘラ切り浮線文、306には結節浮線文とボタン状貼付け文が伴う。308～311はやや浅く粗い平行半隆起線文で、斜行あるいは矢羽状などのモチーフを描く。312は平行半隆起線文間に深い抉り状の凹線を伴う口縁部破片。313は鍔のように張り出した口縁上部に三角形印刻文と結節沈線文を配する土器。314・315にはそれぞれ結節沈線文と押し引き平行沈線文が施される。316・317は縄文を地文として、関西系のいわゆる特殊突帯文に近似する浮線文が弧状などに配されたもの。前者の括れた頸部には刺突文がめぐる。318・319の口縁下には押圧によってミミズ腫れ状となった浮線文が多条にめぐる。320は尖頭状に突出した口縁の波頂部であり、半裁竹管状工具による平行半隆起線文とともにソーメン状・ビーズ状の貼付け文が付加される。

中期初頭　321・322は縄文を地文として、やや膨らみをもつ口縁部に三叉文や重弧状の沈線文を横位に連ねたモチーフを描き、円筒状の胴部に隆帯を垂下させる深鉢形土器。323も同様の土器と考えられるが、口縁下に縄文を地文とせず、重三角状の沈線文と印刻文が隆帯区画内に施される。324は口唇部に１条の沈線をめぐらし、内・外面の口縁下にそれぞれ横位・縦位の押し引き文が施されるもので、次期への過渡的要素をみせる。354・355はやや幅広の平行沈線文とその間に充填される「Ｃ」字状の連続爪形文、抉り状の三叉文を特徴とし、東海系の北裏ＣⅡ式土器に比定されると考えられる。

中期前葉　325～338は角頭状の押引き文を多用する一群。すべて小破片によって占められており全体の文様構成などが窺える個体は少ないが、334・335には横位構成の楕円区画がみられる。337・338は「く」の字状に内傾する口縁部形態を呈し、浅鉢形土器と考えられる。総じてやや幅広の施文具を用いる個体が多く認められるものの、334・335・337・338は細目の工具による施文がなされる。340・341は横帯する隆帯および沈線区画内に斜行沈線文を充填施文するもの。342には同様の区画内に連続突き刺し文列が充填される。344～346は平出Ⅲ類Ａ系土器。縄文を地文とし、多裁竹管状工具などによる平行沈線でモチーフが描かれる。胎土に石英粗粒を多く含むなど特徴的な作りを呈する。

中期中葉　347・348は前出の340・341と同様の文様構成をとりつつも、それらに後出する土器と考えられる。349・350は同一個体。縄文を地文として縦位構成の曲線的なパネル文を描き、要所に三叉状の抉りを配する。胎土に白色砂粒を多く含む。351は胴部を縦位構成の区画文で埋め、区画の内側にクサビ状の刺突を連続施文するもの。352は隆帯脇に連続刺突文が施されたもので、ＳＢ８－１と同時期の所産と考えられる。353は連続爪形文が加えられた隆帯および半隆起線で区画された内部に、縄文とクサビ状の刺突文がみられる土器。356は縦位の撚り糸文が密接施文される土器。美濃地方などに主体的分布をもつ土器と考えられ、時期的には中期中葉末から後葉初段階までと時間幅を有する。

中期後葉　357～360は半裁竹管状工具による縦位の半隆起線を地文として、連続押し引き文を伴う３本組隆帯の懸垂文などを施すもの。361～367は綾杉状短沈線を地文とする一群であり、361～363には立体的に隆起した腕骨文が伴う。これらはおおむね茶褐色の色調を呈し、胎土に雲母など鉱物質に富む砂粒を多く含む点に共通した特徴が見出せる。368は唐草文系樽形土器の口縁下破片。隆帯により区画された横位文様帯内に、列点状の刺突や「コ」字状の粘土紐貼付がめぐる。369・370は波状をなす口縁部破片であり、

波頂下に隆帯渦巻き文が配されて横位に連続する。在地化した加曽利E系土器であろう。371は口縁部に一部が勾玉形などを呈する丸窓状の区画文をめぐらす土器。沈線文内に刺突文が加えられる372とともに、伊那谷および木曽谷中南部から岐阜県下にかけて分布する土器群と考えられる。373～375はそれぞれ凹線文、条線文、粗く細い矢羽状沈線文を特徴とし、当該期でも新しい段階に位置づけられる。

後～晩期　376～380は帯状の縄文施文がなされる土器。376～378・380は平行する2条の沈線文間に縄文を充填施文し、379は外側を磨り消すことにより縄文帯を作り出している。後期初頭称名寺式もしくはそれに並行する在地の土器と考えられるが、379については中期後葉加曽利EⅣ式土器に比定される可能性を残す。381～385は後期前半堀之内式土器に比定されるもの。すべて甕形土器の一部と考えられ、384の頸部には「8」の字状の貼付け文が加えられる。386～390はこれらの底部破片と推定されるもので、390を除いて底面に網代痕が残る。

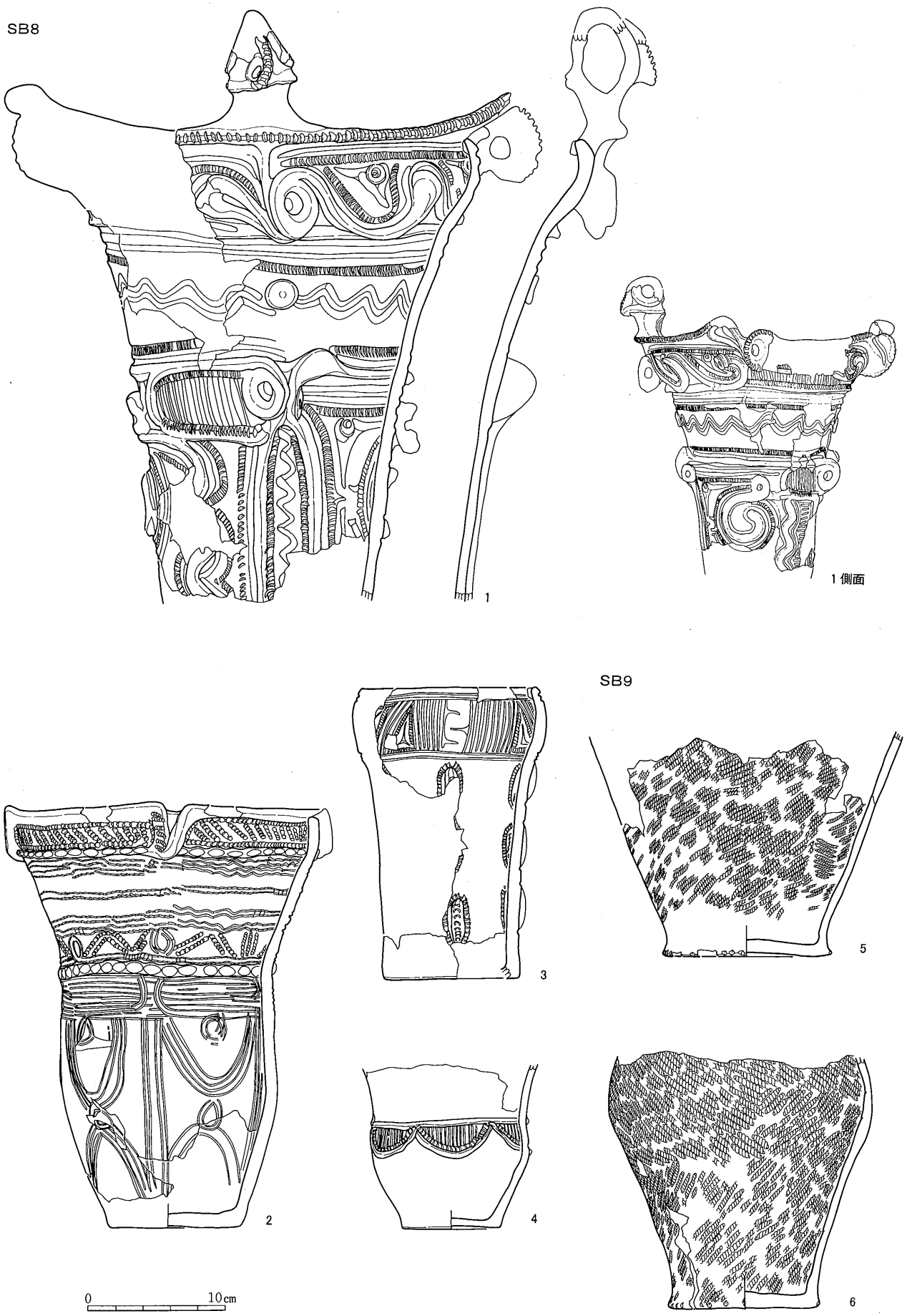
391～399は後期最末期から晩期前半にかけての土器と考えられるもの。同一個体の391・392は小型化した小突起が付く波状口縁の深鉢形土器であり、前者が波頂部、後者が波底部と推定される。口縁下に沈線文とキザミ目が加えられた隆帯文をめぐらし、波頂部と波底部には瘤状突起が付加される。隆帯文下にはいわゆる「稲妻文」と推定される沈線文が認められる。明褐色の色調を呈し、横方向のナデを主とする丁寧な器面調整が行われる。後期最末段階の隆帯文土器群に比定されよう。沈線文が描かれた395～398は同種土器の胴部破片と考えられるが、小破片のうえ出土数も限られており確認には至らない。393・394は鉢形土器と考えられるもので、沈線文を沿わせたキザミ目隆帯文などを口縁下にめぐらす。後者の外面には条痕文が認められる。399は口縁部が「く」の字状に内傾する鉢形土器。屈曲部に凸帯状のキザミ目隆帯文がめぐり、口縁下には横位楕円沈線区画文と区画外への細密な縄文施文、細い棒状の貼付け文が施される。横方向を中心とする丁寧な器面調整が行われているが、外面は二次焼成によると推定される器壁の荒れが著しく、内面および外面口縁下には「おこげ」状の炭化物が厚く付着している。

400～419は晩期末葉の土器。400～402は口縁下に凹線文がめぐるもの。横方向のナデが加えられているが総じて器面調整は粗く、丁寧な作りとは言い難い。403～408は器面に細密な条痕を施すもので、櫛歯状工具などにより横位あるいは縦位に施文される。半裁竹管状工具による「X」字状の施文がなされた408については、後期を含めて時期的に古く位置づけるべき土器かもしれない。409～413は無文の深鉢あるいは鉢形土器と考えられる一群。ナデによる丁寧な器面調整が行われるが、総じて精製とは言い難い。409の外面には斜方向の調整痕が残り、411は胎土に川砂様の粗い砂粒を多く含む。414～418は条痕文系土器であり、斜方向を主とする粗い条痕施文を特徴とする。施文工具を特定できる個体は多くないが、416については貝殻を用いている可能性が高い。胎土に石英粒や白色砂粒を多く含む個体が目立つ。

弥生時代　419はⅠ区の南側調査区外で表採された弥生時代後期の土器。5歯を1単位とする幅約10㎜の櫛歯状工具による櫛描き波状文を、緩やかに括れた頸部に重畳してめぐらしている。胎土に粗粒砂をやや多く含み、暗茶褐色を呈する。内外面ともに丁寧な器面調整が行われ、焼成は堅致。

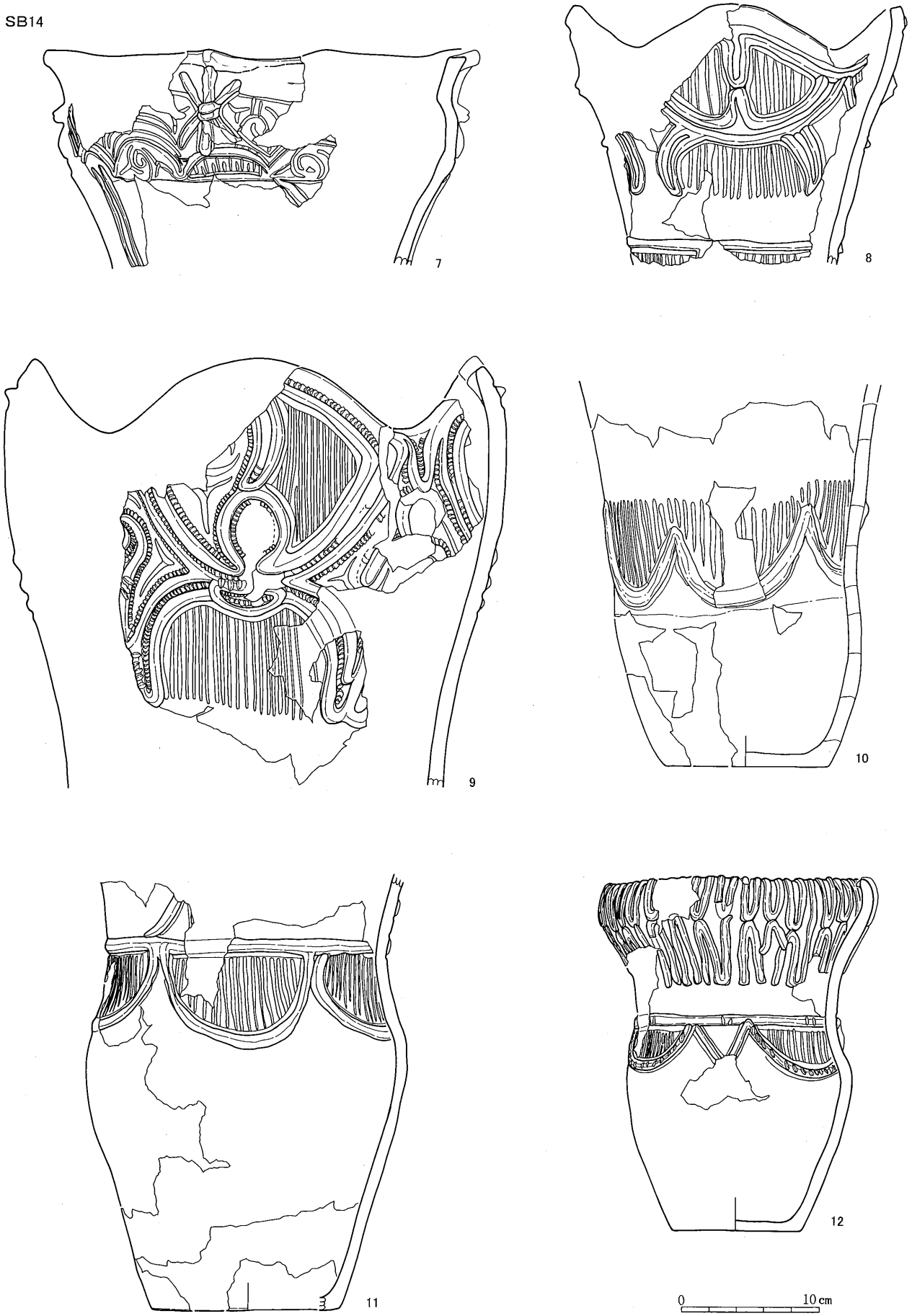
2）土　製　品

土製円板3点が出土しており、すべてを図示した（第44図1～3）。1～3はともに打ち欠き整形により作出されており、それぞれ最大径5.3㎝、4.3㎝、5.0㎝、を測る。重さは1が62.9ｇ、2が21.5ｇ、3が42.2ｇである。用いられた破片はすべて中期中葉に帰属する。1はV－18、2はU－21、3はV－19グリッドからとそれぞれ散在して出土した。

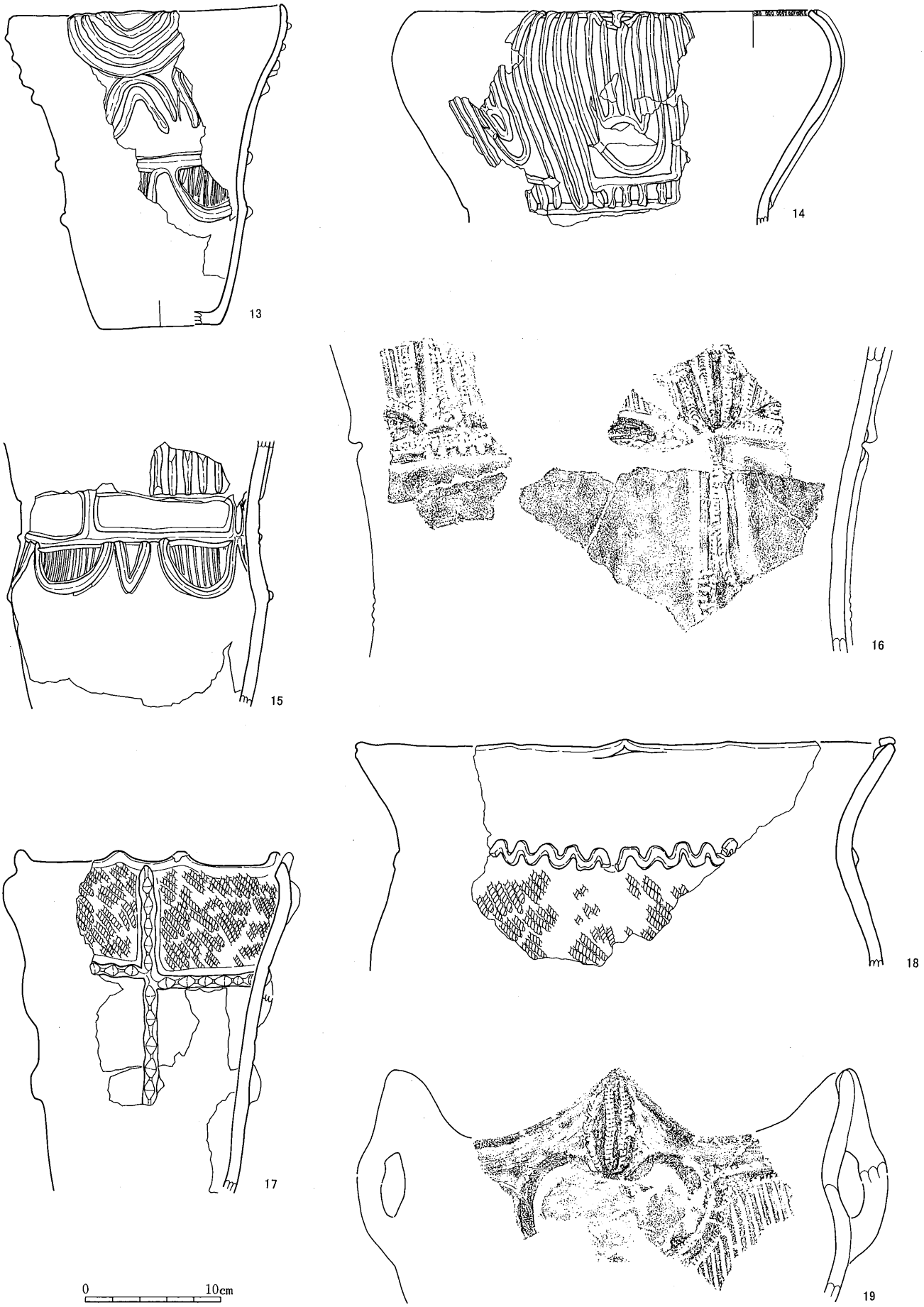


第29図　出土土器（1）

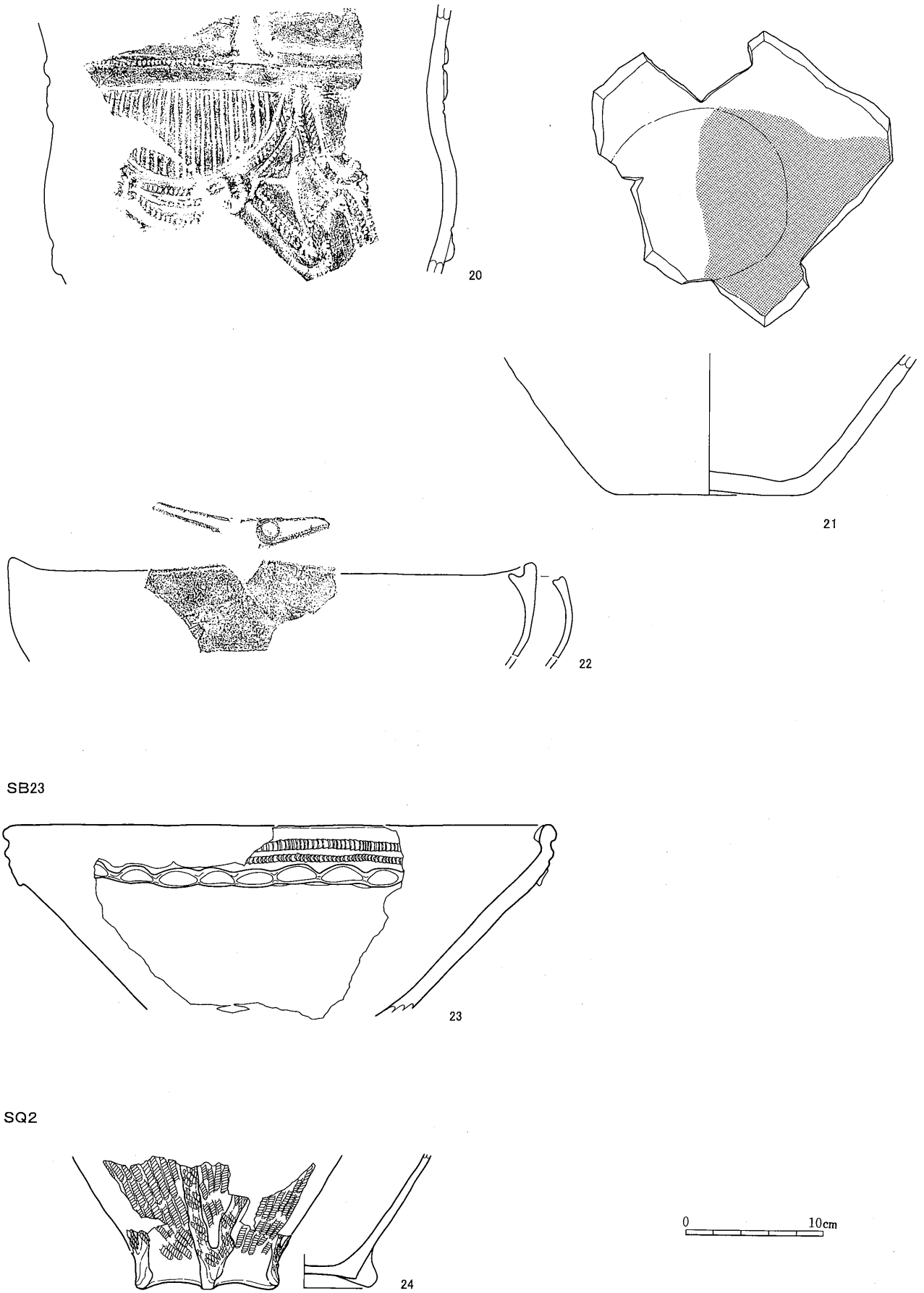
SB14



第30図　出土土器（2）

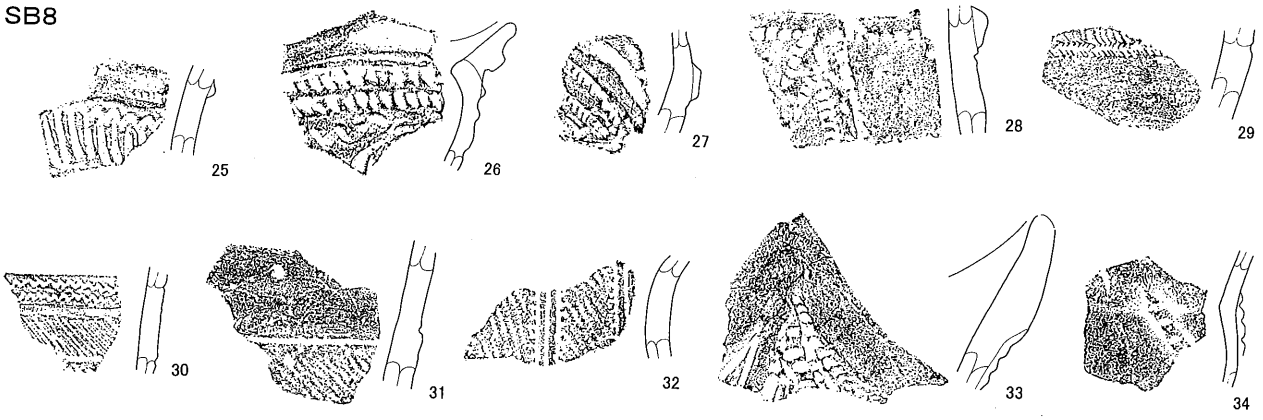


第31図　出土土器（3）

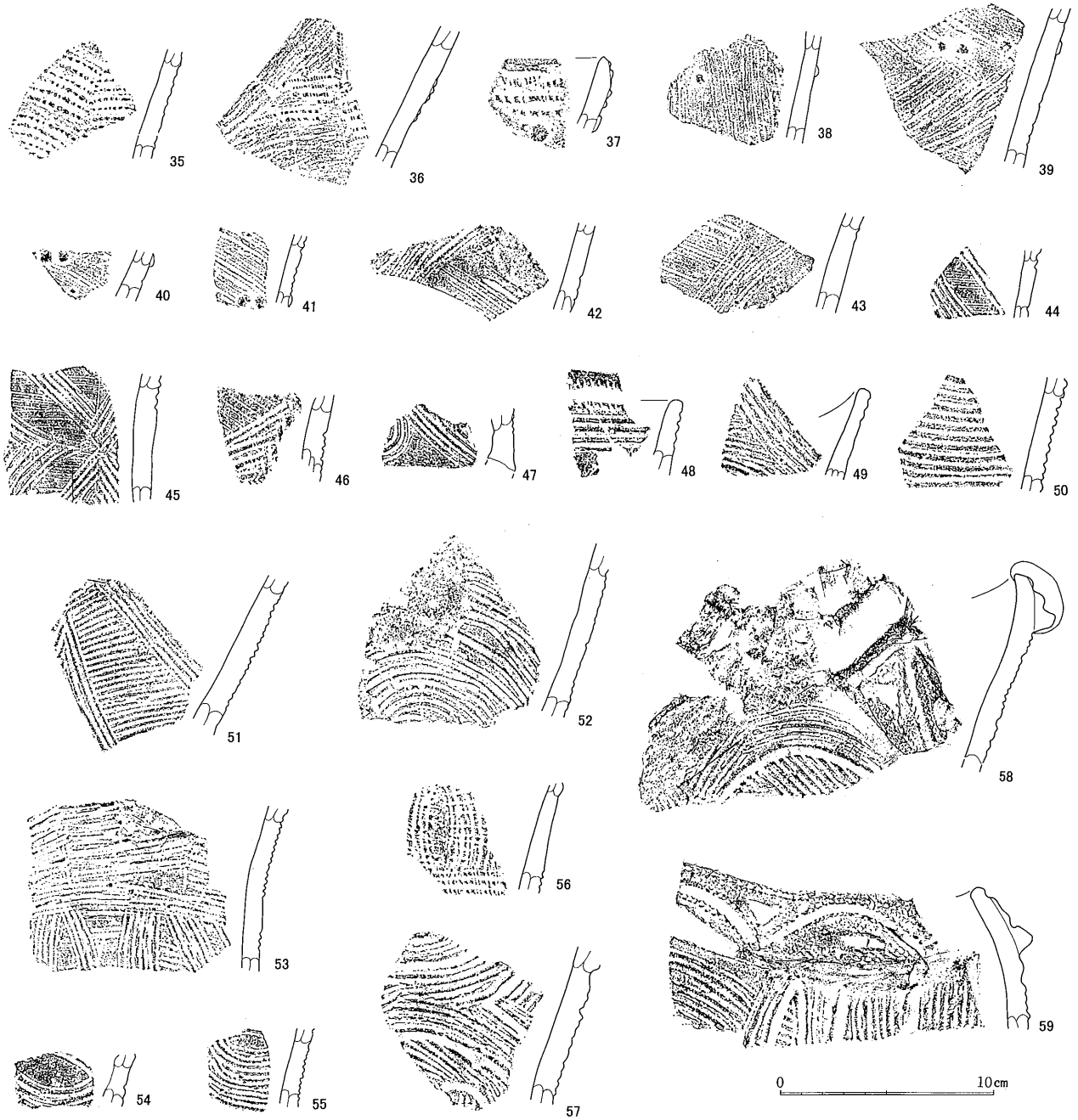


第32図　出土土器（4）

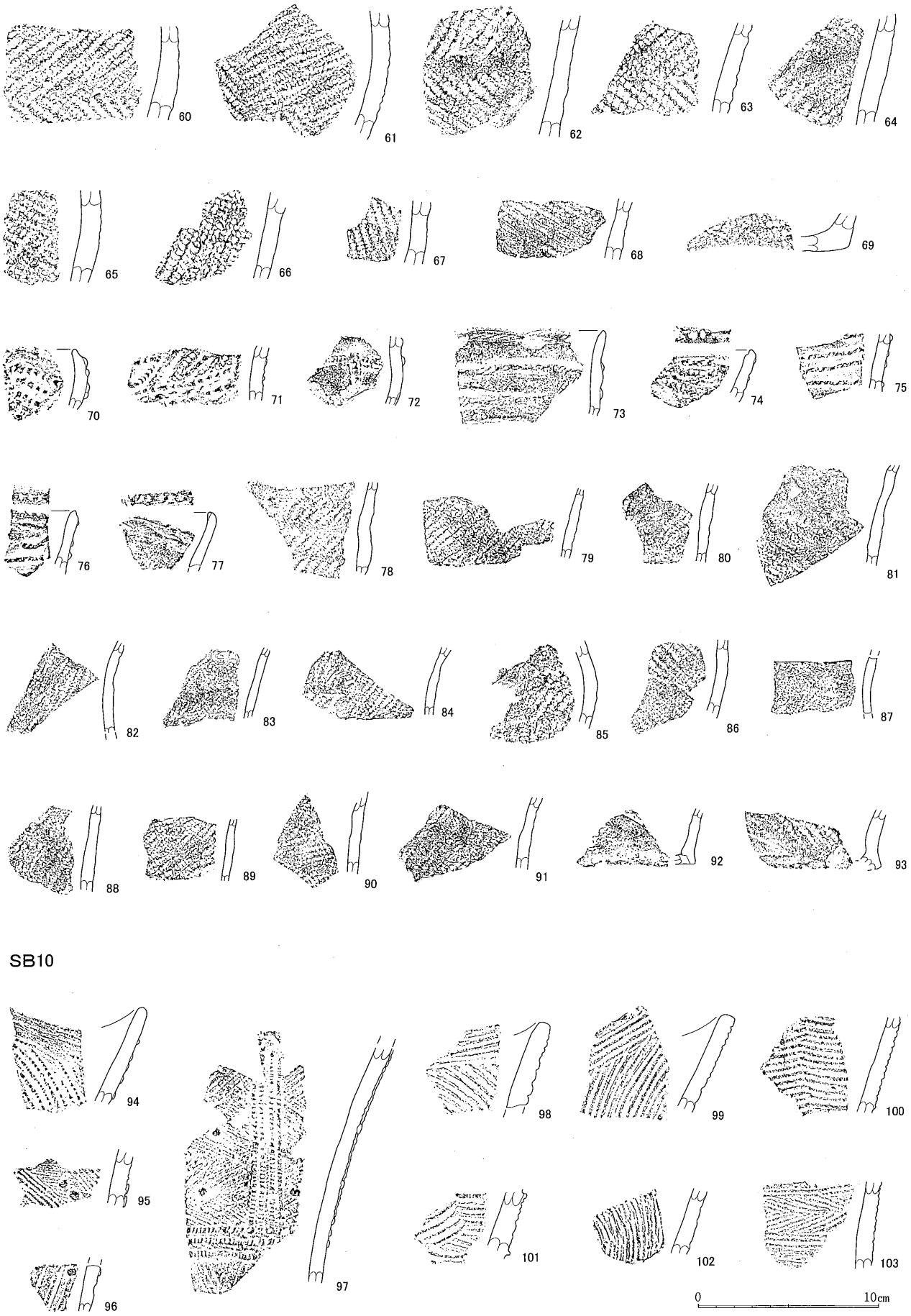
SB8



SB9

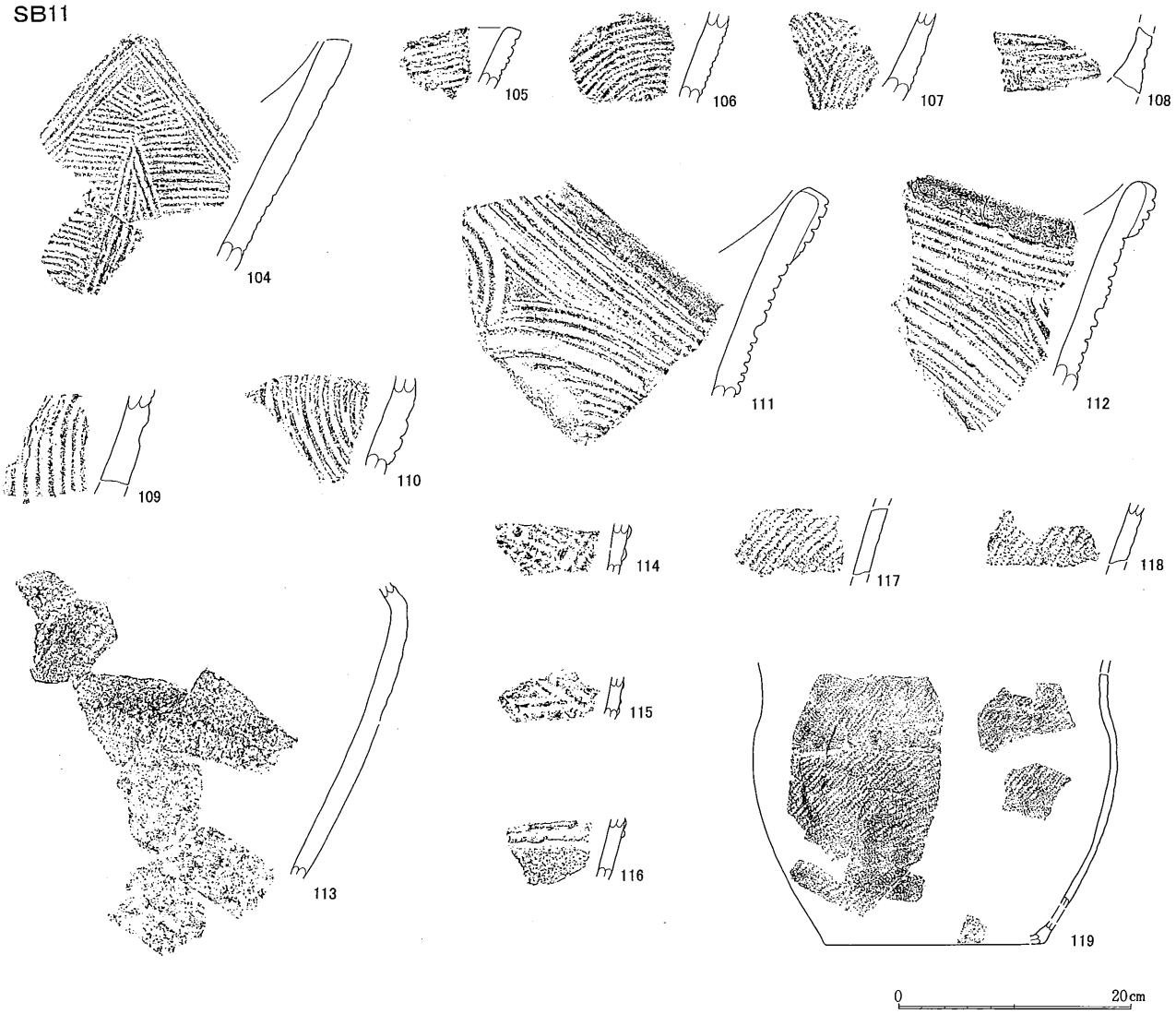


第33図　出土土器（5）

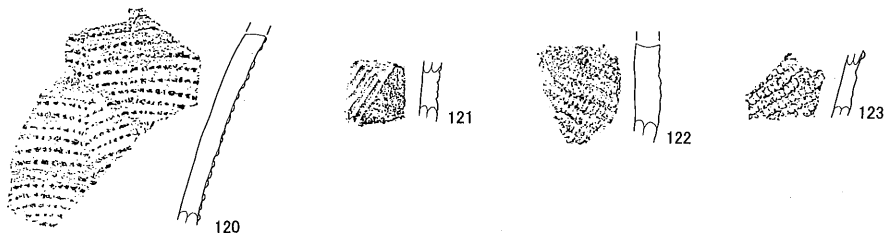

60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
SB10
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
10cm

第34図　出土土器（6）

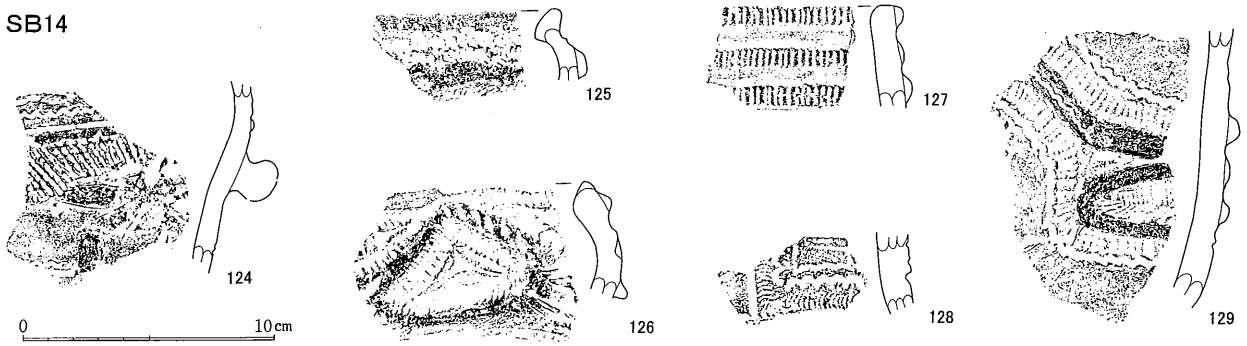
SB11



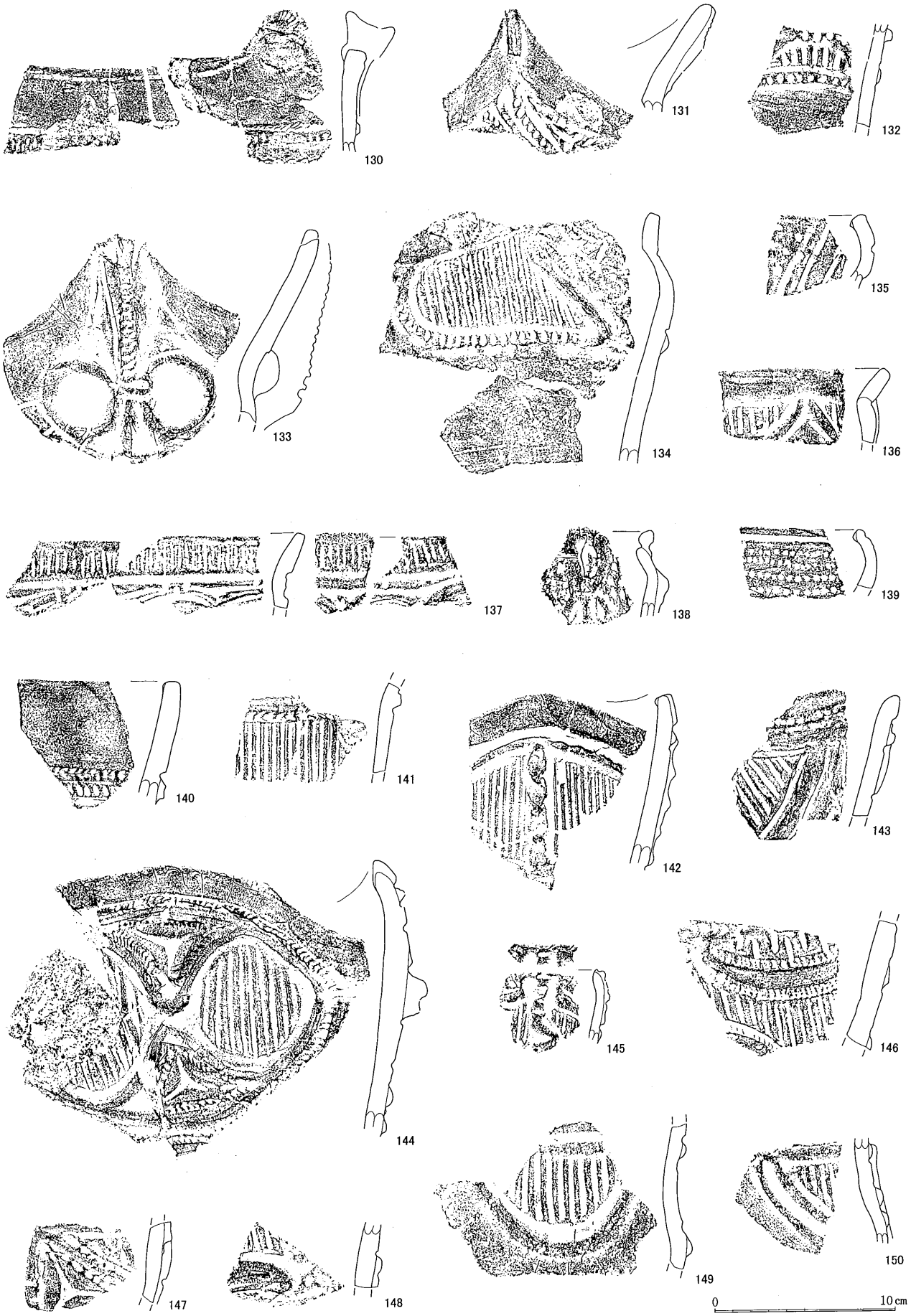
SB12



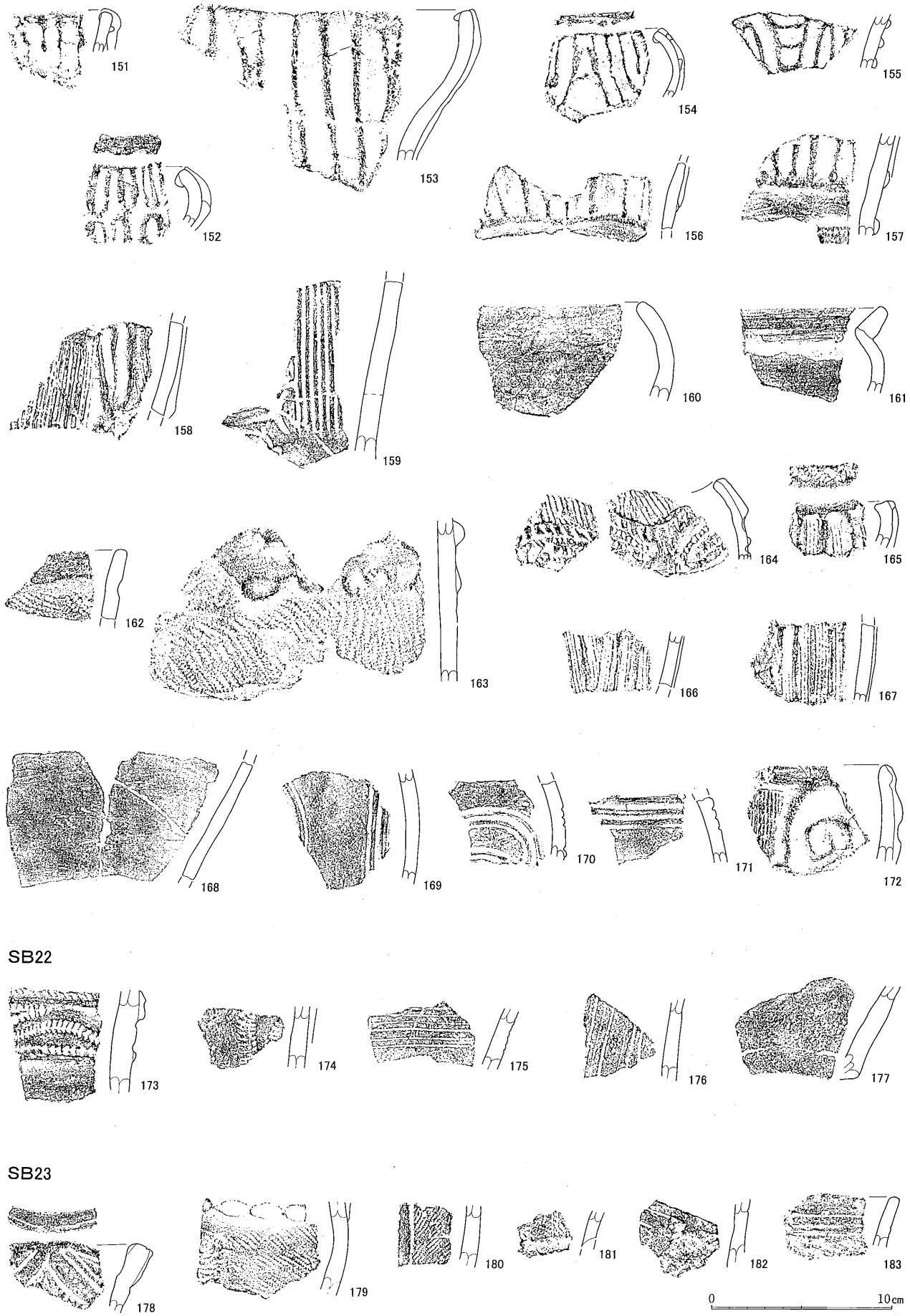
SB14



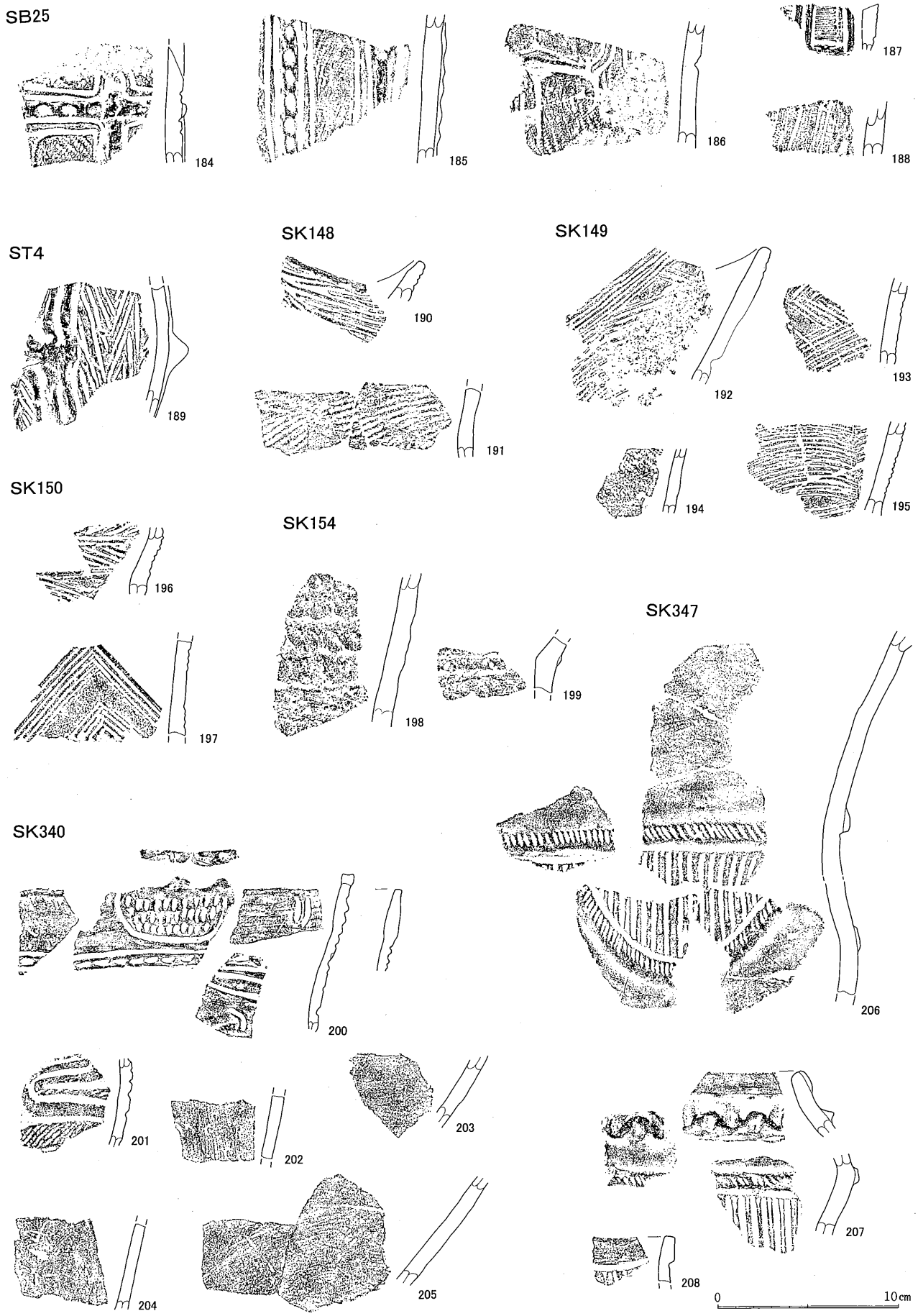
第35図　出土土器（7）


130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
0
10cm

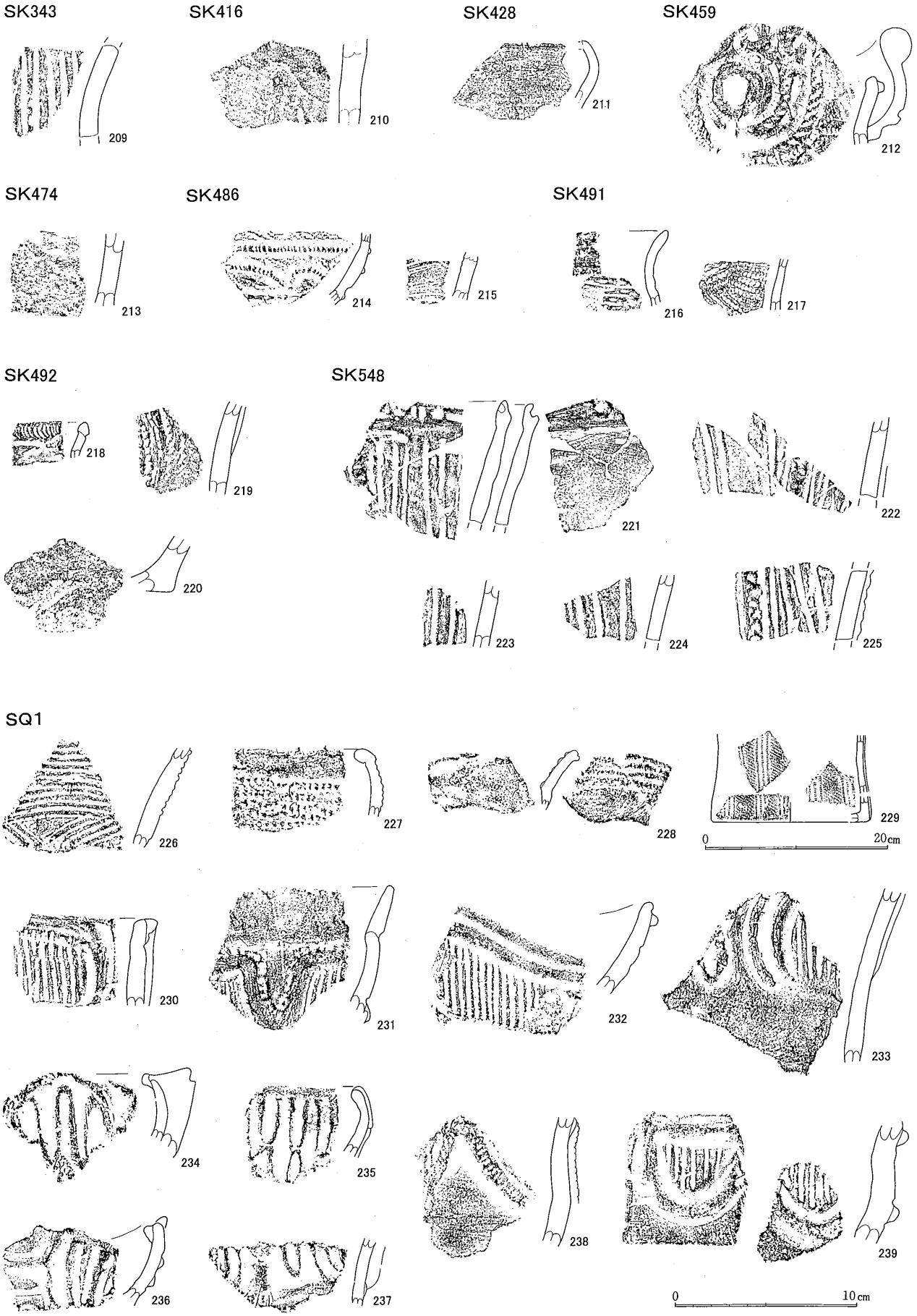
第36図　出土土器（8）


151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
SB22
173
174
175
176
177
SB23
178
179
180
181
182
183
0
10cm

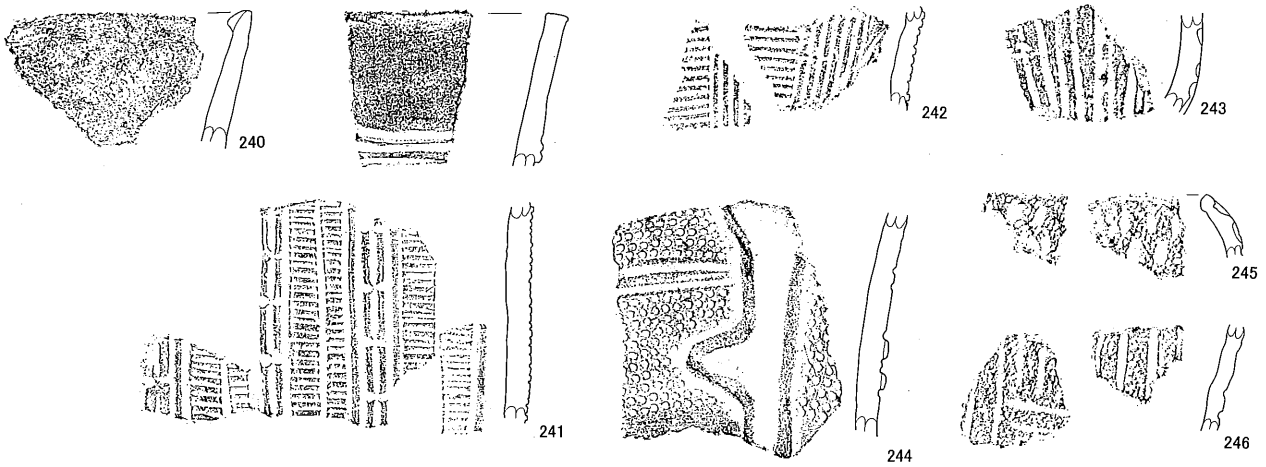
第37図　出土土器（9）


SB25
184
185
186
187
188
ST4
189
SK148
190
191
SK149
192
193
194
195
SK150
196
197
SK154
198
199
SK347
206
SK340
200
201
202
203
204
205
207
208
0
10cm

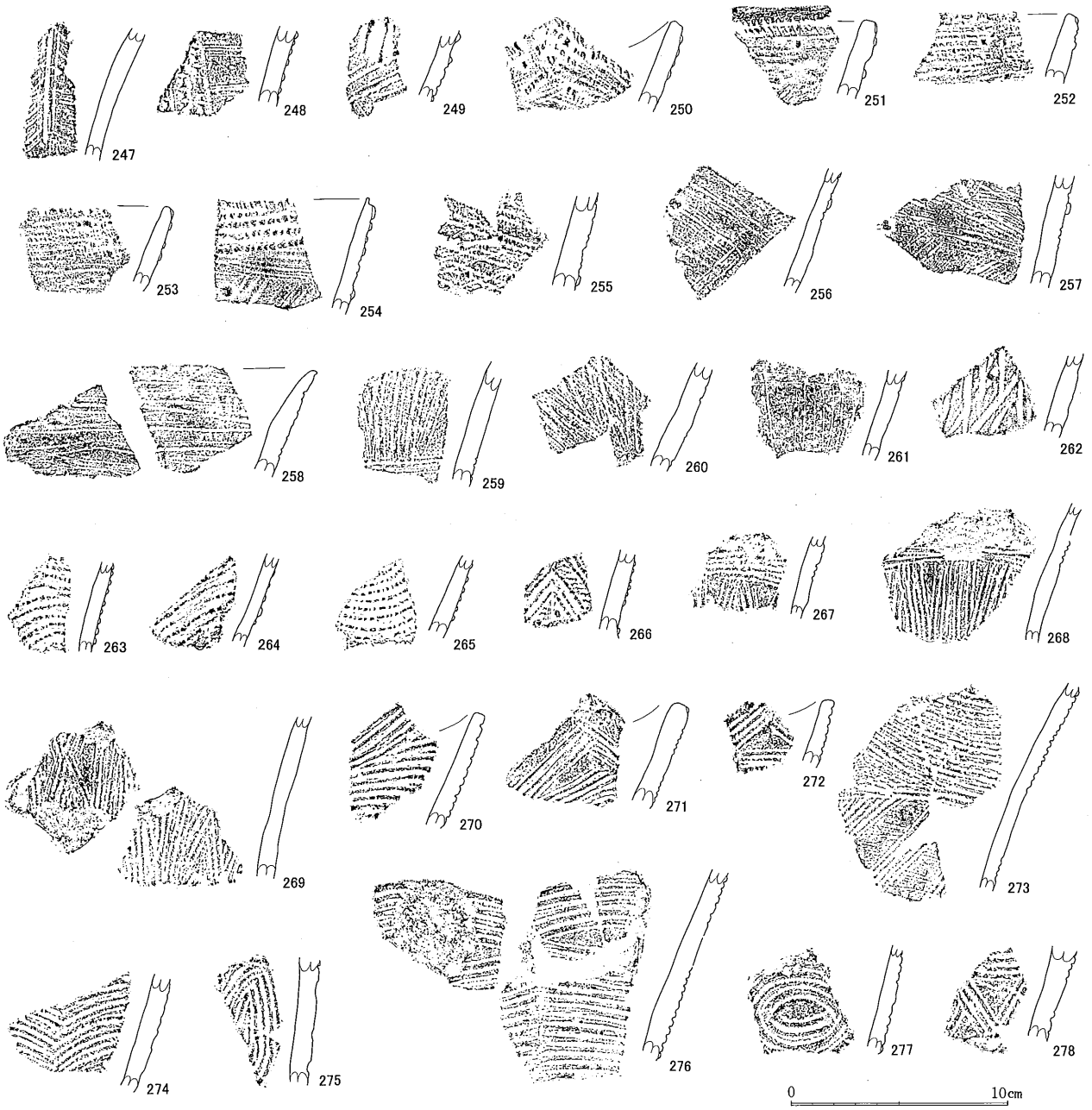
第38図　出土土器（10）


SK343
SK416
SK428
SK459
SK474
SK486
SK491
SK492
SK548
SQ1
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
0
20cm
0
10cm

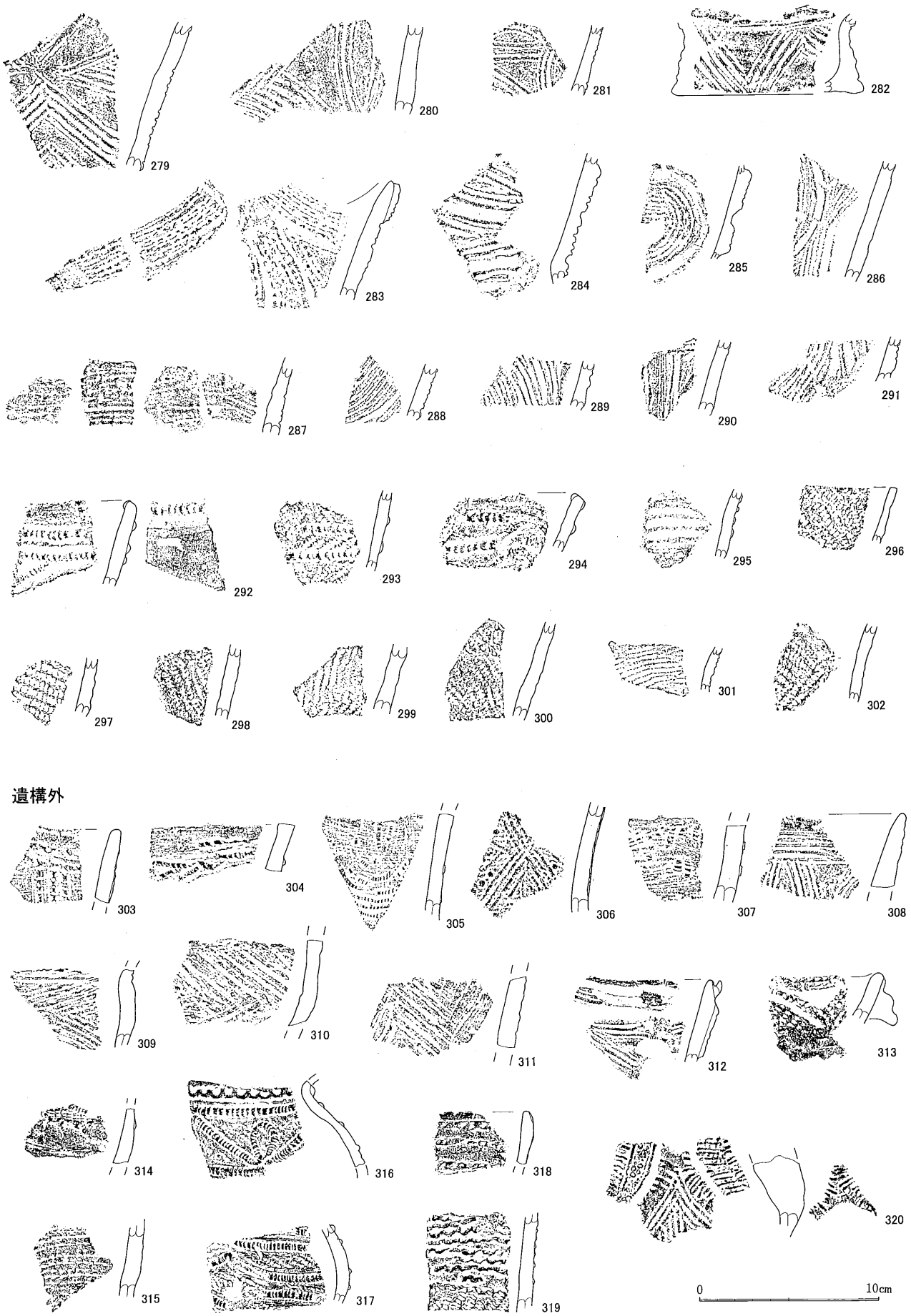
第39図　出土土器（11）



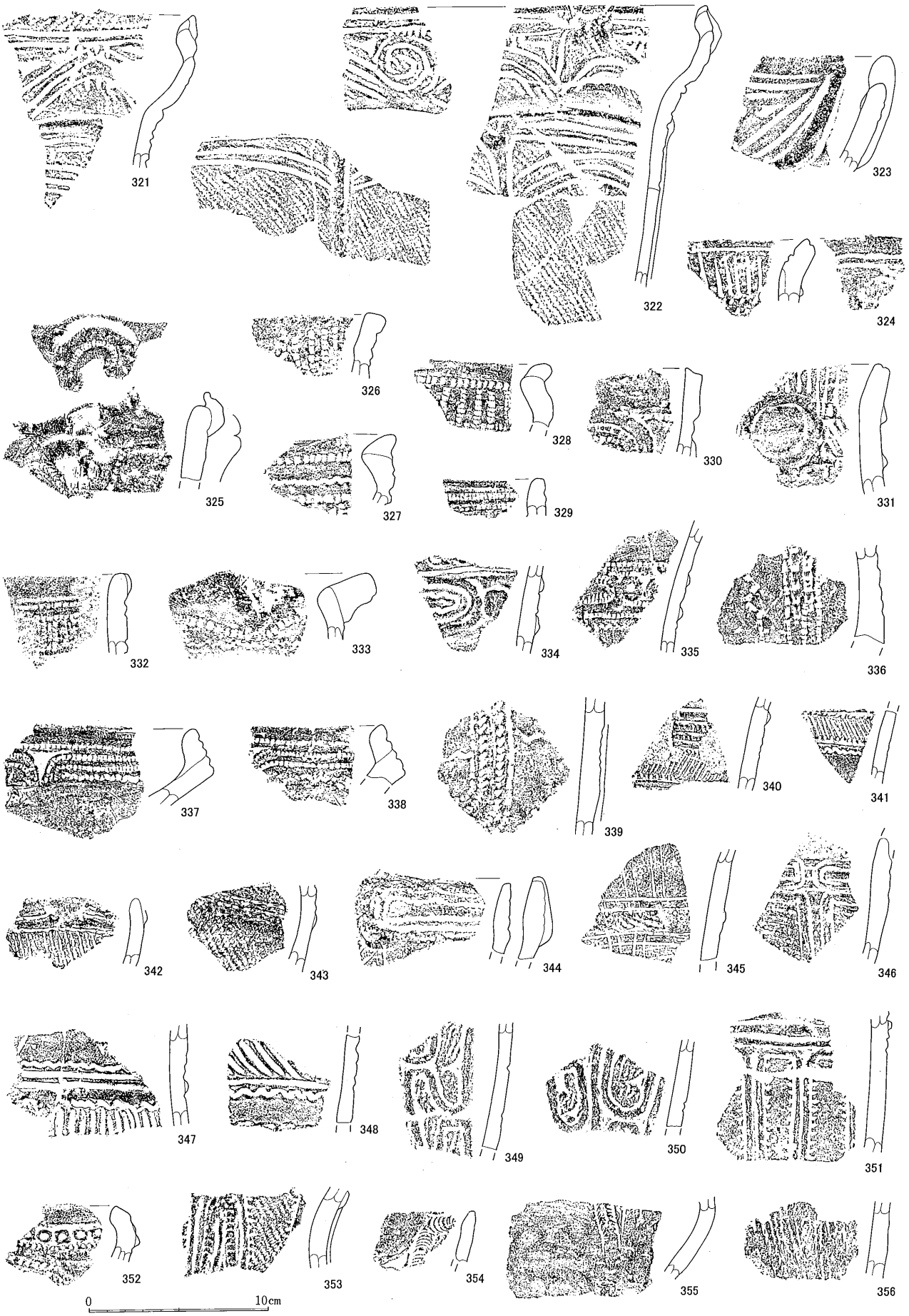
SQ2



第40図　出土土器（12）



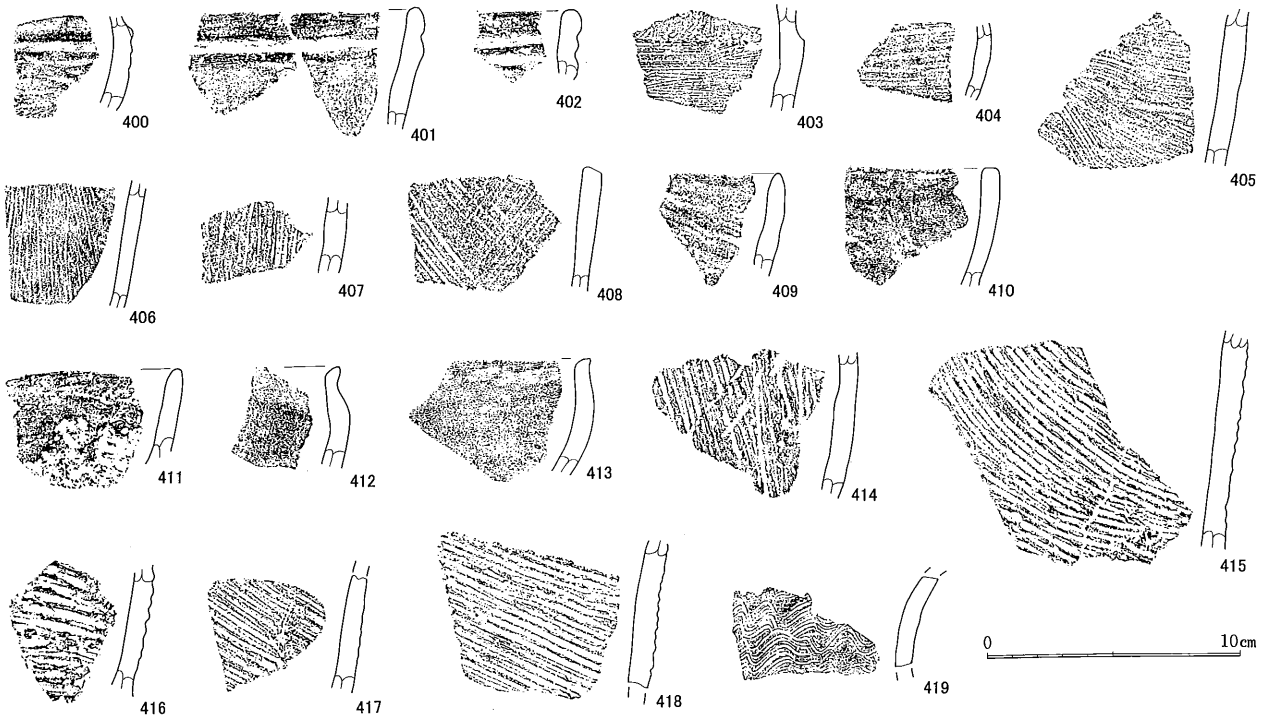
第41図　出土土器（13）


321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
0
10cm

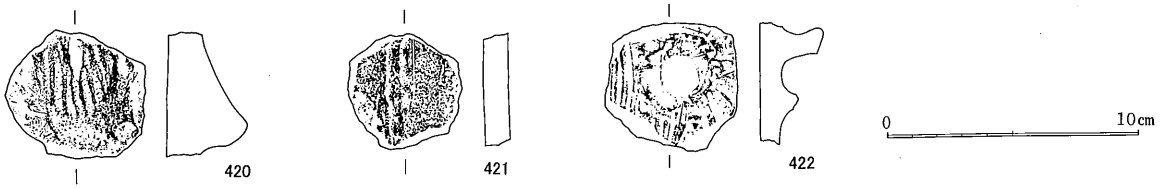
第42図　出土土器（14）

357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
0
10cm
0
20cm

第43図　出土土器（15）



土製品



第44図　出土土器（16）、土製品（1）

3）石　　器

小島遺跡の石器

株式会社　アルカ

1．整理の方法

（1）石器の選択

小島遺跡は縄文前期末葉・中期前半・後期～晩期の3時期の遺構・遺物が残されている遺跡である。主な石器は前期と中期のもので、後･晩期は僅かな量しか残されていない。前期と中期の遺物は800点を超える。整理にあたっては、予め遺物登録台帳に通番の付された石器を中心に行った。石器の通番は、原則として1点につき1番号であり、これらは重量・長さ・幅・厚みと器種・剥離技術などの属性を記述した。しかし、取り上げ番号がない剥片類の一部については、それがまとまった状態でポリ袋一つについて番号がつけてあるので、これらは重量と器種、そして点数のみを記述した。以上の経過で作成したその属性表の個体数は762点となる。

（2）属性表と図版（写真と実測図）

石器属性表は、石器の記述の基本となる台帳である。この属性表を分析することで、小島遺跡出土石器の石材・器種・加工技術の関係を明らかにできる。

小島遺跡の属性表の特徴は、一部の項目において石器（利器）・石核と剥片では同一項目内で記述内容が異なる。それは素材形態・素材打面・素材技術の項目である。記述された対象が石器（利器）の場合、その「素材形態」は加工された本体もしくは刃部を形成した本体そのものの形態を示す。「素材打面」と「素材技術」も同様で、加工された本体について記述されている。対象が「剥片」の場合は、「素材形態」は剥片そのものの形態（つまり横長剥片・矩形剥片・縦長剥片という種類）が記述される。「素材打面」、そして「素材技術」はその剥片の属性そのものを示す。対象が石核の場合、「素材形態」は石核となる剥片や礫という素材の形態を記述し、その「素材技術」は「素材形態」の獲得技術を示した。読者が石核の記述で特に注意されたい点は、「素材打面」が石核の剥片剥離作業面に対する打面形態を示し、「刃部加工」が作業面から剥がされる剥片剥離技術を記述している点である。以上のように本遺跡の属性表は、石器の種類ごとに記述した項目の内容を変えてある。これは省スペースに対応したからである（第2表）。

石器の図版は、可能な限りの資料掲載を目的として写真を中心に作成した（第45～59図）。また、石器実測図は特に今後に活用される定形石器や特徴のある剥片などを選択し、その必要に応じて作成した（第60～71図）。写真と図の縮尺はすべて1/2である。実測図には一部の石器に記号が付してある。小形の剥片石器で矢印のあるバーの範囲は「刃部」の範囲を示している。また裏面図の剥離軸を矢印で示した図や、必要な辺だけを部分的に図化したものもある。

2．石器群のまとめ

いくつかの項目に絞って、石器群の様相を記述したい。

（1）資料体の性格と石材

小島遺跡の石材特徴は、剥片石器の素材が多く、それらは近隣の木曽福島町板敷野遺跡と同じハリ質安山岩が多量に出土し、その他の剥片石器の石材が下呂石・珪岩・黒曜石に限定されたことにある。その内訳は、ハリ質安山岩325点、珪岩73点、黒曜石68点、下呂石29点である（これらの石材は裂片や剥片の一部を重複してカウントしてあるため、実際の点数はこの数値より多くなる）。打製石斧の石材は片岩（98点）と泥岩（44点）が主体を占める。打製石斧は、すべて遺跡外から石器が持ち込まれているため、石材の消費と石器の再生加工が一致しており、これらの石材の剥片類はすべて刃部再生で生じている。

以上の石材は剥片剥離作業と対応しており、剥片剥離作業が行われている「母岩資料」と、製品だけが持ち込まれている「単品資料」で構成される。前出の板敷野遺跡では遺跡内で採取できる安山岩があったが、小島遺跡の石器資料体にはそれはない。従って「大量母岩搬入資料体」・「少量母岩搬入資料体「製品搬入資料体」という3つの分類がなされる。この分類が小島遺跡を構成する石材獲得及び石核消費（剥片剥離作業）の大分類である。

さて、3つの資料体のカテゴリーは、石材の量・剥片剥離技法の種類・石核消費の程度・製作される剥片石器の種類に概ね対応している。

	石　材	量	石　核	剥片剥離技術	石核消費の程度	製作される石器
大量母岩搬入資料	ハリ質安山岩	多	小児の頭大から剥片	HD・HvD	非常に高い	刃器を主体に、少量の石錐
少量母岩搬入資料	珪岩・黒曜石・下呂石	中～少	鶏卵以下	両極打撃・HD・HvD	非常に高い	主に石鏃、少量の削器と石錐
製品搬入資料	片岩・泥岩・安山岩		石核なし	剥離作業無し	石核なし	打製石斧・石皿・磨石・凹石

（2）器種

以下に小島遺跡を特徴づける器種の説明を行う。

刃器：本遺跡を代表する石器で、主にハリ質安山岩の剥片がこの石器に該当する。従来は刃先や形態を二次加工で形成する石器を「削器」とし、刃先はあるが形態形成のない石器を「使用痕剥片」とする慣習があったが、小島遺跡ではこれらの石器の刃部がすべて同じため、「刃器」という名称に統一した。

刃器の形態形成の加工は叩折や直接打撃で、余分な辺を切り取る加工である。この加工では叩き折られた辺にバリが残るので、それは直接打撃によって整形される。また刃部に押圧剥離による整形加工がみられる場合があるが、この加工はうねる辺を真っ直ぐに矯正する場合と刃部再生の初期に用いられる。

二次加工剥片：主にハリ質安山岩の石器で、叩折による成形加工がなされた石器。特徴は刃部が形成されていない点で、刃器の未製品の可能性が高い。

裂片：主に直接打撃によって砕け散った石片。ハンマーの種類と剥離の起源（剥片剥離か二次加工か）が不明な石片である。

以上の他に、石鏃・石匙・石錐・打製石斧などの定形石器がある。また、持ち込まれた剥片や加工礫は「石核原材」として記述した。残核はこれ以上剥離作業のできない石核、石核はまだ剥離作業の可能な形態として記述した。

以上に述べた以外は、ごく通常の器種分類を行って石器を記述した。

（3）加工術の種類

小島遺跡の石器の加工技術には、形態形成の技術と刃部形成の技術の2種類の技術がある。

最初に形態形成の二次加工技術をその属性が明らかな758点で分析してみよう。758点中、形態形成の加工がない個体（剥片・石核・使用痕剥片など）は238点であるので、対象となる個体は520点である。この中で単独で用いられる形態形成の二次加工は、ハードハンマー直接打撃（HD）233点、叩折94点、ソフトハンマー押圧剥離（S'P）35点、折取8点、敲打3点（石皿・磨石）が主であり373点となる。これは520点の71％となる。残りの30％弱は、ハードハンマーの直接打撃の変異と、少数の加工技術、及びそれらの複数の技術的組合せである。

ハードハンマーの直接打撃の変異は、垂直打撃（HvD）14点、径の小さなハンマーを用いた直接打撃（nHD）4点、ハードハンマーの強い直接打撃（CHD）1点である。少数の加工技術はハードハンマーの間接打撃（HI）3点、ハードハンマーの押圧剥離の刃潰し（HP／刃潰し）1点、ソフトハンマーの間接

打撃（S'I）１点などである。

次に刃部に属性のみられる石器は405点あり、そのうち素材の辺をそのまま刃部にしている石器は132点、ハードハンマーの直接打撃（HD）の加工が86点、細いハードハンマーの直接打撃（nHD）６点、変形度の低いソフトハンマー押圧剥離（S'P）50点、変形度の低いソフトハンマー直接打撃（S'D）８点が主である。以上は405点のうち282点であり、69.2％である。

以上より小島遺跡の加工技術は、ハードハンマーの直接打撃、叩折、変形度の少ないソフトハンマー押圧剥離が主な加工技術であり、形態成形加工が前２者に偏り、刃部加工は叩折を除いた上記３者が主たる加工技術であることがわかった。

（４）小島遺跡の石器文化

１）分析カテゴリーの設定

これまで概観したことを、遺跡を形成した縄文人の行動様式として把握し直すことで、この遺跡のまとめにかえたい。

下記の表は、小島遺跡の縄文人の行動様式から推定した石器の分類表である。

	領　域　内	領　域　外
母岩資料	珪岩・ハリ質安山岩・流紋岩安山岩・多孔質安山岩など	黒曜石・下呂石・水晶 （領域に接する地域）
単品搬入資料	片岩・泥岩	蛇紋岩（遠距離地域）
器種	石鏃・石錐・刃器・石錐・磨石・石皿・打製石斧	石鏃・石錐・石匙・磨製石斧

この表にみるように、小島遺跡では、石材と剥離作業からみた資料体のカテゴリーとその内容は、遺跡を形成した縄文人の行動様式の一部を反映していると推定できるが、興味深いことに縄文前期末葉から中期中葉末までこの表の内容には変化がない。そこで、これを統計的に分析すると以下のような興味深い事実がでてきた。

まず、石材カテゴリーをＡ（ハリ質安山岩）・Ｂ（珪岩）・Ｃ（黒曜石・下呂石）・Ｄ（片岩・泥岩など）・Ｅ（安山岩・多孔質安山岩など）とする。次に器種をＡ（石鏃・石錐類）・Ｃ（石匙類）・Ｄ（刃器・削器・掻器類）・Ｅ（打製石斧）・Ｆ（原石・石核原材・石核・剥片類）・Ｇ（磨石・敲石・石皿）とする。これを石器分類の基本として、各段階と石材カテゴリー及び器種カテゴリーのクロス集計表を作成した。分析に用いた段階はＡ（前期末葉）・Ｂ１（中期中葉）・Ｂ２（中期中葉～中葉末：主に土坑群の資料）・Ｂ３（中期中葉末）の４段階である。ただし、Ｂ２段階は土坑群の資料であり、その他の段階は住居出土である点で、遺構の性格が大きく異なる。

２）分析

ａ　段階と石材

下記の表にχ二乗検定を行い有意性を分析してみた。

その結果、段階（縦軸）と石材（横軸）のχ二乗値は危険率５％（閾値25.00）のとき204.83であり、

表１：段階と石材カテゴリー

	A	B	C	D	E	総　計
A	5	29	30	5	5	74
B1	69	10	10	2	3	94
B2	3		1	8		12
B3	139	8	11	14	11	184
総計	216	47	52	29	19	364

よって充分に有意であることがわかる。

また同表を用いて前期末葉（段階Ａ）と中期中葉（段階Ｂ１）の検定は、危険率５％（閾値9.49）のとき75.08で有意。また、中期中葉末（段階Ａ）と前期末（段階Ｂ３）の検定は危険率５％（閾値9.49）のとき128.89で有意となる。従って、前期末葉と他の段階との差異性は、時期が下るにつれて大きくなる。

一方中期全体（段階Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３）では、Ｂ１段階とＢ３段階で危険率５％（閾値9.49）のとき9.49でかろうじて有意であるが、この数値はほとんど差異がないことを示している。

ｂ　段階と器種

表２：段階と器種カテゴリー

	A	C	D	E	F	G	総　計
A	22	2	13	5	29	5	76
B1	6	2	45	2	33	3	91
B2	1	1		8	2		12
B3	11	1	76	11	73	11	183
総計	40	6	134	26	137	19	362

この表にχ二乗検定を行うと、危険率５％（閾値25.00）のとき、検定値116.62で有意となる。そこで、石材と同じ分析を行うために、前期末葉（段階Ａ）と中期のＢ１及びＢ３を比較した。前期末葉（段階Ａ）と中期中葉（段階Ｂ１）では危険率５％（閾値11.07）で検定値27.72となり有意。段階Ａと段階Ｂ３では危険率５％（閾値11.07）で検定値33.61となり有意。この結果も前期から時代が下るに連れて有意さが大きくなった。

また、Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３という中期のなかで検定を行うと、危険率５％（閾値18.31）で検定値76.26となり有意となったが、しかしＢ１とＢ３では「有意でない」と検定結果がでた。

この場合に中期全体の中で有意性がでたのは、Ｂ２の資料の少なさに比較して、打製石斧の数量比率が大きいために有意差となったと理解できるので、ここでは中期全体に器種組成の偏在は存在しないと結論されよう。

３）小島遺跡の石器文化

以上の分析結果をみると、石器文化としての小島遺跡は、前期末と中期ではその石材利用と器種に大きな有意性がみられた。この点を石材の獲得と関連させてまとめにしたい。

小島遺跡の石材は、ほぼ遺跡近傍から賄われ、その石材カテゴリーは前期末から中期中葉にかけて一定性を保っている。また、器種カテゴリーも前期末葉から中期中葉にかけて一定である。この現象をみると、小島遺跡の石器文化はほとんど変化していないようにも見られる。しかし分析の結果は、前期末葉と中期ではその統計検定値に有意性がみられる点から、石器文化の内容に変化があったことが示された。

石材の中で注意するべきは、その石質と器種の作り分けである。比較的遠隔地の黒曜石については、原産地分析によると、90％の黒曜石が星ヶ台産であり、この点で段階差の中で変化はみられない。

また黒曜石や下呂石の量は過小であるとともに、これらの石材では主に石鏃が製作される点が注意される。近傍石材の主たる器種は、前期末葉においては石鏃・削器であり、中期になると刃器と打製石斧の比率が飛躍的に増加する。以上の点でいえば、石材と器種のカテゴリーの段階差は、主にハリ質安山岩製の刃器、及び打製石斧の量の変化に起因すると考えられるのである。また、中期という段階内で打製石斧に意味のある現象は、Ｂ２段階として設定した土坑群に顕著であり、Ｂ２段階とＢ１・Ｂ３段階には大きな有意性がみられる。それは土坑群と住居という遺構の性格に原因が求められるであろう。この点は、同じ段階内での遺構の性格について、今後の分析指標を与えたことになる。

第２表　石器属性表

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
前期末	A	SB９	1	黒耀石	石鏃	0.2	12.0	14.7	2.1	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	2	黒耀石	石鏃	0.6	20.9	14.3	2.7	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	3	黒耀石	石鏃未製品	0.4	14.7	12.4	3.1	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	4	黒耀石	石鏃未製品	0.6	13.9	16.4	3.2	S'P	S'P	横長剥片	加工欠	不明		
前期末	A	SB９	5	黒耀石	石鏃未製品	1.2	15.6	17.2	4.2	S'P	S'P	横長剥片	加工欠	不明		
前期末	A	SB９	6	黒耀石	刃器	1.8	21.0	25.7	5.5	折取	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		
前期末	A	SB９	7	黒耀石	刃器	0.5	19.0	10.5	2.6	なし	素刃・MF	両極剥片	線状	HvD		
前期末	A	SB９	8	黒耀石	刃器	2.4	22.0	16.9	10.4	叩折・HI	素刃・MF	残核	自然面	不明		剥片素材の残核を再利用した刃器
前期末	A	SB９	9	黒耀石	石錐未製品	1.7	21.0	10.3	7.9	なし	HP／急角度	両極石器	自然面	HvD		
前期末	A	SB９	10	黒耀石	剥片	0.4	25.0	9.2	2.9	なし	なし	縦長剥片	折れ	不明		
前期末	A	SB９	11	黒耀石	剥片	0.8	11.9	27.2	4.8	なし	なし	横長剥片	切子打面	CHD		
前期末	A	SB９	12	黒耀石	裂片	0.1	21.3	6.4	5.4	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	13	黒耀石	剥片・残核	96.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	13	黒耀石	刃器	1.0	26.3	13.4	6.1	なし	素刃・MF	縦長剥片	線状	HD		原産地分析では、資料かしていない剥片21点含む。
前期末	A	SB９	14	珪質頁岩	石鏃	1.6	25.1	21.7	4.5	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	15	珪岩	石鏃	0.5	18.6	16.2	3.1	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	16	珪岩	石鏃	0.6	15.6	13	3.1	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	17	珪岩	石錐	4.8	29.6	30.2	7.6	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	18	珪岩	石錐	2.2	27.9	14.3	6.2	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	19	珪岩	有茎鏃	1.9	32	11.8	5.4	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	20	珪岩	石鏃未製品	0.3	15.1	13.4	2.5	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	21	珪岩	石錐未製品	7.7	29	35.9	8.5	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	22	珪岩	石錐刃部	0.1	10.7	10.0	3.8	S'P	不明	不明	不明	不明	刃部先端の小断片	
前期末	A	SB９	23	珪岩	剥片	0.1	8.5	10.6	2.3	なし	なし	矩形剥片	平坦	不明		
前期末	A	SB９	24	珪岩	両極石器	1.5	15.3	16.0	6.3	HvD	なし	剥片	不明	不明		
前期末	A	SB９	25	珪岩	剥片	0.6	14.6	14.0	2.9	なし	なし	矩形剥片	線状	HvD		
前期末	A	SB９	26	珪岩	両極石器	4.7	24.2	24.2	9.2	HvD	なし	縦長剥片	不明	不明		
前期末	A	SB９	27	珪岩	剥片・チップ	270.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	27	珪岩	石核	33.7	50.3	37.2	21.5	HD	HI	剥片	不明	(HD)		
前期末	A	SB９	27	珪岩	石錐	0.6	17.6	11.2	5.5	S'P・稜上反S'I	S'P	小礫	なし	なし	極小の石錐	
前期末	A	SB９	27	珪岩	剥片・石核	174.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	28	下呂石	削器	13.1	45.1	33.0	9.2	SD	S'P	縦長剥片	加工欠	(HD)	完形	
前期末	A	SB９	29	下呂石	裂片	0.3	14.4	10.3	2.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	30	下呂石	両極石器	3.0	26.0	24.1	7.4	HvD	なし	剥片	不明	不明		
前期末	A	SB９	31	下呂石	二次加工剥片	3.8	28.6	21.7	7.9	叩折	不明	縦長剥片	自然面	HD		
前期末	A	SB９	32	下呂石	裂片	0.4	16.9	10.5	2.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SB９	33	下呂石	加工剥片	30.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	S'P		押圧剥離の剥片類・両極石器・加工剥片
前期末	A	SB９	34	ハリ質安山岩	石匙	17.4	44.3	49.2	11.3	nHD	nS'P	横長剥片	加工欠	(HD)		
前期末	A	SB９	35	ハリ質安山岩	石匙	17.3	37.6	35.9	13.4	nHD	折れ	不明	不明	(HD)		石匙の摘み部
前期末	A	SB９	36	ハリ質安山岩	二次加工剥片	218.3	115	72.8	19.3	nHD	刃部なし	縦長剥片	自然面	HD		
前期末	A	SB９	37	片岩	打製石斧	47.6	73.9	46.7	10.6	HD	HD・MF・摩耗	不明	不明	(HD)		
前期末	A	SB９	38	硬質砂岩	打製石斧	22.5	53.8	30.7	12.1	HD	HD・MF・摩耗	不明	不明	(HD)	基部断片	
前期末	A	SB９	39	粘板岩	打製石斧	10.9	35.3	42.5	6.3	HD	HD・MF・摩耗	不明	不明	(HD)	刃部断片	
前期末	A	SB９	40	安山岩	磨石断片（剥片）	9.3	36.0	41.3	6.8	不明	不明	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	41	流紋岩	残核	76.9	46.5	85.3	33.8	HD	HD	不明	不明	不明		
前期末	A	SB９	42	閃緑岩	磨石	517.0	90.7	73.1	58.0	なし	適用外	適用外	適用外	適用外		完形
前期末	A	SB９	43	安山岩	凹石	637.2	117.5	69.3	49.1	敲打	適用外	適用外	適用外	適用外		完形
前期末	A	SB９	44	花崗岩	台石											
前期末	A	SB10	45	黒耀石	原石	40.9	56.2	33.8	26.0	なし	なし	亜角礫	自然面	なし		試し割りがなされている。
前期末	A	SB10	46	黒耀石	剥片	0.3	8.9	13.0	2.8	なし	なし	横長剥片	線状	不明		
前期末	A	SB10	47	珪岩	石核原材	23.8	61.1	29.7	10.3	なし	なし	礫片	なし	HD		節理面割れの剥片（礫片）
前期末	A	SB11	48	珪岩	刃器	9.1	40	36.5	7.6	なし	素刃・MF	矩形剥片	自然面	S'D		良質の珪岩
前期末	A	SB11	49	珪岩	残核	16.7	31.4	36.3	15.6	不明	HI	剥片	不明	不明		石鏃の素材剥片石核
前期末	A	SB11	50	片岩	打製石斧	11.7	46.7	34.1	6.2	HD	MF	剥片	不明	不明	刃部断片	
前期末	A	SB12	51	黒耀石	石鏃未製品	1.0	17.4	16.6	5.5	S'P	S'P	両極剥片	加工欠	HvD		

時　期	段階	遺構名	通番	石　材	器　種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備　考	所　見
前期末	A	SB12	52	黒耀石	石鏃未製品	1.2	19.8	16.9	4.7	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SB12	53	黒耀石	剥片・裂片	7.7	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		原産地分析では資料化していない剥片4点を含む。
前期末	A	SB12	54	珪岩	石鏃	0.4	15.9	11.2	3.2	S'P	S'P	不明	不明	不明	脚折れ	
前期末	A	SB12	55	珪岩	石錐	12.6	52.5	28.1	12.1	叩折	S'P	剥片	加工欠	HD		一対の抉りあり。
前期末	A	SB12	56	珪岩	剥片・両極石器	6.5	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		両極石器1点・剥片1点・裂片6点
前期末	A	SB12	57	下呂石	剥片	2.9	30.4	20.0	5.2	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		
前期末	A	SK153	326	黒耀石	石鏃未製品	2.4	22.6	20.8	6.3	S'P	S'P	矩形剥片	加工欠	不明		
前期末	A	SK153	327	珪岩	石鏃	0.9	17.4	16.3	4.2	S'P	S'P	不明	不明	不明		
前期末	A	SK153	328	珪岩	刃器	5.7	37.2	24.9	6.7	なし	素刃・MF	縦長剥片	線状	CHD		
前期末	A	SK153	329	珪岩	石錐	5.3	33.9	15	13.8	nHI	nHI	裂片	不明	CHD		打撃で飛んだ裂片が素材。
前期末	A	SK153	330	珪岩	剥片	2.6	28.7	18.9	9.2	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		末端辺が鋭利
前期末	A	SK153	331	珪岩	刃器	3.0	20.3	25.8	7.2	なし	素刃・MF	矩形剥片	切子打面	HD		
前期末	A	SK152	324	安山岩	凹石	735.4	117.1	99.2	57.3	なし	なし	円礫	なし	なし		
前期末	A	SK152	325	安山岩	磨石	926.1	111.3	90.7	67.5	なし	なし	円礫	なし	なし		
前期末?	F	SK299	334	安山岩	磨石	537.1	118.1	76.3	39.0	なし	なし	円礫	なし	なし		
前期末	A	SQ2	373	黒耀石	刃器	0.9	24.6	9.2	4.1	折取	素刃・MF	両極剥片	線状	HvD		
前期末	A	SQ2	374	黒耀石	裂片	0.2	16.2	7.5	2.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
前期末	A	SQ2	375	珪岩	刃器	1.9	55	39.8	9.8	なし	素刃・MF	礫面剥片	線状	CHD		
前期末	A	SQ2	376	珪岩	刃器	12.4	70.8	60.8	26.7	なし	素刃・MF	礫面剥片	線状	CHD		
前期末	A	SQ2	377	ハリ質安山岩	刃器	81.5	94	55	15.4	CHD	素刃・MF	矩形剥片	線状	HvD		素材は中形の剥片
前期末	A	SQ2	378	ハリ質安山岩	削器	92.7	56.7	32.2	7.1	nHD・叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	(HD)		
前期末	A	SQ2	379	流紋岩	剥片	10.5	84.9	35.4	12.7	なし	なし	縦長剥片	線状	CHD		
前期末	A	SQ2	380	硬質砂岩	打製石斧	39.8	83.1	33.6	12.2	HD	HD・摩耗	不明	不明	不明		
中期中葉	B1	SB8	58	黒耀石	両極石器	2.2	19.0	12.9	7.4	HvD	なし	剥片	不明	不明		
中期中葉	B1	SB8	59	黒耀石	剥片・裂片	10.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		原産地分析では資料化していない剥片4点を含む。
中期中葉	B1	SB8	60	珪岩	横形石匙	11.8	33.2	48.6	9.3	S'P	S'P	横長剥片	加工欠	不明		非常に良質の珪岩。
中期中葉	B1	SB8	61	珪岩	石匙	2.3	17.8	22.9	6.3	S'P	S'P	横長剥片	加工欠	不明		良質の珪岩。
中期中葉	B1	SB8	62	珪岩	剥片・チップ	8.7	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		30点
中期中葉	B1	SB8	62-1	珪岩	石核・剥片・裂片	44.3	29.5	23.7	6.4	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		やや節理面のある珪岩
中期中葉	B1	SB8	62-2	珪岩			41.9	36.6	20.2							
中期中葉	B1	SB8	63	下呂石	石鏃	0.7	18.9	14.9	4.5	S'P	S'P	不明	不明	不明		
中期中葉	B1	SB8	64	下呂石	掻器	13.9	52.3	33.7	12.3	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	65	下呂石	石鏃未製品	0.6	20.6	10.2	4.7	S'P	S'P	不明	不明	不明		
中期中葉	B1	SB8	66	下呂石	石鏃未製品	2.9	23.8	17.7	8.3	S'P	S'P	不明	不明	不明		分厚い剥片が素材
中期中葉	B1	SB8	67	下呂石	石核・剥片・裂片	26.0	45.9	47.9	13.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		石核は石鏃の素材剥片が目的
中期中葉	B1	SB8	68	ハリ質安山岩	削器	225.4	106.4	75.0	33.8	HD	HP・MF	縦長剥片	自然面	HD		大形剥片を加工している削器。
中期中葉	B1	SB8	69	ハリ質安山岩	剥片	60.4	64.1	59.6	16.1	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		鋭い辺の剥片。
中期中葉	B1	SB8	70	ハリ質安山岩	石核	401.2	64.1	114	61.7	HD	HD	分轄礫	自然面	なし		薄い中形剥片の石核
中期中葉	B1	SB8	71	ハリ質安山岩	刃器	89.0	74.8	57.3	22.8	なし	素刃・MF	縦長剥片	平坦	HD		背面に大きく自然面が残る。
中期中葉	B1	SB8	72	ハリ質安山岩	刃器	56.9	72.3	56.6	16.9	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	73	ハリ質安山岩	削器	173.1	74.2	97.4	18.2	HD	HD	横長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	74	ハリ質安山岩	刃器	24.3	50.7	47.0	11.2	なし	なし	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	75	ハリ質安山岩	目的剥片	88.8	57.2	111.3	15.2	なし	なし	横長剥片	自然面	HD		目的的剥片
中期中葉	B1	SB8	76	ハリ質安山岩	刃器	60.5	79.8	69.1	17.3	なし	素刃・MF	横長剥片	折れ	HD		側面に自然面
中期中葉	B1	SB8	77	ハリ質安山岩	刃器	34.2	50.6	54.8	10.2	なし	素刃・MF	矩形剥片	平坦	SD		
中期中葉	B1	SB8	78	ハリ質安山岩	削器	14.4	51.5	34.3	8.6	なし	S'P	縦長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB8	79	ハリ質安山岩	刃器	103.2	79.9	53.6	22.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	80	ハリ質安山岩	刃器	108.7	99.5	50	30.2	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB8	81	ハリ質安山岩	刃器	68.1	61.5	89.3	14.4	なし	なし	横長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	82	ハリ質安山岩	削器	246.7	77.1	84.4	25.3	叩折	HD	矩形剥片	自然面	CHD		分厚い中形剥片
中期中葉	B1	SB8	83	ハリ質安山岩	刃器	39.6	82.7	36.8	12.5	叩折	HP	縦長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB8	84	ハリ質安山岩	加工剥片	10.3	28.8	43	12.3	なし	なし	横長剥片	平坦	叩折		元の素材剥片はSD
中期中葉	B1	SB8	85	ハリ質安山岩	刃器	44.1	61.0	55.8	18.2	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	86	ハリ質安山岩	刃器	21.7	43.6	44.5	14.3	叩折	素刃・MF	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	87	ハリ質安山岩	刃器	22.6	56.6	27.8	11.7	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	SD		
中期中葉	B1	SB8	88	ハリ質安山岩	刃器	52.7	58.5	52.8	16.2	叩折	HD	矩形剥片	加工欠	HD		

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
中期中葉	B1	SB8	89	ハリ質安山岩	刃器	42.8	63.0	39.1	21.6	HD	HP	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	90	ハリ質安山岩	刃器	13.4	53.7	24.5	10.0	なし	素刃・MF	縦長剥片	自然面	SD		
中期中葉	B1	SB8	91	ハリ質安山岩	目的剥片	6.6	28.9	31.3	7.0	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		縁辺の鋭い剥片。刃器か？
中期中葉	B1	SB8	92	ハリ質安山岩	大形石錐	37.3	75	42.2	13.5	叩折	S'P	横長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	93	ハリ質安山岩	剥片	23.4	44.4	54.5	14.0	なし	なし	矩形剥片	切子打面	SD		鋭い辺の剥片。
中期中葉	B1	SB8	94	ハリ質安山岩	刃器	4.9	33.5	17.8	7.7	叩折	なし	横長剥片	SD	叩折		もとの素材はＳＤ
中期中葉	B1	SB8	95	ハリ質安山岩	加工剥片	11.2	28.8	43.3	9.8	なし	なし	横長剥片	平坦	叩折		
中期中葉	B1	SB8	96	ハリ質安山岩	刃器未製品	175.4	82.3	77.4	33.1	叩折・研磨	HD	縦長剥片	自然面	HD		打面研磨。刃部は再生途上。
中期中葉	B1	SB8	97	ハリ質安山岩	剥片	18.9	43.7	53.6	9.7	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB8	98	欠番						なし					97とガジリ接合	
中期中葉	B1	SB8	99	ハリ質安山岩	剥片	7.3	25.5	62.2	7.5	なし	なし	横長剥片	平坦	SD		鋭い辺の剥片。
中期中葉	B1	SB8	100	ハリ質安山岩	刃器	23.8	49.4	61.9	12.2	HD	素刃・MF	横長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB8	101	ハリ質安山岩	刃器	22.7	55.4	39.6	8.3	叩折・HD	素刃	縦長剥片	平坦	HD		剥離角は深い
中期中葉	B1	SB8	102	ハリ質安山岩	剥片	10.6	26.5	46.8	9.5	なし	なし	横長剥片	平坦	SD		剥離角は深い
中期中葉	B1	SB8	103	ハリ質安山岩	刃器	69.1	83.9	65.4	27.3	叩折	素刃・MF	縦長剥片	平坦（凸）	CHD		
中期中葉	B1	SB8	104	ハリ質安山岩	掻器	58.2	76.8	54.2	18.1	なし	HP/急角度	縦長剥片	加工欠	HD		剥片石核の残核転用掻器
中期中葉	B1	SB8	105	ハリ質安山岩	剥片	8.2	29.8	38.3	9.6	なし	なし	縦長剥片	切子打面	SD		深い剥離角。縁辺は折れ。
中期中葉	B1	SB8	107	ハリ質安山岩	剥片	21.9	46.8	44.4	17.4	なし	なし	縦長剥片	切子打面	SD		鋭い辺の剥片。深い剥離角。
中期中葉	B1	SB8	108	ハリ質安山岩	残核	53.1	56.6	54.9	24.0	なし	SD	剥片	不明	HD		剥片素材の小刃器石核
中期中葉	B1	SB8	109	ハリ質安山岩	削器	52.1	69.6	51.7	19.5	HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		底面に自然面をもつ剥片
中期中葉	B1	SB8	111	ハリ質安山岩	剥片	9.2	34.0	39.1	8.2	なし	なし	横長剥片	切子打面	SD		剥片剥離時の剥片
中期中葉	B1	SB8	112	ハリ質安山岩	剥片	33.7	49.4	50.3	15.3	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	113	ハリ質安山岩	剥片	52.2	53.2	57.5	15.4	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB8	114	ハリ質安山岩	残核	88.6	89.9	52.7	28.1	なし	SD	剥片	加工欠	HD		大形剥片転用の石核
中期中葉	B1	SB8	115	緑色片岩	磨製石斧	156.0	82	45.8	25.4	敲打・研磨	敲打・研磨	不明	不明	不明		基部欠損の後に再生途上で放棄。
中期中葉	B1	SB8	116	片岩	打製石斧	50.0	98.2	36.5	12.1	HD	HD・MF・摩耗	不明	不明	不明		両面に土ズレ痕
中期中葉	B1	SB8	117	安山岩	摩痕礫	未整理				なし	なし	なし	なし	なし		
中期中葉	B1	SB8	118	安山岩	摩痕礫	未整理				なし	なし	なし	なし	なし		
中期中葉	B1	SB8	119	花崗岩	台石	未整理				なし	なし	なし	なし	なし		
中期中葉	B1	SB8	106	ハリ質安山岩	断片	9.6				適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		ガジリで剥がれた剥片。
中期中葉末	B3	SB14	156	黒耀石	石鏃	0.6	18.1	12.0	4.0	S'P	S'P	不明	不明	不明	両脚欠損	
中期中葉末	B3	SB14	157	黒耀石	石核	14.9	23.0	37.2	34.0	なし	nHD	角礫	自然面	なし		
中期中葉末	B3	SB14	158	黒耀石	残核・剥片・裂片	17.8	適用外	適用外	適用外	適用外	HD	適用外	適用外	適用外		剥片剥離資料、原産地分析資料は未資料化剥片５点を含む。
中期中葉末	B3	SB14	159	赤珪岩	石鏃	0.9	19.1	15.5	4.1	S'P	S'P	剥片	不明	不明	先端と片脚欠損	
中期中葉末	B3	SB14	160	珪岩	石錐	1.4	21.9	11.4	5.5	S'P	S'P	剥片	不明	不明	基部摘み欠損	
中期中葉末	B3	SB14	161	珪岩	目的剥片	6.2	27.6	30.8	10.1	なし	なし	矩形剥片	線状	HvD		刃器の素材か？
中期中葉末	B3	SB14	162	珪岩	残核・剥片・裂片	34.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		石鏃生産の資料
中期中葉末	B3	SB14	163	下呂石	石鏃	0.8	23.6	14.2	3.0	S'P	S'P	剥片	不明	不明	完形優品	
中期中葉末	B3	SB14	164	下呂石	石錐	4.3	33.6	23.7	10.9	S'I	S'P	剥片	加工欠	不明	完形優品	
中期中葉末	B3	SB14	165	下呂石	刃器	9.3	38.8	23.5	10.3	なし	素刃・MF	縦長剥片	節理面	nHD		
中期中葉末	B3	SB14	166	下呂石	石鏃未製品	1.8	19.0	19.5	5.5	叩折・SP	なし	両極剥片	加工欠	HvD		
中期中葉末	B3	SB14	167	下呂石	刃器	17.7	48.6	36.3	11.8	HI	素刃・MF	縦長剥片	平坦	不明		
中期中葉末	B3	SB14	167	下呂石	剥片	3.6	33.4	16.7	4.9	なし	なし	縦長剥片	切子打面	S'D		背面に自然面
中期中葉末	B3	SB14	168	ハリ質安山岩	二次加工剥片	17.1	60.1	33.0	8.7	叩折	なし	横長剥片	加工欠	不明		剥離角135度
中期中葉末	B3	SB14	169	ハリ質安山岩	刃器	8.8	34.3	34.5	5.7	叩折・折取	素刃	縦長剥片	折取	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	170	ハリ質安山岩	刃器	26.7	62.5	52.0	8.8	叩折	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	171	ハリ質安山岩	刃器	44.8	89.4	44.9	9.3	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	172	ハリ質安山岩	刃器	102.6	65.2	87.5	26.1	なし	素刃・MF	横長剥片	切子打面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	173	ハリ質安山岩	刃器	57.6	78.1	58.3	10.8	叩折・HD	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明	完形優品	打面と末端辺折取
中期中葉末	B3	SB14	174	ハリ質安山岩	刃器	162.1	81.2	95.9	19.2	S'D	素刃・MF	横長剥片	平坦	S'D	完形優品	
中期中葉末	B3	SB14	175	ハリ質安山岩	刃器	38.3	36.8	83.5	10.5	叩折・HD	素刃・MF	横長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	176	ハリ質安山岩	刃器	222.0	91.1	91.5	29.9	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		裏面に着柄の摩耗痕顕著
中期中葉末	B3	SB14	177	ハリ質安山岩	刃器	176.0	93.8	64.6	26.9	HD	素刃	横長剥片	加工欠	HD	194と接合	
中期中葉末	B3	SB14	178	ハリ質安山岩	剥片	101.1	74.7	66.9	21.7	なし	なし	石核成形剥片	線状	CHD	194と同一母岩	
中期中葉末	B3	SB14	179	ハリ質安山岩	石錐	34.4	43.6	65.3	15.7	叩折	S'D/急角度・S'P	掻器	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	180	ハリ質安山岩	打製石斧未製品	74.8	99.2	41.8	23.4	HD	HD	縦長剥片	加工欠	HD		分厚い縦長剥片。打製石斧製作か。

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
中期中葉末	B3	SB14	181	ハリ質安山岩	刃器	30.3	59.8	52.7	15.3	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	不明		打面と側面を成形
中期中葉末	B3	SB14	182	ハリ質安山岩	加工剥片	31.5	40.8	56.9	15.5	叩折・HD	なし	不明	不明	不明		基辺・末端辺叩折
中期中葉末	B3	SB14	183	ハリ質安山岩	剥片	31.4	42.4	66.4	11.8	なし	なし	横長剥片	線状	HvD		背面の半分は自然面
中期中葉末	B3	SB14	184	ハリ質安山岩	刃器	72.0	35.4	53.2	12.9	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	185	ハリ質安山岩	刃器	83.3	90.5	47.5	14.8	なし	S'P	縦長剥片	平坦	HD		刃部加工は刃先の矯正
中期中葉末	B3	SB14	186	ハリ質安山岩	鋸歯縁削器	77.9	56.9	100.5	17.3	HD	HP/鋸歯	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	187	ハリ質安山岩	打製石斧	88.4	56.8	61.3	21.0	HD	欠損	縦長剥片	自然面	HD		基部に敲打痕
中期中葉末	B3	SB14	188	ハリ質安山岩	刃器	54.4	63.1	51.5	16.0	S'D／平坦・叩折	素刃・MF	横長剥片	平坦	S'D		打面をS'D／平坦で成形加工
中期中葉末	B3	SB14	189	ハリ質安山岩	刃器	23.6	48.0	84.0	17.9	叩折・HD	素刃	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	190	ハリ質安山岩	裂片	1.2	20.5	12.8	4.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	190	ハリ質安山岩	剥片	7.2	43.2	29.6	5.2	なし	なし	縦長剥片	平坦	S' D		
中期中葉末	B3	SB14	191	ハリ質安山岩	刃器	49.6	47.6	66.3	15.6	叩折	素刃・MF	縦長剥片	平坦	HD		背面の半分は自然面
中期中葉末	B3	SB14	192	ハリ質安山岩	尖頭削器	55.4	60.4	67.2	18.8	S'P	S'P	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	193	ハリ質安山岩	掻器	45.5	58.9	40.2	16.7	叩折・HD	S'D	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	194	ハリ質安山岩	目的剥片	184.0	82.7	102.6	24.1	なし	なし	横長剥片	自然面	HD	177と接合	
中期中葉末	B3	SB14	195	ハリ質安山岩	裂片	42.0	52.3	32.5	25.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	196	ハリ質安山岩	刃器	48.5	81.5	47.2	12.8	叩折	素刃・MF	横長剥片	切子打面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	197	ハリ質安山岩	刃器	207.3	99.8	78.6	28.5	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	198	ハリ質安山岩	刃器	26.4	51.0	37.6	13.3	叩折	S'P	不明	自然面	S'D		半割折れ
中期中葉末	B3	SB14	199	ハリ質安山岩	刃器	32.6	54.3	49.8	17.4	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	200	ハリ質安山岩	剥片	54.8	48.9	59.7	19.8	なし	なし	矩形剥片	切子打面	S'D		剥離角140度
中期中葉末	B3	SB14	201	ハリ質安山岩	掻器未製品	52.6	50.7	51.7	20.2	HD	HD	剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	202	ハリ質安山岩	刃器	64.4	52.1	58.3	24	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		基辺に着柄痕。
中期中葉末	B3	SB14	203	ハリ質安山岩	刃器	297.7	144.3	81.9	31.9	叩折	素刃	縦長剥片	自然面	S'D		裏面に装着の摩滅痕
中期中葉末	B3	SB14	204	ハリ質安山岩	二次加工剥片	14.9	53.7	43.9	7.2	HD	なし	縦長剥片	加工欠	不明		打面は加工欠。素材はS'D？
中期中葉末	B3	SB14	205	ハリ質安山岩	剥片	39.3	69.9	32.9	19.2	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		背面の半分は自然面
中期中葉末	B3	SB14	206	ハリ質安山岩	刃器	29.7	43.4	59.1	13.2	HD	素刃	横長剥片	部分加工欠	S'D		ポジ底面をもつ剥片
中期中葉末	B3	SB14	207	ハリ質安山岩	二次加工剥片	97.5	50.6	91.0	24.3	叩折	なし	横長剥片	自然面	CHD		刃器の未製品
中期中葉末	B3	SB14	208	ハリ質安山岩	刃器	49.1	67.9	43.7	20.8	叩折	素刃・MF	横長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	209	ハリ質安山岩	敲打刃器	74.9	56.5	96.4	17.4	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	210	ハリ質安山岩	二次加工剥片	8.8	33.8	37.6	8.2	叩折	素刃	矩形剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	211	ハリ質安山岩	刃器	38.8	53.5	46.1	16.4	叩折	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	212	ハリ質安山岩	加工剥片	1.6	17.1	27.4	5.4	なし	なし	横長剥片	折れ	S'D		背面に着柄痕
中期中葉末	B3	SB14	213	ハリ質安山岩	刃器	8.6	35.3	42.1	6.3	叩折	素刃	矩形剥片	加工欠	不明		素材技術はS'D?
中期中葉末	B3	SB14	214	ハリ質安山岩	加工剥片	3.5	21.0	27.2	9.5	なし	なし	横長剥片	切子打面	叩折		
中期中葉末	B3	SB14	215	ハリ質安山岩	剥片	3.0	21.9	36.8	4.6	なし	なし	横長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	216	ハリ質安山岩	剥片	8.4	31.5	23.9	18.7	なし	なし	縦長剥片	不整複剥離	HD		乱れた打面。石器の二次加工面か。
中期中葉末	B3	SB14	217	ハリ質安山岩	刃器	1.8	26.4	15.2	6.5	折取	素刃	縦長剥片	加工欠	(S'D)		
中期中葉末	B3	SB14	218	ハリ質安山岩	加工剥片	4.0	18.4	36.1	6.0	折取	なし	不明	加工欠	不明		打面と末端辺折取
中期中葉末	B3	SB14	219	ハリ質安山岩	剥片	2.7	27.5	16.2	6.5	なし	なし	縦長剥片	折れ	(S'D)		
中期中葉末	B3	SB14	220	ハリ質安山岩	剥片	1.7	14.4	12.9	4.8	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D	縦折剥片	底面付き剥片
中期中葉末	B3	SB14	221	ハリ質安山岩	剥片	7.8	39.0	46.2	6.6	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D	末端階段折れ	剥離角120度
中期中葉末	B3	SB14	222	ハリ質安山岩	刃器断片	6.9	29.2	27.1	9.9	折取	素刃・MF	不明	不明	(S'D)		
中期中葉末	B3	SB14	223	ハリ質安山岩	剥片	3.2	20.3	21.4	5.8	なし	なし	矩形剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	224	ハリ質安山岩	剥片	7.2	24.1	34.8	11.5	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	225	ハリ質安山岩	裂片	13.5	25.7	39.6	18.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	226	ハリ質安山岩	剥片	4.1	44.4	19.9	5.2	なし	なし	縦長剥片	折れ	(S'D)		
中期中葉末	B3	SB14	227	ハリ質安山岩	加工剥片	1.7	15.4	27.4	4.9	折取	なし	横長剥片	適用外	不明		
中期中葉末	B3	SB14	228	ハリ質安山岩	石錐	7.9	40.9	30.0	6.1	折取	S'P	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	229	ハリ質安山岩	裂片	17.9	28.2	19.1	7.6	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	230	ハリ質安山岩	剥片	2.1	26.8	14.7	6.0	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D	縦折剥片	
中期中葉末	B3	SB14	231	ハリ質安山岩	刃器	6.9	22.2	43.9	5.7	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	(S'D)		背面に底面有り。
中期中葉末	B3	SB14	232	ハリ質安山岩	剥片	8.5	46.2	23.4	11.4	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		剥離角130度
中期中葉末	B3	SB14	233	ハリ質安山岩	刃器断片	1.5	15.3	18.0	4.4	なし	素刃・MF	縦長剥片	折れ	(S'D)		
中期中葉末	B3	SB14	234	ハリ質安山岩	裂片	4.3	35.4	21.3	6.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		石刃状の素材剥片の両端折れた石器
中期中葉末	B3	SB14	235	ハリ質安山岩	刃器	5.7	26.3	36.4	7.8	叩折	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	不明		

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
中期中葉末	B3	SB14	236	ハリ質安山岩	裂片	4.5	36.6	23.1	5.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	237	ハリ質安山岩	剥片	18.7	38.2	52.1	11.2	なし	なし	横長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	238	ハリ質安山岩	加工剥片	5.4	19.6	28.8	8.6	叩折	なし	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	239	ハリ質安山岩	刃器	5.3	20.4	44.7	9.5	叩折	素刃	横長剥片	加工欠	不明		素材技術はS'D?
中期中葉末	B3	SB14	240	ハリ質安山岩	加工剥片	2.4	16.2	30.5	5.8	なし	なし	横長剥片	複剥離	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	241	ハリ質安山岩	剥片	13.4	42.3	33.1	10.0	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	242	ハリ質安山岩	剥片	9.4	50.0	40.5	7.6	なし	なし	縦長剥片	折れ	不明		素材技術はS'D?
中期中葉末	B3	SB14	243	ハリ質安山岩	剥片	5.5	33.5	36.3	6.7	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	244	ハリ質安山岩	刃器	5.5	42.1	38.2	3.6	叩折	素刃	縦長剥片	加工欠	不明		素材技術はS'D?
中期中葉末	B3	SB14	245	ハリ質安山岩	剥片	4.3	37.3	28.3	4.6	なし	なし	縦長剥片	折れ	不明		剥離技術はS'D?
中期中葉末	B3	SB14	246	ハリ質安山岩	刃器	70.9	67.1	62	21	叩折	HD	不明	加工欠	不明		グリッドの刃器と接合
中期中葉末	B3	SB14	247	ハリ質安山岩	剥片	3.1	30.2	19.4	8.0	なし	なし	縦長剥片	切子打面	S'D		剥離角115度
中期中葉末	B3	SB14	248	ハリ質安山岩	剥片	4.0	27.8	35.8	6.0	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D		剥離角125度
中期中葉末	B3	SB14	249	ハリ質安山岩	剥片	47.3	61.7	47.6	10.5	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		剥離角120度。縦折。
中期中葉末	B3	SB14	250	ハリ質安山岩	刃器	26.4	49.9	42.8	14.1	叩折	S'D／平坦	矩形剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	251	ハリ質安山岩	掻器	47.8	41.1	54.5	19.1	なし	S'D／急角度	矩形剥片	自然面	HD		やや鋸歯縁の掻器。未使用。
中期中葉末	B3	SB14	252	ハリ質安山岩	目的剥片	15.5	26.8	47.7	17.3	なし	なし	横長剥片	切子打面	S'D		鋭い角度の底面をもつ剥片
中期中葉末	B3	SB14	253	ハリ質安山岩	二次加工剥片	9.2	54.0	21.2	7.9	叩折	欠損	不明	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	254	ハリ質安山岩	刃器	14.3	37	44.1	19.9	叩折・HD	HP	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	255	ハリ質安山岩	目的剥片	42.7	55.4	49.4	24.4	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		刃器の素材剥片
中期中葉末	B3	SB14	256	ハリ質安山岩	刃器	12.1	25.0	73.0	5.9	叩折	素刃	横長剥片	加工欠	不明		ポジ底面をもつ剥片
中期中葉末	B3	SB14	257	ハリ質安山岩	刃器	76.2	69.6	59.5	18.4	HD	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	258	ハリ質安山岩	鋸歯縁削器	43.7	49.8	80.7	15.9	叩折	HP／鋸歯	縦長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	259	ハリ質安山岩	剥片	23.4	27.9	59.4	15.7	なし	なし	礫面剥片	節理面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	260	ハリ質安山岩	剥片	18.2	50.2	37.5	10.9	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	261	ハリ質安山岩	刃器	61.5	94.2	39.4	16.6	叩折	素刃	横長剥片	自然面	HD		素材打面を除去
中期中葉末	B3	SB14	262	ハリ質安山岩	刃器	56.1	60.1	87.6	14.2	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	263	ハリ質安山岩	刃器	62.9	58.2	47.2	19.4	叩折	素刃・MF	不明	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	264	ハリ質安山岩	刃器	24.4	39.2	42.0	12.7	叩折	素刃・MF	不明	不明	不明		
中期中葉末	B3	SB14	265	ハリ質安山岩	剥片	20.0	71.8	39.6	6.6	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		
中期中葉末	B3	SB14	266	ハリ質安山岩	刃器	20.3	34.7	47.5	13.0	叩折・HD	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		底面付き剥片
中期中葉末	B3	SB14	267	ハリ質安山岩	裂片	10.9	28.0	43.7	8.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		背面に自然面
中期中葉末	B3	SB14	268	ハリ質安山岩	加工剥片	20.7	45.3	44.8	11.3	叩折	なし	不明	加工欠	不明		四方に叩折痕
中期中葉末	B3	SB14	269	ハリ質安山岩	刃器	16.7	38.1	29.5	15.7	HD	素刃	縦長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	270	ハリ質安山岩	刃器	27.4	60.5	31.5	16.6	叩折・HD	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		ポジポジ剥片
中期中葉末	B3	SB14	271	ハリ質安山岩	刃器	6.0	37.1	19.9	7.7	折取	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	(S'D)		側辺に節理面
中期中葉末	B3	SB14	272	ハリ質安山岩	刃器	37.4	46.7	51.7	17.4	叩折・HD	素刃・MF	不明	平坦	(S'D)		刃部の一部欠損
中期中葉末	B3	SB14	273	ハリ質安山岩	刃器	36.7	55.7	65.2	10.0	叩折	素刃・MF	横長剥片	切子打面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	274	ハリ質安山岩	目的剥片	39.2	61.7	61.9	17.0	なし	なし	矩形剥片	自然面	CHD		
中期中葉末	B3	SB14	275	ハリ質安山岩	削器	50.9	50.1	63.9	15.1	叩折・HD・敲打	S'D	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	276	ハリ質安山岩	刃器	36.8	52	44.7	19.9	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	277	ハリ質安山岩	裂片	14.8	29.8	56.4	12.7	適用外	適用外	適用外	適用外	CHD		剥片剥離作業の剥片
中期中葉末	B3	SB14	278	ハリ質安山岩	剥片	36.8	60.2	44.7	19.6	なし	なし	縦長剥片	切子打面	S'D		剥離角140度
中期中葉末	B3	SB14	279	ハリ質安山岩	掻器	71.4	56.4	71.0	15.5	叩折・HD	nHD／急角度	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	280	ハリ質安山岩	剥片	6.6	50.4	27.8	6.1	なし	なし	縦長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	281	ハリ質安山岩	刃器	18.5	31.2	60.9	10.3	叩折	素刃	横長剥片	加工欠	不明		
中期中葉末	B3	SB14	282	ハリ質安山岩	刃器	25.8	72.4	39.3	9.6	なし	素刃・MF	縦長剥片	線状	CHD		
中期中葉末	B3	SB14	283	ハリ質安山岩	刃器	30.3	78.2	37.9	11.2	叩折	素刃	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SB14	284	ハリ質安山岩	刃器	30.4	37.6	36.2	20.5	叩折・HD	S'D／平坦	矩形剥片	平坦	HD		背面に自然面。掻器未製品か。
中期中葉末	B3	SB14	285	ハリ質安山岩	刃器	18.8	55.1	31.9	9.1	叩折・HD	S'D	横長剥片	加工欠	不明		掻器未製品か
中期中葉末	B3	SB14	286	ハリ質安山岩	裂片	8.7	53.3	27.8	8.5	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	287	ハリ質安山岩	刃器	56.3	92.5	34.9	19.3	HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	(HD)		縦折の分厚い縦長剥片
中期中葉末	B3	SB14	288	ハリ質安山岩	刃器	28.2	63.5	53.4	14.3	叩折	素刃	縦長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	289	ハリ質安山岩	目的剥片	76.2	83.7	51.0	21.9	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		
中期中葉末	B3	SB14	290	ハリ質安山岩	剥片	7.3	44.2	29.0	9.8	なし	なし	縦長剥片	切子打面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	291	ハリ質安山岩	刃器	27.6	34.0	62.8	12.7	叩折	S'P	横長剥片	加工欠	不明		

時　期	段階	遺構名	通番	石　材	器　種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備　考	所　見
中期中葉末	B3	SB14	292	ハリ質安山岩	鋸歯縁削器	15.9	40.7	50.5	8.6	なし	HP／鋸歯	横長剥片	線状	HD		
中期中葉末	B3	SB14	293	ハリ質安山岩	刃器	23.2	33.3	78.4	9.9	なし	素刃・MF	横長剥片	切子打面	S'D		底面付き剥片
中期中葉末	B3	SB14	294	ハリ質安山岩	刃器	56.4	58.1	63.0	15.3	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SB14	295	ハリ質安山岩	刃器	62.1	63.5	61.3	14.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SB14	296	結晶片岩	剥片	39.2	85	48.3	11.1	なし	なし	縦長剥片	線状	HD		打製石斧を剥離した剥片
中期中葉末	B3	SB14	297	結晶片岩	剥片	48.8	104.4	50	8.9	なし	なし	縦長剥片	線状	HD		打製石斧を剥離した剥片
中期中葉末	B3	SB14	298	片岩	打製石斧	67.9	122.8	46.7	12.3	HD	MF	不明	不明	不明		石材は扁平に割れていく片岩
中期中葉末	B3	SB14	299	片岩	加工剥片	36.7	85.6	34.1	10.9	なし	なし	横長剥片	線状	HD		打製石斧を剥離した剥片
中期中葉末	B3	SB14	300	片岩	削器	45.0	109.4	33.9	9.7	HD	HD・摩耗	打製石斧剥片	不明	不明		石材は扁平に割れていく片岩
中期中葉末	B3	SB14	301	結晶片岩	打製石斧	57.2	73.7	43.4	15.4	HD	HD・MF	不明	不明	不明		
中期中葉末	B3	SB14	302	ホルンフェルス	打製石斧	216.5	107.4	61.7	29.4	HD	HD・MF	不明	不明	不明		大形打製石斧の断片
中期中葉末	B3	SB14	303	ホルンフェルス	打製石斧	457.1	148.3	80.4	32.4	HD	HD・MF	不明	不明	不明		基部は叩折で再加工されている。
中期中葉末	B3	SB14	304	片岩	刃器	25.2	49.3	53.9	11.2	HD	HD・MF	打製石斧剥片	不明	不明	刃部断片	
中期中葉末	B3	SB14	305	片岩	加工剥片	16.1	57.1	28.2	4.4	適用外	適用外	打製石斧	適用外	適用外	適用外	計測値は最大のもの
中期中葉末	B3	SB14	306	安山岩	凹石	323.8	84.6	81.7	48.5	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外	1／3欠損	309と接合
中期中葉末	B3	SB14	307	安山岩	凹石	234.2	82.9	67.5	48.0	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	308	安山岩	凹石	233.9	65.7	69.3	48.6	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	309	安山岩	凹石	160.5	82.1	45.9	47.9	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外	2／3欠損	306と接合
中期中葉末	B3	SB14	310	安山岩	凹・敲・磨石	933.0	124.6	83.3	57.0	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外		被熱資料
中期中葉末	B3	SB14	311	安山岩	磨石	327.3	100.7	68.9	40.1	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外	1／3欠損	被熱資料
中期中葉末	B3	SB14	312	安山岩	磨石	1126.5	110.6	113.6	65.5	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	313	未整理	磨石	未整理										
中期中葉末	B3	SB14	314	流紋岩	土器混和材？	416.4	98.7	69.3	54.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	
中期中葉末	B3	SB14	315-1	安山岩	磨石	704.7	128.0	71.5	58.7	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	315-2	安山岩	石皿	3400.0	205.4	171.2	61.9	敲打	敲打・摩耗	楕円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	316	安山岩	台石	1000.0	144.9	140.9	56.0	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SB14	317	安山岩	台石	4600.0	196.9	187.7	73.5	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外		
中期中葉	B1	SB22	120	黒耀石	削器	3.6	25.9	21.1	7.8	SP	SP	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB22	121	珪岩	剥片	3.8	21.9	28.1	8.0	なし	なし	矩形剥片	折れ	HD		
中期中葉	B1	SB22	122	珪岩	剥片	37.6	51.6	40.4	18	なし	なし	矩形剥片	節理面	HD		分厚い中形剥片
中期中葉	B1	SB22	123	珪岩	剥片	6.7	21.8	51.3	6.6	なし	なし	横長剥片	節理面	HD		背面は節理面
中期中葉	B1	SB22	124	珪岩	刃器	7.3	37.8	29.4	7.3	叩折	なし	剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB22	125	珪岩	剥片	2.8	19.2	18.1	8.5	なし	なし	矩形剥片	自然面	HD		直接打撃で吹っ飛んだ小剥片
中期中葉	B1	SB22	126	ハリ質安山岩	刃器	104.7	94.6	71.3	20.7	叩折	なし	横長剥片	不明	HD		打面除去
中期中葉	B1	SB22	127	ハリ質安山岩	刃器	14.0	47.8	45.7	8.5	叩折	なし	矩形剥片	平坦	HD		石核は剥片
中期中葉	B1	SB22	128	ハリ質安山岩	刃器	97.2	63.0	98.8	15.5	HD	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉	B1	SB22	129	ハリ質安山岩	刃器	17.6	56.0	38.6	10.6	なし	素刃・MF	横長剥片	折れ	HD		強い力で剥落した素材
中期中葉	B1	SB22	130	ハリ質安山岩	刃器	32.2	47.5	51.1	15.2	叩折	素刃	縦長剥片	加工欠	HD		打面と側辺を叩折。未使用。
中期中葉	B1	SB22	131	ハリ質安山岩	縦形石匙	30.0	79	34.3	17.3	叩折	素刃	縦長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB22	132	ハリ質安山岩	削器	47.4	72.0	69.3	12.2	なし	S'P・欠損	矩形剥片	自然面	HD		刃部の大部分は折れ。
中期中葉	B1	SB22	133	ハリ質安山岩	刃器	8.2	32.5	31.0	11.7	叩折	素刃	加工剥片	折れ	HD		加工剥片を用いた刃器ブランク。
中期中葉	B1	SB22	134	ハリ質安山岩	刃器	2.0	37.6	14.5	3.9	なし	素刃	縦長剥片	折れ	HD		石刃様の縦長剥片。
中期中葉	B1	SB22	135	安山岩	石皿	3253.0	210.0	163.6	53.6	敲打	なし	楕円礫	なし	なし	完形	
中期中葉	B1	SB22	136	玄武岩	台石	2964.5	307.3	99.8	57.5	なし	摩耗	長亜円礫	なし	なし		
中期中葉	B1	SB23	137	黒耀石	石錐	2.0	37.1	11.1	8.5	S'P	S'P	剥片	不明	不明		
中期中葉	B1	SB23	138	ハリ質安山岩	刃器	14.3	32.3	64.7	6.7	なし	素刃・MF	横長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB23	139	ハリ質安山岩	掻器	364.8	95.5	82.6	29.1	なし	HD／急角度	縦長剥片	自然面	HvD		
中期中葉	B1	SB23	140	ハリ質安山岩	加工剥片	8.3	35.6	21.3	10.7	なし	なし	横長剥片	線状	叩折		
中期中葉	B1	SB23	141	ハリ質安山岩	刃器	21.4	39.9	42.7	12.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB23	142	ハリ質安山岩	残核	149.0	76.7	61.7	30.0	HD	HD	礫片	不明	CHD		
中期中葉	B1	SB23	143	ハリ質安山岩	敲打刃器	172.0	73.8	75.2	21.9	なし	HD	矩形剥片	自然面	HvD		
中期中葉	B1	SB23	144	ハリ質安山岩	加工剥片	2.6	27.1	23.4	4.5	なし	なし	縦長剥片	折れ	HD		
中期中葉	B1	SB23	145	ハリ質安山岩	加工剥片	79.2	50.3	73.8	24.6	なし	なし	横長剥片	平坦	叩折		背面は自然
中期中葉	B1	SB23	146	ハリ質安山岩	目的剥片	27.6	47.9	59.3	9.3	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB23	147	ハリ質安山岩	刃器	80.8	65.5	67.3	17.9	なし	HD	矩形剥片	自然面	HvD		
中期中葉	B1	SB23	148	ハリ質安山岩	石錐	26.3	68.5	37.7	13.0	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB23	149	ハリ質安山岩	刃器	17.7	33.9	46.6	14.3	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
中期中葉	B1	SB23	150	ハリ質安山岩	刃器	30.9	38.3	62.4	11.8	叩折	素刃・MF	横長剥片	平坦	HD		
中期中葉	B1	SB23	151	ハリ質安山岩	刃器	75.6	98.9	42.2	17.1	叩折・HD	素刃・MF	横長剥片	加工欠	HD		
中期中葉	B1	SB23	152	ハリ質安山岩	削器未製品	74.4	99.1	44.3	13.7	叩折	nHD	縦長剥片	加工欠	HD		側辺に自然面
中期中葉	B1	SB23	153	玄武岩	磨痕礫	2042.7	154.1	139.5	74.1	なし	なし	円礫	なし	なし		被熱資料
中期中葉	B1	SB23	154	安山岩	磨痕礫	未整理										
中期中葉	B1	SB23	155	花崗岩	台石	未整理										
中期	B4	SK157	332	ホルンフェルス	打製石斧	68.6	81.1	47.9	14.2	HD	欠損	不明	不明	不明		
中期中～後葉	B2	SK343	337	黒耀石	石鏃未製品	2.4	21.1	19.3	8.3	S'P	S'P	横長剥片	加工欠	不明		
中期中～後葉	B2	SK343	338	ハリ質安山岩	二次加工剥片	25.8	37.0	53.4	14.1	HD	刃部不明	横長剥片	切子打面	HD		
中期中～後葉	B2	SK343	339	片岩	打製石斧	67.0	100.7	40.8	12.3	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK347	340	ハリ質安山岩	石匙	46.9	53.5	61.3	19.5	HD	nHD	縦長剥片	加工欠	HD		
中期中～後葉	B2	ST4 Pit 2	341	安山岩	磨痕礫	未整理										石皿に擬制された可能性あり。
中期中～後葉	B2	ST4 Pit 2	342	安山岩	石皿	未整理									半欠	重弧状の線刻あり。
中期中～後葉	B2	SK431	343	安山岩	礫	未整理										石皿に擬制された可能性あり。
中期中～後葉	B2	SK465	345	ハリ質安山岩	目的剥片	40.2	36.2	66.9	16.4	なし	なし	横長剥片	切子打面	HD		
中期中～後葉	B2	SK465	346	溶飛流紋岩	磨痕礫	未整理									敲打による剥離	石皿に擬制された可能性あり。
		SK465	676	泥岩	打製石斧	55.6	82.5	62.8	7.7	HD	MF・摩耗	横長剥片	加工欠	HvD	削器素材剥片か	基部欠損
縄文時期不明	F	SK491	347	珪岩	剥片	7.2	36.7	24.8	8.0	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中～後葉	B2	SK527	348	緑色片岩	打製石斧	103.3	133.4	49.2	15.3	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK527	349	凝灰岩	打製石斧	55.3	105.4	46.2	10.8	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK527	350	凝灰岩	打製石斧	135.3	138.1	42.5	17.1	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK527	351	片岩	打製石斧	83.6	119.5	48.3	15.1	HD	HD・MF・摩耗	欠損	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK527	352	片岩	打製石斧	68.2	124.9	45.7	11	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD		
中期中～後葉	B2	SK527	353	片岩	打製石斧	107.7	118.4	52.2	16	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	CHD	刃部は再生されている。	
縄文平安不明	F	SK55	323	安山岩	磨痕礫	709.6	140.0	90.0	46.4	なし	なし	円礫	なし	なし	大きな断片	
中期中～後葉	B2	ST2	322	硬質砂岩	打製石斧	190.9	149.0	65.5	19.9	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		
中期中葉末	B3	SQ1	354	黒耀石	剥片	2.1	18.8	19.6	5.7	なし	なし	矩形剥片	線状	HvD		
中期中葉末	B3	SQ1	355	珪岩	縦形石匙	12.0	54.2	28.0	8.1	S'P	S'P	縦長剥片	加工欠	不明	完形優品	
中期中葉末	B3	SQ1	356	珪岩	両極石器	6.3	24.8	32.2	9.8	HvD	なし	剥片	不明	不明		
中期中葉末	B3	SQ1	357	珪岩	極小石錐	2.3	15.2	13.9	3.5	nHP	nHP	裂片	適用外	適用外		
中期中葉末	B3	SQ1	358	下呂石	石鏃	0.7	21.1	17.6	2.7	SP	SP	不明	不明	不明		
中期中葉末	B3	SQ1	359	ハリ質安山岩	二次加工剥片	58.3	55.3	59.7	18.7	叩折	なし	矩形剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SQ1	360	ハリ質安山岩	目的剥片	29.0	58.5	49.8	10.3	なし	なし	縦長剥片	自然面	HvD		
中期中葉末	B3	SQ1	361	ハリ質安山岩	刃器	55.7	79.0	45.9	18.0	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		
中期中葉末	B3	SQ1	362	ハリ質安山岩	刃器	25.5	59.7	39.7	12.0	なし	素刃・MF	縦長剥片	線状	HvD		
中期中葉末	B3	SQ1	363	ハリ質安山岩	刃器	36.6	76.7	46.8	12.2	なし	素刃・MF	縦長剥片	線状	HvD		
中期中葉末	B3	SQ1	364	ハリ質安山岩	目的剥片	22.3	72.3	42.7	9.2	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
中期中葉末	B3	SQ1	365	ハリ質安山岩	刃器	90.5	90.1	60.5	15.9	なし	素刃・MF	縦長剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SQ1	366	ハリ質安山岩	目的剥片	11.2	39.4	35.0	9.0	なし	なし	矩形剥片	自然面	S'D		
中期中葉末	B3	SQ1	367	ハリ質安山岩	目的剥片	14.2	40.1	44.3	8.7	なし	なし	横長剥片	切子打面	HD		
中期中葉末	B3	SQ1	368	ハリ質安山岩	目的剥片	16.0	53.4	43.1	7.7	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		
中期中葉末	B3	SQ1	369	粘板岩	打製石斧	90.5	90.9	48.6	17.6	HD	欠損	不明	不明	不明		
中期中葉末	B3	SQ1	370	片岩	打製石斧	25.5	63.8	33.4	9.2	HD	欠損	不明	不明	不明		
中期中葉末	B3	SQ1	371	凝灰岩	打製石斧	36.9	102.7	40.1	6.7	HD	HD・MF	不明	不明	不明	刃部部分破損	使い込まれて断片化した打製石斧。
中期中葉末	B3	SQ1	372	片岩	打製石斧	62.0	88.7	47.3	11.1	HD	HD・MF	不明	不明	不明	完形	
中期中葉末	B3	SQ1	357	珪岩	石錐	11.0	20.6	15.7	5.2	nHP	nHP	両極石器	不明	HvD		
縄文後期	C	SK340	335	ハリ質安山岩	二次加工剥片	42.8	56.8	47.6	18.6	HD	刃部不明	剥片	加工欠	HD	未製品	
縄文後期	C	SK340	336	粘板岩	打製石斧	144.0	119.1	52.9	19.3	HD	HD・摩耗	扁平礫	なし	なし	完形優品	
縄文時期不明	F	SB6	318	ハリ質安山岩	刃器	15.9	49.1	46.9	6.3	なし	素刃・MF	縦長剥片	折れ	CHD		
縄文時期不明	F	SB6	319	ハリ質安山岩	二次加工剥片	76.0	54.4	76.5	21.3	HD	刃部不明	横長剥片	加工欠	CHD		
縄文時期不明	F	SB6	320	ハリ質安山岩	目的剥片	85.2	76.4	86.0	14.4	なし	なし	矩形剥片	折れ	CHD		背面に大きな自然面
縄文時期不明	F	SB6	321	安山岩	磨石	1170.5	131.0	119.2	53.1	なし	なし	円礫	なし	なし		
平安	F	SK195	333	未整理	打製石斧	未整理										
		Ⅰ区a	690	黒耀石	剥片	1.7	17.4	26.1	4.0	なし	なし	横長剥片	調整	HD		不要
		Ⅰ区a	690	黒耀石	両極石器	7.9	31.6	37.4	8.1	なし	素刃	矩形剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区a	691	ハリ質安山岩	刃器	39.2	40.5	66.3	14.0	なし	素刃・MF	横長剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区a	692	ハリ質安山岩	刃器	135.0	130.0	60.5	26.0	HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	HD		背面に自然面

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		Ⅰ区a	693	ハリ質安山岩	刃器	85.8	77.5	45.0	20.0	叩折	素刃・MF	横長剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区a	694	ハリ質安山岩	剥片	77.2	53.5	67.0	22.0	なし	なし	矩形剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区a	695	水晶	礫断片	0.9	14.4	8.2	7.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		Ⅰ区a	696	ハリ質安山岩	削器	36.6	42.5	76.6	13.2	HD	素刃・MF	礫面剥片	線状	加工欠		
		Ⅰ区a	697	安山岩	打製石斧	317.8	105.0	94.0	27.2	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		背面に自然面
		Ⅰ区a	698	安山岩	打製石斧	400.5	148.0	87.5	27.8	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		完形、背面に自然面、晩期に属する可能性。
		Ⅰ区a	699	安山岩	打製石斧	300.9	115.5	96.2	20.8	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		背面に自然面
		Ⅰ区a	700	安山岩	打製石斧	200.2	120.0	68.8	18.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		背面に自然面、刃部欠損後再加工
		Ⅰ区a	701	安山岩	打製石斧	207.3	82.8	72.7	22.2	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		背面に自然面・基部欠損
		Ⅰ区a	702	安山岩	打製石斧	326.0	116.0	86.0	31.5	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		完形、背面に自然面、晩期に属する可能性あり。
		Ⅰ区a	703	安山岩	打製石斧	225.7	129.0	78.0	26.0	HD	欠損	不明	不明	HD		刃部欠損
		Ⅰ区a	704	安山岩	打製石斧	73.2	62.5	67.0	15.4	HD	不明	不明	不明	不明		断片
		Ⅰ区a	705	ハリ質安山岩	剥片	45.1	60.0	58.8	12.8	HD	不明	矩形剥片	線状	不明		打製石斧加工剥片
		Ⅰ区a	706	安山岩	打製石斧	52.3	78.0	48.0	10.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		完形
		Ⅰ区a	707	片岩	打製石斧	147.7	91.8	60.0	23.4	HD	欠損	不明	不明	HD		刃部欠損
		Ⅰ区a	708	片岩	打製石斧	94.9	130.0	37.0	17.5	HD	欠損	横長剥片	不明	HD		
		Ⅰ区a	709	泥岩	打製石斧	14.6	47.0	37.3	8.0	HD	不明	横長剥片	不明	不明		断片
		Ⅰ区a	710	泥岩	打製石斧	66.8	95.0	41.5	14.5	HD	欠損	不明	不明	HD		着柄による摩耗顕著
		Ⅰ区a	711	泥岩	打製石斧	46.0	91.6	45.0	9.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	HD		
		Ⅰ区a	712	片岩	剥片	13.8	35.0	54.0	7.0	なし	なし	横長剥片	線状	HD		打製石斧加工剥片
		Ⅰ区a	713	片岩	剥片	9.0	50.0	28.0	5.7	なし	なし	横長剥片	線状	HD		打製石斧加工剥片
		Ⅰ区a	714	片岩	剥片	24.9	76.7	35.0	8.0	なし	なし	横長剥片	線状	HD		打製石斧加工剥片
		Ⅰ区a	715	泥岩	打製石斧	158.5	114.0	75.0	12.5	HD	欠損	横長剥片	不明	HD		剥片と同一石材
		Ⅰ区a	716	泥岩	打製石斧	39.0	72.4	41.2	9.4	不明	不明	不明	不明	不明		風化顕著で剥離面が不明瞭。
		Ⅰ区b	717	黒耀石	両極石器・剥片	5.5	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		Ⅰ区b	718	珪岩	剥片	23.3	70.3	24.8	17.3	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		
		Ⅰ区b	719	下呂石	両極石器	7.2	26.5	24.3	10.5	HvD	なし	不明	不明	不明		
		Ⅰ区b	720	ハリ質安山岩	刃器	18.7	43.5	53.4	15.0	叩折	素刃・MF	横長剥片	平坦	S'D		
		Ⅰ区b	721	ハリ質安山岩	石核断片	27.1	32.6	53.6	15.2	HD	HD	剥片	平坦	不明		
		Ⅰ区b	722	ハリ質安山岩	二次加工剥片	27.9	63.5	34.9	14.5	叩折	刃部不明	縦長剥片	平坦	不明		
		Ⅰ区b	723	ハリ質安山岩	二次加工剥片	88.9	84.2	56.0	20.0	HD	刃部不明	縦長剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区b	724	ハリ質安山岩	石錐	15.5	51.6	35.9	9.6	S'D	S'P	横長剥片	加工欠	不明		
		Ⅰ区b	725	片岩	打製石斧	118.3	120.5	56.0	13.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		完形
		Ⅰ区b	726	片岩	打製石斧	76.5	106.5	43.3	16.0	HD	MF	縦長剥片	不明	不明		完形
		Ⅰ区b	727	泥岩	打製石斧	60.9	104.5	38.0	16.5	HD	MF	横長剥片	不明	不明		完形
		Ⅰ区c	728	黒耀石	小角礫	7.9	19.9	22.4	12.9	HvD	なし	角礫	平坦	なし		両極石器の素材
		Ⅰ区c	728	黒耀石	剥片	9.6	31.8	30.1	13	なし	なし	矩形剥片	平坦	HD		
		Ⅰ区c	729	安山岩	打製石斧	398.0	118.0	88.0	32.5	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		背面に自然面、基部欠損、晩期に属する可能性あり。
		Ⅰ区c	730	安山岩	打製石斧	82.0	81.7	56.8	13.5	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		基部断片
		Ⅰ区c	731	片岩	打製石斧	132.3	128.5	52.6	17.0	HD	MF	剥片	不明	不明		風化顕著
		Ⅰ区c	732	ハリ質安山岩	削器	127.5	57.0	124.0	20.5	なし	HP	横長剥片	切子打面	HD		
		Ⅰ区c	733	安山岩	磨石	797.8	110.5	95.6	59.5	適用外	適用外	楕円礫	適用外	適用外		風化激しいが主面部に磨面
		Ⅰ区d	734	黒耀石	両極剥片	0.8	20.5	10.1	4.1	HvD	なし	不明	不明	不明		
		Ⅰ区d	735	ハリ質安山岩	剥片	244.6	69.5	96.6	30.6	なし	なし	横長剥片	切子打面	CHD		
		Ⅰ区d	736	ハリ質安山岩	残核	93.4	79.8	61.4	24.0	HD	HD	剥片	自然面	HD		
		Ⅰ区d	737	安山岩	掻器	95.8	69.8	80.3	18.8	S'D	S'D	矩形剥片	加工欠	不明		
		Ⅰ区d	738	片岩	打製石斧	73.8	80.4	43.5	17.8	HD	MF	剥片	不明	不明		打製石斧の断片を再利用、風化顕著
		Ⅰ区d	739	泥岩	打製石斧	61.8	107.5	36.4	14.2	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形、背面に自然面、刃部正面側に摩耗顕著
		Ⅰ区e	740	黒耀石	裂片	1.8	24.6	16.0	5.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		Ⅰ区e	741	珪岩	両極石器	3.6	26.4	15.0	8.6	HvD	なし	不明	不明	不明		
		Ⅰ区e	742	珪岩	刃器	9.2	46.7	35.0	7.7	なし	素刃・MF	横長剥片	節理面	S'D		
		Ⅰ区e	743	珪岩	刃器	4.0	32.3	23.0	4.9	HP／刃潰し	素刃	矩形剥片	節理面	S'D		
		Ⅰ区e	744	泥岩	打製石斧	99.5	107.5	53.3	16.3	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側に摩耗顕著
		Ⅰ区g	745	黒耀石	両極石器	2.8	23.8	18.3	10.8	HvD	なし	剥片	不明	不明		
		Ⅰ区g	746	珪岩	剥片	1.6	14.9	24.2	4.5	なし	なし	横長剥片	平坦	S'I		
		Ⅰ区g	747	片岩	打製石斧	24.0	54.5	43.0	7.8	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片
		Ⅱ区	748	ハリ質安山岩	石核素材	1113.6	153.9	149.7	43.6	なし	なし	大形礫端片	自然面	HvD		

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		Ⅲ区	750	片岩	打製石斧	78.8	102.0	43.0	16.3	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		
		Ⅲ区a	749	流紋岩	打製石斧	53.1	65.3	46.0	13.3	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		搬入品？
		Q18・19	381	ハリ質安山岩	削器	184.7	95.1	72.5	29.5	なし	HD	縦長剥片	平坦	HD		
		Q18・19	382	安山岩	打製石斧	358.0	170.0	68.1	37.0	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		背面に自然面、晩期に属する可能性あり。
		Q18・19	383	流紋岩	打製石斧	233.0	94.0	87.0	25.6	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		刃部断片、晩期に属する可能性あり
		Q18・19	384	安山岩	打製石斧	158.2	95.6	74.0	20.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		基部断片、晩期に属する可能性あり。
		Q18・19	385	安山岩	打製石斧	67.0	81.5	57.0	1.1	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		基部欠損、晩期に属する可能性あり
		Q18・19	386	片岩	打製石斧	137.0	115.3	61.5	1.6	HD	MF	縦長剥片	不明	不明		基部欠損
		Q18・19	387	泥岩	打製石斧	30.1	67.0	50.0	6.2	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		Q18・19	388	片岩	打製石斧	172.8	106.0	65.5	18.0	HD	HD・MF	縦長剥片	不明	不明		基部欠損
		Q18・19	389	片岩	打製石斧	77.6	93.7	50.2	18.2	HD	MF	剥片	不明	不明		刃部断片
		Q18・19	390	片岩	打製石斧	34.1	67.0	46.2	9.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		Q18・19	391	片岩	打製石斧	27.9	73.4	41.0	7.4	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		基部欠損、打製石斧の断片を再加工している。
		Q18・19	392	片岩	打製石斧	60.2	97.4	40.4	12.0	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側に摩耗顕著
		Q18・19	393	ホルンフェルス	打製石斧	79.0	88.7	53.2	13.0	HD	MF	剥片	不明	不明		山梨県の勝坂遺跡で多用される石材である。
		Q18・19	394	泥岩	打製石斧	99.1	122.5	41.7	15.5	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		完形
		R8	395	片岩	打製石斧	101.5	101.0	47.0	16.0	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		刃部正面側摩耗顕著、基部欠損
		R8	396	片岩	打製石斧	94.4	108.5	52.4	14.7	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部の潰れ顕著
		S24	399	珪岩	剥片	5.1	27.2	26.1	7.7	なし	なし	縦長剥片	平坦	不明		
		S8	397	ハリ質安山岩	二次加工剥片	150.7	79.4	66.1	25.0	HD	刃部不明	礫ブロック	不明	不明		
		S9	398	安山岩	打製石斧	238.6	95.0	69.4	27.6	HD	欠損	剥片	不明	不明		晩期に属する可能性あり。
		T24	767	黒耀石	剥片	1.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U14	400	黒耀石	石錐	5.2	29.5	18.8	10.2	nHD	nHD	不明	不明	不明		
		U14	401	ハリ質安山岩	石核	165.9	102.7	83.1	15.6	なし	HD	大形剥片	欠損	CHD		主要剥離面が作業面
		U15	402	ハリ質安山岩	残核	376.7	78.8	83.5	46.3	なし	HD	不明	平坦	不明		
		U19	403	ハリ質安山岩	剥片	23.6	40.5	39.1	13.7	なし	なし	矩形剥片	平坦	S'D		
		U19	404	ハリ質安山岩	裂片	6.0	24.8	37.4	6.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U19	405	泥岩	打製石斧	22.8	39.2	53.7	10.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片、刃部正面側摩耗顕著
		U20	406	未整理	礫	未整理										
		U21	407	黒耀石	裂片	4.5	29.4	17.8	13.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U21	408	ハリ質安山岩	剥片	32.6	62.9	48.1	10.8	なし	なし	横長剥片	折れ	不明		
		U21	409	ハリ質安山岩	剥片	8.7	25.9	55.0	7.1	なし	なし	横長剥片	折れ	不明		
		U21	410	ハリ質安山岩	二次加工剥片	35.9	38.3	50.1	13.3	叩折	刃部不明	横長剥片	加工欠	不明		
		U21	411	片岩	打製石斧	42.7	57.5	57.0	9.5	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部正面側摩耗顕著
		U21	412	片岩	打製石斧	8.2	54.5	26.0	5.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		小形打製石斧で素材は、打製石斧断片の可能性あり。
		U21	413	片岩	打製石斧	21.7	57.5	34.0	9.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		U22	414	泥岩	打製石斧	60.2	88.5	39.0	13.0	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		基部欠、背面自然面
		U22	415	片岩	打製石斧	20.7	48.3	37.6	10.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		基部断片
		U22	766	凝灰岩	打製石斧	53.1	78.0	40.5	14.5	HD	欠損	縦長剥片	不明	不明		基部断片、基部端部にも摩耗あり。
		U23	417	黒耀石	裂片	0.3	10.3	19.2	2.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U23	418	黒耀石	剥片	2.2	23.7	18.5	6.5	なし	なし	縦長剥片	点状	HvD		
		U23	419	黒耀石	剥片	2.2	24.9	18.0	6.3	なし	なし	なし	点状	HvD		赤混じり
		U23	420	珪岩	刃器	5.9	21.3	58.4	7.6	叩折	素刃	縦長剥片	平坦	S'D		
		U23	421	下呂石	裂片	0.8	12.3	25.3	2.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U23	422	下呂石	両極石器	2.5	25.9	16.3	6.2	HvD	刃部不明	横長剥片	加工欠	不明		
		U23	423	ハリ質安山岩	鋸歯縁削器	79.3	56.3	85.3	22.1	HD	HP／鋸歯	横長剥片	加工欠	HD		
		U23	424	ハリ質安山岩	剥片	36.3	52.0	45.9	16.7	なし	なし	矩形剥片	点状	HvD		縦折剥片
		U23	425	ハリ質安山岩	刃器未製品	58.3	58.8	52.6	12.4	叩折・HD	HD	縦長剥片	加工欠	不明		
		U23	426	ハリ質安山岩	裂片	4.4	32.0	25.1	7.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U23	427	安山岩	打製石斧加工剥片	7.8	29.7	42.1	4.3	なし	なし	適用外	点状	HD		
		U23	428	泥岩	打製石斧	99.0	99.5	57.5	14.2	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部表裏の摩耗顕著
		U23	429	ハリ質安山岩	剥片	37.8	49.0	80.0	11.5	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		打製石斧製作時、あるいは事故剥離
		U23	430	片岩	打製石斧	96.7	130.0	47.6	13.2	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		
		U23	431	泥岩	打製石斧	81.0	73.0	52.5	16.5	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		背面自然面、刃部断片
		U24	432	黒耀石	裂片	1.7	17.6	13.5	9.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U24	433	珪岩	石錐	2.7	35.7	15.7	6.5	S'P	S'P	縦長剥片	加工欠	不明		
		U24	434	珪岩	石錐	6.9	41.6	21.0	9.5	S'P	S'P	縦長剥片	平坦	S'D		

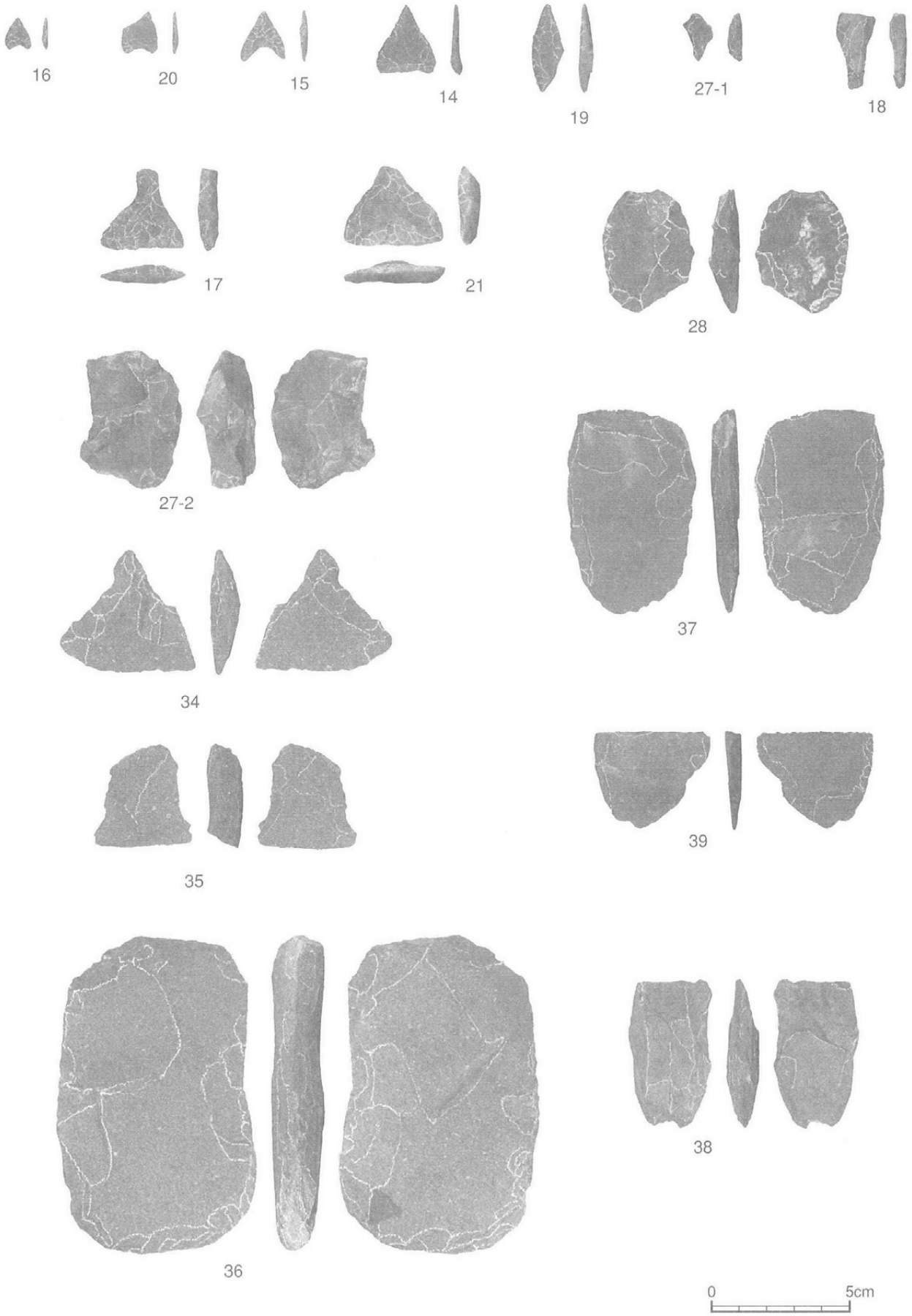
時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		U24	435	珪岩	剥片・チップ	31.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U24	436	ハリ質安山岩	礫断片	184.1	85.1	105.3	21.4	なし	なし	矩形剥片	点状	HvD		
		U24	437	ハリ質安山岩	裂片	5.6	26.2	41.4	5.4	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		U24	438	ハリ質安山岩	残核	537.9	87.6	107.5	50.8	なし	HD	半割礫	自然面	HD		被熱資料
		U24	439	ハリ質安山岩	剥片	26.7	40.9	50.7	13.3	なし	なし	横長剥片	切子打面	S'D		
		U24	440	泥岩	打製石斧	113.5	111.5	60.3	19.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		裏面欠損
		U24	441	片岩	打製石斧	47.0	94.0	50.5	9.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		断片
		U24	442	片岩	剥片	15.7	40.0	50.0	7.5	なし	なし	横長剥片	欠損	HD		打製石斧制作時の剥片か事故剥離の剥片
		U24	443	片岩	打製石斧	38.1	101.0	46.0	9.2	HD	欠損	剥片	不明	不明		裏面欠損、断片
		U24	444	片岩	打製石斧	58.0	86.5	41.5	15.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、背面自然面
		U24	445	泥岩	打製石斧	75.7	91.0	47.4	14.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		風化顕著
		U25	446	ハリ質安山岩	掻器	115.8	67.0	74.2	19.0	なし	nHD／急角度	礫端片	自然面	HvD		
		U25	447	泥岩	打製石斧	69.2	78.4	59.3	10.5	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		裏面欠損
		U26	448	泥岩	打製石斧	39.6	75.0	39.0	12.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		基部欠損
		U26	449	泥岩	打製石斧	24.6	96.5	31.2	7.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		裏面側欠損
		U26	450	凝灰岩	打製石斧	24.3	78.0	34.0	8.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		
		U26	451	安山岩	打製石斧	84.5	86.2	51.5	16.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		基部欠損、刃部正面側摩耗顕著
		U26	452	片岩	打製石斧	18.8	69.0	42.2	5.8	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		U26	453	泥岩	打製石斧	19.1	57.0	29.2	10.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		U26	454	安山岩	凹石	521.7	101.4	89.3	60.1	なし	くぼみ	円礫	適用外	適用外		両面刃部
		U26	455	安山岩	特殊磨石	810.0	112.9	87.0	60.4	なし	摩耗	長楕円礫	適用外	適用外	1／3欠損	
		U27	456	珪岩	剥片	39.2	46.4	44.5	20.4	なし	なし	縦長剥片	節理面	HD		分厚い剥片。
		V17	457	黒耀石	裂片	1.3	17.6	12.3	8.5	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V18	458	ハリ質安山岩	二次加工剥片	28.9	57.5	40.3	17.9	叩折	素刃	縦長剥片	加工欠	不明		
		V18	459	片岩	打製石斧	38.1	73.8	53.5	7.2	HD	欠損	縦長剥片	不明	不明		断片
		V18	460	安山岩	打製石斧	247.4	130.0	72.8	25.7	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		刃部欠損、大形打製石斧
		V18	461	片岩	打製石斧	27.3	70.0	34.0	10.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		背面自然面、小形打製石斧
		V18	462	片岩	打製石斧	25.5	64.3	37.0	7.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V19	463	黒耀石	両極剥片	0.7	21.3	11.0	3.8	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		
		V19	464	珪岩	裂片	8.1	28.4	20.2	12.8	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V19	465	珪岩	両極剥片	2.9	28.0	17.9	6.2	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		
		V19	466	珪岩	残核	11.1	36.6	24.9	15.7	なし	HD	剥片	節理面	不明		
		V19	467	安山岩	礫断片	80.2	68.6	76.4	19.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V19	468	ハリ質安山岩	加工剥片	27.7	48.5	46.9	14.2	叩折	なし	不明	不明	HD		
		V19	469	凝灰岩	砥石	23.2	50.0	37.5	13.2	叩折	研磨	剥片	加工欠	HD		
		V19	470	片岩	裂片	6.0	41.0	25.3	5.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V19	471	片岩	打製石斧	59.5	100.0	43.8	10.8	HD	欠損	縦長剥片	不明	不明		基部断片
		V19	472	片岩	打製石斧	37.7	67.3	51.4	10.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		折れ面の縁辺に微細剥離があり、再利用の可能性あり。
		V19	473	泥岩	剥片	51.9	66.0	46.0	14.0	なし	なし	剥片	自然面	HD		背面自然面
		V20	474	珪岩	削器	15.2	35.4	31.9	10.3	HD	S'P	縦長剥片	切子打面	HD		赤珪岩
		V20	475	ハリ質安山岩	剥片	38.1	68.3	40.5	14.0	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		
		V20	476	安山岩	打製石斧	64.3	89.0	47.5	16.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側に摩耗顕著
		V21	477	ハリ質安山岩	刃器	81.4	77.1	46.2	22.0	なし	S'P	縦長剥片	平坦	S'D		
		V21	478	ハリ質安山岩	刃器	169.7	108.2	67.7	26.3	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
		V21	479	安山岩	打製石斧	173.5	104.6	60.6	24.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		刃部欠損
		V21	480	泥岩	打製石斧	94.2	99.0	50.5	20.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		
		V21	481	片岩	打製石斧	27.8	68.6	39.5	7.2	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		基部欠損、小形打製石斧
		V21	482	片岩	打製石斧	17.4	58.7	42.6	4.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V21	483	安山岩	打製石斧	47.9	85.0	45.8	9.5	HD	欠損	縦長剥片	不明	不明		基部断片
		V21	484	片岩	打製石斧	46.2	91.7	35.5	12.6	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		基部欠損
		V22	485	黒耀石	裂片	1.6	17.5	20.4	5.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V22	486	黒耀石	裂片	0.5	17.3	13.6	2.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V22	487	下呂石	剥片	11.7	45.3	36.5	10.5	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		
		V22	488	ハリ質安山岩	刃器	36.5	41.9	56.1	16.6	叩折	素刃・MF	剥片	加工欠	不明		
		V22	489	ハリ質安山岩	残核	120.5	55.6	74.1	30.0	HD	HD	不明	不明	不明		
		V22	490	凝灰岩	打製石斧	63.9	100.0	36.4	15.0	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		刃部正面側と左側辺に摩耗顕著
		V22	491	片岩	打製石斧	67.0	108.7	43.0	11.5	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側の摩耗顕著

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		V22	492	片岩	打製石斧	16.9	56.0	54.5	6.4	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V22	493	片岩	打製石斧	56.5	94.0	45.0	10.9	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形
		V22	494	未整理	打製石斧	未整理										
		V22	495	安山岩	凹石	1000.0	117.7	101.7	62.3	なし	なし	円礫	適用外	適用外		
		V22	496	安山岩	石皿	3200.0	150.0	140.5	78.6	HvD	摩耗	円礫	平坦	適用外		分轄されている
		V22	497	安山岩	磨痕礫	5600.0	335.0	147.6	78.0	なし	なし	長楕円礫	なし	適用外		
		V23	498	黒耀石	刃器	3.2	30.1	20.2	6.1	なし	素刃・MF	縦長剥片	平坦	nHI		
		V23	499	黒耀石	石核	19.0	18.5	32.4	32.7	なし	HI	分轄礫	平坦	HvD		
		V23	500	黒耀石	残核	8.6	17.5	38.7	17.1	なし	HD	剥片	平坦	CHD		
		V23	501	黒耀石	裂片	0.2	11.8	10.8	2.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V23	502	黒耀石	裂片	2.0	23.4	13.7	8.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V23	503	珪岩	剥片	1.0	16.4	25.4	2.9	なし	なし	横長剥片	平坦	nHI		
		V23	504	珪岩	刃器	11.1	38.2	35.4	9.4	HI	素刃・MF	矩形剥片	平坦	HD		
		V23	505	下呂石	裂片	1.2	16.2	23.4	4.7	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V23	506	ハリ質安山岩	削器	202.7	74.6	72.7	36.0	HD	HD	矩形剥片	加工欠	不明		
		V23	507	ハリ質安山岩	剥片	38.6	39.8	60.7	22.8	なし	なし	横長剥片	切子打面	S'D		
		V23	508	ハリ質安山岩	残核	522.3	138.3	92.0	42.3	なし	HD	分轄礫		CHD		
		V23	509	ハリ質安山岩	剥片	136.0	114.9	47.8	27.8	なし	なし	縦長剥片	欠損	HD		
		V23	510	泥岩	裂片	37.4	60.8	55.8	15.6	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V23	511	片岩	打製石斧	49.6	73.0	44.8	11.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		刃部断片を再加工している。
		V23	512	片岩	打製石斧	24.5	59.5	46.0	8.2	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V23	513	片岩	打製石斧	50.6	91.0	40.0	10.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形
		V23	514	ホルンフェルス	打製石斧	43.2	60.4	40.0	16.8	HD	MF	横長剥片	不明	不明		刃部断片、風化顕著
		V23	515	安山岩	打製石斧	50.9	96.0	46.5	11.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側の摩耗顕著
		V23	516	泥岩	打製石斧	1285.5	113.5	40.0	25.0	HD・敲打	MF・摩耗	剥片	不明	不明		完形、両側辺に敲打痕顕著。刃部正面側に摩耗顕著
		V24	517	珪岩	裂片	1.7	17.0	27.3	4.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V24	518	下呂石	石鏃未製品	3.2	22.6	24.7	6.6	S'P	S'P	両極剥片	不明	不明		
		V24	519	ハリ質安山岩	剥片	13.4	29.6	50.1	12.2	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		
		V24	520	ハリ質安山岩	刃器	97.8	68.5	55.7	22.2	叩折・HD	素刃	縦長剥片	自然面	HD		素材は縦折剥片
		V24	521	片岩	打製石斧	30.1	50.0	50.0	9.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片
		V24	522	片岩	打製石斧	30.1	55.0	66.0	5.7	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V24	523	片岩	打製石斧	77.3	115.6	40.0	12.5	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		完形、被熱資料、刃部正面側に摩耗顕著
		V24	524	片岩	打製石斧	75.9	88.0	41.0	16.2	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		基部欠損、刃部正面側に摩耗顕著
		V25	525	黒耀石	二次加工剥片	6.8	25.5	32.9	9.9	HI	刃部不明	小角礫	自然面	適用外		
		V25	526	黒耀石	剥片	1.2	23.2	11.3	6.8	なし	なし	縦長剥片	自然面	不明		
		V25	527	ハリ質安山岩	剥片	32.6	40.0	49.0	16.4	なし	なし	横長剥片	折れ	HD		
		V25	528	ハリ質安山岩	刃器	46.5	57.6	66.3	12.7	叩折	素刃・MF	不明	加工欠	不明		
		V25	529	安山岩	磨石断片	52.4	55.4	73.9	16.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V25	530	凝灰岩	扁平片刃石斧	46.8	56.8	41.0	11.0	研磨	片刃	不明	不明	不明		基部欠損、弥生
		V25	531	片岩	打製石斧	11.2	58.0	27.0	8.6	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V25	532	片岩	剥片	11.5	54.6	31.6	9.0	なし	なし	剥片	不明	不明		打製石斧の欠損時の剥片
		V25	533	片岩	打製石斧	11.5	71.5	22.5	7.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V25	534	片岩	打製石斧	24.2	82.3	29.2	8.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V25	535	片岩	打製石斧	93.1	102.5	45.8	20.0	HD	MF	剥片	不明	不明		基部欠損
		V25	536	ホルンフェルス	打製石斧	155.9	9.0	67.3	20.8	HD	MF	横長剥片	不明	不明		基部欠損
		V26	537	黒耀石	剥片	1.4	23.1	17.5	4.9	なし	なし	縦長剥片	平坦	nHI		
		V26	538	黒耀石	剥片	2.2	23.7	32.0	5.6	なし	なし	横長剥片	自然面	HD		
		V26	539	黒耀石	両極石器	1.6	22.9	14.8	5.1	HvD	なし	不明	不明	不明		
		V26	540	珪岩	剥片	2.7	17.1	25.3	5.7	なし	なし	横長剥片	平坦	nHI		
		V26	541	珪岩	剥片	64.8	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V26	542	下呂石	剥片	2.3	17.2	30.3	6.1	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D		
		V26	543	下呂石	剥片	9.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V26	544	ハリ質安山岩	礫面剥片	98.7	95.6	51.6	19.7	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		
		V26	545	ハリ質安山岩	剥片	63.3	52.4	79.5	18.8	なし	なし	横長剥片	平坦	S'D		
		V26	546	ハリ質安山岩	剥片	16.4	45.3	41.5	9.4	なし	なし	矩形剥片	点状	HD		
		V26	547	ハリ質安山岩	二次加工剥片	29.1	56.2	49.4	17.7	叩折	刃部不明	縦長剥片	加工欠	不明		
		V26	548	ハリ質安山岩	二次加工剥片	50.8	53.6	63.2	14.4	HD	刃部不明	剥片	加工欠	不明		

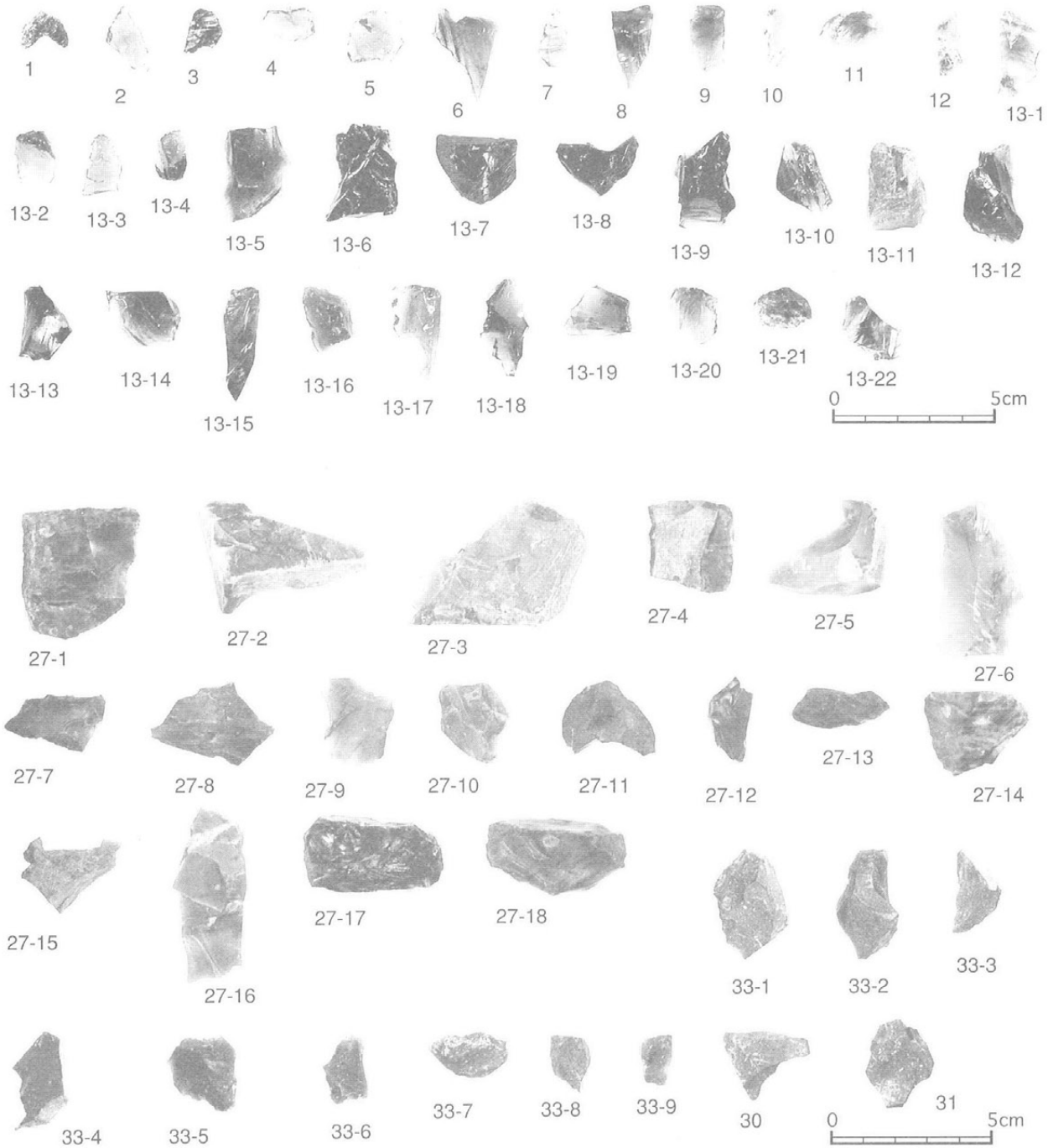
時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		V26	549	ハリ質安山岩	石核断片	165.5	82.4	76.5	32.0	HD	HD	不明	不明	不明		
		V26	550	ハリ質安山岩	剥片	38.9	40.3	67.5	16.7	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		
		V26	551	ハリ質安山岩	刃器	29.4	57.0	52.8	16.5	叩折	素刃・MF	矩形剥片	自然面	HD		
		V26	552	ハリ質安山岩	二次加工剥片	46.8	47.2	73.3	13.3	叩折	刃部なし	縦長剥片	加工欠	HD		
		V26	553	ハリ質安山岩	刃器	35.4	52.0	59.8	12.8	叩折	素刃・MF	横長剥片	点状	HD		
		V26	554	ホルンフェルス	裂片	9.6	39.9	43.6	4.7	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V26	555	流紋岩	加工剥片	23.3	45.0	56.1	10.9	なし	なし	横長剥片	線状	HD		
		V26	556	片岩	裂片	6.2	33.9	32.0	4.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V26	557	ハリ質安山岩	剥片・チップ	19.5	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		V26	558	蛇紋岩	磨製石斧	20.3	52.0	27.0	8.4	擦切・研磨	やや片刃	不明	不明	不明		完形
		V26	559	片岩	打製石斧	59.1	87.4	60.0	9.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V26	560	片岩	打製石斧	56.5	93.6	51.3	9.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		裏面欠損、断片
		V26	561	泥岩	打製石斧	95.3	101.0	51.8	13.4	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		基部欠損、
		V26	562	安山岩	打製石斧	87.2	86.0	56.5	48.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片
		V26	563	片岩	打製石斧	132, 2	108.3	58.7	21.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		完形
		V26	564	片岩	打製石斧	34.0	84.5	40.0	8.2	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		
		V26	565	泥岩	打製石斧	39.7	63.5	47.6	10.5	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片
		V26	566	片岩	打製石斧	35.9	70.5	45.5	8.2	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V26	567	凝灰岩	打製石斧	37.7	65.8	55.8	11.7	HD	欠損	剥片	不明	不明		基部断片
		V26	568	片岩	打製石斧	52.0	57.0	70.0	9.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		刃部断片
		V26	569	片岩	打製石斧	8.8	31.0	29.2	8.6	HD	欠損	剥片	不明	不明		基部断片、背面自然面
		V26	570	凝灰岩	打製石斧	20.5	55.4	53.3	7.2	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		V26	571	片岩	打製石斧	23.4	85.4	33.0	10.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片、被熱資料
		V26	572	ホルンフェルス	打製石斧	133.3	95.6	54.0	21.2	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		基部断片
		V26	573	凝灰岩	打製石斧	68.9	103.5	52.6	10.0	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側の摩耗顕著
		V26	574	片岩	打製石斧	75.3	99.0	47.5	13.4	HD	欠損	剥片	不明	不明		
		V26	575	片岩	打製石斧	25.0	61.8	36.0	9.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		小形打製石斧、打製石斧の断片を再加工
		V26	576	凝灰岩	打製石斧	14.7	46.7	44.2	4.7	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V26	577	片岩	打製石斧	10.2	54.3	33.8	5.0	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		V26	578	安山岩	磨石	1000.0	116.8	109.8	52.8	なし	摩耗	円礫	なし	適用外		
		V26	579	安山岩	磨石	800.0	113.2	106.9	54.8	なし	摩耗	円礫	なし	適用外		
		V27	580	珪岩	削器	5.4	33.5	32.2	7.3	なし	nHP／急角度	縦長剥片	平坦	S'D		
		V27	581	凝灰岩	打製石斧	86.0	100.0	41.0	17.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部欠損後も再利用
		V27	582	片岩	打製石斧	96.0	104.4	48.0	13.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		完形、正面側刃部摩耗顕著
		V27	583	安山岩	打製石斧	86.1	73.5	70.3	15.4	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		基部断片
		W・X18	680	ハリ質安山岩	剥片	未整理										SB14　MOJ246と接合
		W・X18	681	ハリ質安山岩	刃器	20.6	52.6	35.7	11.0	叩折	素刃・MF	縦長剥片	点状	CHD		
		W・X18	682	ハリ質安山岩	裂片	17.2	35.8	27.9	16.8	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W・X18	683	ハリ質安山岩	刃器	37.6	52.8	61.8	14.0	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		
		W・X18	684	ハリ質安山岩	刃器	19.4	26.7	51.4	15.8	叩折・HD	素刃・MF	縦長剥片	加工欠	不明		縦長剥片の側辺を加工
		W・X18	685	ハリ質安山岩	刃器	21.3	34.7	57.4	9.3	叩折	素刃	横長剥片	加工欠	不明		
		W・X18	686	ハリ質安山岩	剥片	45.9	78.9	36.3	15.3	なし	なし	縦長剥片	欠損	不明		
		W・X18	687	泥岩	打製石斧	52.1	93.3	48.0	10.8	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形
		W・X18	688	泥岩	打製石斧	99.7	101.8	45.0	15.2	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		風化顕著
		W14	584	ハリ質安山岩	刃器	86.6	51.0	108.8	18.7	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		
		W14	585	ハリ質安山岩	裂片	10.5	52.6	23.7	9.7	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W15	586	ハリ質安山岩	刃器	48.6	57.7	57.8	15.9	叩折	素刃・MF	矩形剥片	加工欠	不明		3方向叩折
		W18	587	ハリ質安山岩	裂片	6.1	35.8	28.7	5.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W18	588	ハリ質安山岩	二次加工剥片	32.7	52.4	30.6	17.2	叩折・HD	刃部なし	縦長剥片	自然面	HD		
		W18	589	片岩	打製石斧	18.8	76.5	25.0	10.0	HD	MF	縦長剥片	不明	不明		完形、打製石斧の断片を再加工して小形打製石斧を製作。
		W19	590	黒耀石	剥片	5.9	27.6	22.8	11.0	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		
		W19	591	ハリ質安山岩	刃器	31.0	67.7	45.7	10.5	なし	素刃・MF	縦長剥片	平坦	S'D		
		W19	592	砂岩	削器	70.5	68.9	56.9	18.7	叩折	S'P	縦長剥片	自然面	HD		
		W19	593	ホルンフェルス	剥片	4.8	23.1	48.0	4.8	なし	なし	横長剥片	線状	HD		
		W19	594	安山岩	磨石	628.9	108.9	97.6	40.4	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外		
		W20	596	珪岩	剥片	3.4	25.0	23.3	5.1	なし	なし	矩形剥片	不明	HD		
		W20	597	ハリ質安山岩	剥片	27.9	58.0	35.1	15.9	不明	不明	不明	不明			ガジリで半割

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		W20	598	泥岩	打製石斧	144.2	114.0	57.9	17.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		側辺部の摩耗顕著
		W20	599	泥岩	打製石斧	61.7	102.4	45.0	11.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		MF・摩耗
		W20	768	黒耀石	使用痕剥片	0.9	17.8	12.0	6.4	なし	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
		W20	769	珪岩	剥片	3.2	21.2	23.6	6.4	なし	なし	矩形剥片	不明	HD		
		W21	600	ハリ質安山岩	剥片	176.1	75.5	78.0	27.0	なし	なし	矩形剥片	自然面	HD		
		W21	601	ハリ質安山岩	剥片	未整理										
		W21	602	安山岩	打製石斧	265.2	80.0	90.8	28.0	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		大形打製石斧
		W21	603	泥岩	打製石斧	96.6	103.8	46.0	15.0	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部正面側摩耗顕著
		W21	604	泥岩	打製石斧	71.5	89.3	43.6	12.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部刃潰れとわずかに摩耗
		W21	605	片岩	打製石斧	40.5	76.0	53.5	6.8	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部先端部のみ摩耗
		W21	606	凝灰岩	打製石斧	43.3	77.3	45.2	15.8	HD	なし	横長剥片	不明	不明		打製石斧断片を再加工
		W21	607	片岩	打製石斧	46.6	87.0	49.0	9.0	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部正面側摩耗
		W21	608	凝灰岩	打製石斧	53.6	100.7	42.5	9.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		
		W21	609	凝灰岩	打製石斧	122.6	110.0	65.3	15.5	HD	欠損	剥片	不明	不明		裏面側欠損
		W21	610	片岩	打製石斧	55.4	141.0	41.3	8.0	HD	HD	HD	不明	不明		
		W21	611	泥岩	打製石斧	36.2	75.5	39.0	10.0	HD	欠損	HD	不明	不明		刃部欠損しているがわずかに摩耗部が見られる。
		W22	612	ハリ質安山岩	刃器	172.1	78.6	96.1	21.6	なし	素刃・MF	横長剥片	自然面	HD		大形刃器
		W22	613	粘板岩	剥片	31.9	54.7	66.9	8.4	なし	なし	矩形剥片	線状	HD		
		W22	614	粘板岩	剥片	25.7	71.4	33.7	14.6	なし	なし	縦長剥片	折れ	HD		
		W22	615	凝灰岩	打製石斧	102.2	112.0	53.0	14.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		風化顕著
		W22	616	片岩	打製石斧	34.8	87.5	43.5	10.0	HD	MF	横長剥片	不明	不明		
		W22	617	泥岩	打製石斧	22.0	40.0	51.0	12.0	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		刃部断片
		W22	618	安山岩	打製石斧	120.4	113.8	51.2	17.4	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		完形、風化顕著
		W23	619	ハリ質安山岩	加工剥片	12.4	52.0	26.8	10.7	叩折	刃部なし	縦長剥片	加工欠	HD		
		W23	620	ハリ質安山岩	刃器	32.2	33.8	54.5	18.6	なし	素刃・MF	横長剥片	自然面	HD		
		W23	621	ハリ質安山岩	二次加工剥片	80.2	61.1	64.6	18.7	叩折	刃部なし	縦長剥片	加工欠	不明		
		W23	622	ハリ質安山岩	刃器	12.6	38.9	48.0	9.3	叩折	素刃	横長剥片	加工欠	不明		打面を２方向に叩折
		W23	623	ハリ質安山岩	裂片	22.7	63.3	43.8	8.4	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W23	624	緑色凝灰岩	打製石斧	46.0	72.0	40.8	11.6	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		完形、磨製石斧の断片を素材としている。
		W23	625	安山岩	打製石斧	143.6	100.0	53.8	24.6	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		完形、風化顕著
		W23	626	凝灰岩	打製石斧	53.9	77.4	46.0	10.0	HD	欠損	横長剥片	不明	不明		両側辺が着柄による摩耗
		W23	627	泥岩	打製石斧	103.1	107.5	49.0	20.0	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部正面の摩耗顕著。
		W23	628	泥岩	打製石斧	57.6	91.8	37.9	15.0	HD	MF・摩耗	剥片	不明	不明		正面側の摩耗顕著
		W23	629	片岩	打製石斧	84.5	99.4	47.5	13.8	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形
		W23	630	片岩	打製石斧	27.2	40.0	46.8	12.7	HD	刃潰れ	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		W24	631	黒耀石	両極石器	1.1	15.8	14.6	4.1	HvD	なし	剥片	不明	不明		石鏃のブランクか
		W24	632	下呂石	両極剥片断片	1.6	27.5	16.4	4.6	なし	なし	不明	不明	HvD		
		W24	633	片岩	打製石斧	57.2	70.9	45.6	12.8	HD	欠損	剥片	不明	不明		
		W24	634	片岩	打製石斧	31.7	72.1	44.5	7.7	HD	摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部摩耗顕著
		W25	635	黒耀石	剥片	2.7	28.0	21.3	7.4	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		赤混じる
		W25	636	黒耀石	剥片	10.0	25.5	41.3	10.4	なし	なし	横長剥片	自然面	HD		
		W25	637	珪岩	削器	14.0	47.9	35.3	8.7	叩折	nHP／急角度	縦長剥片	切子打面	S'D		
		W25	638	珪岩	剥片・両極石器	3.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W25	639	ハリ質安山岩	刃器	60.0	76.2	51.2	14.4	なし	素刃・MF	縦長剥片	自然面	S'D		
		W25	640	ハリ質安山岩	剥片	28.0	34.0	49.6	18.8	なし	なし	横長剥片	砕け	CHD		
		W25	641	ハリ質安山岩	刃器	15.5	43.4	34.7	7.0	叩折	S'P	縦長剥片	加工欠	不明		
		W25	642	ハリ質安山岩	剥片	44.5	61.9	40.2	19.0	なし	なし	縦長剥片	自然面	CHD		
		W25	643	ハリ質安山岩	裂片	4.8	23.4	29.6	7.8	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W25	644	片岩	打製石斧	56.6	82.0	44.7	12.8	HD	摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部摩耗顕著
		W25	645	片岩	打製石斧	66.9	100.0	50.2	9.4	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		
		W25	646	凝灰岩	打製石斧	40.7	87.0	45.5	7.0	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		
		W25	647	泥岩	打製石斧	105.4	115.3	54.0	17.0	HD	MF	横長剥片	不明	不明		
		W25	648	片岩	打製石斧	59.8	83.0	47.2	10.0	HD	欠損	縦長剥片	自然面	HvD		基部断片
		W25	649	安山岩	円礫	646.5	108.8	99.2	52.6	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W26	650	黒耀石	裂片	1.4	27.2	10.2	5.6	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W26	651	ハリ質安山岩	裂片	3.8	32.9	30.5	3.9	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W26	652	ハリ質安山岩	石核断片	237.6	85.7	103.4	38.0	HD	HD	礫ブロック	自然面	CHD		

時期	段階	遺構名	通番	石材	器種	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	形態加工	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	備考	所見
		W26	653	ハリ質安山岩	二次加工剥片	20.6	44.0	44.9	9.9	叩折	刃部なし	縦長剥片	加工欠	不明		
		W26	654	片岩	打製石斧	70.9	104.0	47.0	10.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		風化顕著
		W26	655	凝灰岩	打製石斧	22.6	58.5	38.3	7.7	HD	欠損	剥片	不明	不明		基部断片
		W26	656	凝灰岩	打製石斧	74.8	98.5	52.0	13.0	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		風化顕著
		W26	657	泥岩	打製石斧	66.7	76.2	53.8	15.0	HD	HD	剥片	不明	不明	HD	基部断片
		W26	658	片岩	打製石斧	169.5	120.5	78.0	18.0	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		大形打製石斧
		W26	659	砂岩	打製石斧	128.8	102.2	52.0	25.0	HD	HD・MF	剥片	不明	不明		完形
		W26	653	ハリ質安山岩	裂片	8.0	40.5	28.5	5.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		W27	660	ハリ質安山岩	刃器	64.5	62.6	46.1	18.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
		W27	661	ハリ質安山岩	剥片	41.7	83.9	56.3	10.8	なし	なし	縦長剥片	平坦	S'D		
		W27	662	流紋岩	剥片	38.5	55.8	58.9	15.7	なし	なし	矩形剥片	線状	HD		打製石斧製作の剥片
		X18	663	黒耀石	裂片	0.7	8.5	12.7	7.1	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		X18	664	ハリ質安山岩	刃器	5.1	22.0	38.8	9.4	叩折	素刃・MF	横長剥片	加工欠	不明		2方向叩折
		X18	665	ハリ質安山岩	剥片	8.0	27.7	40.5	8.3	なし	なし	横長剥片	砕け	HD		
		X18	666	ハリ質安山岩	剥片	10.6	34.7	28.3	12.1	なし	なし	縦長剥片	切子打面	S'D		末端折れ
		X18	667	ハリ質安山岩	裂片	8.8	44.5	23.9	7.0	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		X19	668	片岩	打製石斧	60.5	60.0	50.6	14.0	HD	MF	縦長剥片	不明	不明		刃部断片
		X20	669	黒耀石	剥片	0.7	15.0	12.4	4.3	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		
		X20	670	ハリ質安山岩	剥片	146.9	78.1	90.1	22.8	なし	なし	横長剥片	平坦	HD		ガジリ多数
		X20	671	ハリ質安山岩	削器	46.7	87.1	42.6	14.5	なし	S'P	縦長剥片	切子打面	S'D		
		X20	672	泥岩	打製石斧	76.8	144.0	31.8	21.7	HD	欠損	剥片	不明	不明		断片
		X20	673	片岩	剥片	18.2	60.0	34.0	8.5	なし	なし	縦長剥片	線状	HvD		打製石斧の刃部の衝撃剥離の剥片の可能性あり。
		X21	674	安山岩	打製石斧	116.4	80.0	61.0	22.8	HD	HD・MF	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		X21	675	片岩	打製石斧未製品	242.7	183.0	61.6	13.7	HD	HD	縦長剥片	不明	不明		完形
		X22・23	677	泥岩	打製石斧	106.5	111.2	53.2	18.5	HD	MF	横長剥片	不明	不明		完形
		X22・23	678	泥岩	打製石斧	127.0	107.0	42.4	25.3	HD・敲打	MF	横長剥片	不明	不明		両側辺に敲打痕明瞭、縦斧の可能性あり。
		X22・23	679	安山岩	磨石	440.3	97.5	83.2	47.3	なし	摩耗	円礫	適用外	適用外	部分欠損	
		Y19	689	ハリ質安山岩	剥片（剥離有）	未整理										
		表採	751	黒耀石	裂片	4.3	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		表採	752	ハリ質安山岩	剥片	54.9	84.2	48.3	18.3	なし	なし	縦長剥片	平坦	HD		
		表採	753	ハリ質安山岩	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	接合データ	760と接合
		表採	754	ハリ質安山岩	裂片	7.7	34.0	37.6	6.6	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		表採	755	ハリ質安山岩	刃器	16.5	45.6	40.2	9.2	なし	素刃・MF	矩形剥片	自然面	HD		
		表採	756	ハリ質安山岩	裂片	18.1	38.2	31.6	17.2	適用外	適用外	適用外	適用外	適用外		
		表採	757	ハリ質安山岩	刃器	21.6	41.6	40.5	9.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
		表採	758	ハリ質安山岩	刃器	84.6	104.6	61.2	17.5	叩折	素刃・MF	縦長剥片	自然面	HD		
		表採	759	ハリ質安山岩	剥片	135.9	80.1	70.9	25.7	なし	なし	縦長剥片	自然面	HD		
		表採	760	ハリ質安山岩	コア	1232.3	96.2	108.4	149.8	なし	HD	礫ブロック	切子打面	CHD		753と接合
		表採	761	泥岩	打製石斧	48.6	99.0	41.0	10.5	HD	MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		完形、刃部表裏の摩耗顕著
		表採	762	安山岩	打製石斧	363.1	129.0	91.0	26.0	HD	HD・MF・摩耗	扁平礫	なし	なし		基部欠損、晩期に属する
		表採	763	安山岩	打製石斧	144.2	83.0	67.5	20.0	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		表採	764	泥岩	打製石斧	134.4	93.0	60.0	21.5	HD	HD・MF・摩耗	横長剥片	不明	不明		刃部断片
		表採	765	片岩	打製石斧	54.3	85.0	47.5	10.5	HD	MF・摩耗	縦長剥片	不明	不明		完形、打製石斧断片の再加工の可能性あり。刃部正面側に摩耗顕著

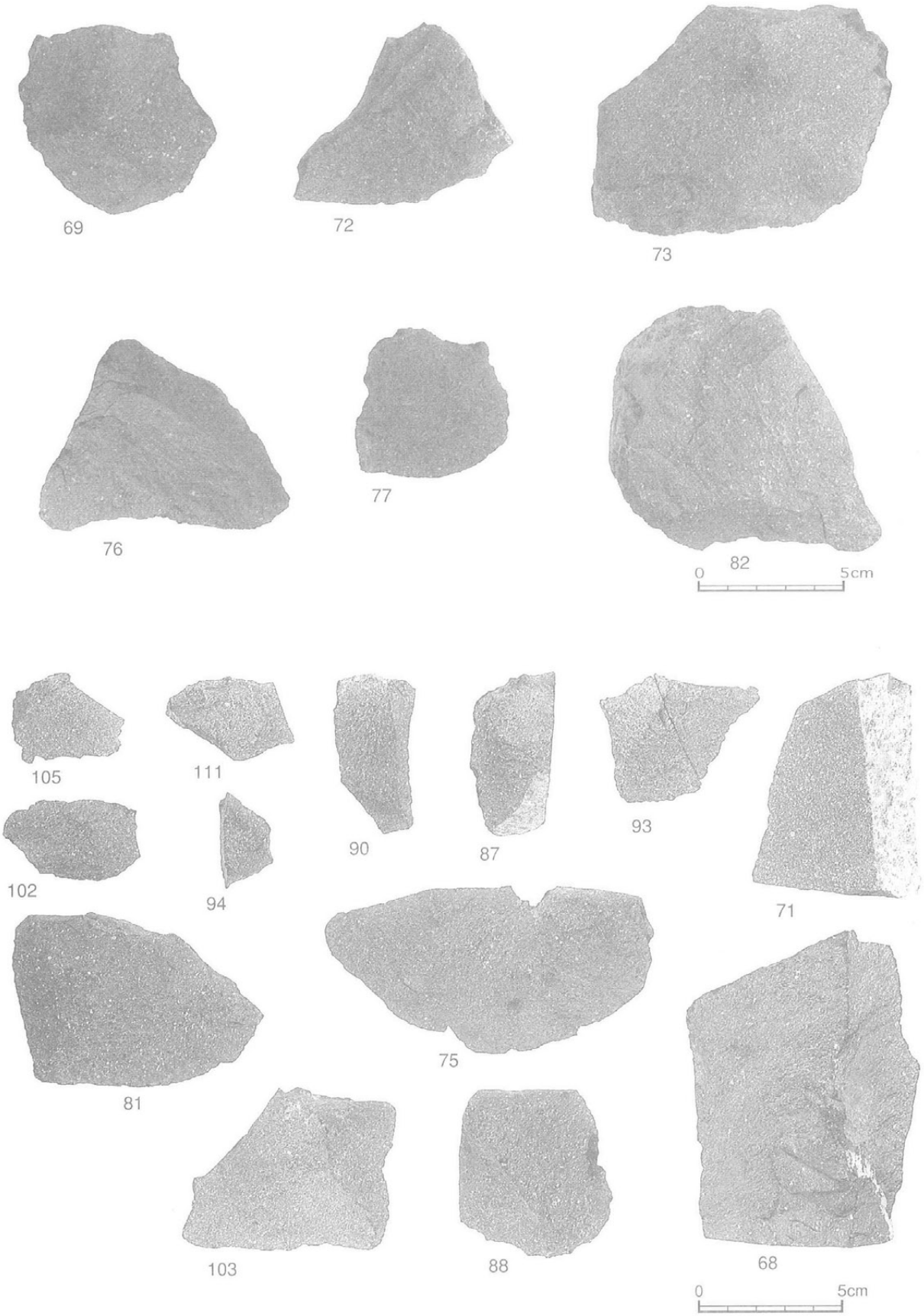


第45図　SB 9（縄文前期末葉）出土石器

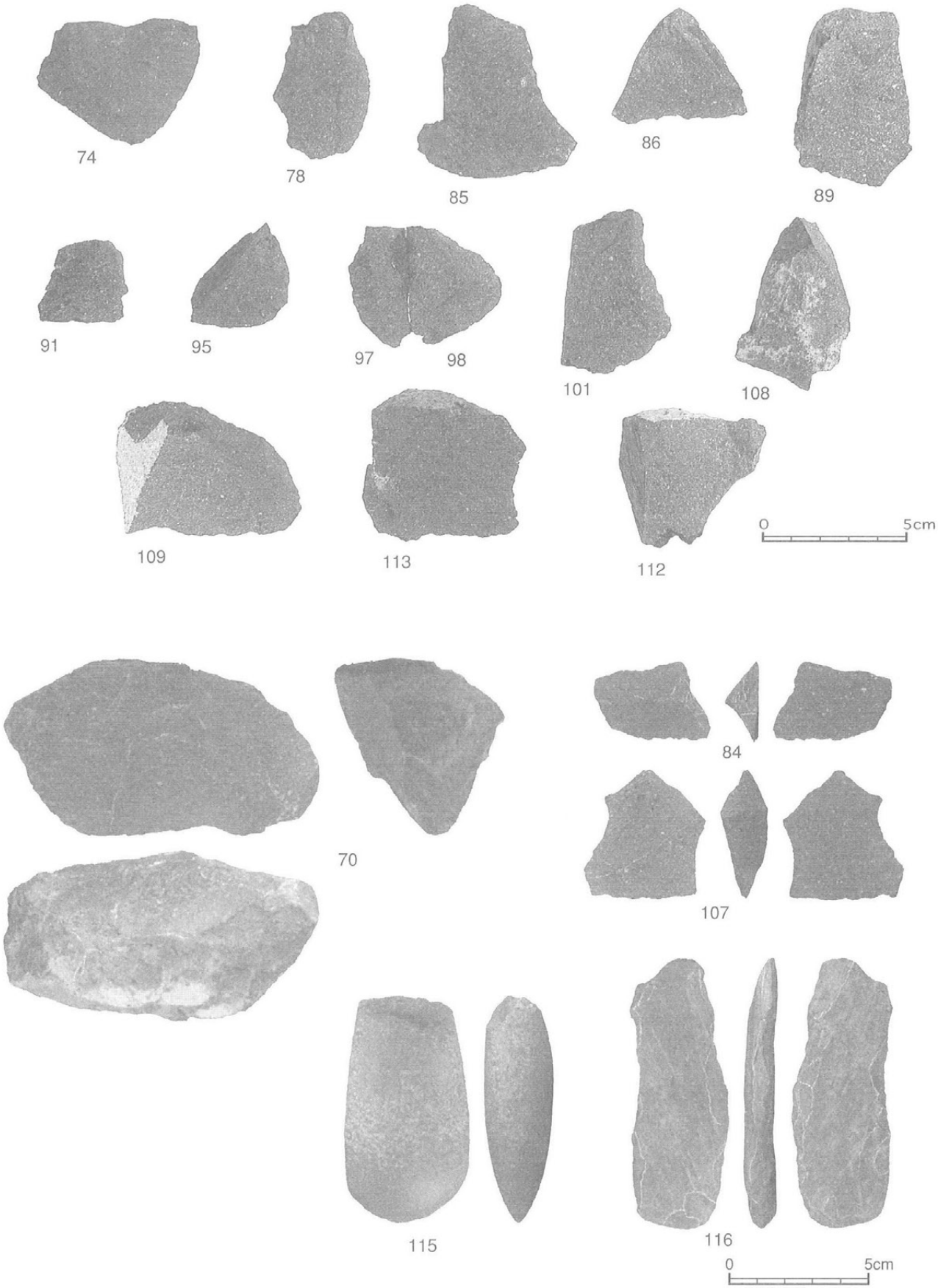


第46図　SB 9（縄文前期末葉）出土石器

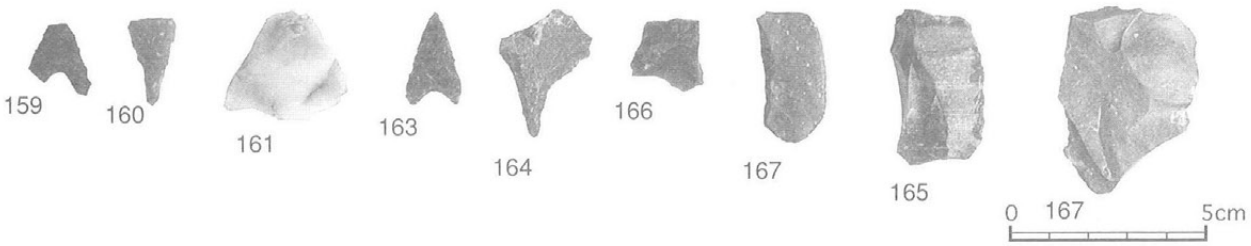
第47図　SB８（縄文中期中葉）出土石器

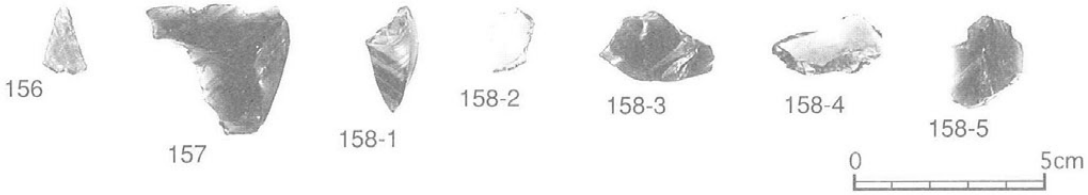


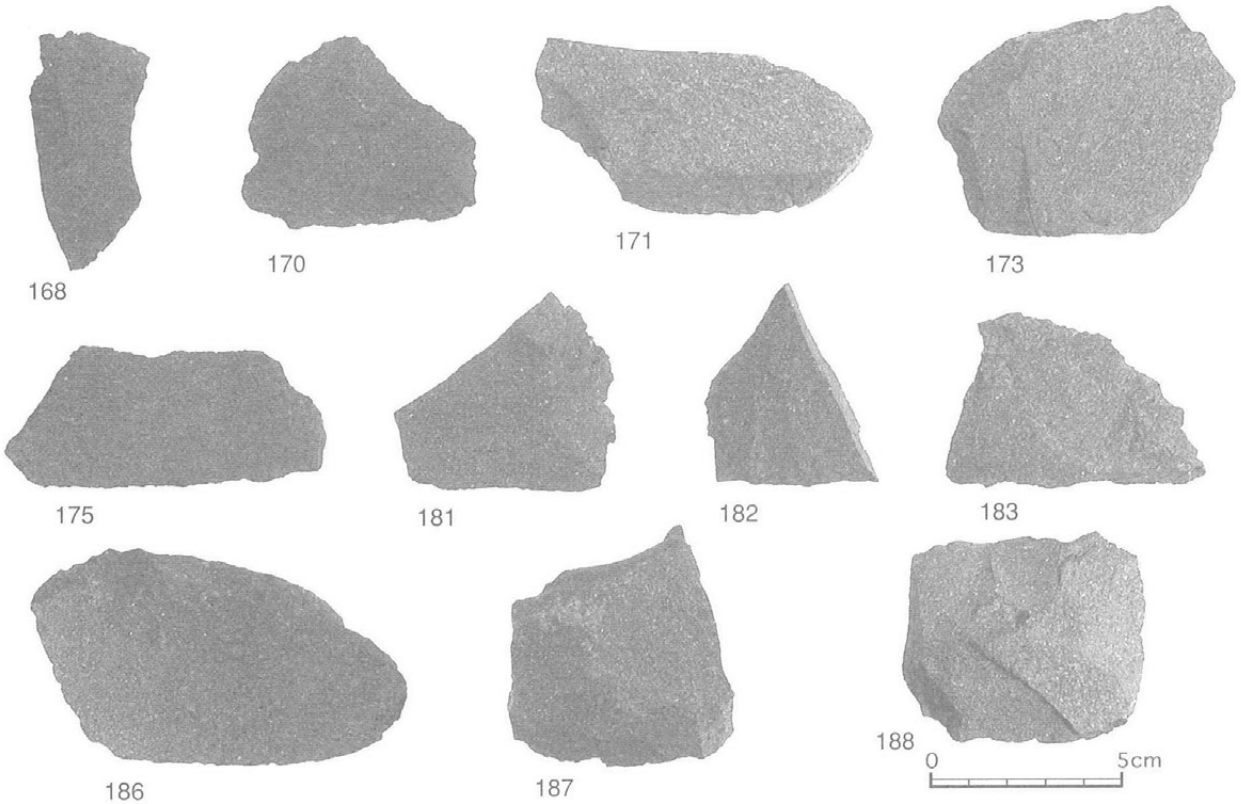
第48図　SB 8（縄文中期中葉）出土石器



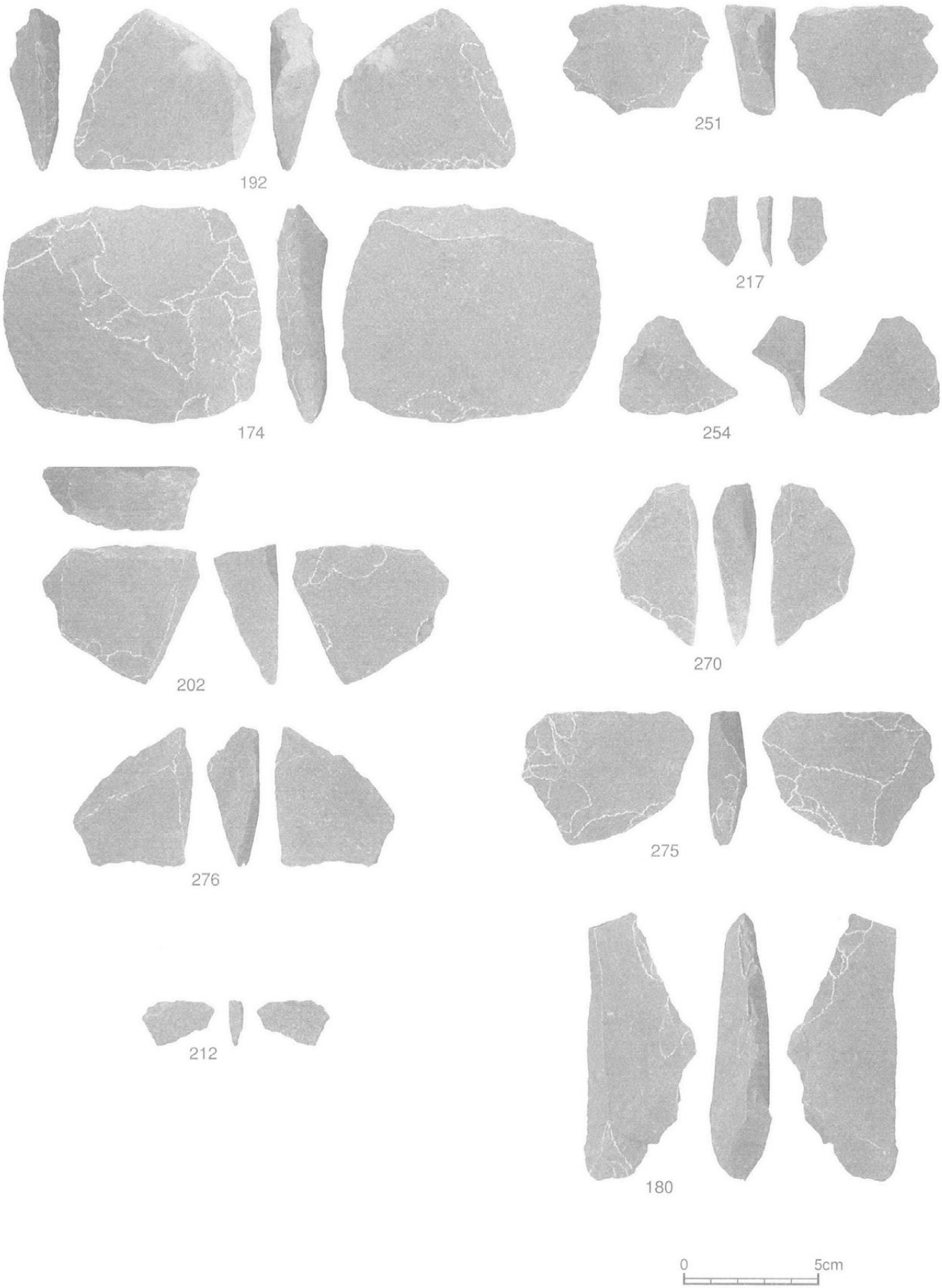
第49図　SB 8（縄文中期中葉）出土石器



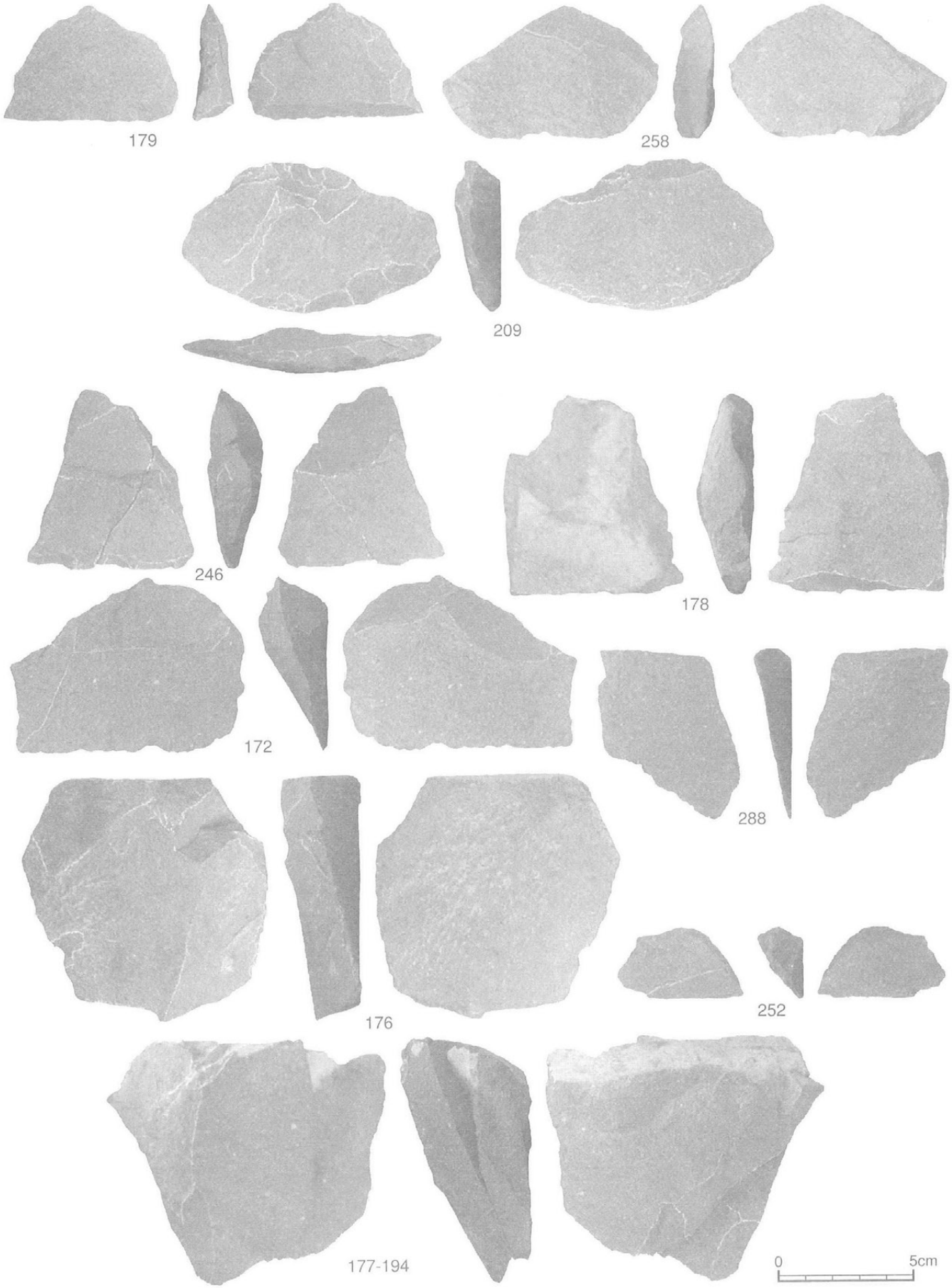




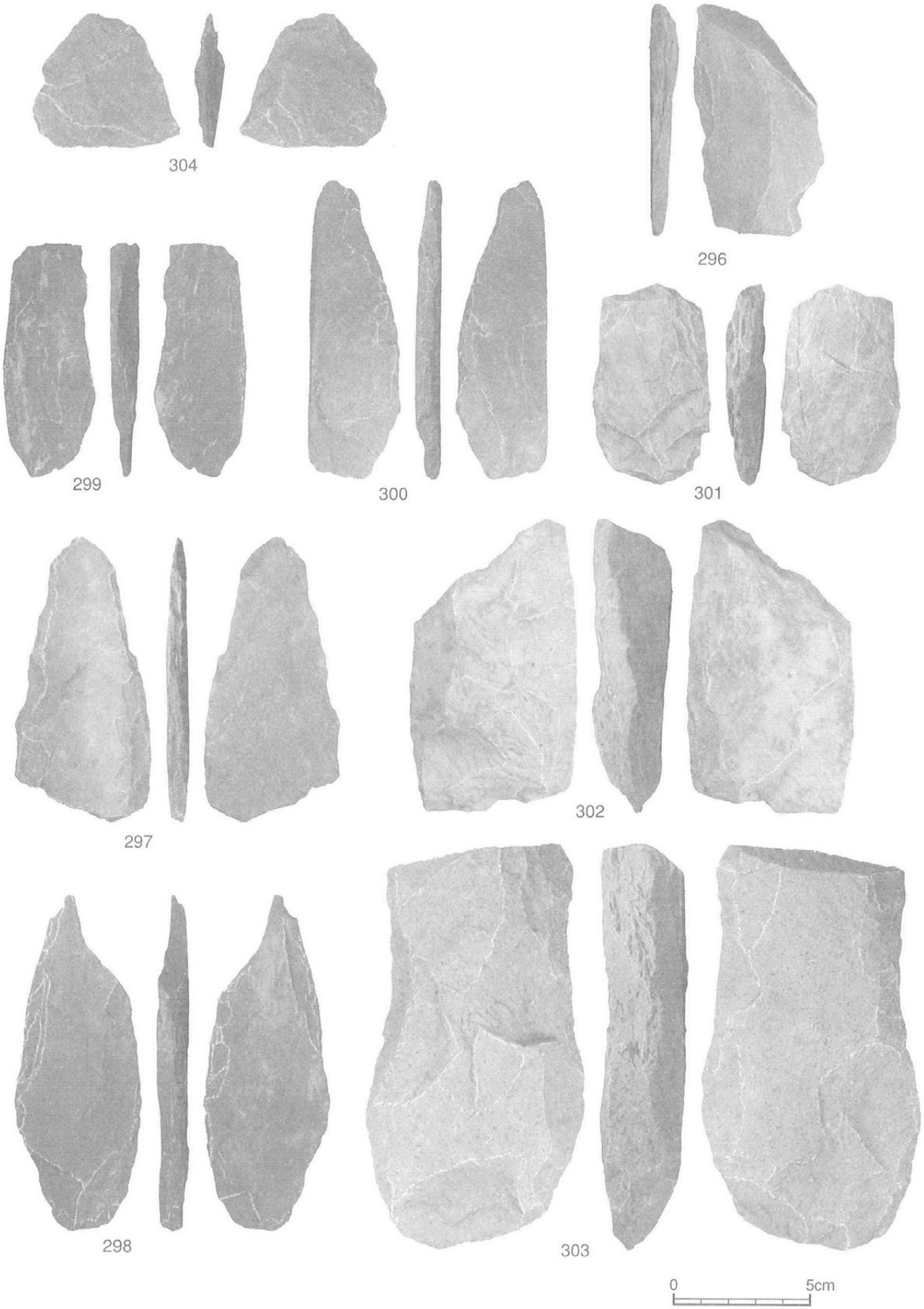
第50図　SB14（縄文中期中葉）出土石器



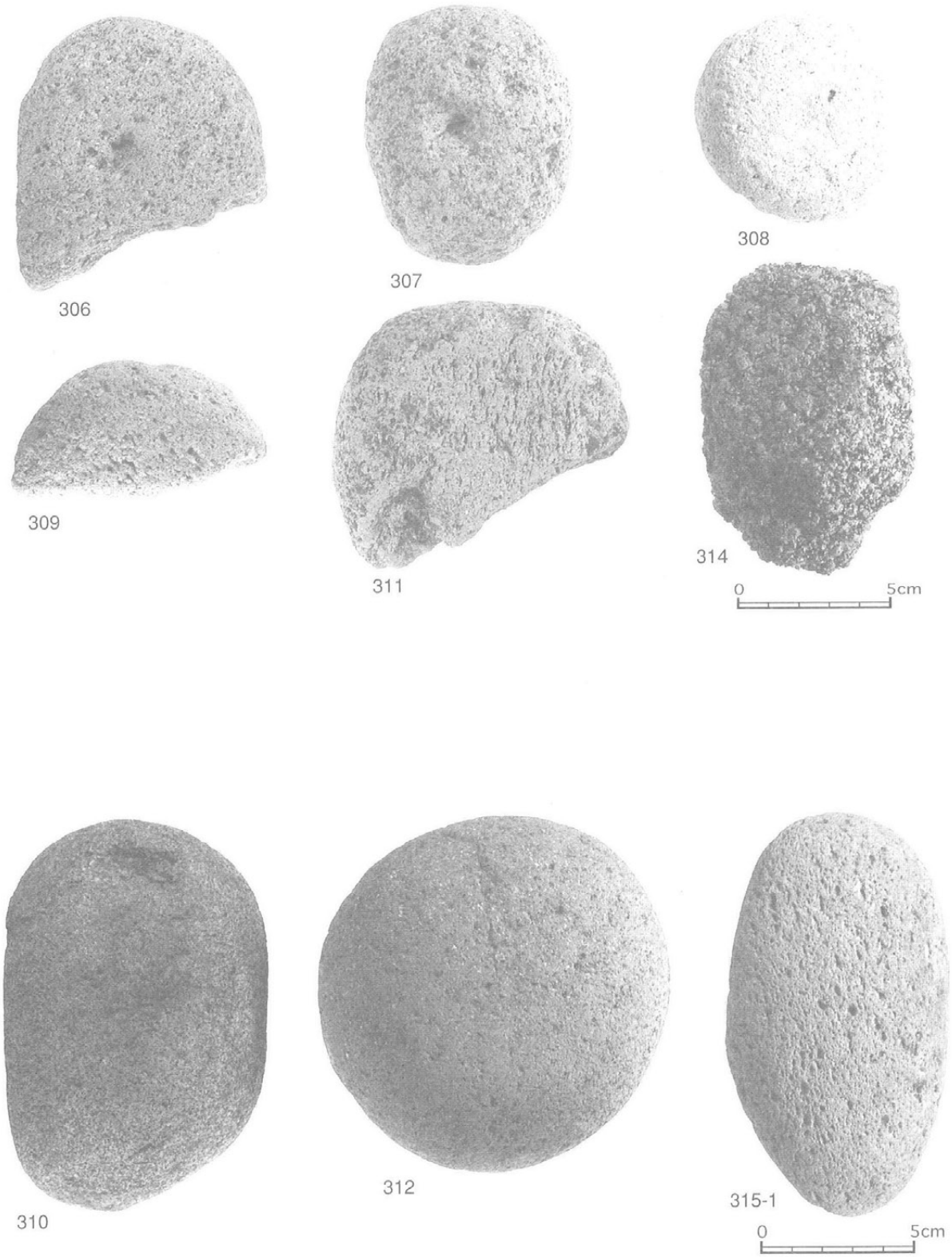
第51図　SB14（縄文中期中葉）出土石器



第52図　SB14（縄文中期中葉）出土石器



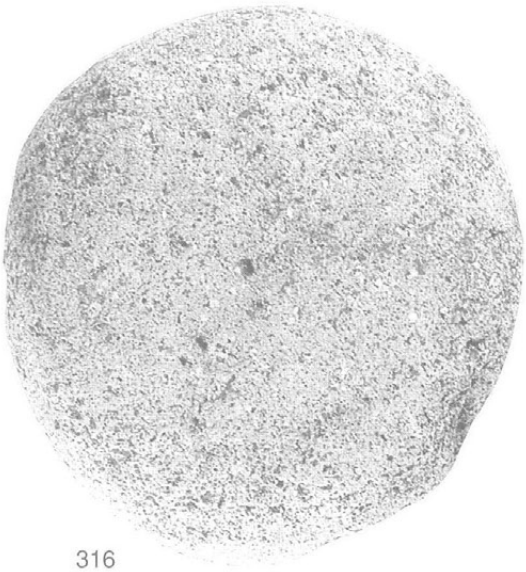
第53図　SB14（縄文中期中葉）出土石器



第54図　SB14（縄文中期中葉）出土石器

315-2

0　5cm



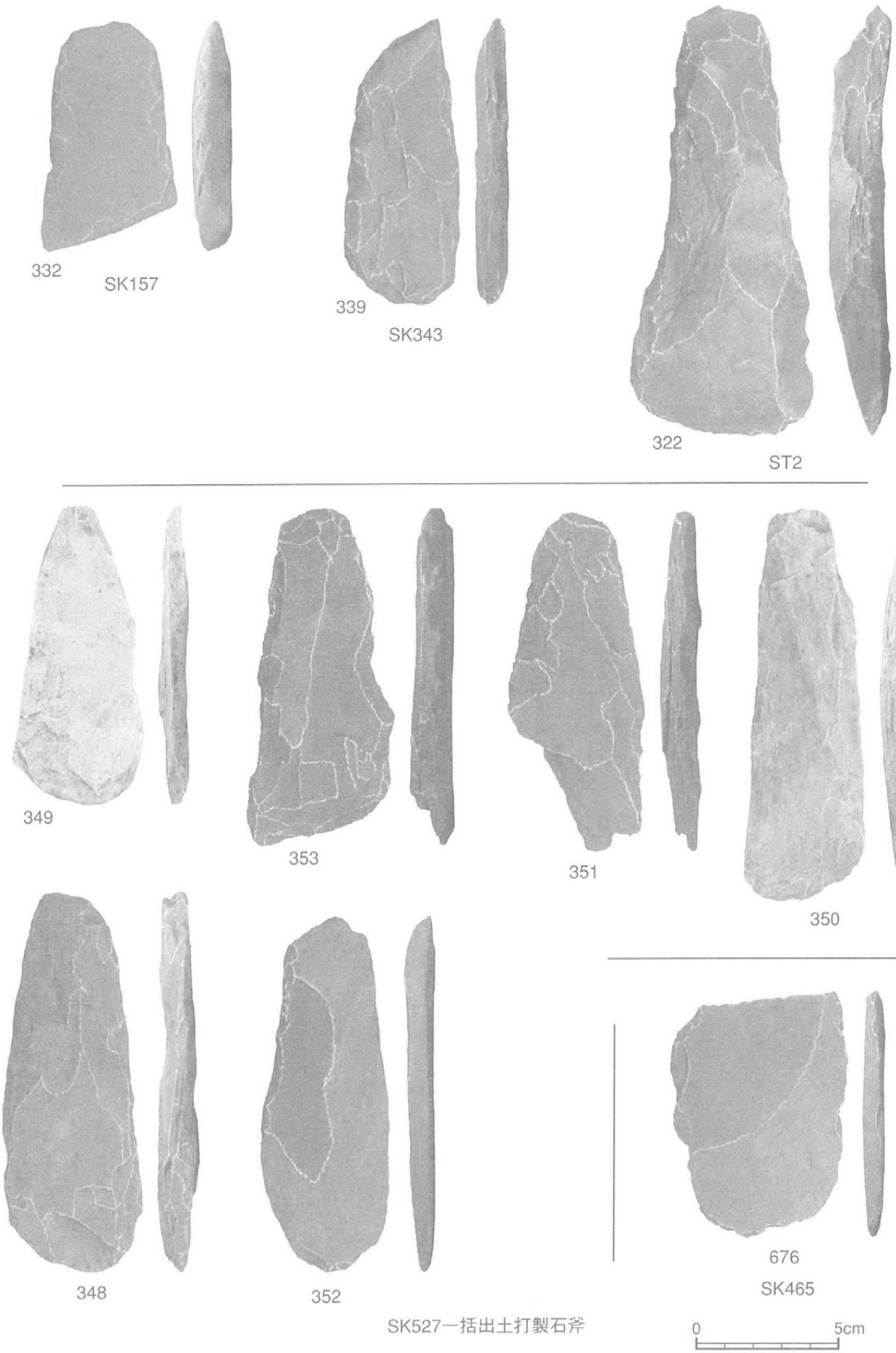
316

0　5cm

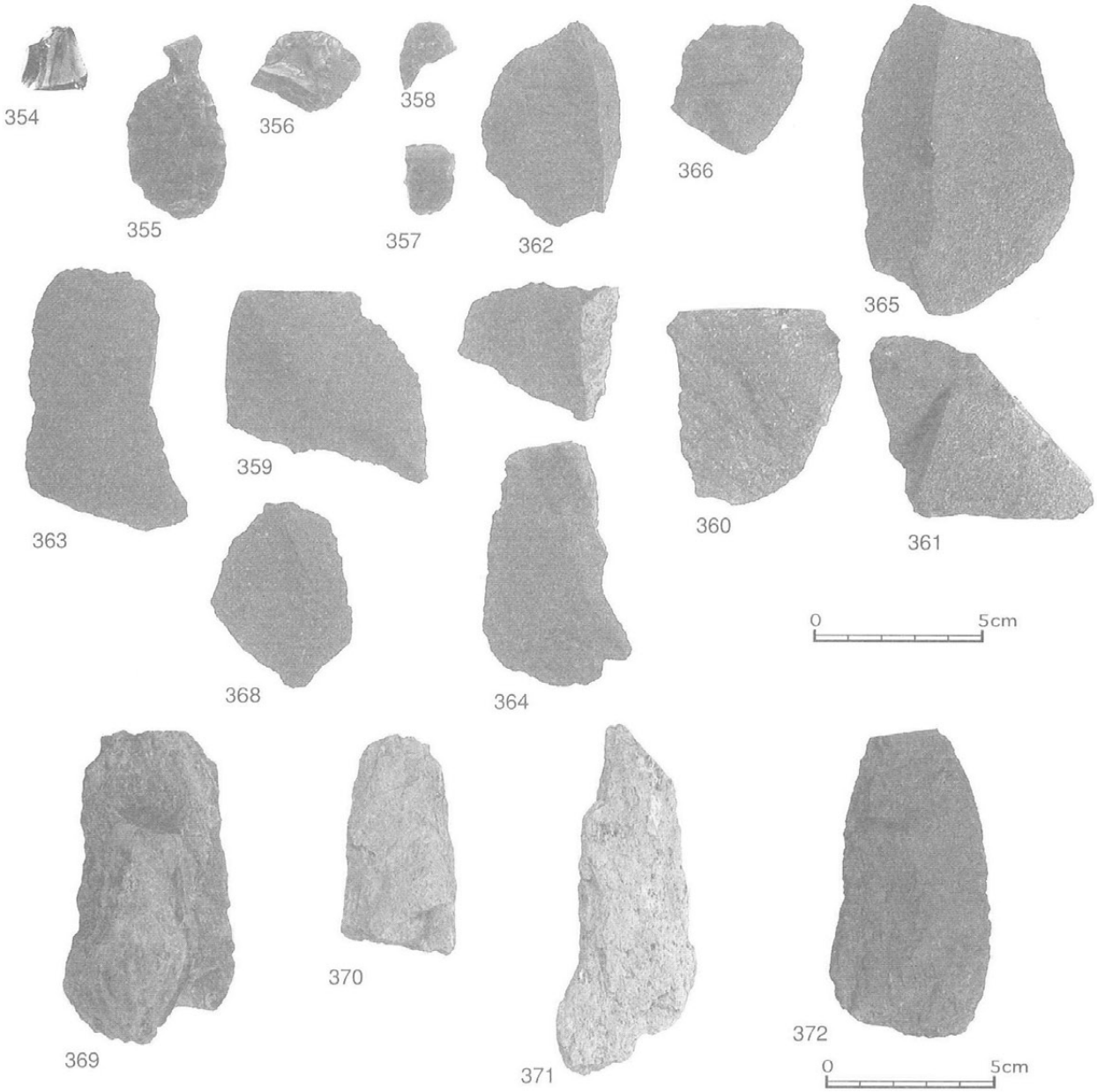
317

0　5cm

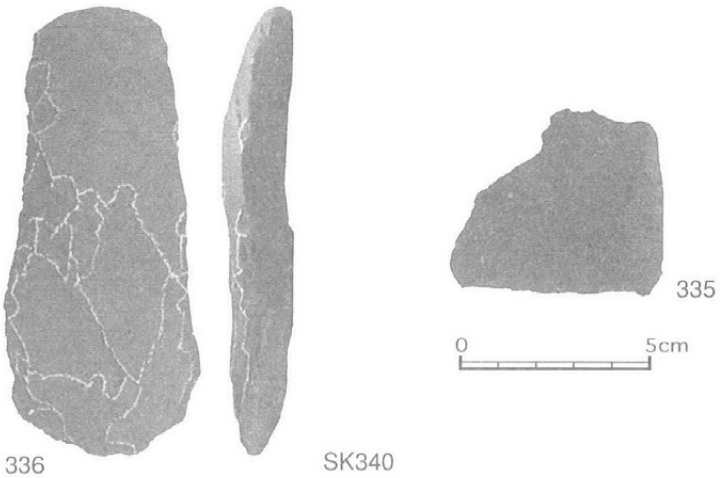
第55図　SB14（縄文中期中葉）出土石器



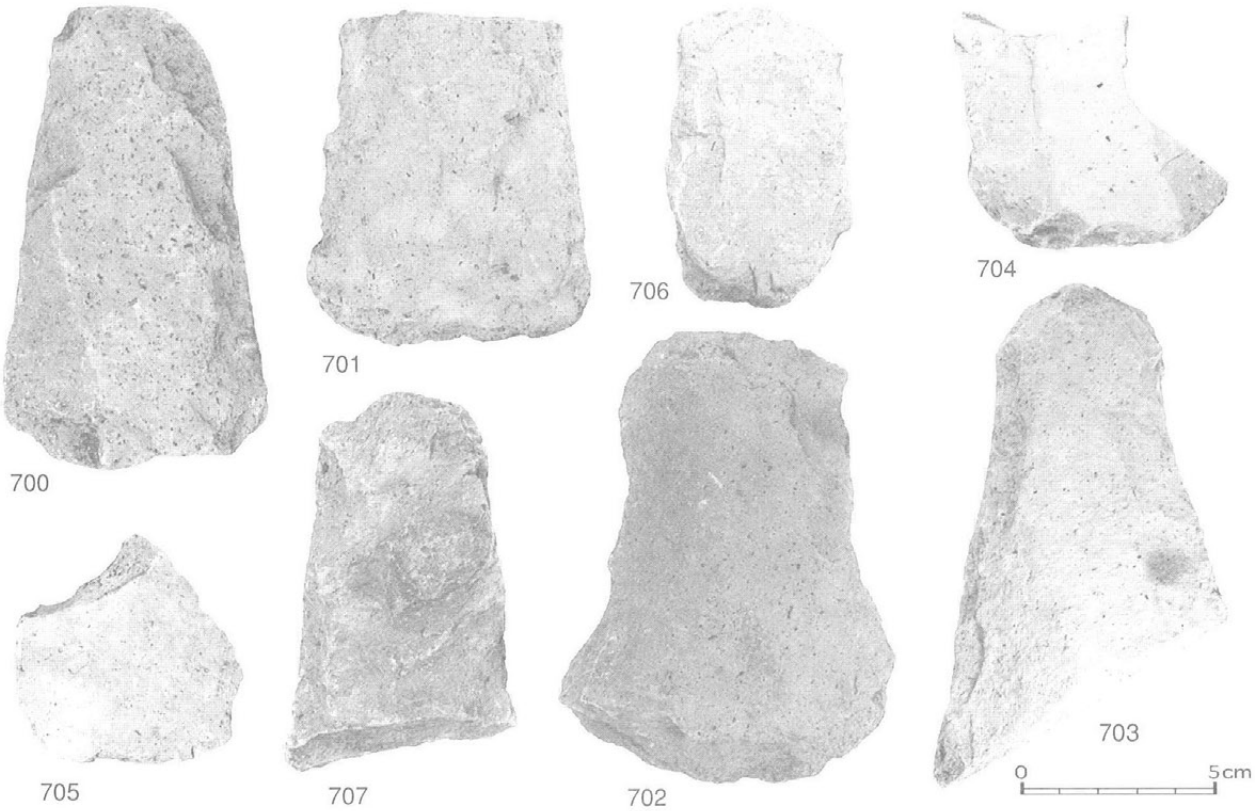
第56図　SK・ST（縄文中期中葉）出土石器

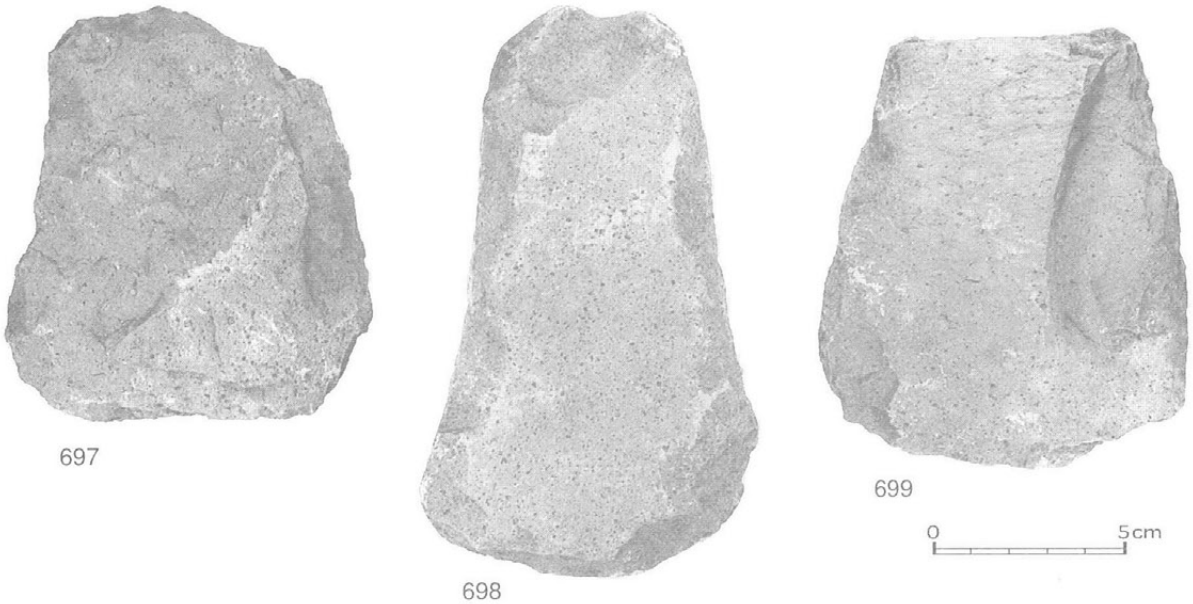


第57図　SQ１出土石器（縄文中期中葉）

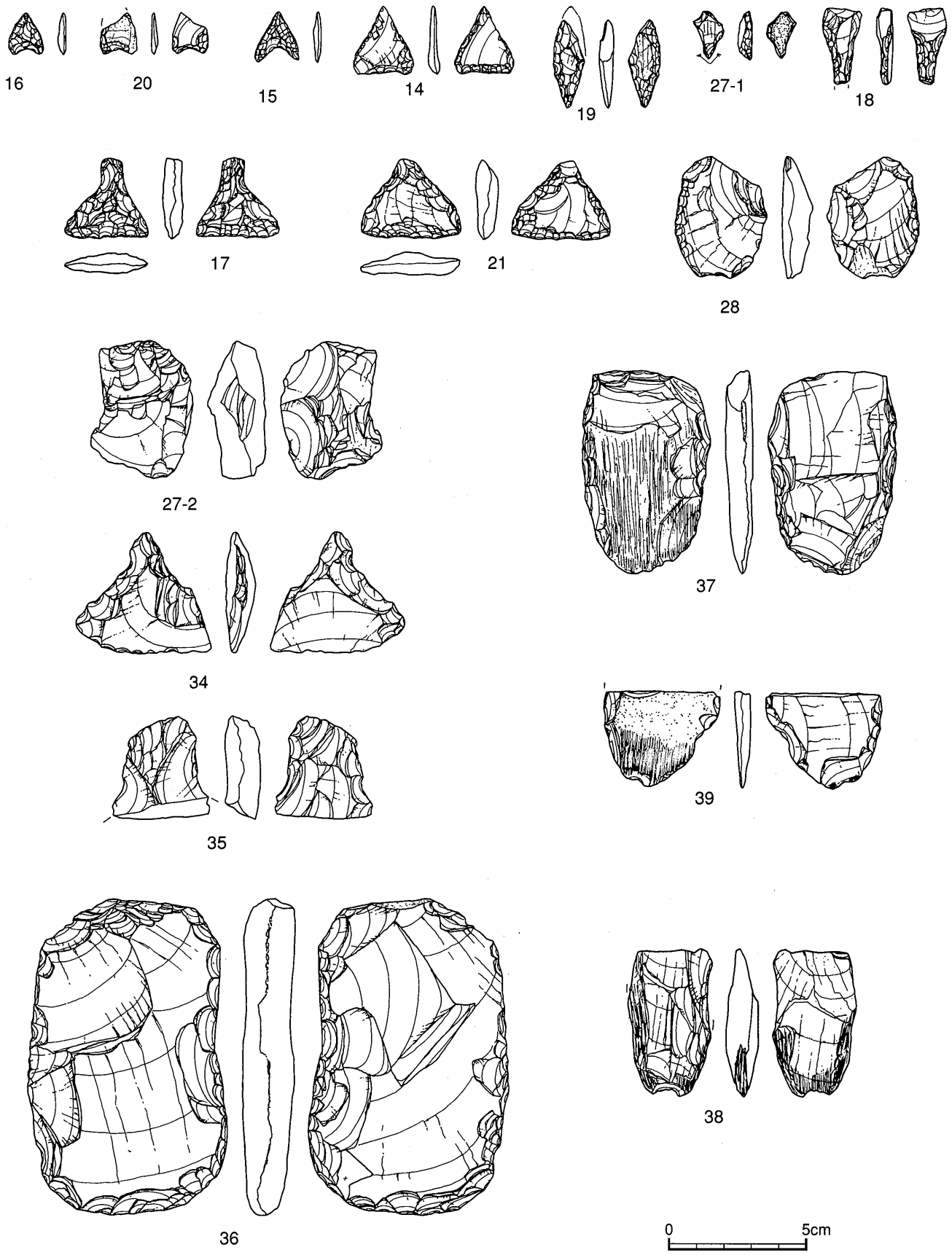


第58図　SK出土石器（縄文後期）

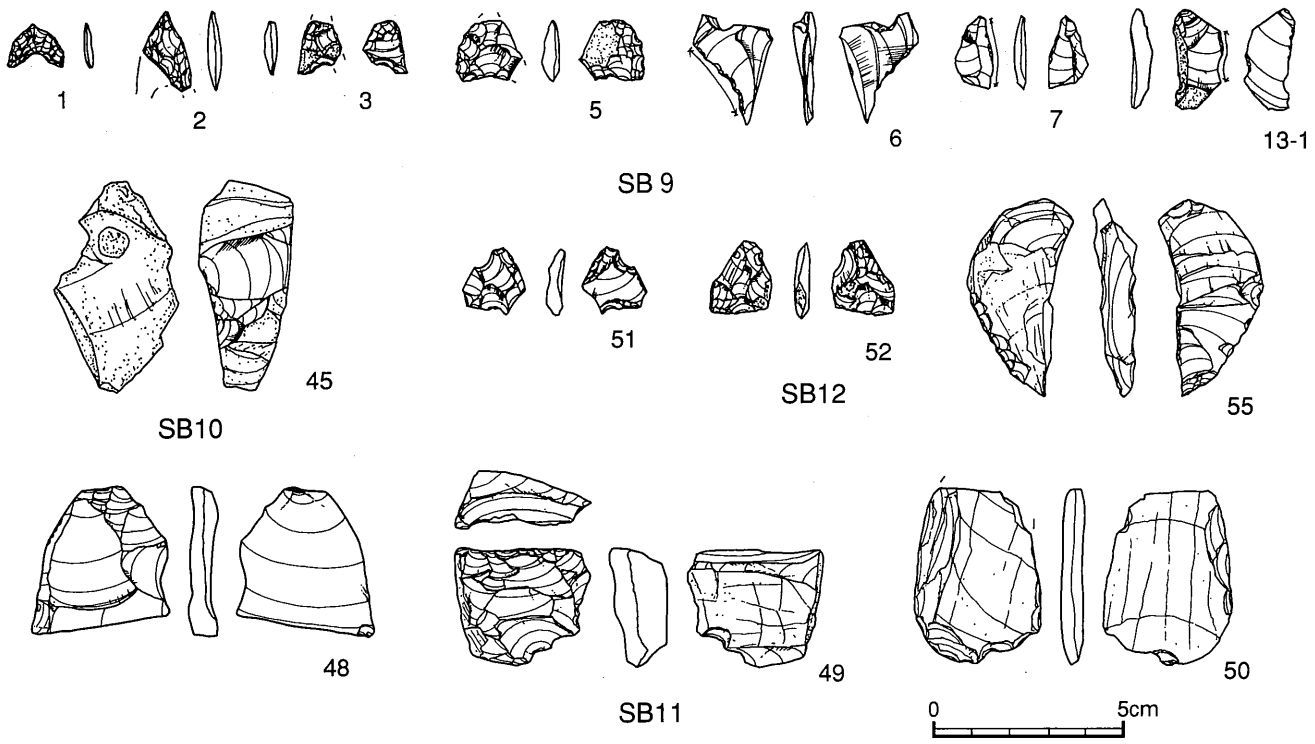




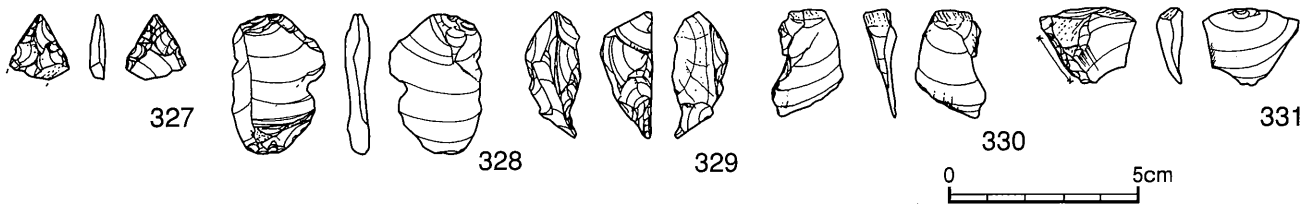
第59図　遺構外出土石器(縄文晩期－弥生)



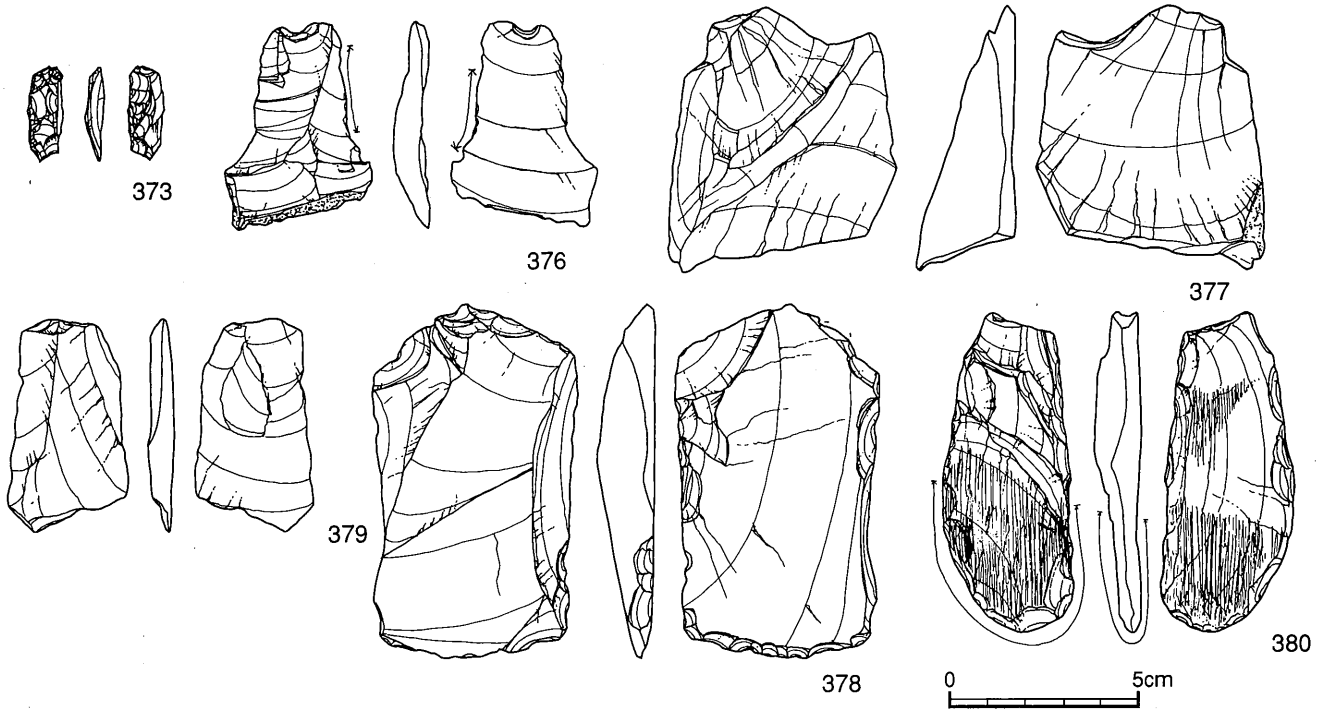
第60図　SB９（縄文前期末葉）出土石器実測図



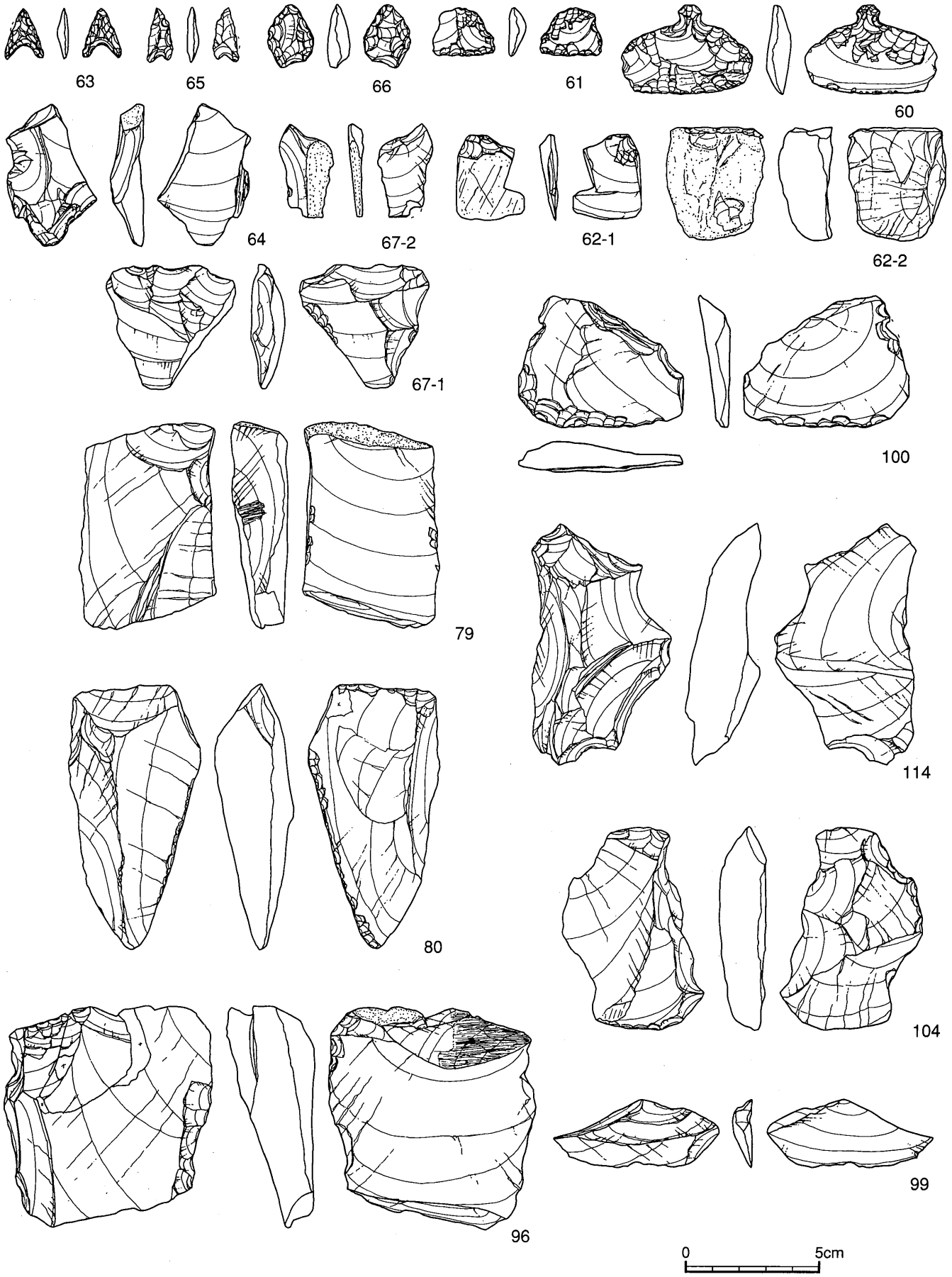
第61図　SB9，10，11，12（縄文前期末葉）出土石器実測図



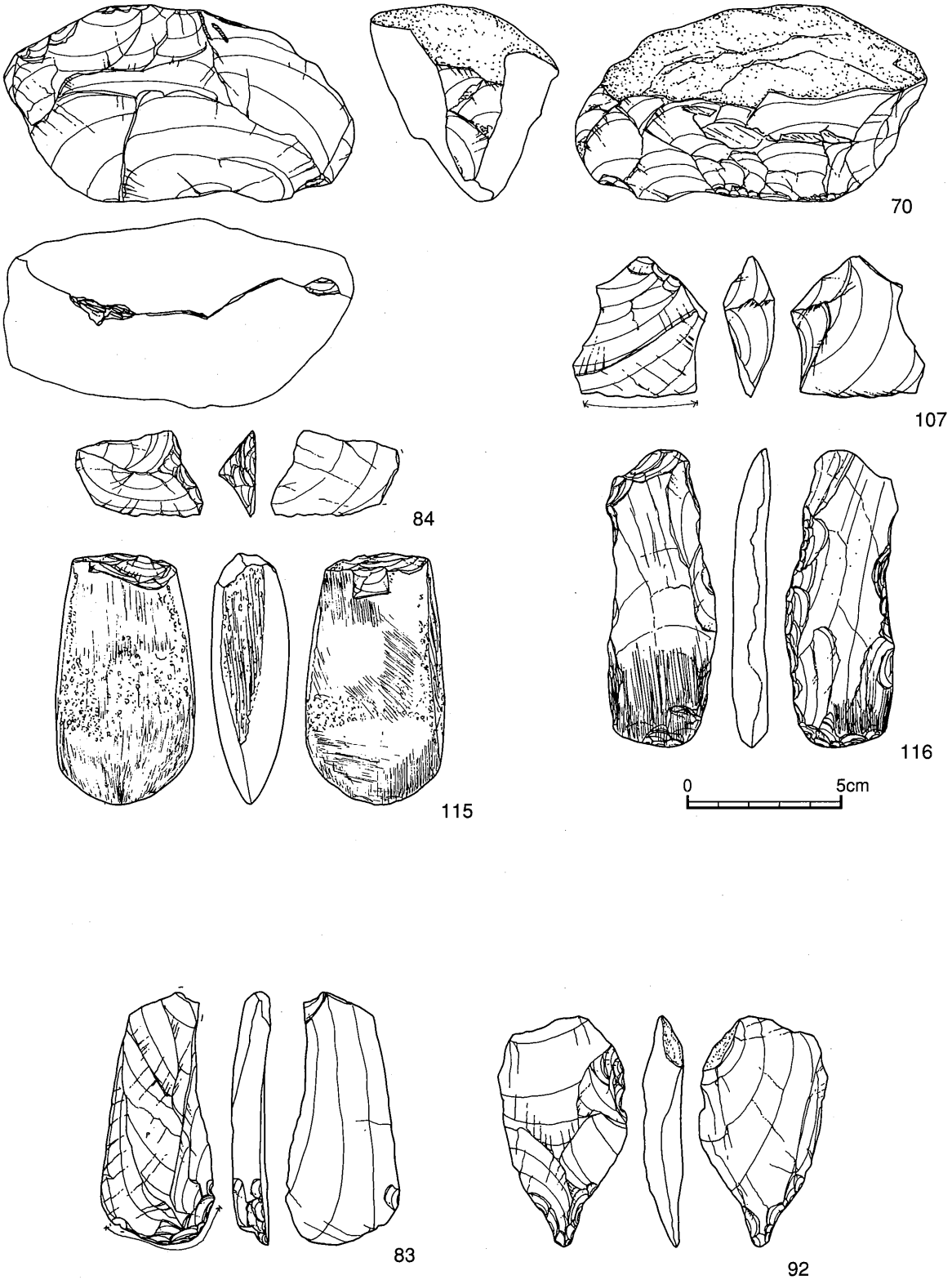
第62図　SK153（縄文前期末葉）出土石器実測図



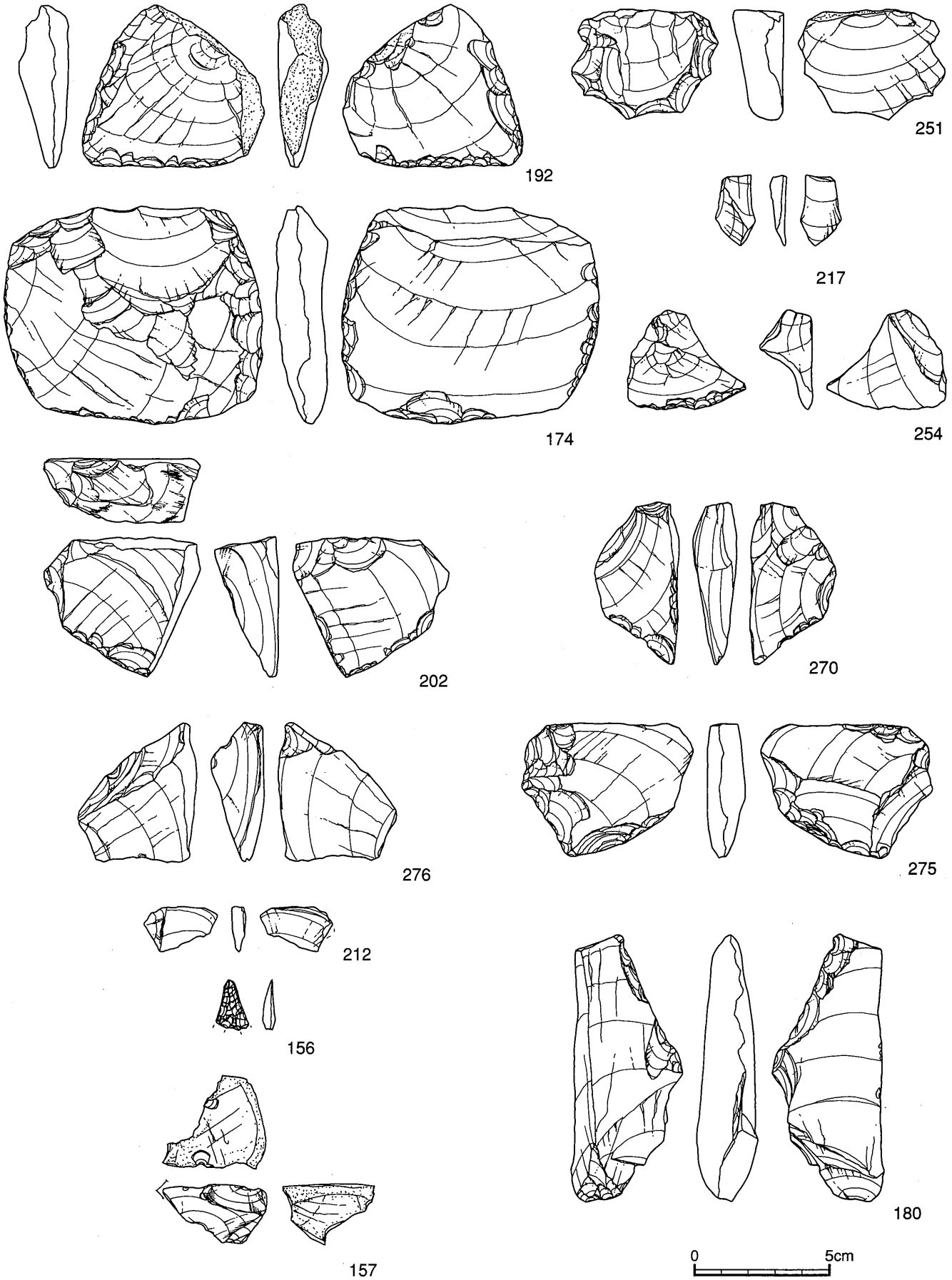
第63図　SQ２（縄文前期末葉）出土石器実測図



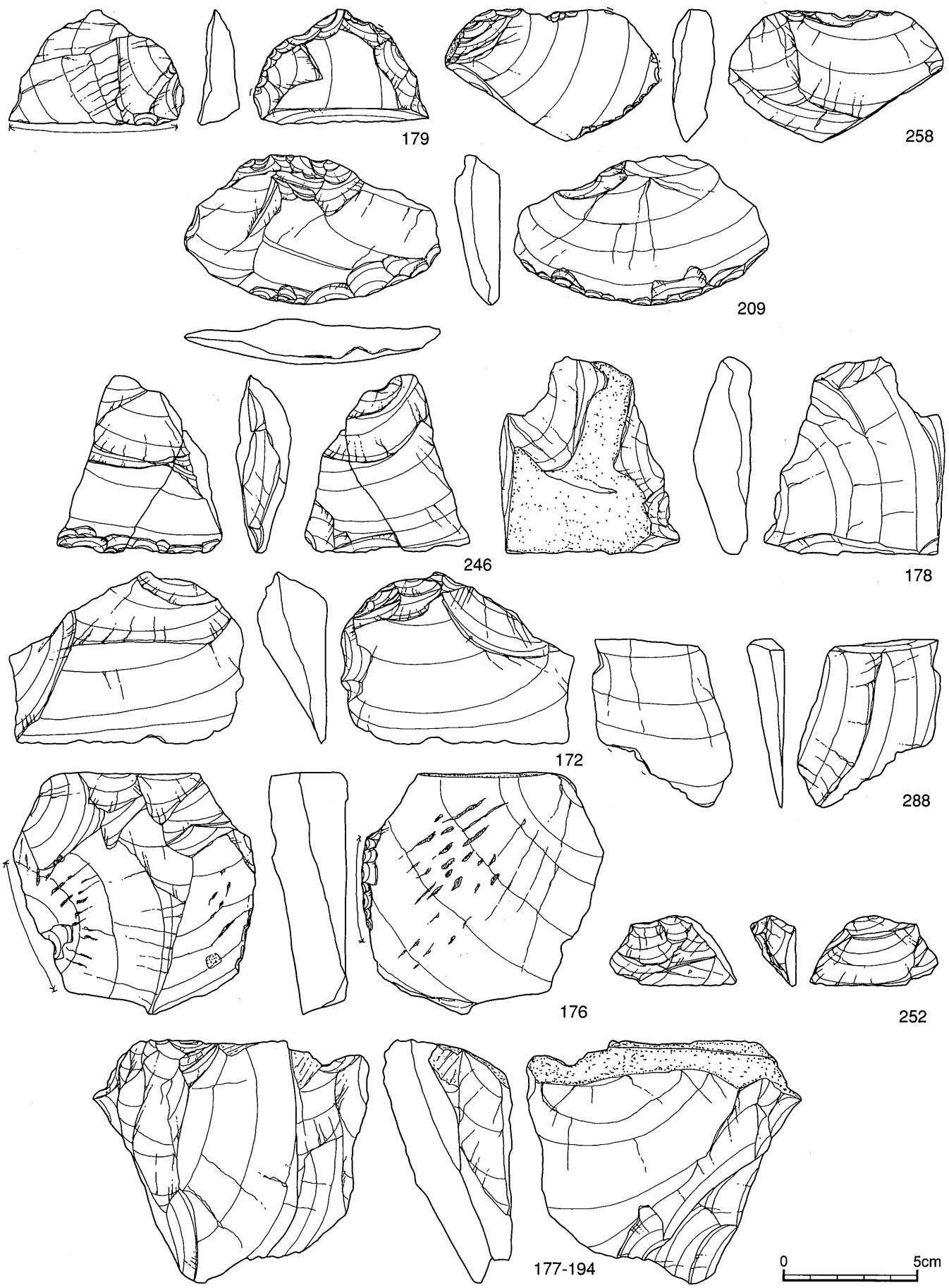
第64図　SB８（縄文中期中葉）出土石器実測図



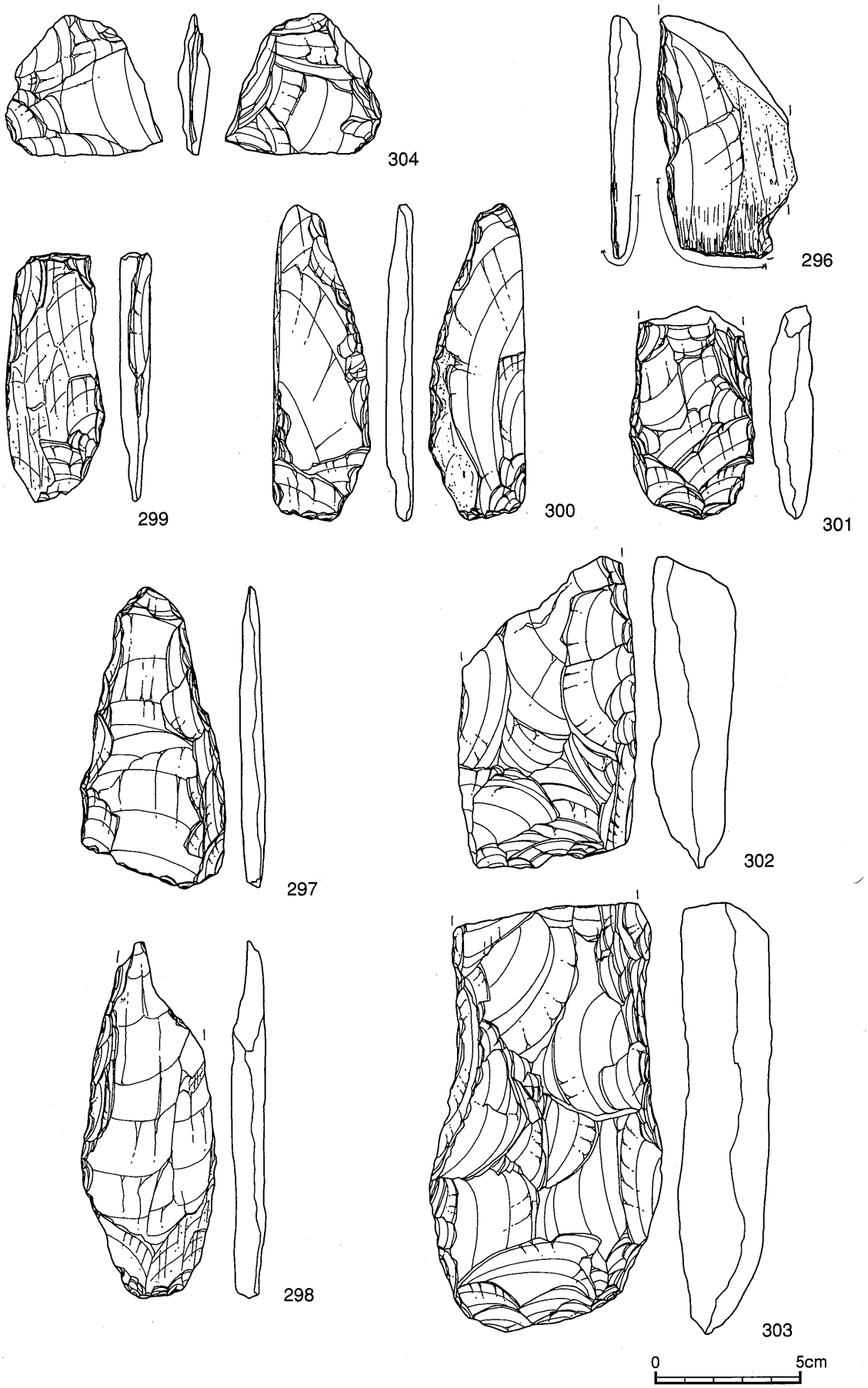
第65図　SB８（縄文中期中葉）出土石器実測図



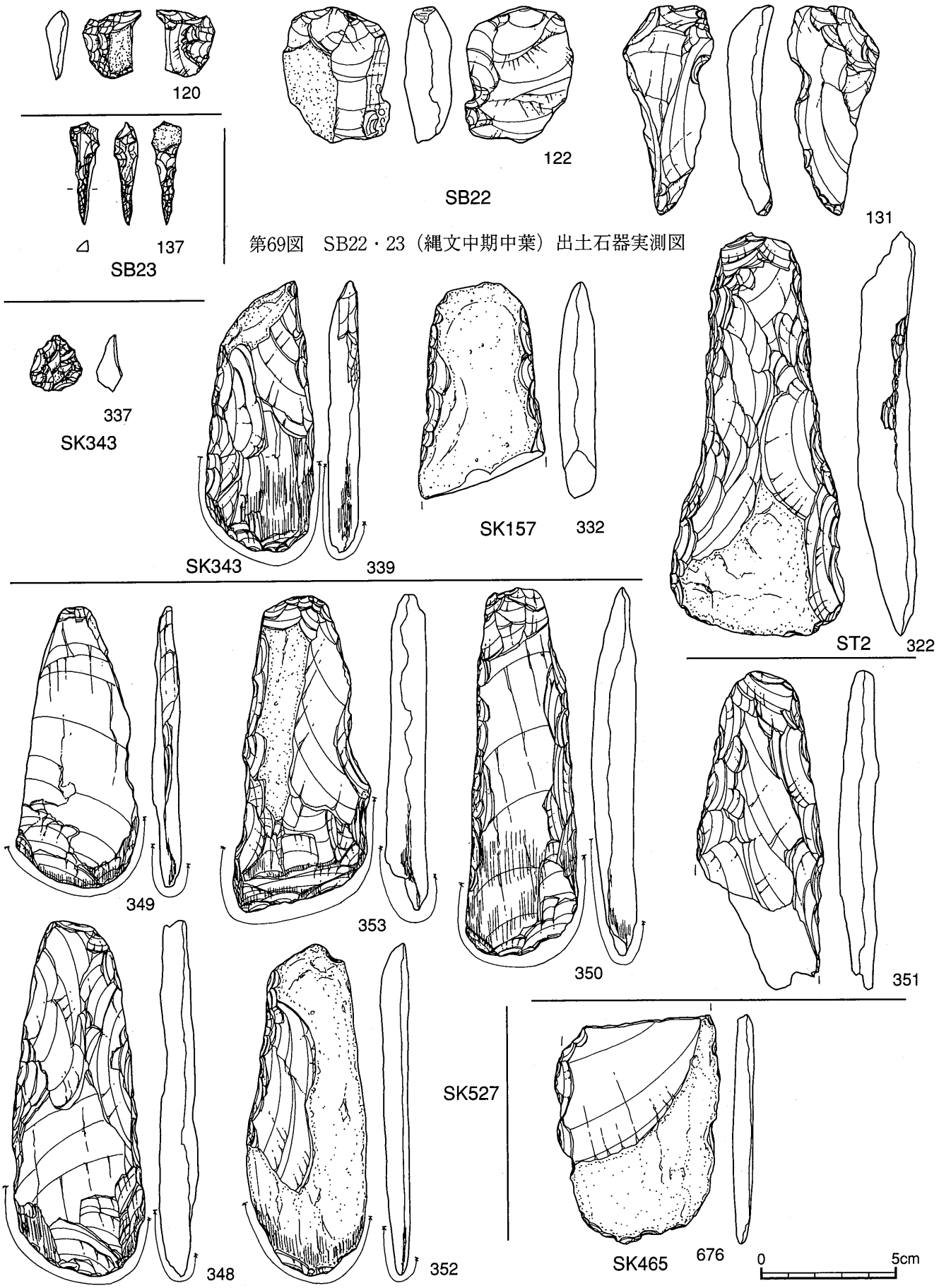
第66図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図



第67図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図

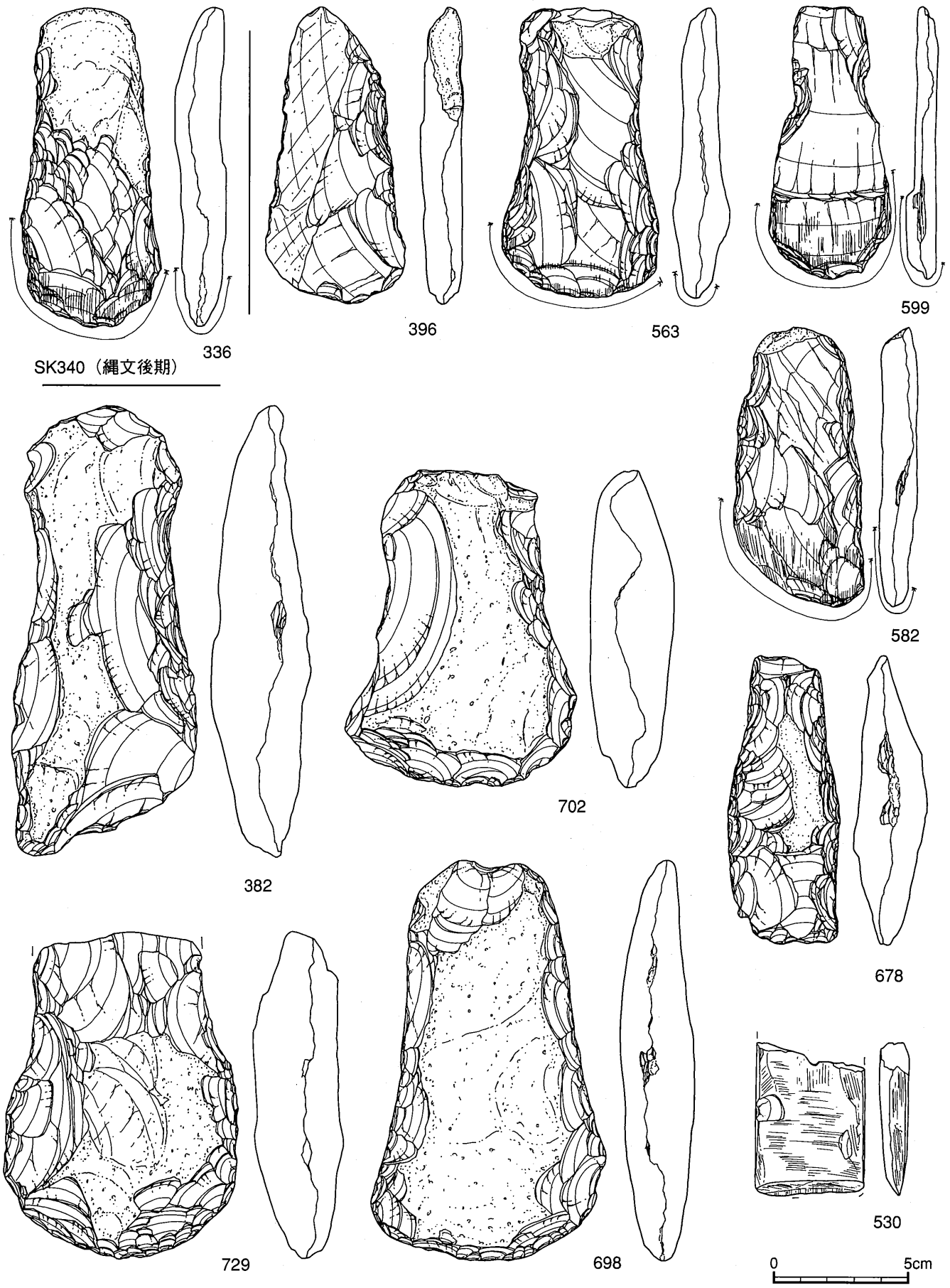


第68図　SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図



第69図　SB22・23（縄文中期中葉）出土石器実測図

第70図　SK（縄文中期中葉）出土石器実測図



第71図　SK・遺構外出土石器実測図

また次項の使用痕分析によると、珪岩・黒曜石・下呂石は動物資源に対応すると分析されたが、その点からは、前期末葉と中期の石器の内容の差異は、獲得する資源の選択に異変が起きたとも解釈できよう。

今回の分析を通じて、縄文土器の型式変化（段階）が、石器の内容の変化（石材と器種の量の変化）と対応している点が確認された。また、後述する使用痕分析の結果を援用すれば、前期が動物資源に偏り、中期がそれ以外の資源利用という仮説を導き出されたことが、ひとつの成果である。

（角張淳一）

3．使用痕分析

小島遺跡は縄文文化前期から中期にかけて営まれた集落遺跡であり、木曽谷における縄文集落の一つとして重要な遺跡である。

この小論では、使用痕分析を通して小島遺跡出土剥片石器の機能について考察していきたい。

1）資料の選択

住居ならびにピット、グリッド出土の30点の石器を分析した。石材はチャート、黒曜石、下呂石である。安山岩は表面風化のため、分析対象から外した。分析した石器器種は、石錐、石匙、刃器、削器であり、両極石器や剥片などは除外した。

2）観察方法

キーエンス社のデジタルＨＤマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている（梶原・阿子島　1981）。微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島　1981）を用いた。

チャートと黒曜石の光沢タイプは御堂島に準じた（御堂島　1986,88）。

3）分析結果

分析の結果、10点の石器に使用痕が確認できた。以下、その中から石匙2点について下記に詳述した後、全体の結果をまとめる。

他の石器については、使用痕属性表のデータを参照されたい。属性表の中に、「なし」「不明」の項目がある。「なし」は何も確認できなかったことを指し、「不明」は痕跡が残されているが、不明瞭であるため、光沢タイプなどを決定することができない項目である。

（石匙）

No.60　チャート製の横形石匙である。

［刃部］刃部は片面加工で直線に近い刃部の形態である。

［表面状態］良好である。

［光沢］刃部に、粗いが割と広範囲に広がる光沢がみられる。表面は滑らかな部分もあるが、全体に荒れた様相を呈し、Ｅ２タイプ光沢と考えられる（第72図：写真１－２）。刃部以外の縁辺には、こうした痕跡はみられなかった（同上：写真３）。

［線状痕］縁辺に対して、平行方向に走る線状痕がみられた。

［推定される作業］確認できた光沢や線状痕などから、皮・肉などの切断に利用されたと考えられる。

第３表　使用痕属性表

時　代	段階	遺構名	通番	石　材	器　種	光　沢	線状痕	摩　耗	図　版
前期末	A	SB９	6	黒耀石	刃器	なし	平行？	軽微	
前期末	A	SB９	7	黒耀石	刃器	I	直交	軽微	
前期末	A	SB９	17	珪岩	石錐	不明	不明	不明	
前期末	A	SB９	18	珪岩	石錐	なし	なし	軽微	
前期末	A	SB９	19	珪岩	石錐	F	直交	中程度	
前期末	A	SB９	21	珪岩	石錐未製品	E２	平行	中程度	
前期末	A	SB９	27	珪岩	石錐	E２	直交	軽微	
前期末	A	SB９	28	下呂石	削器	不明	不明	軽微	
前期末	A	SB11	48	珪岩	刃器	E	不明	中程度	
前期末	A	SB12	55	珪岩	石錐	F１?	平行	軽微	
前期末	A	SB12	57	下呂石	刃器	不明	直交？	軽微	
中期中葉	B１	SB８	60	珪岩	横形石匙	E２	平行	中程度	図１上
中期中葉	B１	SB８	64	下呂石	掻器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B１	SB22	120	黒耀石	削器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B１	SB22	124	珪岩	刃器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B１	SB23	137	黒耀石	石錐	なし	直交？	軽微	
中期中葉末	B３	SB14	160	珪岩	石錐	不明	不明	軽微	
中期中葉末	B３	SB14	164	下呂石	石錐	なし	なし	軽微	
中期中葉末	B３	SB14	165	下呂石	刃器	不明	平行	軽微	
中期中葉末	B３	SB14	166	下呂石	刃器	なし	なし	なし	
中期中葉末	B３	SB14	167	下呂石	刃器	不明	平行？	軽微	
前期末	A	SK153	326	黒耀石	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SK153	328	珪岩	刃器	F?	不明	軽微	
前期末	A	SK153	329	珪岩	石錐	E?	直交	中程度	
前期末	A	SK153	331	珪岩	刃器	F?	不明	軽微	
中期中葉末	B３	SQ１	355	珪岩	縦形石匙	不明	不明	中程度	図１下
中期中葉末	B３	SQ１	357	珪岩	極小石錐	不明	不明	軽微	
前期末	A	SQ２	373	黒耀石	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SQ２	375	珪岩	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SQ２	376	珪岩	刃器	なし	なし	なし	

No.355　チャート製の縦形石匙である。

［刃部］両面加工で、割と直線的な刃部である。

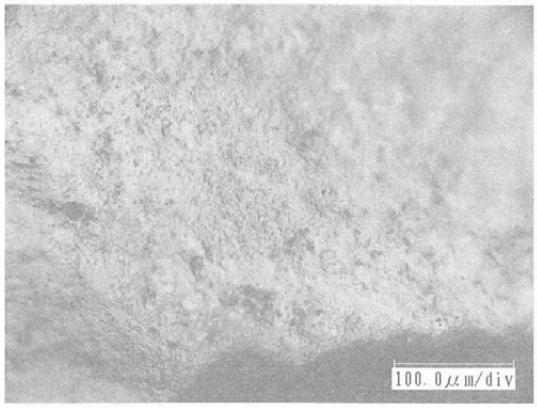
［表面状態］全体に光沢で覆われている（同上：写真２）。

［光沢］、縁辺の稜上に摩耗と光沢がみられた（同上：写真１）。石器表面にみられる光沢と異なる点は、縁辺の光沢は摩耗をともなうことであり、表面とは様相が異なる。

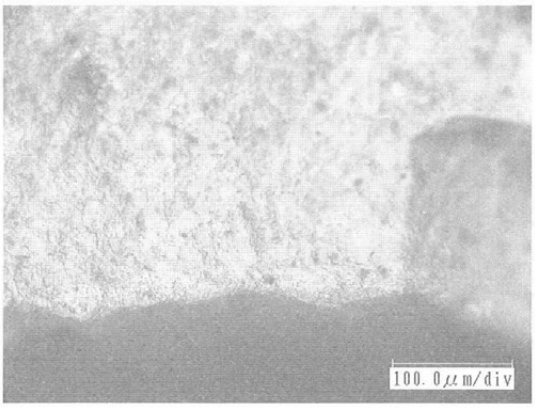
［線状痕］縁辺に対して、平行方向に走る線状痕がみられた。

［推定される作業］光沢タイプは不明であるが、微小剥離痕が発達しないことから、被加工物は皮や肉など柔らかいものが考えられる。

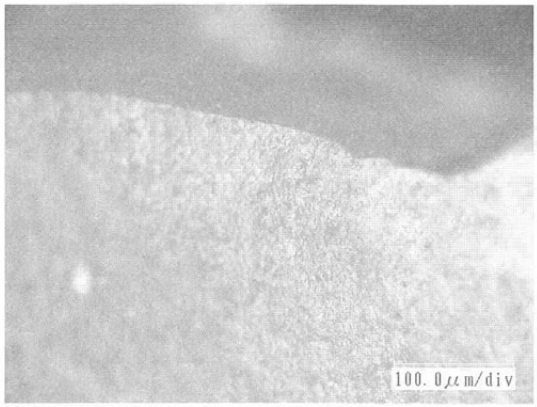
（刃器・削器）



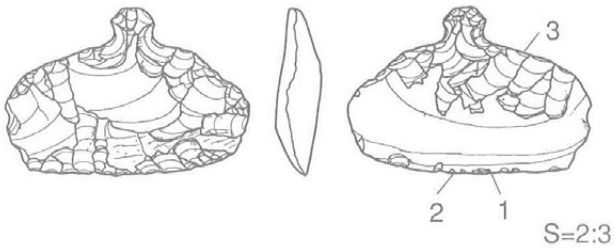
1　E2タイプ光沢



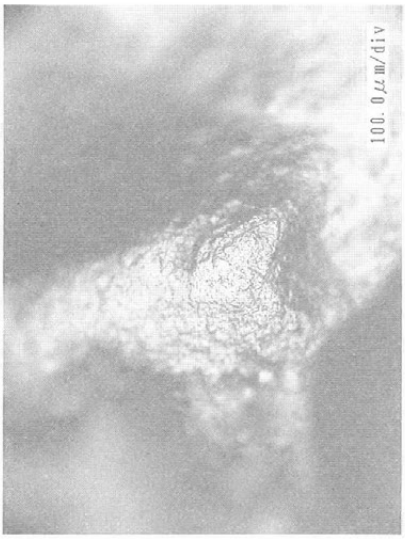
2　E2タイプ光沢



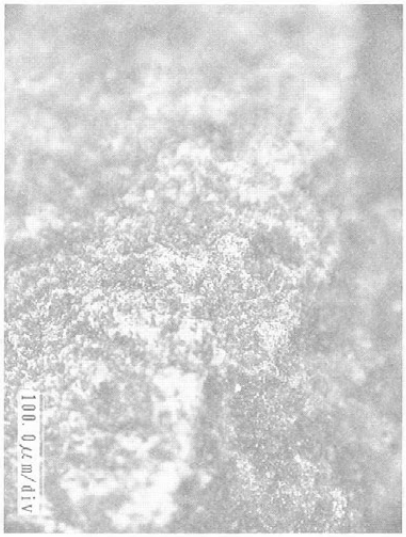
3　刃部以外の縁辺の状況



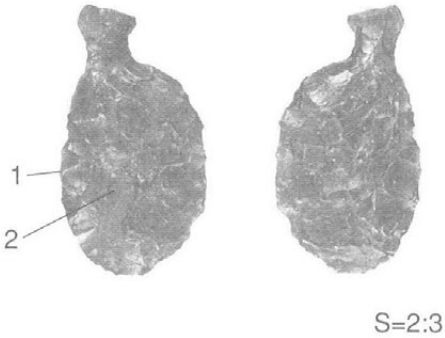
SB8出土　MOJ-60



1　稜上にみられる光沢と摩耗



2　石器の表面



SQ1出土　MOJ-355

第72図　石器の使用痕写真

刃器・削器は、確認できた光沢はＥやＦタイプであり、他の光沢タイプはみられなかった。線状痕は平行方向がほとんどであるため、主に被加工物の切断に使用されたと推定される。被加工物は、微小剥離痕の発達が弱いことから比較的柔らかいものが考えられ、さらに光沢タイプから、肉や皮などが想定できる。使用痕の発達は石匙の方が強いことを除けば、刃器・削器にみられた使用痕と石匙とは、非常に近い内容であるといえる。

（石錐）

石錐は、明確な光沢はみられないが、軽微の摩耗がみられた。１点棒状の形態に中程度の摩耗がみられ、他の摘みつき石錐と、摩耗の程度が異なる。

※時期的変遷

小島遺跡は縄文前期、中期中葉と後葉の３時期に大きく分かれる。剥片石器の使用痕分析の結果では、この３時期に大きな相違は認められなかった。

４）まとめ

小島遺跡の使用痕分析の結果、チャートや黒曜石、下呂石製剥片石器は、主に動物資源の処理に利用されていたことが考えられる。この傾向は、縄文前期から中期にかけて、大きく異なることはなく、前期・中期を通して、石器の使用方法は同じであったと考えられる。

最後に木曽谷における使用痕分析の今後の大きな課題をとりあげたい。この遺跡の主要な石器の一つに、安山岩製石器がある。特に中期になると、その出土量は、チャートや黒曜石などの剥片石器を圧倒的にしのいで出土している。安山岩製石器の刃部を観察すると、低角度と急角度があり、また微小剥離痕や摩耗の発達程度に変位がある。それぞれ作業に適した刃部が作出されたと思われる。

小島遺跡の剥離技術分析などを属性分析にかけた結果、前期と中期の間に大きな有意性が確認された。一方で、中期内での有意性はそれほどでない。この差の大きな原因の一つに安山岩製石器の存在があると考えられる。つまり、中期以降、小島遺跡において、安山岩製石器の果たした役割が大きくなり、安山岩製石器が小島遺跡における生業活動に大きくかかわったと考えられる。

木曽谷の縄文遺跡を研究する上で、安山岩製石器の分析は避けて通れない問題である。低倍率分析などによって線状痕や微小剥離痕など分析し、安山岩製石器の機能を追求していかなければならない。

（高橋　哲）

参考文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社

梶原洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その２）」『考古学雑誌』67-1　pp.1-35

御堂島正　1986「黒曜石製石器の使用痕－ポリッシュに関する実験的研究－」『神奈川考古』22　pp.51-77

1988「使用痕と石材-チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ-」『考古学雑誌』74-2　pp.1-28

第Ⅳ章　古代～中・近世の遺構と遺物

第１節　遺　　構

今回の発掘調査で出土した当該期に帰属する遺構は、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡１棟、土坑102基以上、柵列状遺構８条を数える。小ピット状のものが主体を占める土坑に不確実な調査所見が多く残されているが、ほぼすべて平安時代の所産と考えられ、数時期にわたる集落遺跡の存在が明らかとなった。調査区外になお多くの遺構の存在が予測されることから、遺跡と集落をめぐる全体像の解明については、前章に記した原始時代のそれと同様に、今後の調査に委ねられた重要な課題といえる（第73図）。

以下、調査された遺構の個別的な記録を所見とともに記す。

１）竪穴住居跡

SB１（第74図、図版８）

位置　上位段丘面のⅣ区、Ｃ－13グリッドに位置する。南西側にSB２が分布する。

形状　平面形は方形を呈すると思われるが、北半分は不明瞭である。推定長径480cm、短径360cm以上、確認部の床面積14.27m²を測る。長軸方向はＮ－72°－Ｗを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、確認部の最大壁高は50cmを測る。確認面は基本土層ＡのⅢ層である。

覆土　３層に分けられる。第３層は観察記録を欠いているが、貼床埋土にあたる。

第１層　暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の焼土・炭化物を含む。）

第２層　暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける。）

床面　Ⅲ層中に形成されていた。やや起伏をもち、床面中央部付近には比較的平坦な貼床面が形成されていた。

柱穴　認められなかった。

カマド　南西隅近くに構築されていたものと思われる。上部に粘性のある土が堆積していたほか、焼土面には構造材と思われる平たい礫が敷かれたように遺存していた。上部構造など全容は不明である。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中より光ヶ丘１～大原２号窯式期の碗１点、灰釉陶器片１点、土師器坏１点、甕１点、土師器片６点、カマド付近より灰釉陶器碗１点（大原２号窯式？）が出土した（第89図１～４）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原２号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

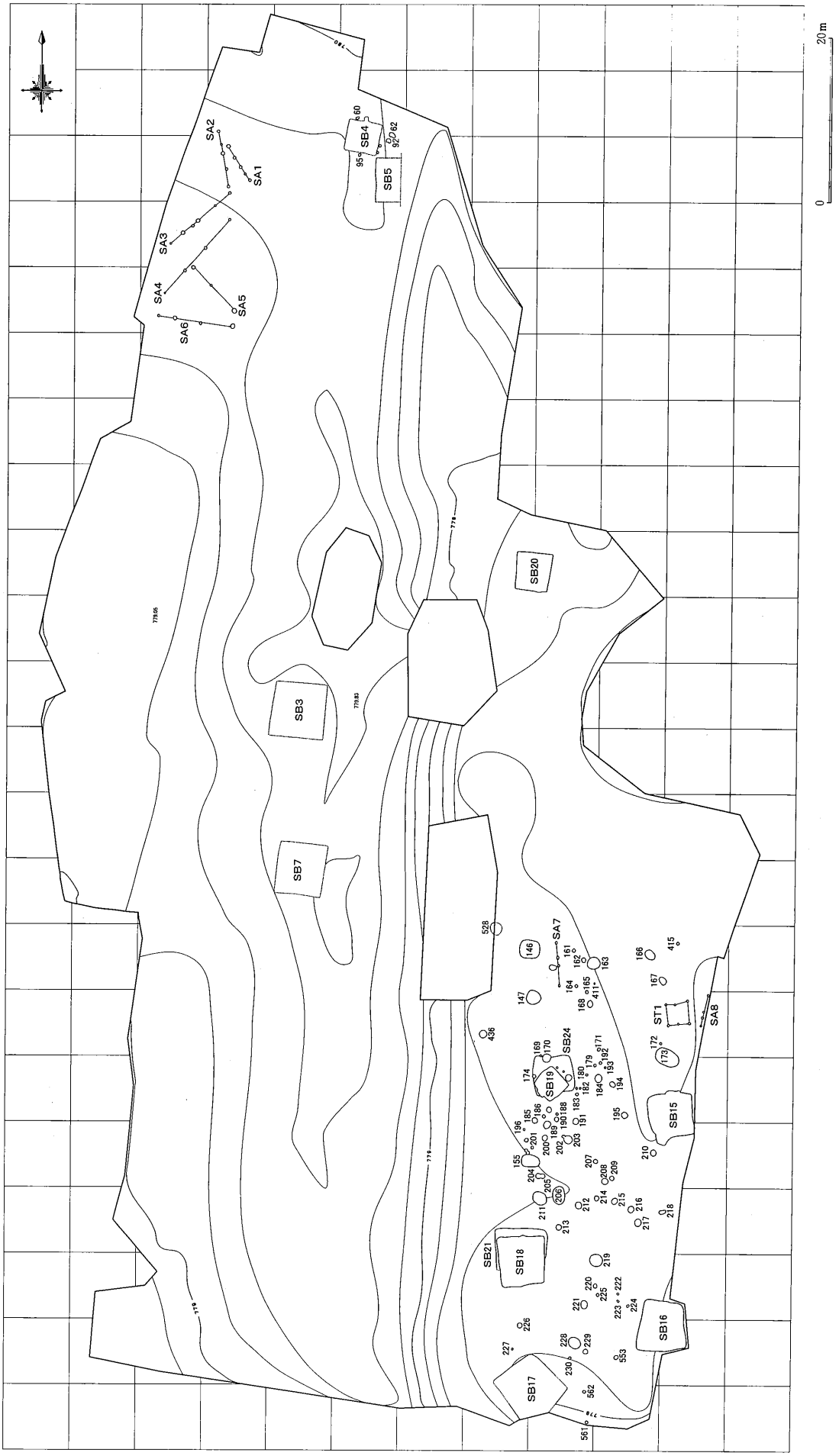
SB２（第75図）

位置　上位段丘面のⅣ区、Ｂ－14グリッドに位置する。北東側にSB１が分布する。

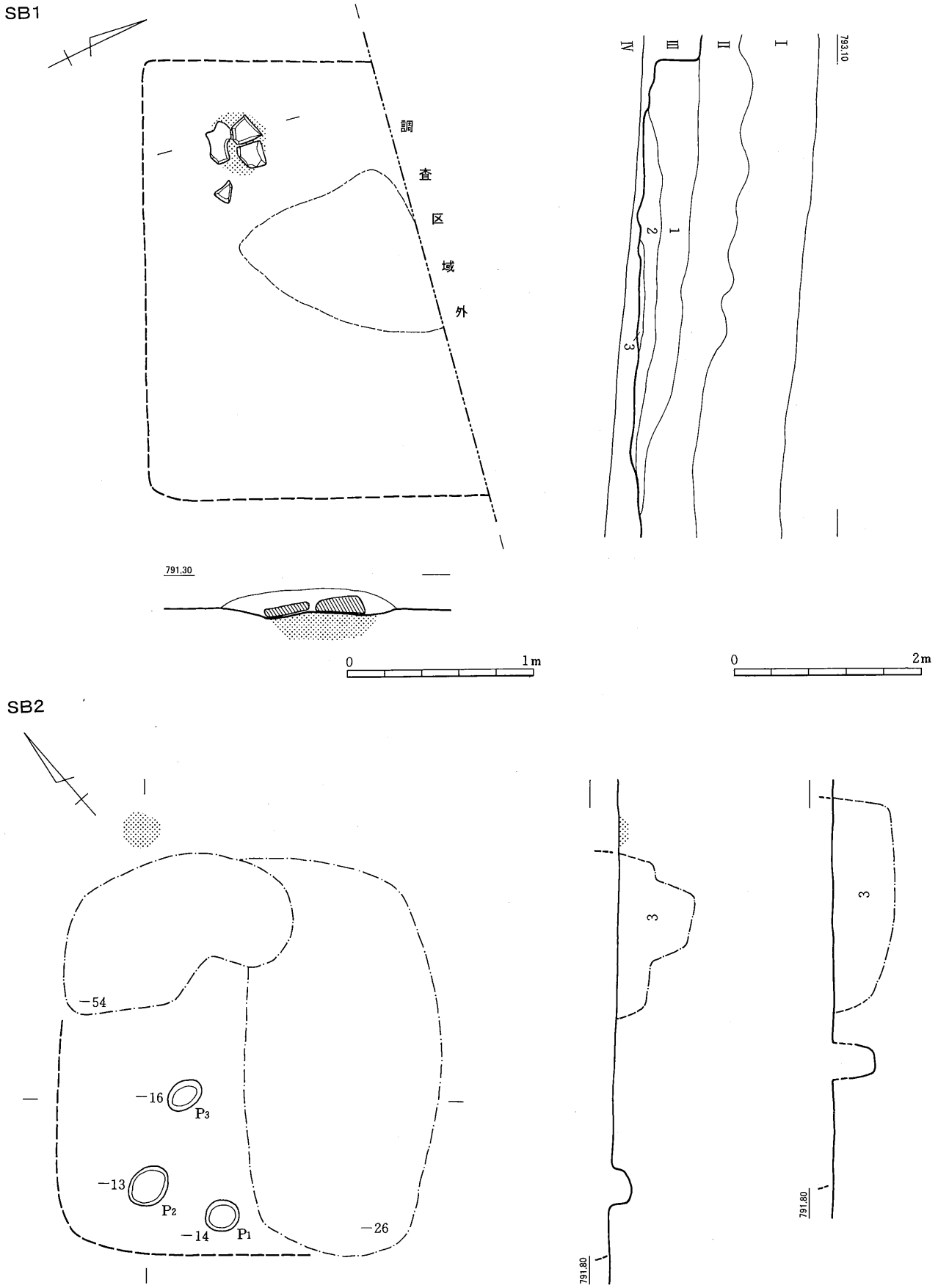
形状　各所に調査時の削平を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径410cm、推定短径400cm、確認部の床面積16.20m²を測る。長軸方向はＮ－44°－Ｅを示す。壁は確認できなかった。確認面は基本土層ＡのⅢ層である。

覆土　３層に分けられる。第３層は掘り方内埋土にあたる。

第１層　暗褐色土層（Ｐ２埋土）



第73図　古代・中世の遺構分布図（1：700）



第74図　SB1・2　実測図

第２層　黒褐色土層（Ｐ１・Ｐ３埋土）

第３層　暗褐色土層（掘り方埋土）

床面　Ⅲ層中に形成されているものと思われるが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。床面下部に広い範囲にわたって落ち込みが認められた。調査段階では本址に伴う掘り方と考えたが、70～80cmと非常に深く、推測の域を出ない。

柱穴　住居内南西側から３個のピットが検出された。口径35～50cm、深さ15～25cmを測る。本址に伴う柱穴の可能性も考えられるが、配列には規則性がみられず、断定できない。

カマド　北東隅近くに構築されていたものと思われる。焼土面が出土しただけであり、構造等の全容は不明である。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　掘り方内より灰釉陶器碗片１点（虎渓山１号窯式）が出土した（第89図２）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、虎渓山１号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB３（第75図、図版８）

位置　中位段丘面のＩ区、Ｒ－16グリッドに位置する。南側にSB７が分布する。

形状　全体に耕作による撹乱を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径670cm、推定短径670cm、確認部の床面積43.77m²を測る。主軸方向はＮ－83°－Ｗを示す。中央部から東側にかけて覆土が10cmほど堆積するものの、床面より上部はほとんど削平されており、壁は確認できなかった。

覆土　２層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の砂粒を含む。）

第２層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。少量の黄褐色土ブロック、多量の砂粒を含む。）

床面　中央部から東側にかけて粘土質の土を用いて貼床面が形成されていた。わずかに起伏をもつ。掘り方は南西部付近で部分的に検出された。範囲は確認できなかったが、深さは10cm以上と推測される。

柱穴　住居内より８個のピットが検出された。Ｐ１・８は口径64～70cm、深さ20～24cm、Ｐ２～７は口径30～40cm、深さ11～18cmを測る。中央部から東北部にかけて不規則に分布しており、主柱穴として特定できるものはみられない。

カマド　西壁ほぼ中央部に位置する。左袖部と焼土面以外は削平されている。袖は粘土で作られており、焼土面は掘り込みを伴う。東壁際より深さ５cmほどの掘り込みを伴う焼土面が認められたが、上部に特別な施設は認められず、カマドとの関係は不明である。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中よりカマド付近にかけて灰釉陶器片159点のほか、土師器・須恵器の小片、火打ち鉄１点などが出土している。光ヶ丘１号窯式期の碗１点、皿１点、大原２号窯式期の碗３点、皿７点、時期不明の碗１点、灰釉長頸壺１点、土師器甕１点、須恵器片１点を図示した（第89・94図６～20、115）。

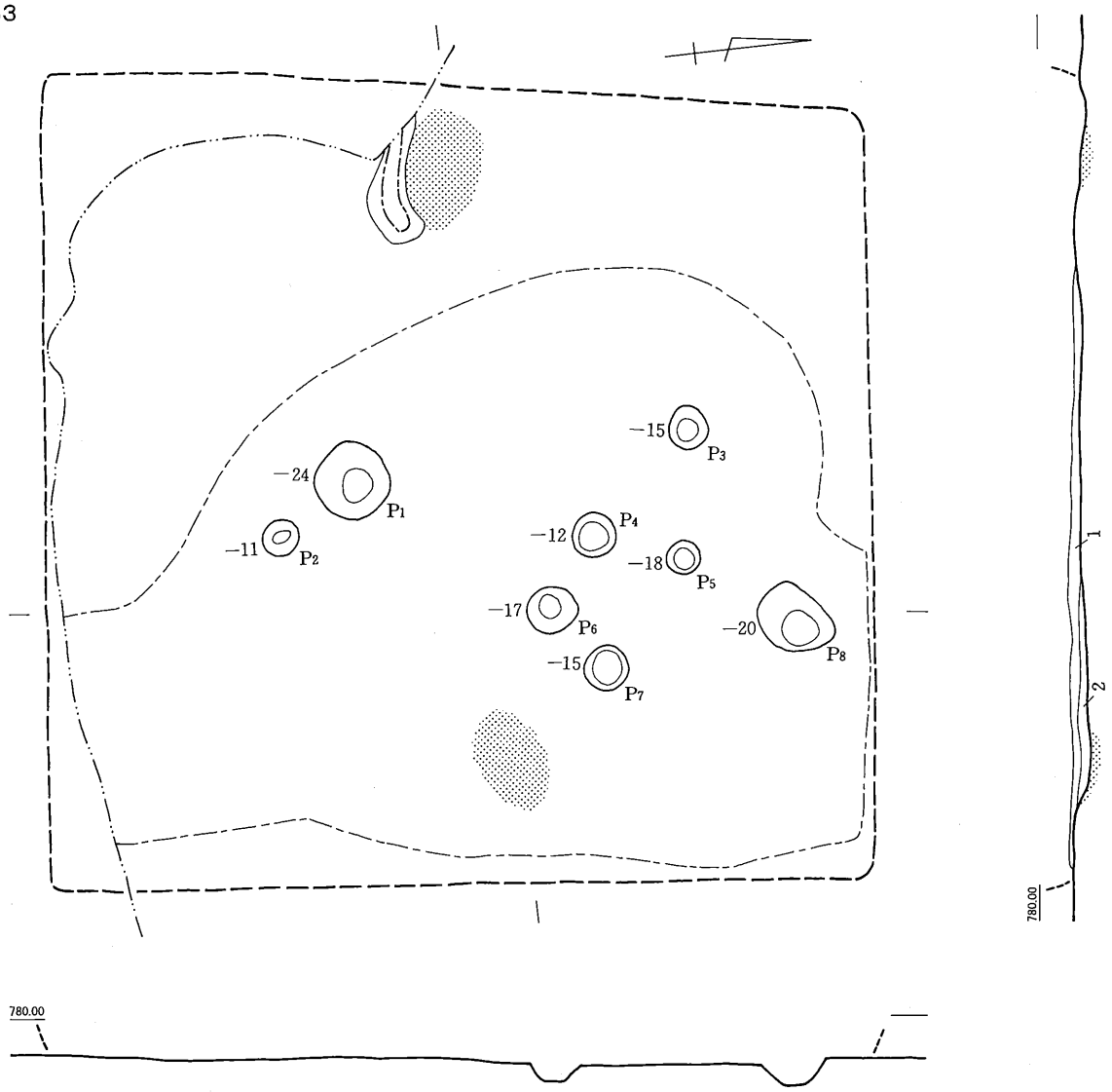
時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原２号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB４（第76図、図版８）

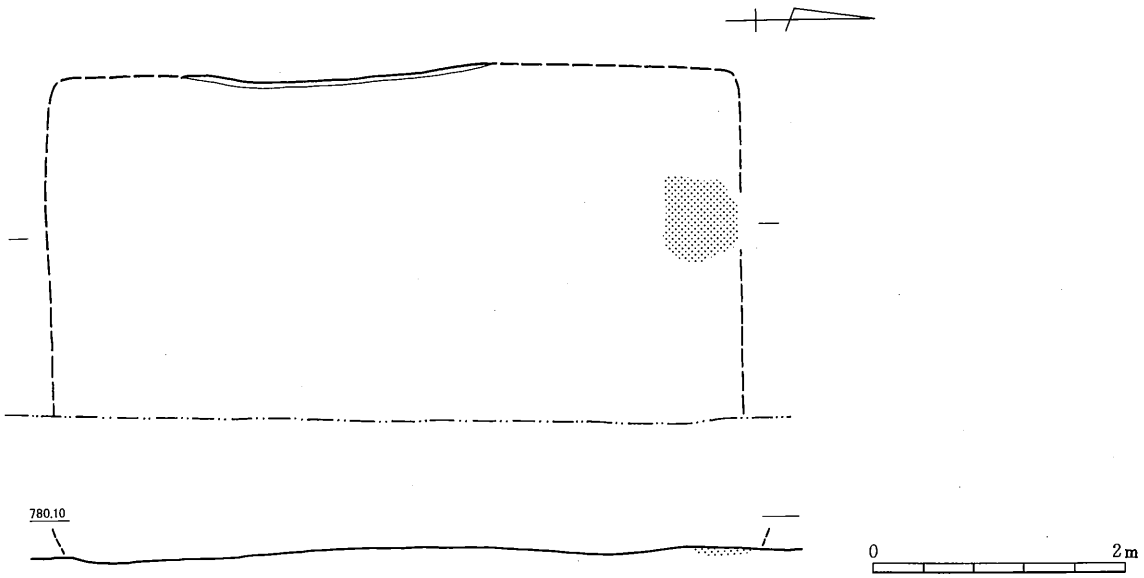
位置　中位段丘面の上部平坦面のＩ区、Ｓ－７グリッドに位置する。南東側にSB５が近接分布する。

形状　全体に耕作による撹乱を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径400cm、推

SB3



SB5



第75図　SB３・５　実測図

定短径380cm、確認部の床面積15.33㎡を測る。長軸方向はN－10°－Eを示す。壁は認められなかった。

覆土　多量の小礫を含む暗褐色土が堆積していた。

床面　耕作により削平されていたが、北東隅付近で掘り方が認められた。

柱穴　住居内より２個のピットが検出された。北西隅近くに位置するＰ２は口径30cm、深さ11cm、南壁寄りのＰ３は口径55cm、深さ24cmを測る。Ｐ２は位置的にみて本址に伴う柱穴であった可能性が考えられるが、断定できない。この他、住居を囲むように４個のピットが検出された。口径30～40cm、深さ６～19cmを測り、壁柱穴との関連も考えられる。

カマド　北壁中央部に構築されていた。径50cmほどの円形の範囲に焼土面が残されていたのみであり、掘り込みや袖部も認められなかった。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　掘り方内より大原２号窯式期例を含む灰釉陶器４点が出土した（第89図21）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原２号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB５（第75図、図版９）

位置　中位段丘面の上部平坦面山側のＩ区、Ｓ－８グリッドに位置する。北西側にSB４が分布する。

形状　東半分が耕作により削平されているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径540cm、短径270cm以上、残存部の床面積15.07㎡を測る。長軸方向はほぼ北を向くものと思われる。壁は西側の一部で確認されただけであり、確認部の最大壁高は10cmを測る。

覆土　掘り方内埋土と思われる暗褐色土が堆積していただけである。

床面　耕作により削平されていた。

柱穴　認められなかった。

カマド　北西隅近くから長径65cm、短径55cmの焼土面が検出され、位置関係などからカマドの痕跡と判断した。掘り込みはほとんどみられなかった。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　南壁付近より灰釉陶器長頸壷１点、灰釉陶器片２点、掘り方内より大原２号～虎渓山１号窯式期の碗１点が出土した（第89図22・23）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前～後半、大原２号～虎渓山１号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB７（第76図）

位置　中位段丘面の上部平坦面のＩ区、Ｒ－19グリッドに位置する。北側にSB３が分布する。

形状　全体に耕作による撹乱を受けているが、平面形は長方形を呈するものと思われる。推定される規模は長径630cm、短径560cm、推定床面積は36.77㎡を測る。長軸方向はN－６°－Eを示す。耕作により壁は削平されていた。

覆土　周溝内埋土と思われる黒褐色土が堆積していた。

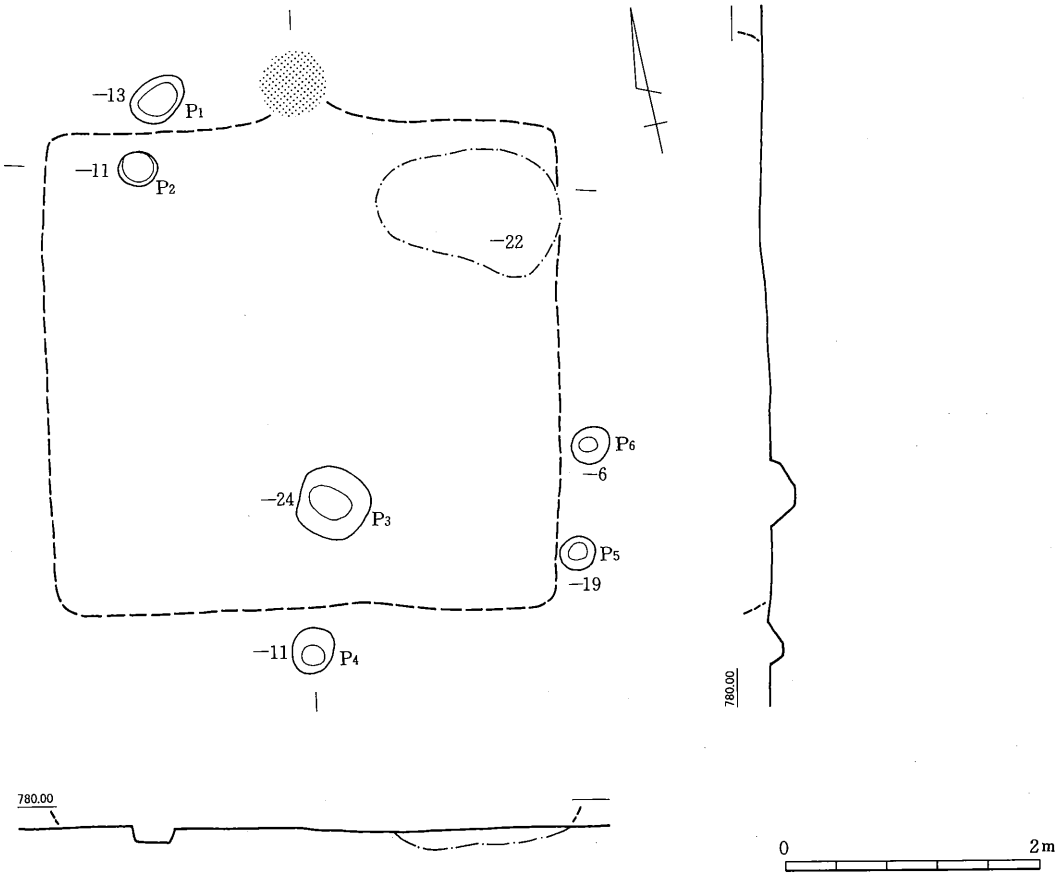
床面　耕作により削平されていた。北西側から幅30cm、深さ10cmの周溝が検出された。

柱穴　認められなかった。

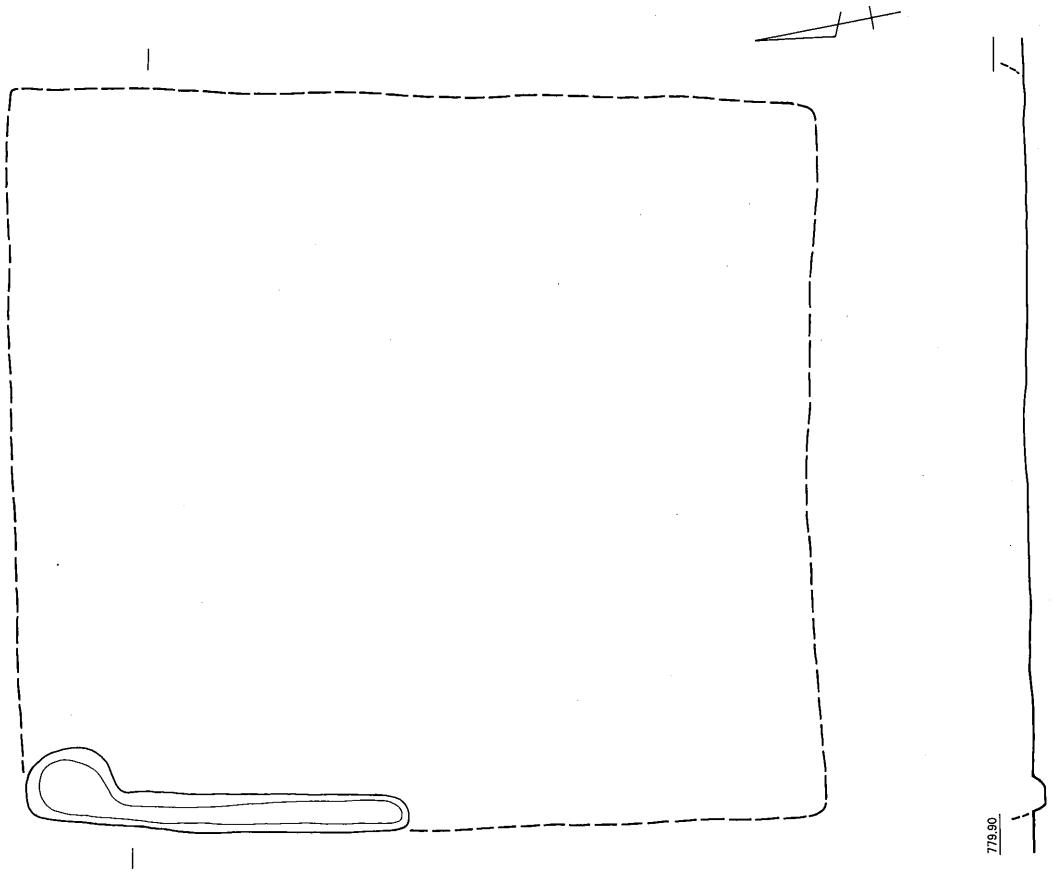
カマド　認められなかった。

内部施設　認められなかった。

SB4



SB7



第76図　SB４・７　実測図

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や住居の形状などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SB15（第77図、図版９）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、Ｘ－23グリッドに位置する。北側にＳＴ１が分布する。

形状　東側を削平されているが、平面形は不整な方形を呈するものと思われる。長径550cm、推定短径540cm、確認部の床面積は28.73m²を測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は24cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層である。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

床面　Ⅱ層中に形成されていた。比較的平坦である。掘り方は認められなかった。

柱穴　住居内より12個のピットが検出された。口径30～50cm、深さ８～35cmを測り、南側と北側に集中する傾向をみせている。特にＰ１・２・４とＰ９・10・11は対応する位置にあり、本址に伴う柱穴と推測される。

カマド　新旧２基のカマドが構築されていた。新カマドは南西隅に大きく張り出しており、石組みカマドと推測される。上部に角礫を集中分布させた暗黄褐色土が厚く堆積し、焼土面には多数の偏平な礫が上部を覆うように遺存していた。旧カマドは北壁中央部に位置し、焼土面のみ残存していた。テラス状の張り出しを伴い、付近には焼土粒を含んだ土が広がっていた。この他、南東隅近くから焼土面が検出された。残存部の長径90cmを測り、深さ10cmほどの掘り込みを伴うが、カマドとの関係は不明である。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　中央部付近を中心として、灰釉陶器片82点、土師器16点、鉄製品として釘２点、砥石１点が出土している。底部に「芳蘭」の墨書が残された灰釉陶器が含まれる（第90・94図24～34、116・117）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、９世紀後半、光ヶ丘１号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB16（第78図、図版10）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、Ｘ－26グリッドに位置する。南東側にSB17が分布する。

形状　遺構検出にやや不明な点を残すが、平面形は不整な方形を呈する。長径620cm、短径610cm、床面積は32.54m²を測る。長軸方向はＮ－９°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は36cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層である。

覆土　４層に分けられる。第２・第３・第４層はカマド内埋土にあたる。

第１層　黒色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

第２層　黒色土層（粘性・しまりに欠ける。明黄褐色ブロックを含む。）

第３層　黒色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の明黄褐色ブロックを含む。）

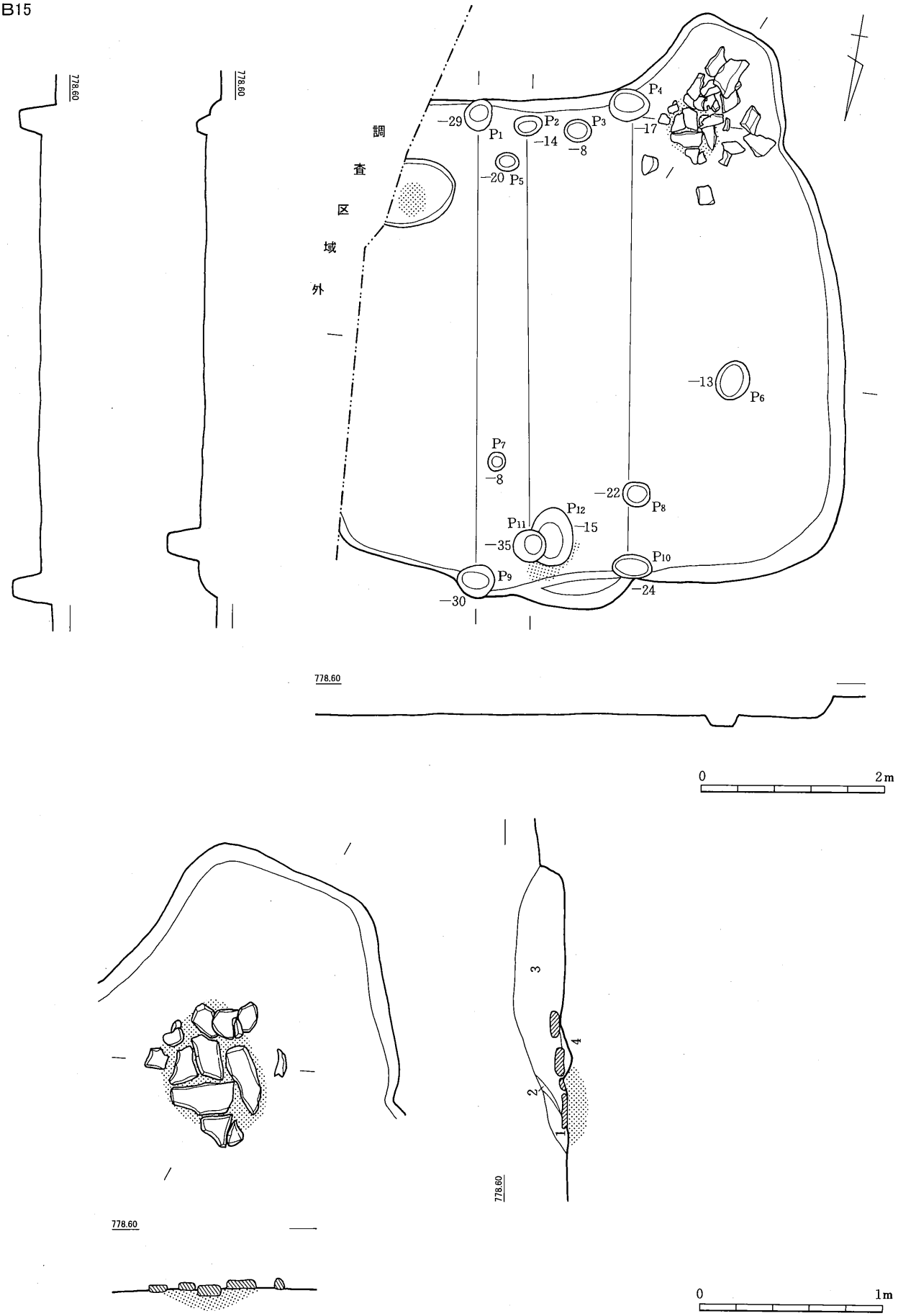
第４層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

床面　調査時の掘り過ぎのため不明瞭であるが、平坦な貼床面が形成されていたものと思われる。

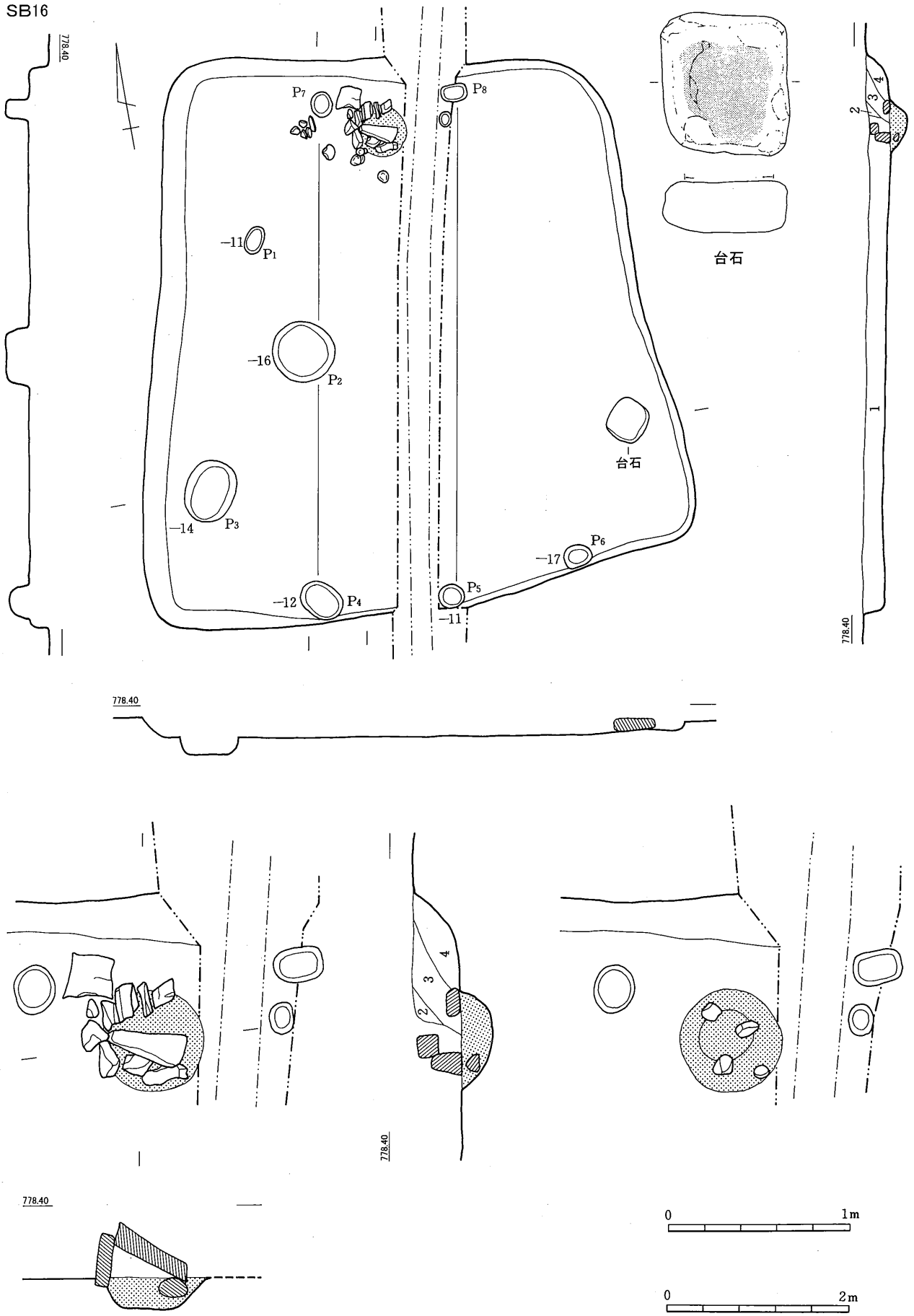
柱穴　住居内より９個のピットが検出された。カマド両側から検出されたＰ７・８と規則的な配置をみせるＰ４・５（６）は、本址に伴う主柱穴と推測される。口径48～68cm、深さ12～16cmを測り、Ｐ４・７と同一線上ほぼ中央に位置するＰ２には、作業用ピットなどの機能が推定される。

カマド　北壁中央部に石組みカマドが構築されていた。左袖部の袖石と天井石の一部が残存していた。堆

SB15



第77図　SB15　実測図



第78図　SB16　実測図

積した焼土内には小形の礫が4個配置され、支脚的な用途が考えられる。

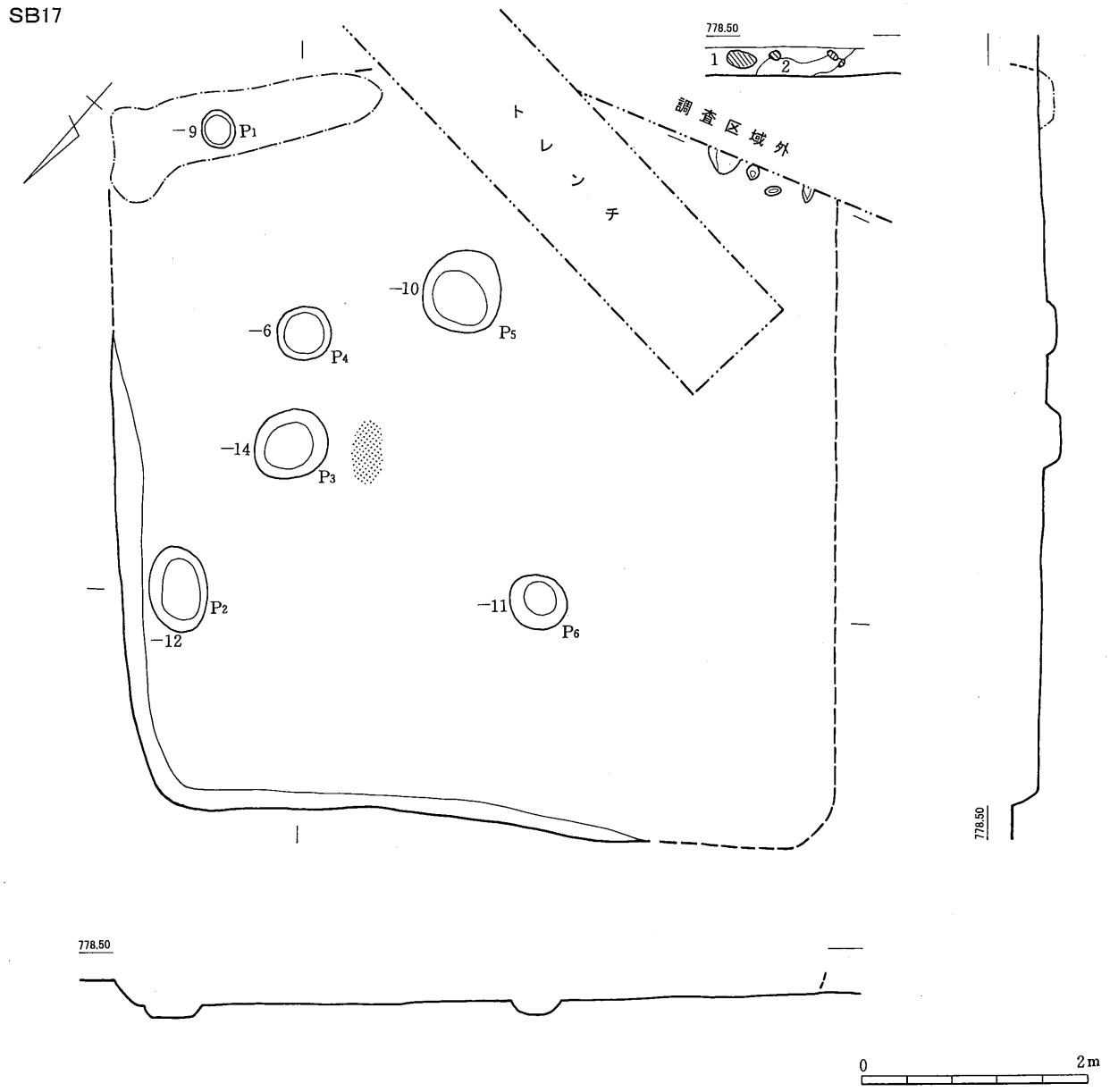
内部施設　南東隅近くの床面から径約40cm四方の平坦な礫が検出された。使用痕が残されており、作業用の台石として使用されていた可能性が考えられる。

出土遺物　カマド内より光ヶ丘1号窯式期の碗底部1点、カマド左側礫集中部より土師器甕1点、覆土中より大原1号窯式期の皿1点、須恵器長頸壺胴部片1点、土師器甕口縁片1点のほか、灰釉片10点と土師器片19点が出土した（第90図35～39）。また、覆土中より鉄滓1点が出土している。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、9世紀後半、光ヶ丘1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB17（第79図、図版10）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、Ⅴ－27グリッドに位置する。北東側にSB16が分布する。



第79図　SB17　実測図

形状　南側が調査区域外にかかるが、平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。推定長径650cm、推定短径640cm、確認部の床面積43.02m²を測る。長軸方向はＳ－43°－Ｅを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は23cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層である。

覆土　暗褐色土が堆積していた。

床面　明確には確認できなかったが、何層かにわたって薄い硬化面が重なるように分布していた。南東隅より溝状の掘り方が検出された。深さ10cmほどを測り、底面は起伏に富む。

柱穴　住居内より６個のピットが検出された。口径35～85cm、深さ６～14cmを測る。配列には明瞭な規則性は認められない。

カマド　南西隅に構築されていたものと思われる。カマドの構築材と推測される礫の周辺に焼土がわずかに散在していた。

内部施設　中央部よりやや北東寄りの床面に焼土が堆積していた。長径60cm、短径25cmの長楕円形を呈するが、掘り込みは認められず、性格は不明である。

出土遺物　ほとんど覆土中よりの出土である。高台に籾痕が付着した山茶碗小碗、同小皿のほか、青磁片３点・混入品と推測される灰釉陶器片などが出土している（第90図40～44）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代末葉、11世紀後葉から12世紀前半、尾張３～５型式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB18（第80・81図、図版11）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－25グリッドに位置する。北側でSB21を切る。

形状　平面形は長方形を呈する。長径610cm、短径560cm、床面積32.96m²を測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は51cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層である。

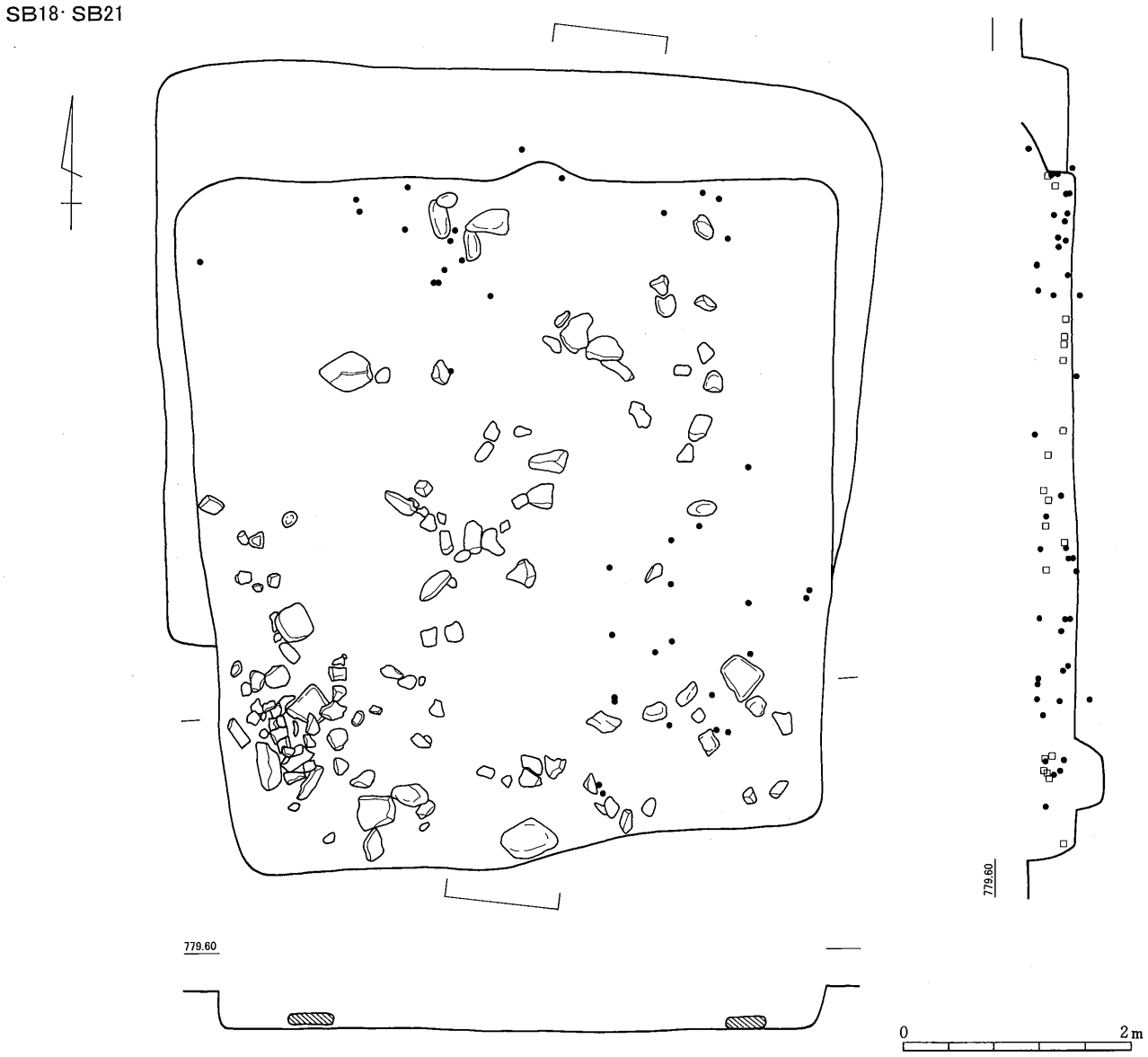
覆土　７層に分けられる。第６・第７層はピット内埋土にあたる。

第１層　黒褐色土層（粘性をもち、しまる。少量の赤色土粒を含む。）
第２層　黒褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。多量の礫を含む。）
第３層　黒褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。少量の赤色土粒を含む。）
第４層　暗褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。赤色土粒を含む。）
第５層　暗褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。多量の赤色土ブロックを含む。）
第６層　黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。少量の赤色土粒を含む。）
第７層　黒色土層（少量の赤色土粒を含む。）

床面　北カマド付近から中央部にかけて貼床面が形成されていた。掘り方内には黄褐色土ブロックを含んだ土が堆積していたが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。北東隅から南東隅にかけて幅18cmほどの周溝が検出された。

柱穴　住居内より６個のピットが検出された。配列に明瞭な規則性は認められない。特にＰ１・２は長径100～150cm、深さ22～26cmを測り、柱穴とは考えにくい。この他、周溝内から６個の小ピットが出土している。南壁際のＰ６同様、壁柱穴であった可能性も考えられる。

カマド　北壁と西壁の中央部に２基のカマドが構築されていた。北カマドはわずかに張り出している。袖部には袖石の抜き取り痕がみられるが、わずかに礫と粘土ブロックが残されており、石組み粘土カマドであったと考えられる。浅く凹んだ被熱面の上に灰層が薄く堆積しており、その上部にカマドの構築材と思われる粘土ブロック、さらにその上部に焼土が堆積していた。西カマドも石組み粘土カマドであったと考えられ、右袖部には袖石が残されていた。被熱面は赤化が著しく、灰層が３層にわたって堆積していた。

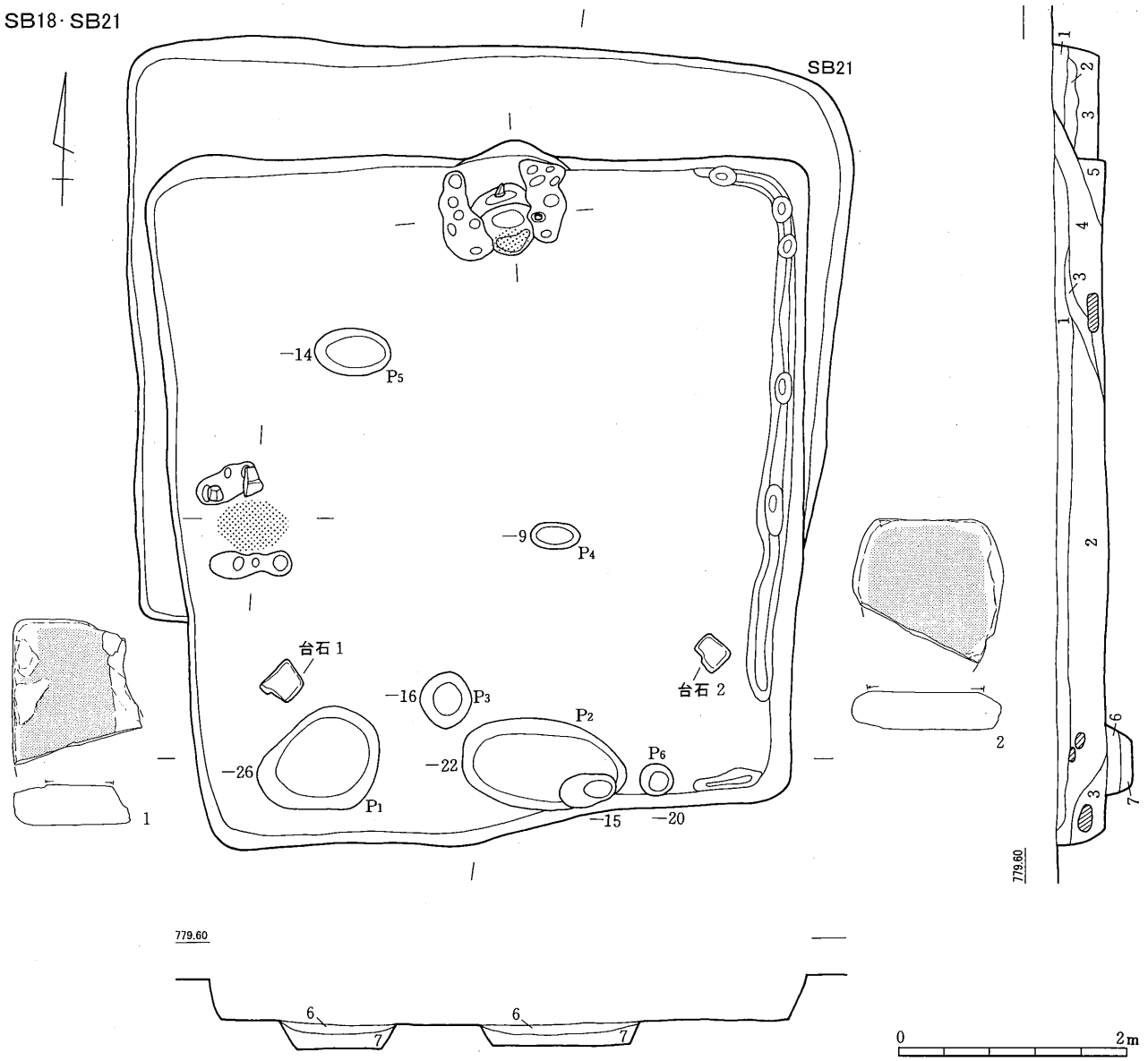


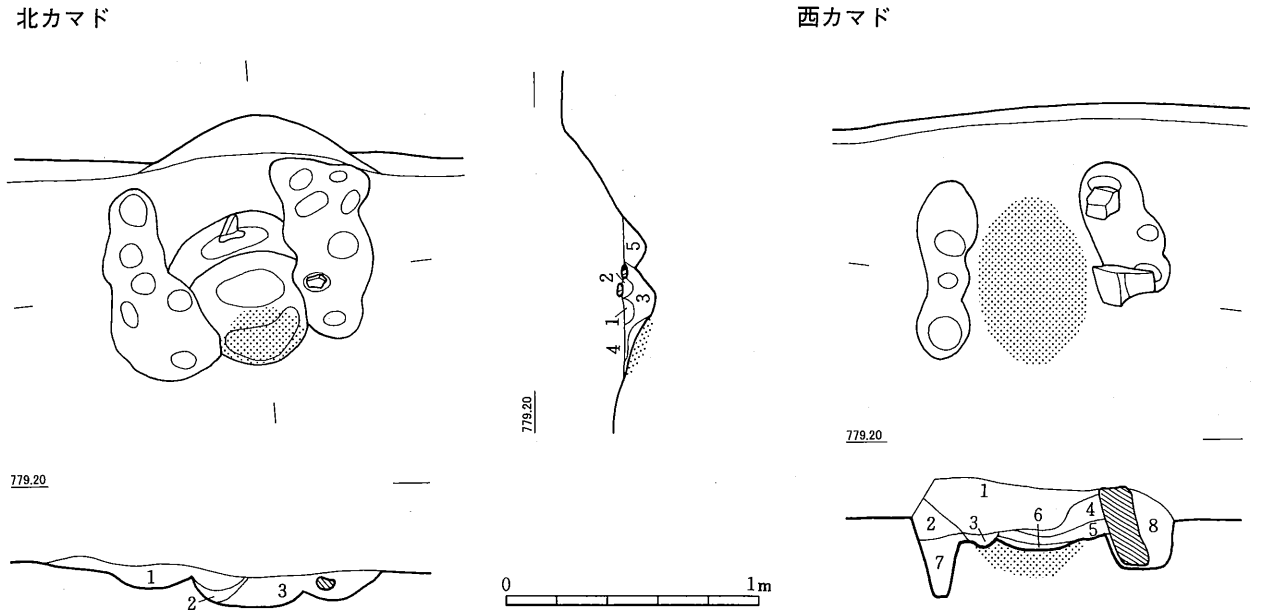
第80図　SB18遺物・礫出土状況

袖石および構築材の残存状況および構築材の残存状況などから、北カマドと西カマドが併存していた可能性も考えられるが、断定できない。カマド内埋土は、以下のとおりである。

北カマド　第1層　黄褐色土層（粘性あり。カマド構築材。）
　　第2層　黄褐色土層（粘性あり。上部灰層。）
　　第3層　褐色土層（黄褐色土・黒色土を含む。）
　　第4層　白灰褐色土層（下部灰層）
　　第5層　黒色土層（黄褐色土ブロックを含む。）

西カマド　第1層　黄橙色土層（粘性強い。カマド構築材。）
　　第2層　黄灰褐色土層（黄橙色土・黒色土ブロックを含む。）
　　第3層　黄灰褐色土層（黄橙色土・黒色土ブロック、黒色土粒を含む。）
　　第4層　暗褐色土層（灰を含む。）
　　第5層　黄褐色土層（粘性あり。上部灰層。）
　　第6層　褐色土層（粘性あり。下部灰層。）





第81図　SB18・21　実測図

第７層　　黒褐色土層（黄褐色土ブロックを含む。掘り方埋土。）

第８層　　黄褐色土層（粘性あり。掘り方を埋めるカマド構築材。）

内部施設　南東隅と南西隅近くの床面に磨耗痕のある平石２個が遺存していた。同一礫を半割して左右に分けて据え付けるように設置しており、作業用の台石として使用されたと推測される。作業用ピットとも考えられるＰ１・２との対応関係や関連の有無が注意される。

出土遺物　覆土第２～４層を中心として、光ヶ丘１号窯式に比定されると考えられる個体を主とする灰釉陶器片156点、土師器片88点、土錘１点、砥石４点が出土している（第91・92図45～68）。また、覆土中には被熱した花崗岩角礫を含む大小の礫が、投棄されたかのような状態で多量に遺存していた。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、９世紀後半、光ヶ丘１号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとＳＢ21に後続する。

SB19（第82図）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－22グリッドに位置する。北側でSB24を切る。

形状　平面形はほぼ方形を呈する。長径330cm、短径320cm、床面積は10.78m²を測る。長軸方向はＮ－50°－Ｗを示す。壁はカマド部を除いて急傾斜に掘り込まれており、最大壁高は34cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層であり、SB24よりやや上層で検出された。

覆土　３層に分けられる。第２・第３層はカマド埋土に相当する。

第１層　黒褐色土層（黄褐色土粒・白色砂粒を含む。）

第２層　黒褐色土層（黄褐色土粒・赤色粒を含む。）

第３層　黄褐色土層（粘性をもち、しまる。）

床面　ほぼ平坦に整えられていたものと思われるが、全容は不明である。

柱穴　住居内より７個のピットが検出された。このうち南東壁に沿って検出された３個のピットは口径15～30cm、深さ５～10cmを測り、壁柱穴の可能性が考えられる。Ｐ３・４などは断面が浅い皿状を呈し、柱穴とは異なる用途が考えられる。

カマド　南西壁中央部に構築されていた。煙道と推測される部分が大きく外に張り出している。焼土面を覆うように粘性のある黄褐色土などが堆積していたほか、直上には火床の構造材と思われる平たい礫が敷かれたように遺存していた。両袖部からは長径30cm、深さ13cmを測るＰ１・２が検出されており、袖石の抜き取り痕と推測される。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中より光ヶ丘１号～大原２号窯式期にかけての灰釉陶器片32点、土師器片40点、須恵器壺片２点が出土している（第92図69～74）。

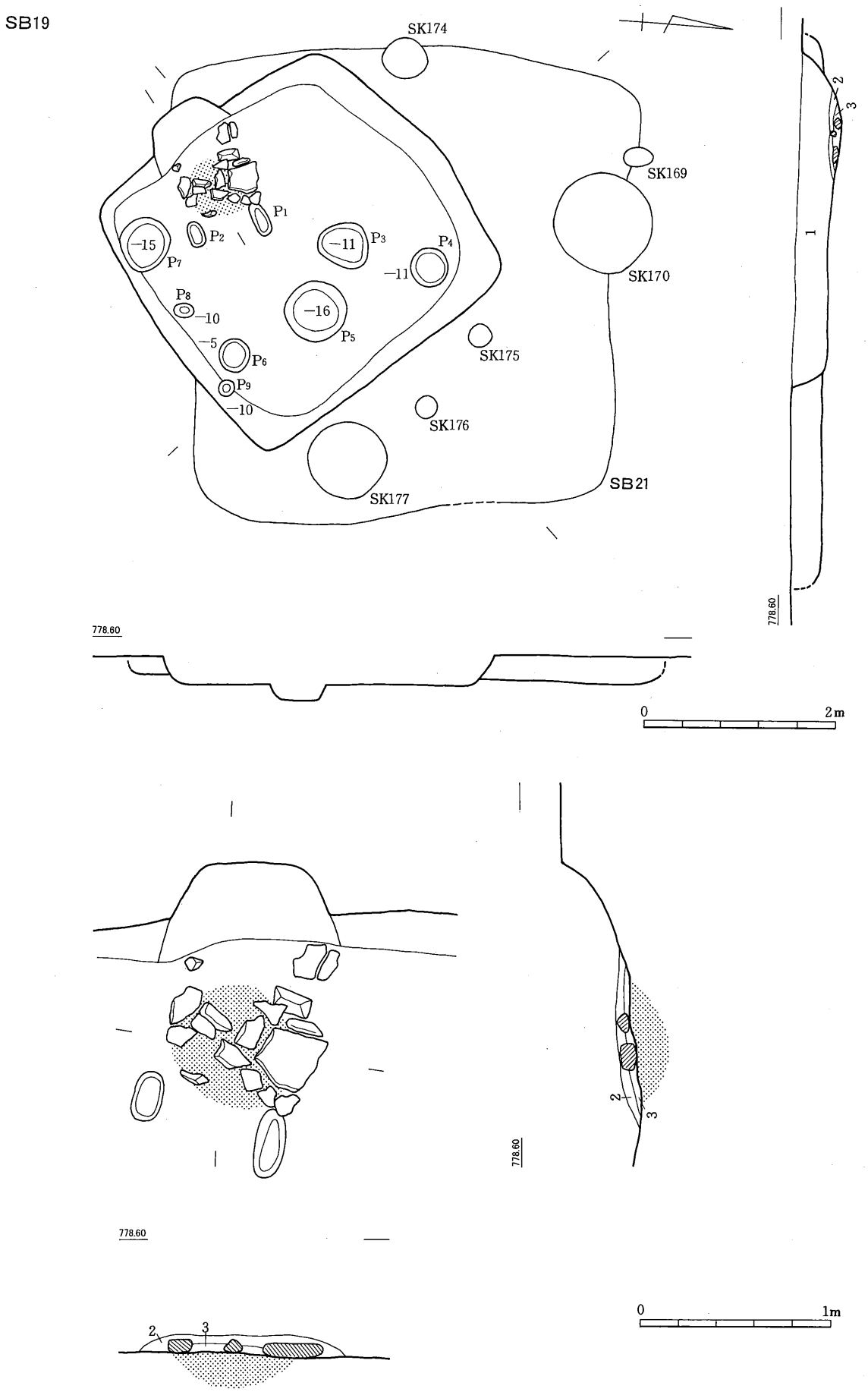
時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉～中葉、９世紀後半～10世紀前半、光ヶ丘１号～大原２号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB24に後続する。

SB20（第83図、図版12）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｕ・Ｖ－14グリッドに位置する。

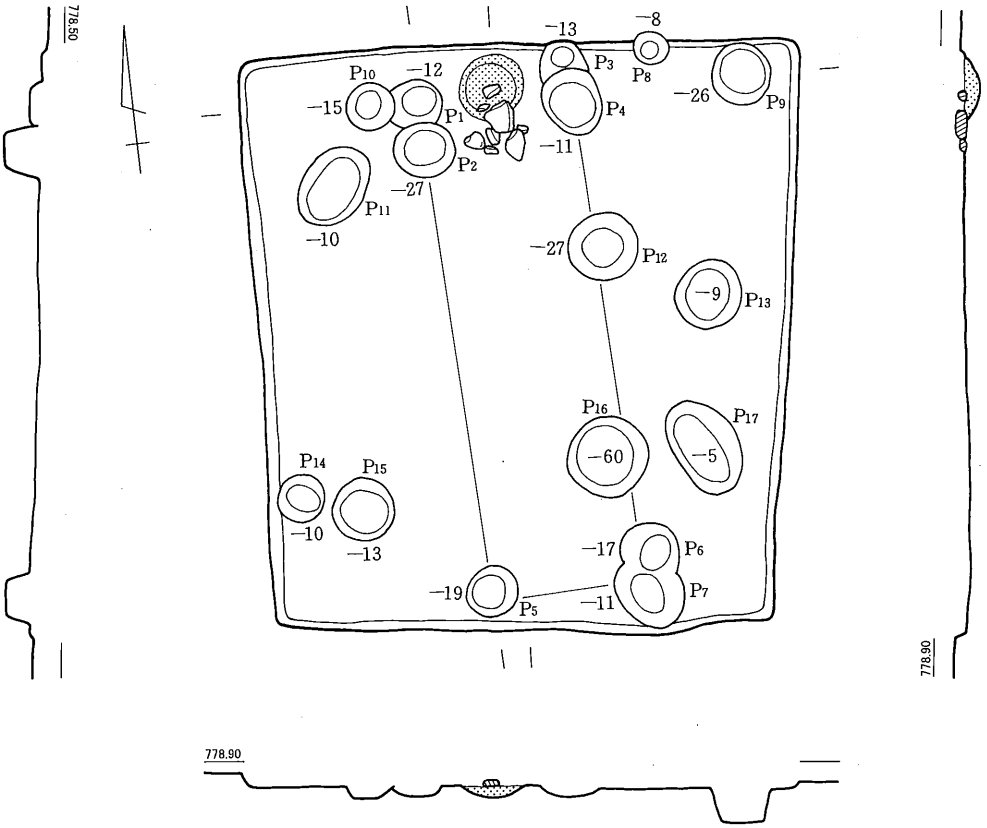
形状　平面形は不整な長方形を呈する。長径470cm、短径440cm、床面積は19.05m²を測る。長軸方向はＮ－５°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は17cmを測る。

覆土　粘性をもつが、しまりに欠ける黒褐色土が堆積していた。多量の白色砂粒を含む。

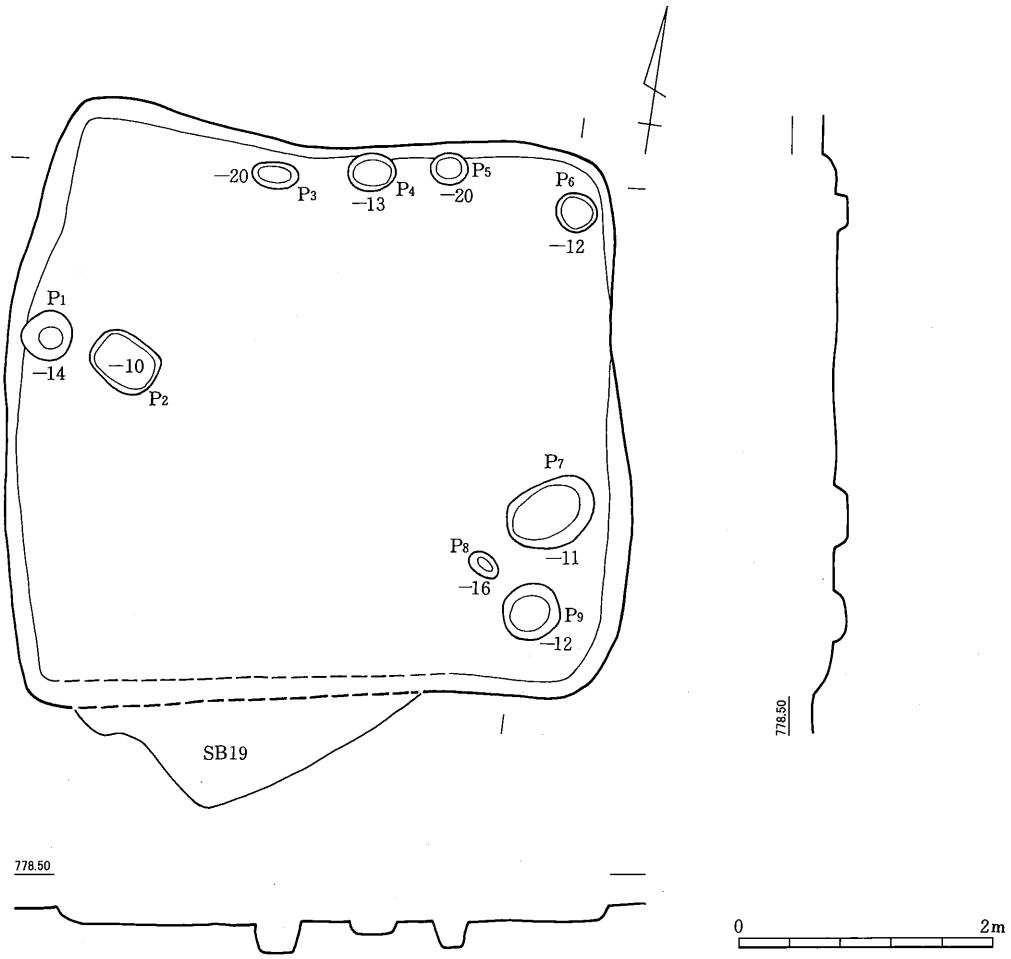


第82図　SB19　実測図

SB20



SB24



第83図　SB20・24　実測図

床面　比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴　住居内より17個のピットが検出された。竪穴壁と軸方位を異にするものの、長方形を形成する配置状況などから、Ｐ１～７が主柱穴であったと推定される。また、長軸線西側のＰ11・15にも配列に規則性が認められるほか、口径55～65cm、深さ27～60cmの規模を有するＰ12・16などにも柱穴としての機能が推定される。ピットの多さからみて建て替えが行われた可能性についても考慮される。

カマド　北壁ほぼ中央部に構築されていた。上部構造は不明である。焼土上面付近から構造材と思われる長さ15～20cmほどの平たい礫が複数出土した。焼土は深さ10cmほどの掘り込み内に堆積しており、内部から灰釉陶器が出土した。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　カマド付近を含む床面近くから大原２号窯式期と思われる碗５点、皿６点の他、灰釉陶器片57点、須恵器甕片１点、刀子片１点が出土している（第93・94図75～87、114）。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原２号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB21（第83図、図版11）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－25グリッドに位置する。北側の一部を除きSB18に切られる。

形状　平面形は長方形を呈するものと思われる。長径640cm、短径520cm、推定床面積は31.32㎡を測る。長軸方向はＮ－２°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は39cmを測る。

覆土　３層に分けられる。

第１層　黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。赤色土粒を含む。）

第２層　黒色土層（比較的柔らかい。少量の赤色土粒を含む。）

第３層　黒色土層（比較的柔らかい。少量の白色砂粒・赤色土粒を含む。）

床面　比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴　認められなかった。

カマド　認められなかった。残存状況から推測すると南壁側に存在した可能性が考えられる。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土や住居の形状などから判断して平安時代前葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSB18に先行する。

SB24（第83図、図版12）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｖ－22グリッドに位置する。南側をSB19に切られる。

形状　平面形は不整な長方形を呈する。長径500cm、短径430cm、推定床面積は21.24㎡を測る。長軸方向はＮ― 75°―Ｅを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は14cmを測る。確認面は基本土層ＣのⅡ層であるが、本址を切るSB19より下層で検出された。

覆土　粘性をもつが、しまりを欠く黒褐色土が堆積していた。暗褐色土ブロックや少量の白色砂粒を含む。

床面　比較的平坦であるが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。

柱穴　住居跡内より９個のピットが検出された。壁際に集中する傾向をみせており、壁柱穴の可能性が推測される。口径30～40cm、深さ６～26cmを測る。

カマド　認められなかった。壁の残存状況から推測すると南壁側に存在した可能性が考えられる。

内部施設　認められなかった。

出土遺物　覆土中より、耳皿片1点を含む灰釉陶器片7点が出土している（第93図88）。大原2号窯式と推測される灰釉陶器1点には「万」の墨書が認められ、「□万」の合わせ文字の可能性が推測される。

時期　伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉～中葉、9世紀後半～10世紀前半、光ヶ丘1号～大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとＳＢ19に先行する。

2）掘立柱建物跡

ＳＴ１（第84図、図版12）

位置　中位段丘面の下部平坦面のＩ区、Ｘ－21グリッドに位置する。縄文時代の所産と考えられる土坑2基が重複して分布する。

形状　平面形は1間×2間の建物跡と思われる。北棟中央の柱穴はやや内側に位置し、柱筋の通りは良好とはいえない。桁行260cm、梁行260cm、柱穴間隔は棟側で120～130cm、妻側で260cmを測り、面積は6.8m²である。長軸方向はＮ－86°－Ｅである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈しており、口径は24～33cm、確認面からの深さは22～31cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

3）柵列状遺構

ＳＡ１（第84図）

位置　中位段丘面の上部平坦面、Ｉ区北西部に位置する。

形状　長さ530cmの範囲に5個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は90～160cmを測る。主軸方向はＮ－33°－Ｗである。柱穴の平面形は略円形を呈しており、口径は34～42cm、確認面からの深さは12～20cmを測る。

覆土　黒色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

ＳＡ２（第84図）

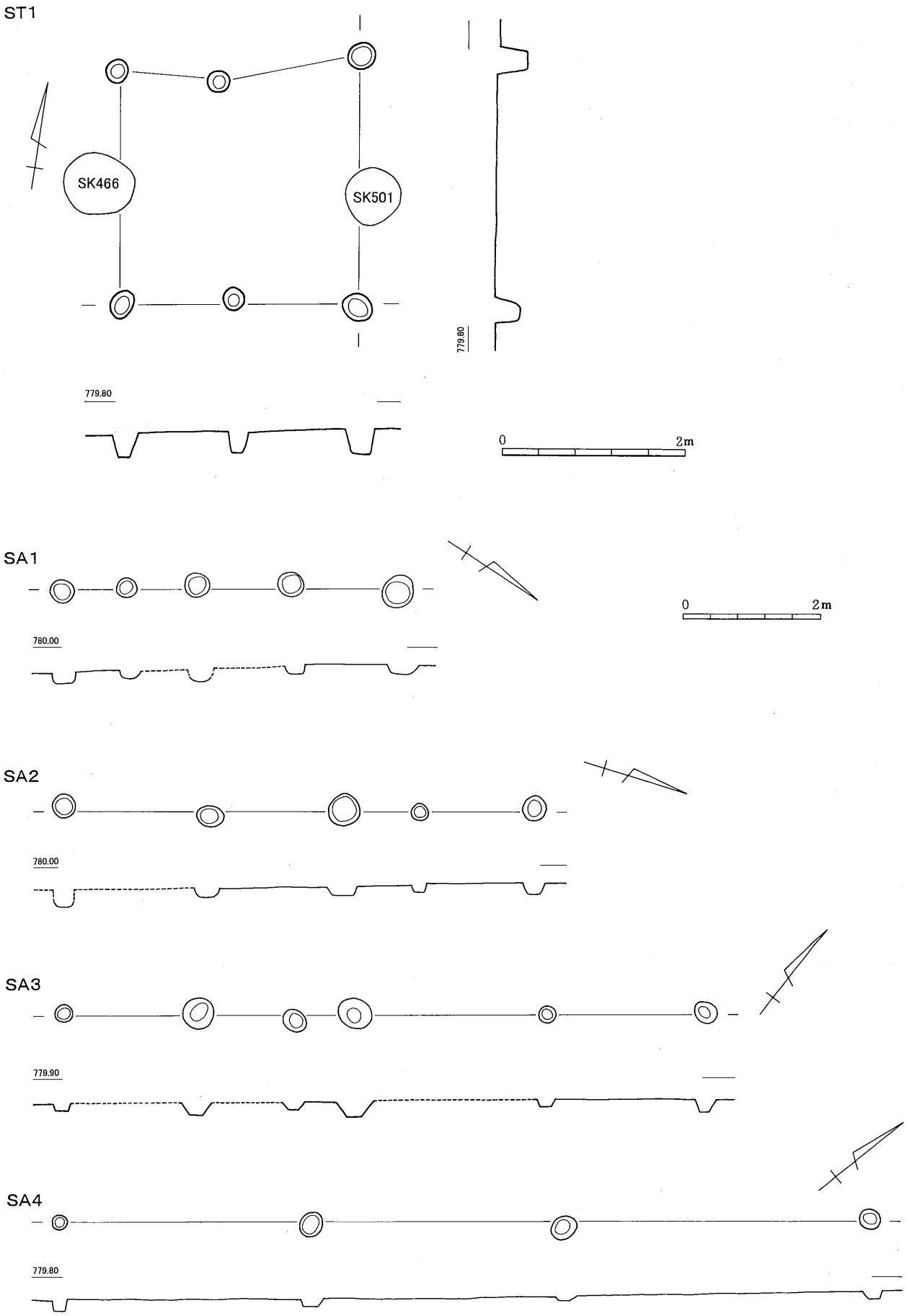
位置　中位段丘面の上部平坦面、Ｉ区北西部に位置する。

形状　長さ720cmの範囲に5個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は100～210cmを測る。主軸方向はＮ－11°－Ｗである。柱穴の平面形は円形～楕円形を呈しており、口径は24～44cm、確認面からの深さは9～14cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



第84図　ST１・SA１～４　実測図

SA３（第84図）

位置　中位段丘面の上部平坦面、Ⅰ区北西部に位置する。

形状　長さ972cmの範囲に６個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は80～280cmを測る。主軸方向はN－50°－Eである。柱穴の平面形は円形～楕円形を呈しており、口径は22～50cm、確認面からの深さは８～20cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA４（第84図）

位置　中位段丘面の上部平坦面、Ⅰ区北西部に位置する。

形状　長さ1216cmの範囲に４個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は370～450cmを測る。主軸方向はN－41°－Eである。柱穴の平面形は円形～楕円形を呈しており、口径は20～40cm、確認面からの深さは７～18cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA５（第85図）

位置　中位段丘面の上部平坦面、Ⅰ区北西部に位置する。

形状　長さ780cmの範囲に３個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は310～430cmを測る。主軸方向はN－43°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈しており、口径は28～60cm、確認面からの深さは９～10cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA６（第85図）

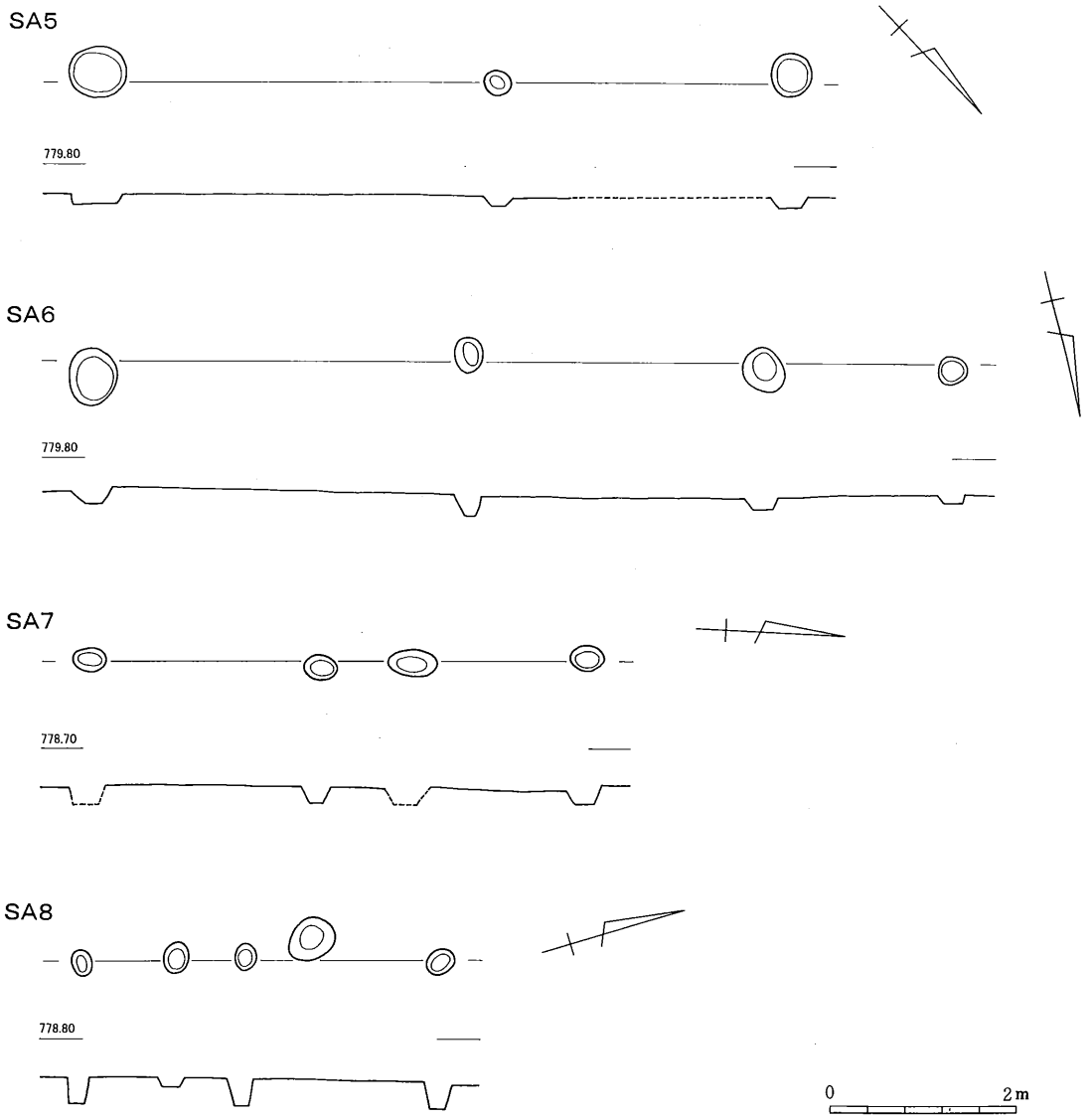
位置　中位段丘面の上部平坦面、Ⅰ区北西部に位置する。

形状　長さ950cmの範囲に４個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は200～400cmを測る。主軸方向はN－83°－Wである。柱穴の平面形は円形～楕円形を呈しており、口径は30～58cm、確認面からの深さは12～23cmを測る。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



第85図　SA５～８　実測図

SA７（第85図）

位置　中位段丘面の下部平坦面、Ⅰ区南東部に位置する。

形状　長さ560cmの範囲に４個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は90～240cmを測る。主軸方向はN－４°－Wである。柱穴の平面形は楕円形を呈しており、口径は31～46cm、確認面からの深さは16～23cmを測る。

覆土　黒色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA８（第85図）

位置　中位段丘面の下部平坦面、Ⅰ区南東部に位置する。掘立柱建物跡ST１が近接して分布する。

形状　長さ406cmの範囲に４個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は70～210cmを測る。主軸方向はN－

13°－Eである。柱穴の平面形は楕円形を呈しており、口径は26～32cm、確認面からの深さは18～29cmを測る。本址は調査区の東端部に接して位置しており、掘立柱建物跡の一部である可能性を残す。

覆土　黒色土が堆積していた。

出土遺物　認められなかった。

時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

4）土　　坑

当該期の所産と考えられる土坑はⅡ区を除く各調査区から万遍なく出土しているが、竪穴住居跡が発見されたⅠ区およびⅣ区に集中する傾向が顕著に認められる。とりわけ、主要な集落域であったことが確認されたⅠ区南東部および同北西端部付近に濃密な分布をみせている。Ⅰ区南東部に位置するＳＢ15・16・18・19付近には長軸が100cmを越えるやや大型の遺構を含む大小の土坑がまとまって分布し、性格等の詳細は不明ながらも居住域との強い相関関係が推定される。一方、Ⅰ区北西端部付近では時期比定に不確定な点を残すものの、住居群に隣接する柵列状遺構として抽出された一群と混在するように分布しており、同遺構群との関連や何らかの構造物の痕跡であった可能性などが考慮される。

以下、比較的規模の大きなものを選択的に抽出・図示したうえで、特徴的な土坑に限定して個別説明を記す。他については、土坑一覧表を参照されたい（第１表）。

SK146（第86図、図版13）

位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、Ⅴ－20グリッドに位置する。上面を覆うように大小の礫が規則的な配置をみせながら群集する。南側に４ｍほど離れてSK147が隣接する。

形状　平面形は長径124cm、短径109cm、深さ15cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ－９°－Ｅである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。南東隅を挟んで２個の小ピットを伴う。上面を覆う中小の礫は一定のレベルを保ちながら規則的な配列状態をみせており、その上部中央付近には径50～60cmにも及ぶ大形の礫３点が遺存する。南東部および北西部を中心として、小規模な焼土堆積とともに炭化物の広範な分布が認められた。

覆土　４層に分けられる。

第１層　黒褐色砂質土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物を含む。）

第２層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の炭化物を含む。）

第３層　黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。きわめて多量の炭化物を含む。）

第４層　暗褐色土層（多量の焼土粒を含む。）

出土遺物　覆土中より土師器甕の破片１点が出土した。

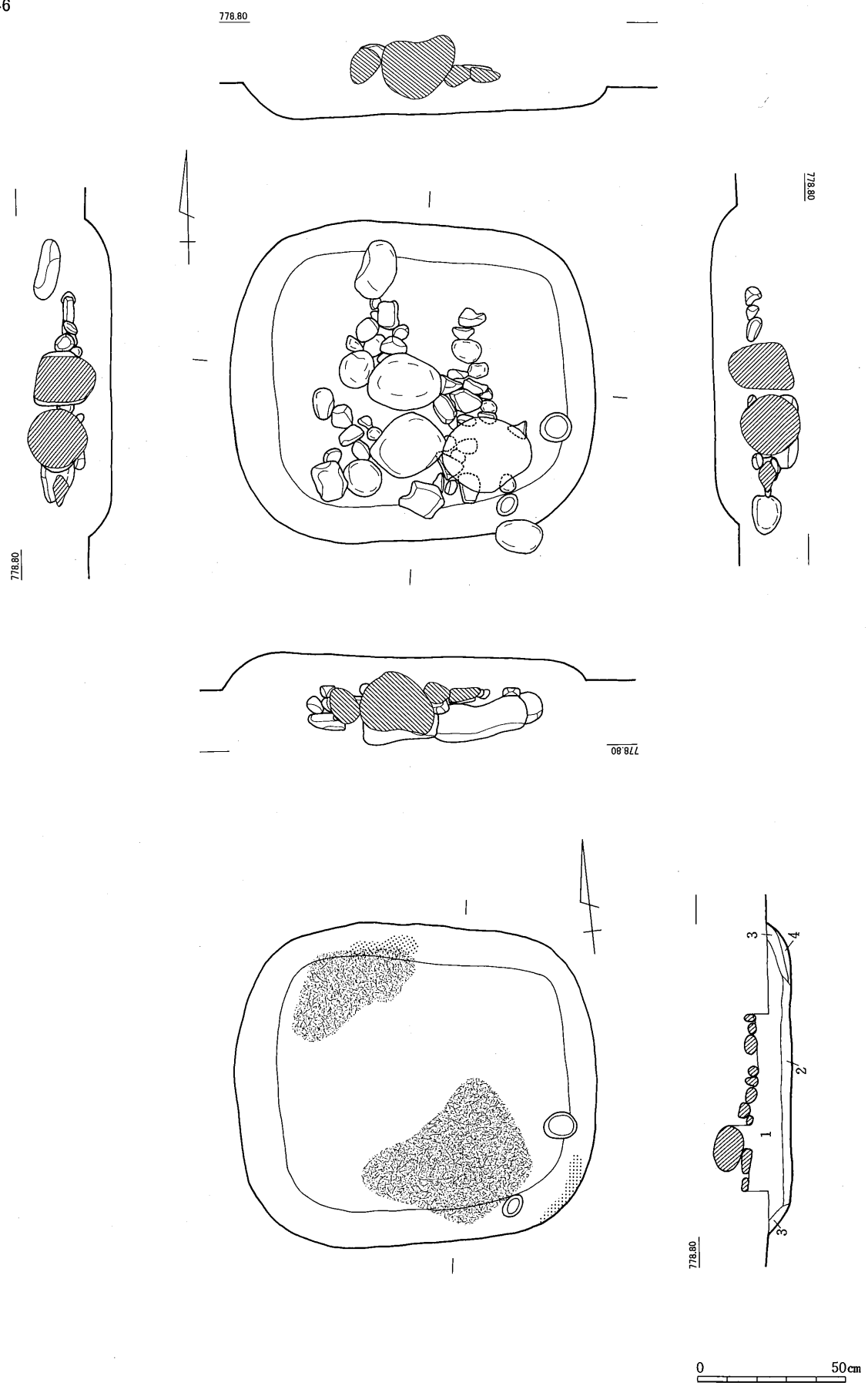
時期　伴出遺物や覆土のあり方などからは平安時代の所産である可能性が考えられるものの、形態的な特徴を考慮するならば、中世も含めた時間幅を推定しておくのが現在のところ妥当のように思われる。

SK147（第87図、図版13）

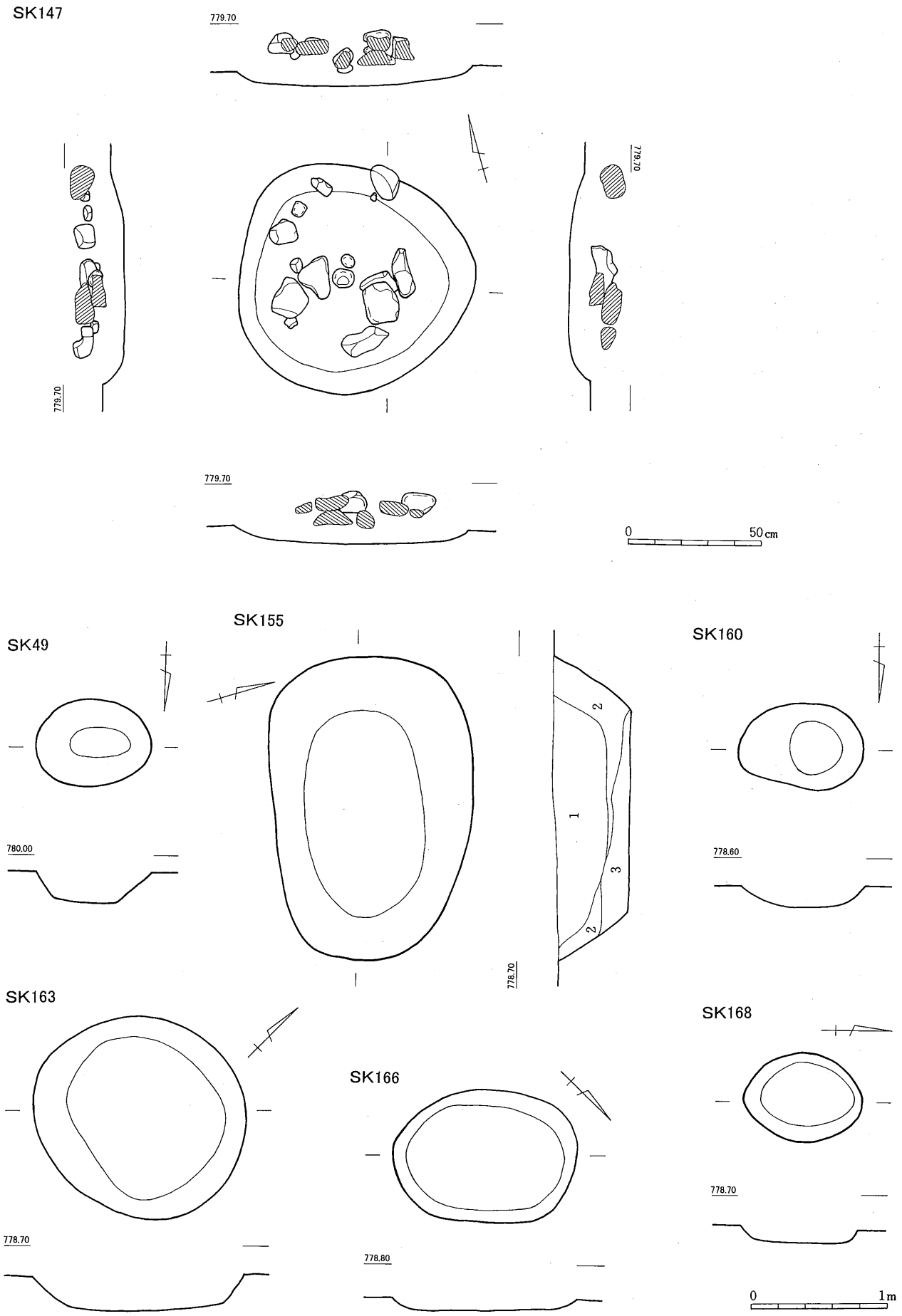
位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、Ⅴ－21グリッドに位置する。北側にSK146が隣接する。

形状　平面形は長径89cm、短径87cm、深さ12cmの不整な円形を呈する。長軸方向はＮ－16°－Ｅである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。上面を覆うように大小の礫が群集し、礫は一定のレベルを保ちながらやや環状の配置を示すなど、比較的規則的な配列状態をみせている。

SK146



第86図　SK実測図（1）・SK146


SK147
779.70
779.70
779.70
779.70
0
50cm
SK49
780.00
SK155
1
2
3
2
778.70
SK160
778.60
SK163
778.70
SK166
778.80
SK168
778.70
0
1m

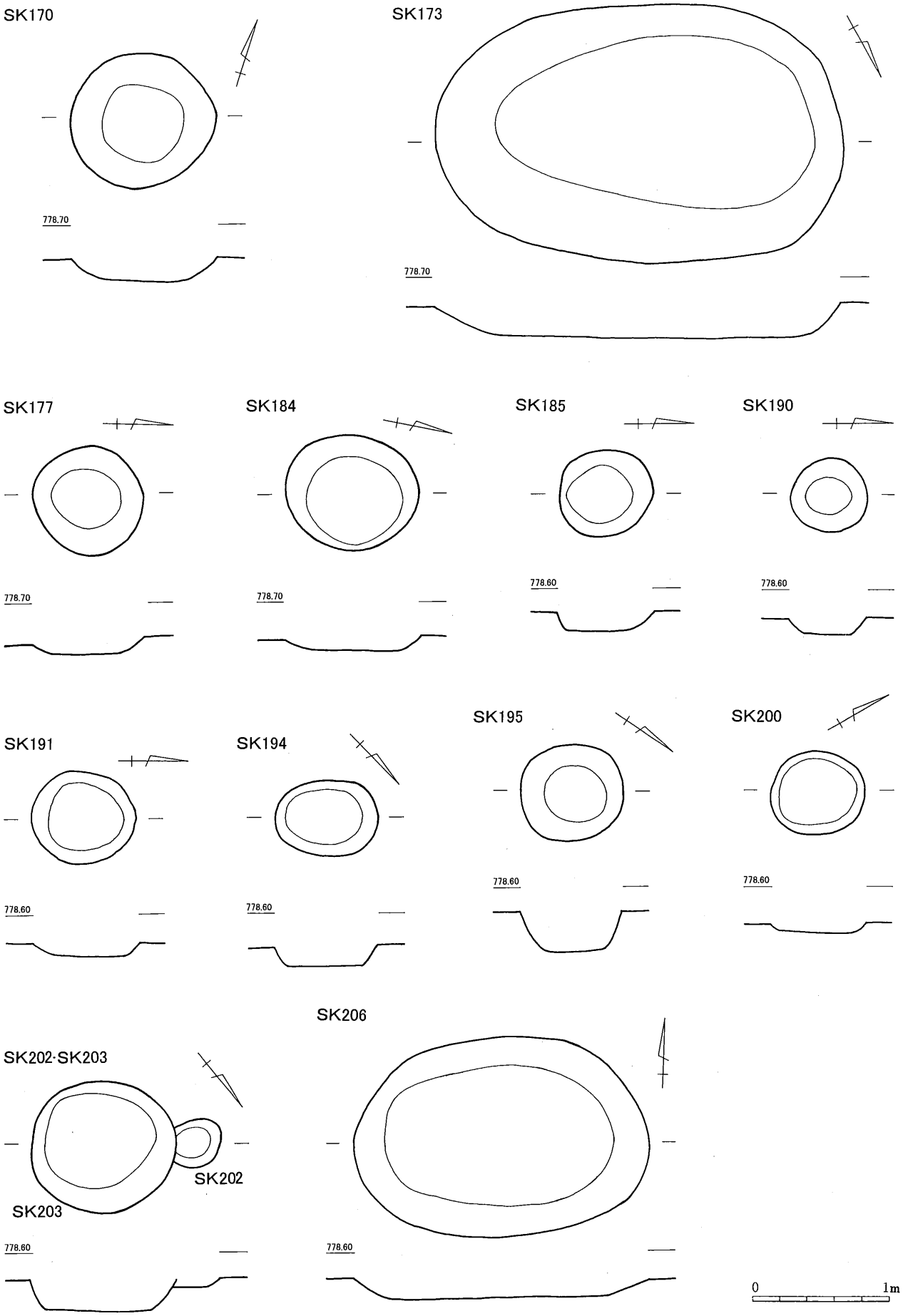
第87図　SK実測図（2）

覆土　黒褐色土が堆積していた。
出土遺物　認められなかった。
時期　覆土や形状などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、前出のSK146と同様、中世も含めた時間幅を推定しておくのが現在のところもっとも妥当のように思われる。

SK155（第87図、図版13）
位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、U－23グリッドに位置する。北側でSK199を切る。
形状　平面形は長径224cm、短径149cm、深さ52cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN－82°－Eである。断面は擂り鉢状に近く、坑底はやや傾斜する。
覆土　3層に分けられる。
第1層　黒褐色砂質土層（粘性をもち、しまる。白色砂粒を含む。）
第2層　黒褐色土層（多量の黒色土ブロックを含む。）
第3層　黒色土層（黒褐色土を含む。）
出土遺物　認められなかった。
時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK199に後続する。

SK173（第88図、図版13）
位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、W－21グリッドに位置する。
形状　平面形は長径302cm、短径191cm、深さ25cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN－63°－Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。
覆土　白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。
出土遺物　認められなかった。
時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK206（第88図）
位置　中位段丘面の下部平坦面のⅠ区、V－24グリッドに位置する。
形状　平面形は長径218cm、短径149cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN－3°－Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。
覆土　白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。
出土遺物　認められなかった。
時期　覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。


SK170
778.70
SK173
778.70
SK177
778.70
SK184
778.70
SK185
778.60
SK190
778.60
SK191
778.60
SK194
778.60
SK195
778.60
SK200
778.60
SK202·SK203
SK202
SK203
778.60
SK206
778.60
0
1m

第88図　SK実測図（3）

第2節　遺　　物

1）遺構内出土遺物

SB1（第89図1～4）

1・2は灰釉陶器の底部片。1は底面に回転糸切り痕をとどめ、回転ナデ整形される。2は内面全体に施釉され、高台脇に回転ヘラケズリが加えられる。カマド周辺から出土した前者は大原2号窯式、後者は光ヶ丘1号～大原2号窯式に比定されよう。3は口径推定14.8cm、器高5.0cmを測る黒色土器坏。4は器高14.5cmの小型の土師器甕。口縁下を回転ナデとし、胴部には横位のカキ目がめぐる。

SB2（第89図5）

5は掘り方内から出土した灰釉陶器の底部片。全面を回転ナデ整形とし、底面に回転糸切り痕を残す。虎渓山1号窯式に比定されると思われる。

SB3（第89図6～20）

6～17は灰釉陶器の碗・皿類であり、刷毛塗りの6・7を除いて他はほぼ浸け掛け施釉される。回転ナデ整形を基本とし、8・12・14の高台脇には回転ヘラケズリが加えられる。底面にケズリが加えられるものが多く、13にはさらにナデ調整が行われる。推定口径は1が12.8cm、8が12.5cm、9が13.6cm、10が14.0cm、16が12.2cmなどを測る。6・7は光ヶ丘1号窯式に、他は大原2号窯式に比定されよう。18は灰釉陶器の長頸壷。19は表裏面にタタキ目と青海波文をもつ須恵器片。20は小型の土師器甕。

SB4（第89図21）

21灰釉陶器の底部片。底面に回転糸切り痕をとどめ、回転ナデ整形される。良好な胎土を用いており、大原2号窯式に比定される。

SB5（第89図22・23）

22は大原2号窯～虎渓山1号窯式に比定される灰釉陶器碗。高台脇に回転ヘラケズリが加えられており、口径推定18.0cm、器高5.9cmを測る。23は灰釉陶器の長頸壷。現存最大径は17.6cm。外面全面施釉。

SB15（第90図24～34）

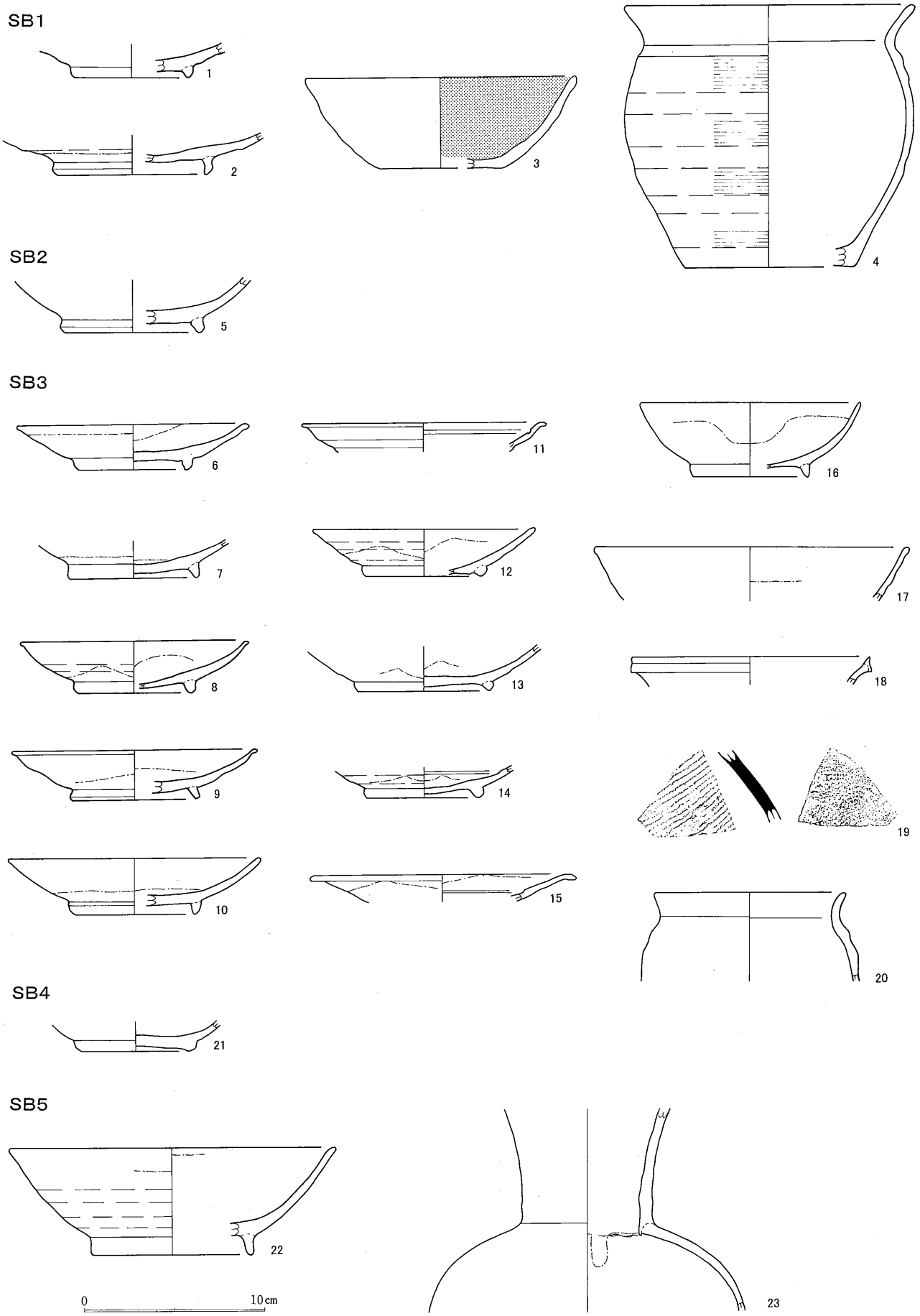
24～30は灰釉陶器の碗・皿類。施釉は刷毛塗りによるもので占められており、24・26・29・30の高台脇には回転ヘラケズリが観察される。30の底面に「芳蘭」と考えられる墨書が認められるほか、26の内面下部には墨の痕跡が残る。法量は24が口径14.8cm・器高2.5cm、27が口径15.0cm・器高3.7cm、29が口径18.6cmなどを測る。若干後出的な27を除き、他は光ヶ丘1号窯式に比定される。31・33は灰釉陶器。壷類の胴下半および注口部であり、後者は多角形に面取りがなされる。32は土師器甕の底部であり、同部外面に横位のカキ目、底面には回転糸切り痕をとどめる。34は砂岩の円礫を用いた砥石。表裏面の長軸方向に4面の砥面が形成され、一部に研磨時の線条痕が観察される。

SB16（第90図35～39）

35・36は灰釉陶器の碗・皿類。前者が刷毛塗り（内面底部に一刷毛の施釉あり）、後者が浸け掛け施釉であり、ともに高台脇と底面に回転ヘラケズリが加えられている。35が光ヶ丘1号窯式に、口径13.8cm、器高2.5cmを測る36が大原2号窯式に比定される。37は須恵器の長頸壷と考えられる肩部破片であり、胴部最大径25.4cm（推定値）を測る。38・39はそれぞれ口径22.8cmと12.3cmを測る土師器甕。後者の口縁下から胴部にかけては横位のカキ目が顕著にめぐる。

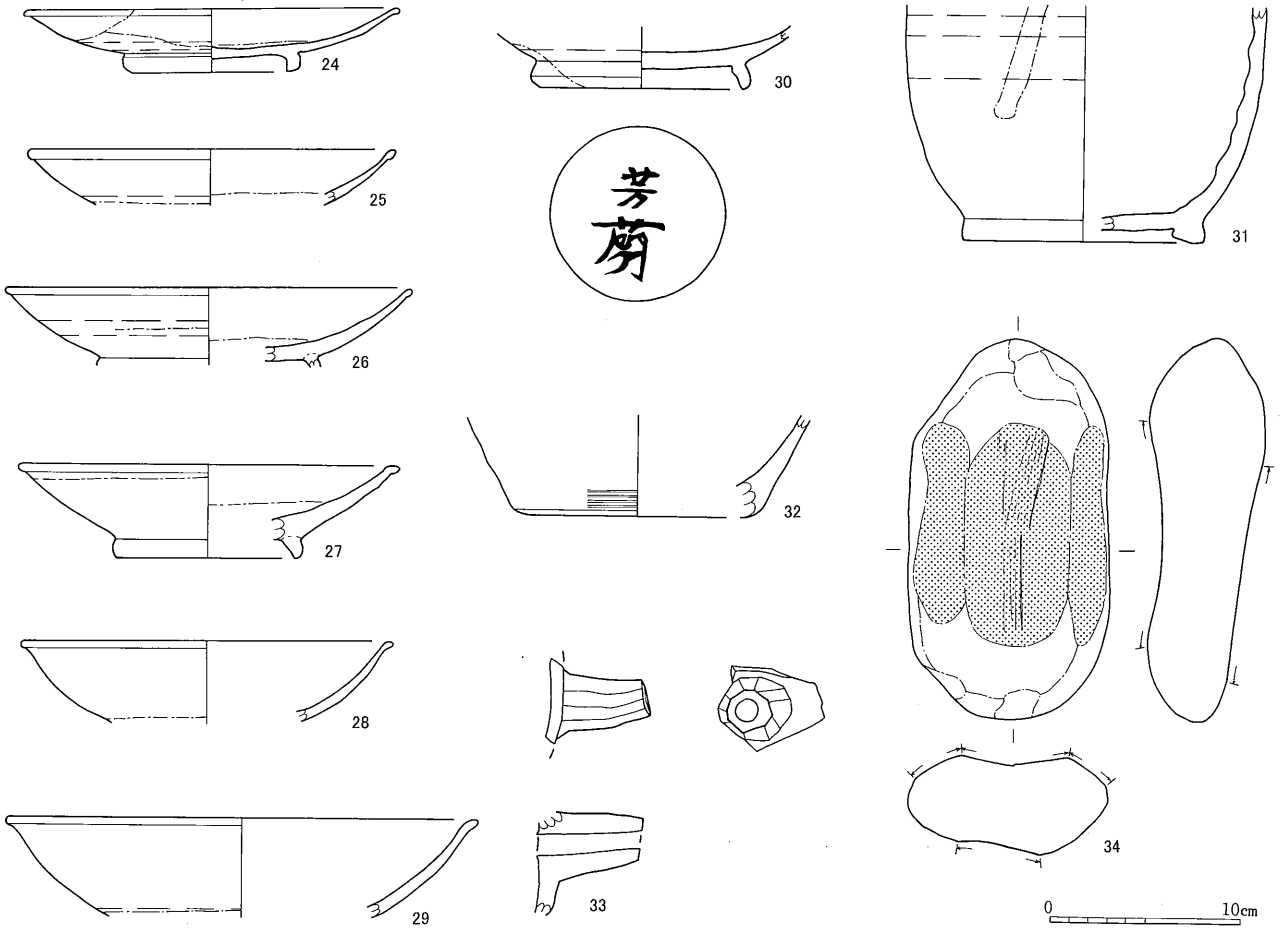
SB17（第90図40～44）

40・41は灰釉陶器。40は底面に回転ヘラケズリが加えられており、虎渓山1号窯式に比定されると思わ

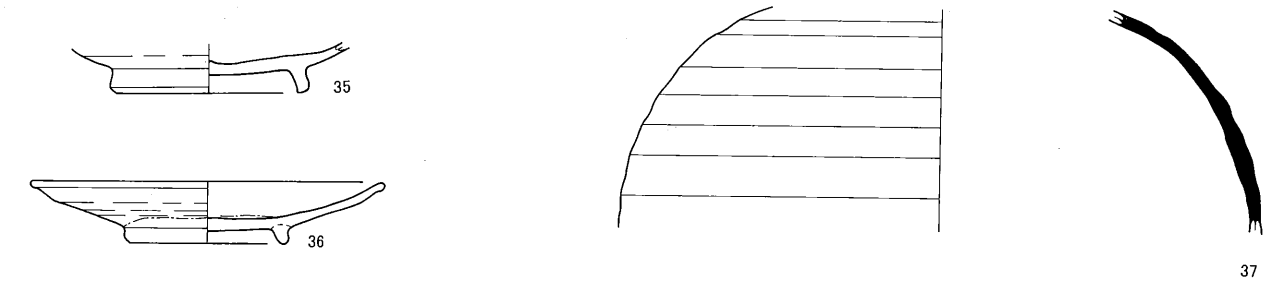

SB1
1
2
3
4
SB2
5
SB3
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
SB4
21
SB5
22
23
0
10cm

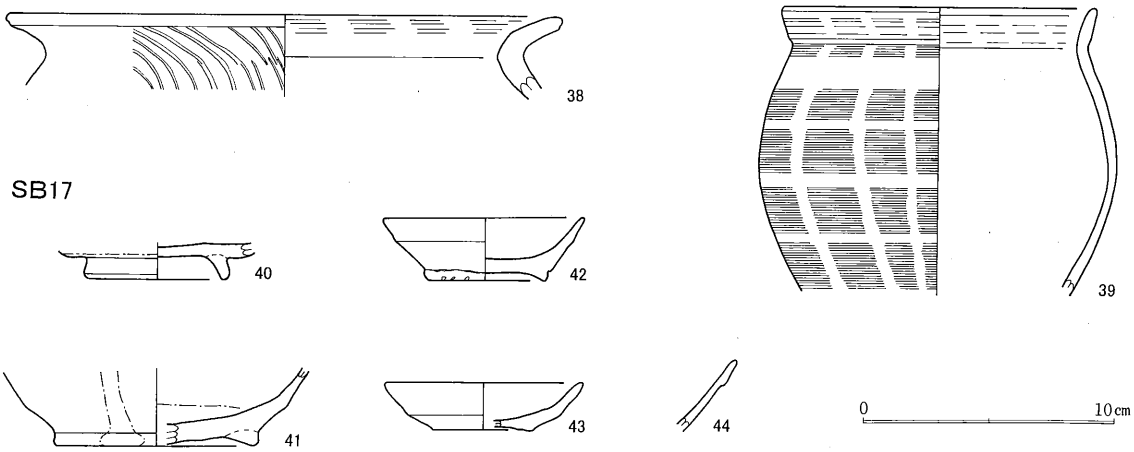
第89図　出土遺物（1）

SB15



SB16

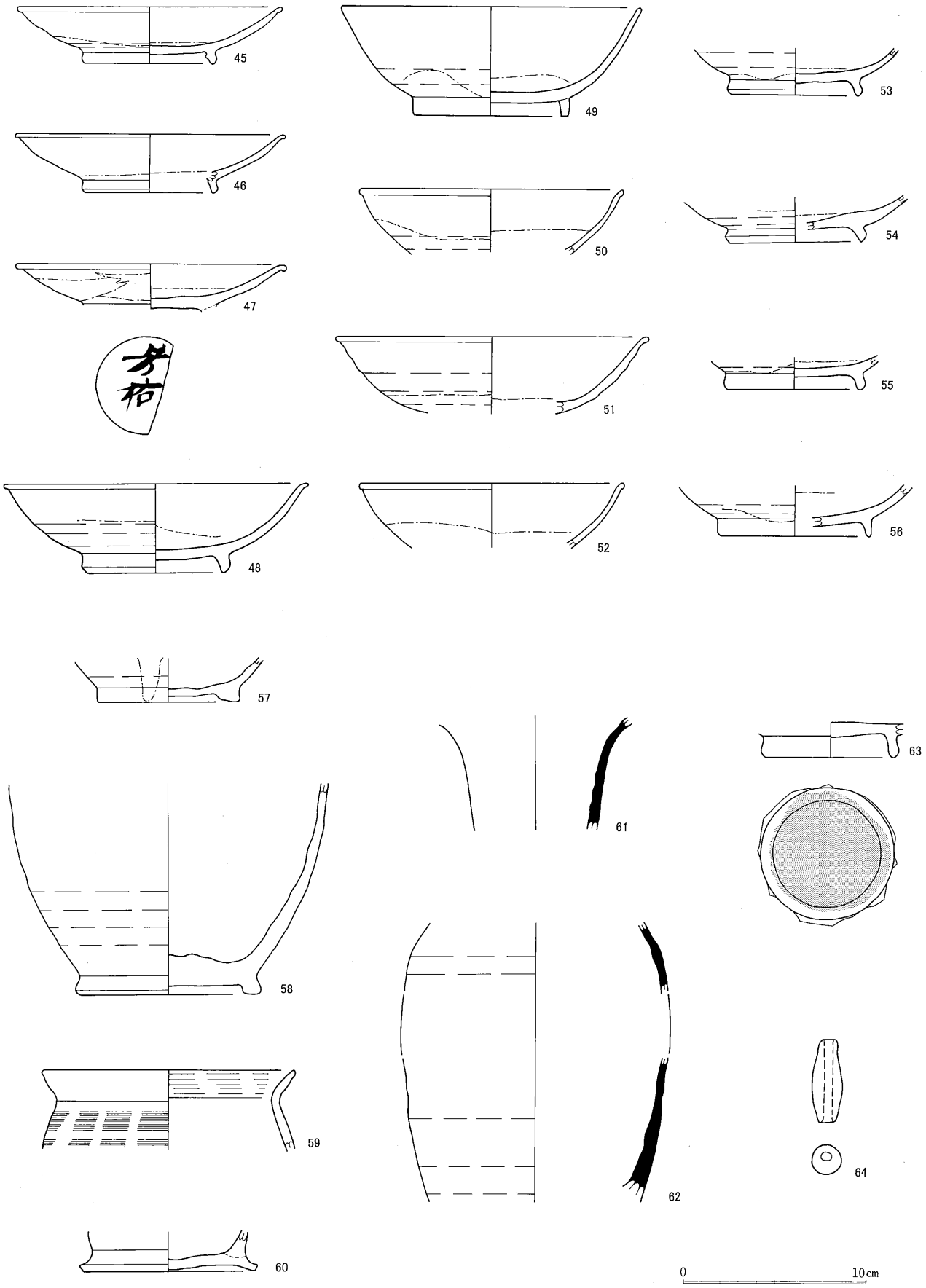




SB17

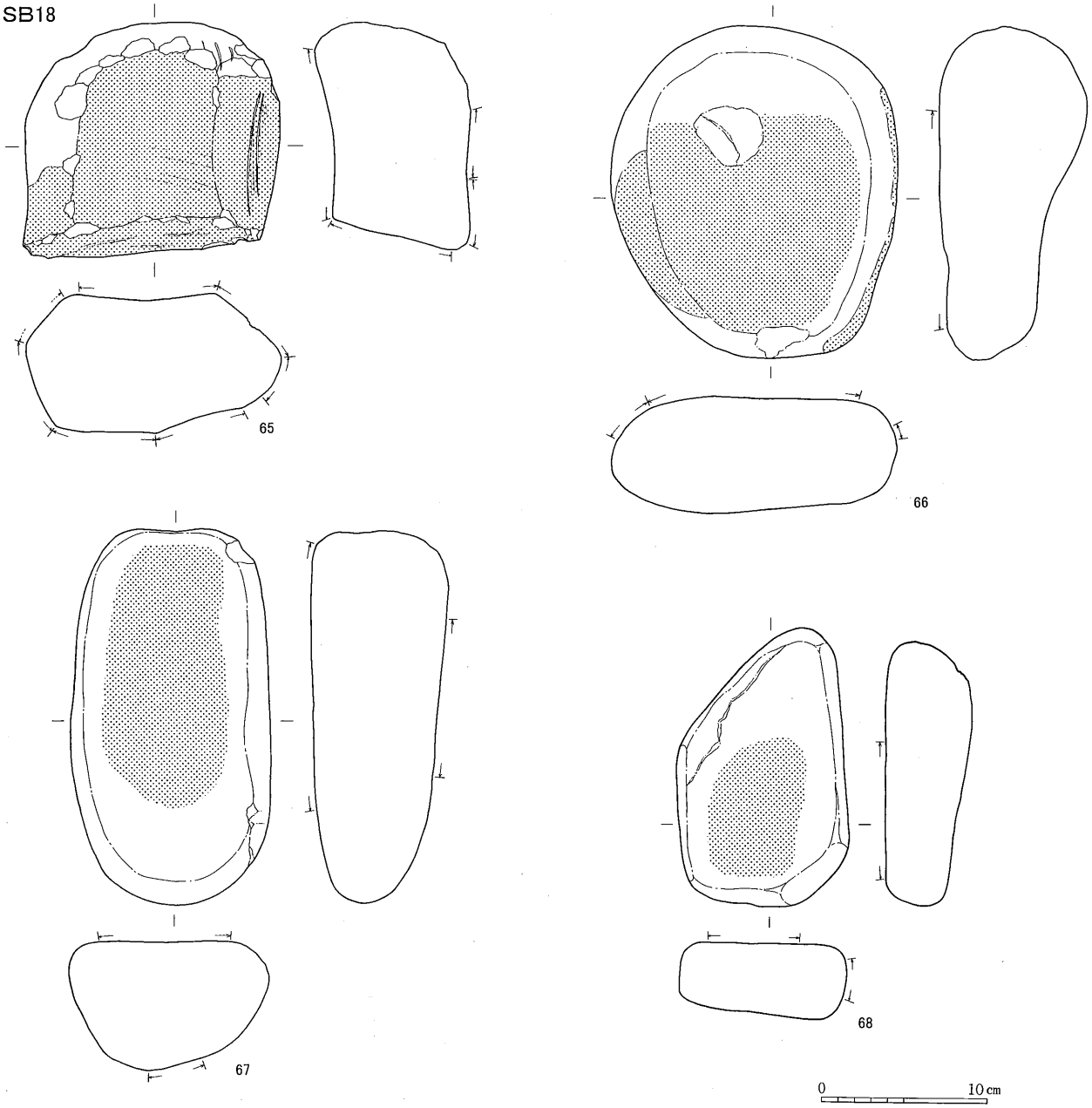
第90図　出土遺物（2）

SB18

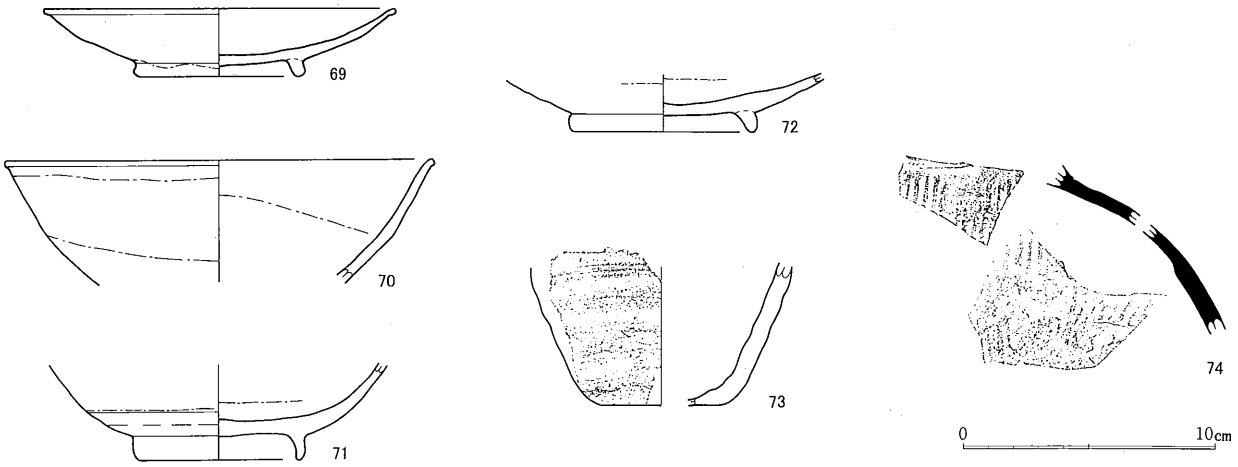


第91図　出土遺物（3）

SB18



SB19



第92図　出土遺物（4）

れる。41は浸け掛け施釉され、底面に回転糸切り痕を残す。高台の形状などから丸石2号窯～明和27号窯式頃の所産と考えられる。42・43は底面に回転糸切り痕や籾殻痕を残す山茶碗。それぞれ口径8.0cm・器高2.5cm、口径7.8cm・器高2.4cmを測る。高台部分の形状などから前者は尾張3・4型式に、後者は尾張5型式に比定される。44は淡い黄緑色の釉調を呈する青磁碗の口縁部破片。

SB18（第91・92図45～68）

45～56は灰釉陶器の碗・皿類。46・47・52を除き、他の高台脇および底面には回転ヘラケズリが加えられる。すべて刷毛塗りによる施釉がなされ、47・49・54・56の内面底部付近には一筆の刷毛施釉が見られる。47の底面には墨書「芳□」（芳蘭？）が記されている。器形全体を知れる個体は少ないものの、45が口径14.2cm・器高3.1cm、48が口径16.4cm・器高4.9cm、49が口径16.1cm・器高5.9cmなどを測る。器形および整形・施釉の特徴などから、すべて光ヶ丘1号窯式に比定されると考えられる。

57・58は長頸壷と考えられる灰釉陶器。59は口径13.6cmを測り、胴部に横位のカキ目がめぐる土師器甕。60は器面全体に指オサエ痕が残る土師器。袋物製品の高台あるいは脚台部分と思われるが、器種・器形ともに詳細は不明である。61・62は須恵器であり、ともに長頸壷の一部と考えられる。63は灰釉陶器の周囲を打ち欠いて高台内を再利用した転用硯であり、底面に朱墨痕が残る。64は土錘。土師質で、長さ4.5cm、最大幅1.7cm、重さ12.2gを測る。

65～68は砥石。65～67が砂岩、68が濃飛流紋岩の自然円礫を用いており、65は使用による著しい摩滅によって多面体に近い砥面を形成している。大きさや重量などから、置砥としての使用が推定される。

SB19（第92図69～74）

69～73は灰釉陶器の碗・皿類。69・70は刷毛塗り施釉、72は浸け掛け施釉とみられ、69・73の底面には回転ヘラケズリが、71・72の底面にはさらにナデ調整が加えられる。また、69の内面底部には一筆の刷毛施釉がなされる。69が口径13.8cm・器高2.7cm、70が口径16.8cmなどを測り、若干後出的な72を除いて他は光ヶ丘1号窯式に比定される。73は小型の土師器甕であり、同部に顕著なロクロ目が観察される。74はタタキ目を有する須恵器壷の肩部破片。

SB20（第93図75～87）

75～85は灰釉陶器の碗・皿類。施釉はすべて浸け掛けによってなされ、75の高台脇には回転ヘラケズリが加えられる。78・80は底面に回転糸切り痕を残すが、75・77・79・81・82の底面にはケズリ調整が行われる。皿類では口径12cm前後の個体と14cm以上の個体に大別でき、碗類では81が15.2cm、83が17.1cm、84が10.2cmと口径（法量）に変異をもつ。虎渓山1号窯式～丸石2号窯式と推定される85を除いて、他はすべて大原2号窯式に比定されると考えられる。

86は須恵器の大甕の頸部破片。87は内面に墨跡が残る灰釉陶器片であり、硯として転用されたものと推定される。

SB24（第93図88）

89は灰釉陶器の碗。口径14.4cm、器高4.6cmを測り、底面に文字不明の墨書が記されている。施釉は浸け掛けされ、墨書のある底面には回転ナデ調整が加えられる。大原2号窯式に比定されよう。

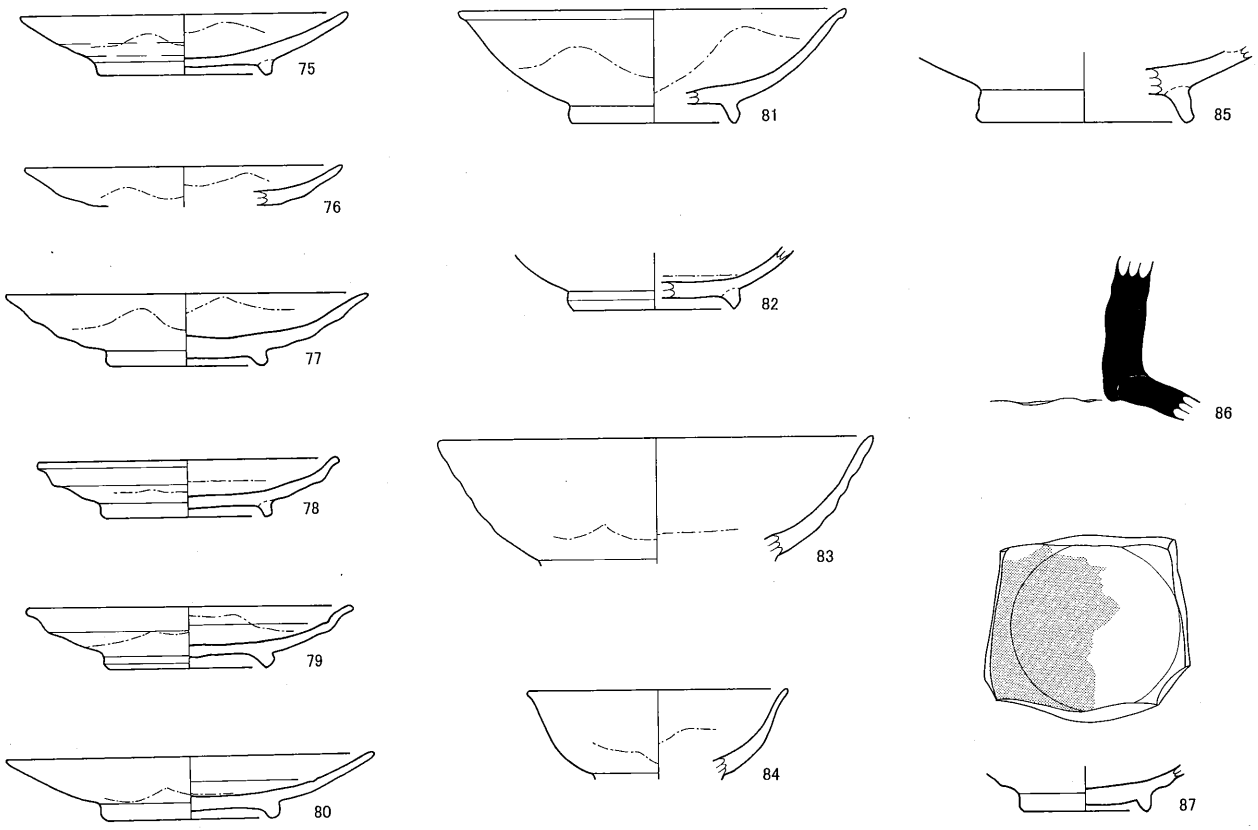
SK436（第93図89）

89は灰釉陶器の碗または皿。形態的な特徴などから、大原2号窯式に比定される可能性が高い。

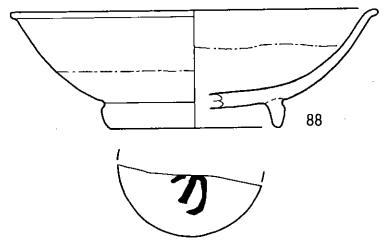
SK501（第93図90）

90は土師器の碗。底部のみの残存であり、詳細は不明である。

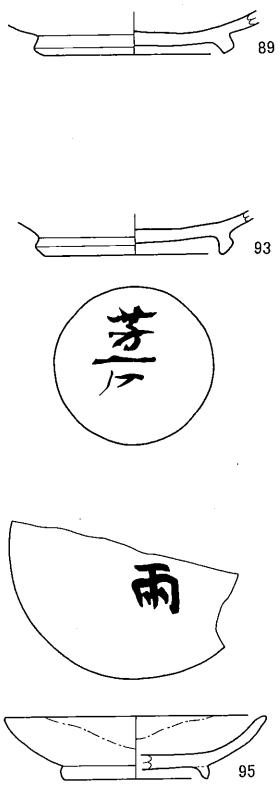
SB20



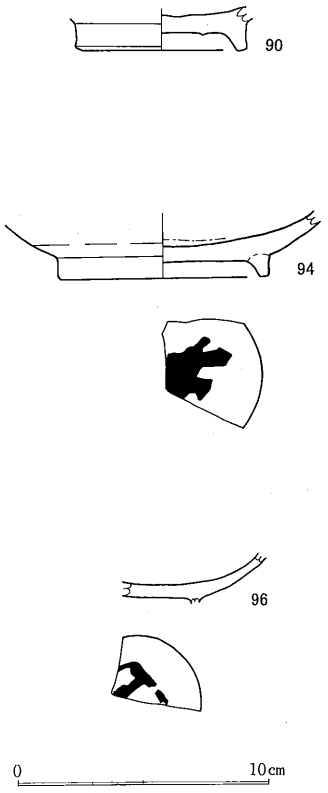
SB24



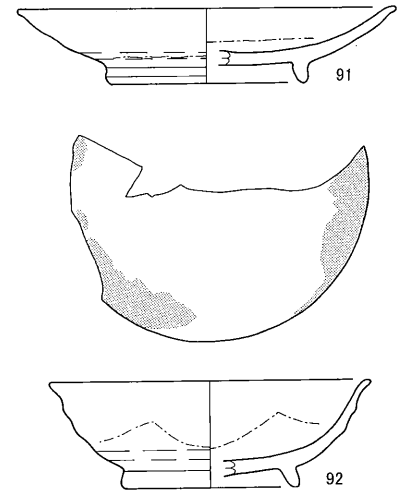
SK436



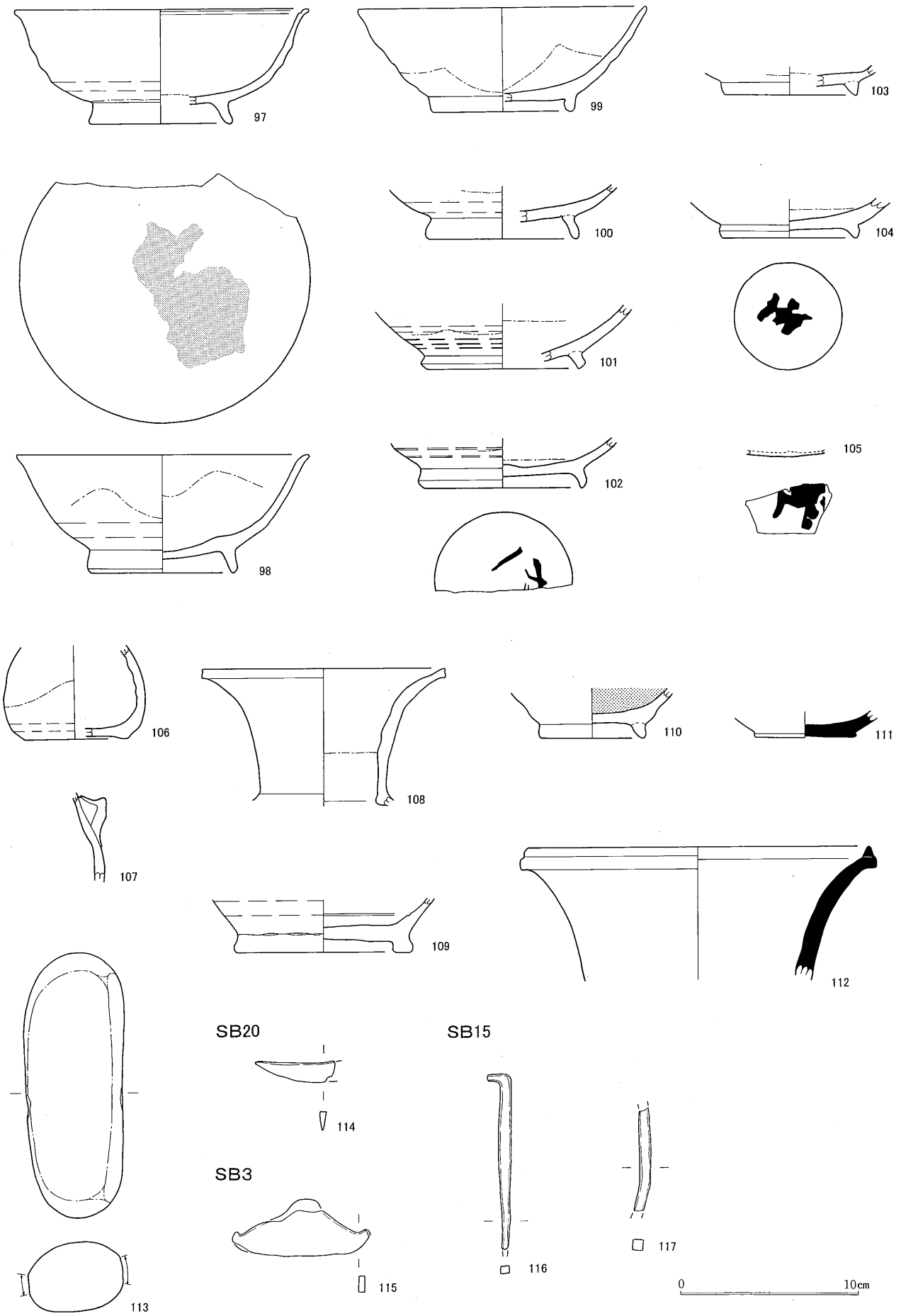
SK501



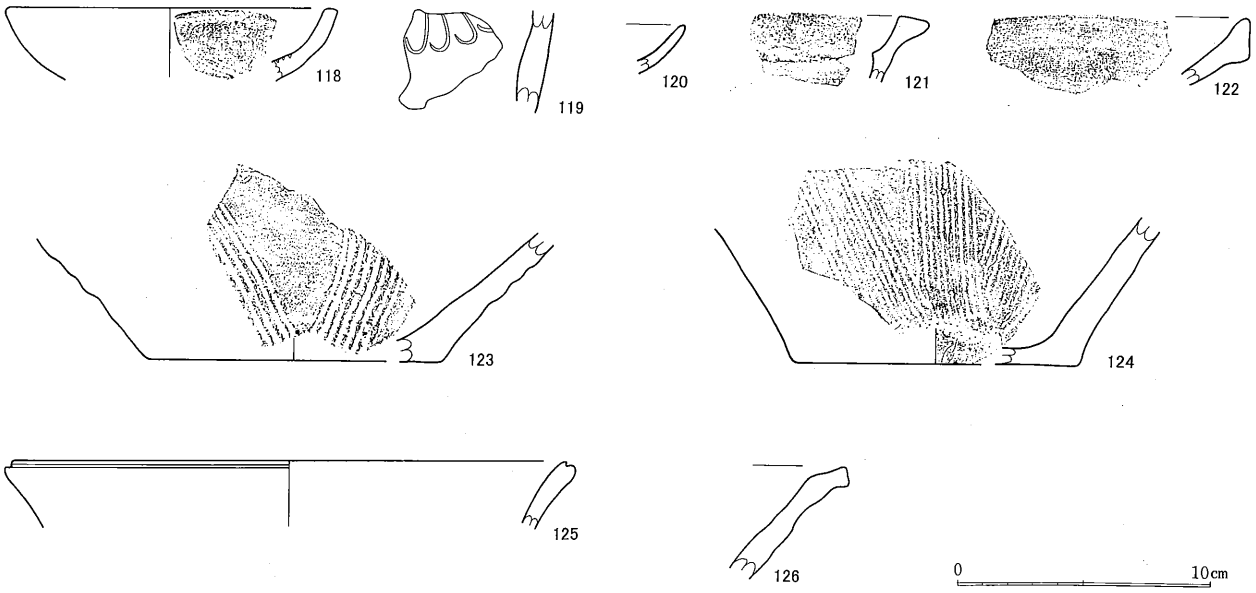
遺構外



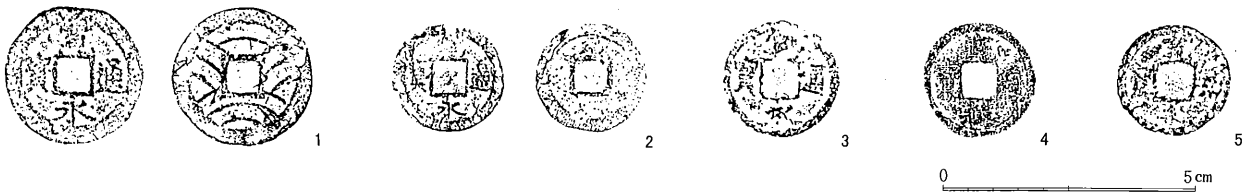
第93図　出土遺物（5）


97
99
103
100
104
101
105
102
98
106
108
110
111
107
109
112
SB20
SB15
114
SB3
116
117
115
113
0
10cm

第94図　出土遺物（6）



第95図　出土遺物（7）



第96図　出土遺物（8）－銭貨

2）遺構外出土遺物、鉄製品等

古代の陶器類（第93・94図91～112）

91～105は灰釉陶器の碗・皿類。91は口径14.8cm、器高3.0cmを測る皿。SB15出土の30と同様「芳蘭」と記された可能性が考えられる墨書のある93とともに、光ヶ丘１号窯式に比定される。92は大原２号窯式に比定される碗であり、口径16.3cm、器高6.6cmを測る。内面口縁下に沿ってタール状の炭化物が厚く付着しており、灯明具としての使用が推測される。94・95・96は光ヶ丘１号～大原２号窯式にかけての個体であり、内面（95）または底面に墨書が記されている。93・96はⅠ区南東部、94はⅠ区北西部、95はⅣ区からの出土。97～99は口径15.9～16.3cm、器高6.4～6.8cmを測る深碗。浸け掛けによる施釉が行われ、底面には回転ヘラケズリが加えられる。98の内面にはウルシとみられる褐色・半透明の樹脂状物質が被膜化して付着する。102・104・105の底面には判読不明の墨書がある。それぞれ虎渓山１号～丸石２号窯式にかけての所産と推定される。97・98・103はⅣ区、他はⅠ区北西部からの出土である。

106～109は灰釉陶器の袋物製品。106は小瓶、107はやや新しい段階の四耳壷片。108・109は長頸壷の口頸部と底部片。110は内面に黒色処理が施された黒色土器。111・112は須恵器の坏と壷の口頸部片。106・107・109～111はⅠ区南東部、108・112は北西部のそれぞれ竪穴住居跡周辺域から出土した。

土製品

小破片のため図示できないが、９世紀後半の集落域に相当するⅠ区南東部、W－24グリッドより鞴の羽口片１点が出土している。SB16出土の鉄滓と合わせて、小鍛冶の存在が考慮される。

石製品（第94図113）

113はⅠ区南東部出土の編み物石。細長い円礫の両側縁ほぼ中央部に、紐掛け用と考えられる浅い抉り

が作り出されている。長さ14.9cm、重さ565ｇを測る安山岩製。確認されたのは図示した１点のみ。

鉄製品（第94図114～117）

114は刀子（SB20）、115は火打ち鉄（SB３）、116･117（SB15）は釘と考えられる。SB16出土の鉄滓１点を除き、図示したものが出土したほぼすべてである。

中・近世の焼物（第95図118～124）

118は古瀬戸前期、13世紀後半代の卸皿であり、推定口径12.7cmを測る。119は印花文が付された古瀬戸瓶子の胴部小片。120は16世紀代の丸皿。122と121はそれぞれ大窯Ⅱ期16世紀中葉、同Ⅳ期16世紀末葉の製品と考えられるもの。123は16世紀代、124は16世紀後半～17世紀代にかけての擂り鉢。125は白瓷系捏鉢（片口鉢）。13世紀前半頃の中津川窯製品と考えられ、推定口径は22.0cm。126は灰釉が総掛けされた古瀬戸後期の折縁深皿。

図示したもののほか、17世紀後半～18世紀前半、さらに18世紀末～19世紀にかけての陶磁器類が若干量出土している。これらは総じてⅠ～Ⅳ区の発掘調査区全体に散漫な分布を示していた。

銭貨（第96図１～５）

「寛永通宝」６点があり、すべてⅡ区からの遺構外出土である。図中１が鉄製のほか、他はすべて銅製。１は裏面に波型（11波）があり、径2.8cm。２の裏面上部には「元」の文字があり、径2.3cm。３～５および未図示の１点は裏面に文字・文様なく、いずれも径2.3cmを測る。

それぞれ字体が微妙に異なっているが、摩滅が著しく既知事例との照合ならびに判別は困難である。

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　土器の胎土分析・Ｘ線回折分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小島遺跡は、長野県三岳村に所在し、王滝川右岸の河岸段丘上に位置している。本遺跡の発掘調査では、縄文時代前期末葉～中期中葉・後葉と考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、さらに、平安時代の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。遺物では、縄文土器や土師器、石器、鉄製品などが出土している。なお、縄文時代の各遺構から一括で出土した土器は、縄文時代前期末葉・中期初頭、中期中葉、中期後葉の４時期に区分され、さらに信州系、関西系、北陸系、岐阜系の４系統に分類されている。

本報告では、これら分類された縄文土器について、材質すなわち胎土の特徴を把握し、上記の型式学的分類との比較対照を行う。また、遺跡の地理的位置から、周辺地質と胎土から読み取れる地質学的背景との比較を行い、その在地性あるいは搬入品の可能性について検証する。

なお、本報告では、赤色物質が土器内面に付着する縄文土器が認められたことから、この物質の由来を明らかにするためＸ線回折分析を実施する。

Ⅰ．胎土分析

１．試料

試料は、小島遺跡から出土した縄文土器片28点である（No.1～28)。これら試料は、考古学的な型式・系統分類がされており、縄文時代前期末葉の土器片試料８点（No.1～８)、中期初頭の土器片試料４点（No.9～12)、中期中葉の土器片試料２点（No.13、14)、中期中葉末の土器片試料14点（No.15～28）である。

各試料の出土遺構、本文土器図版中No.、時期、系統は、分析結果とともに表１に記す。

２．分析方法

胎土分析は、現在様々な分析手法が用いられているが、大きく分類すると鉱物組成や岩片組成を求める手法と化学組成を求める手法とがある。前者は、胎土中に含まれる重鉱物を対象とした分析や土器を薄片とし顕微鏡観察などを行う方法であり、後者は土器胎土に含まれる素地土である粘土や鉱物を対象に蛍光Ｘ線分析を実施する方法である。前者の方法は、縄文土器、弥生土器および土師器のような比較的粗粒の砂粒を含み、比較的低温焼成で鉱物の変質が少ない試料に有効であり、胎土の特徴が捉えやすいこと、土器の材料である粘土や鉱物と背景となる地質との関連性を考えやすいといった利点がある。一方、後者の方法は土器の材質（種類）に拘わらず再現性の高い数値化されたデータが得られるといった利点がある。

今回の分析試料は、比較的低温焼成によって製作された土器であること、また、当地域では同様な分析例が少なく胎土の情報をより多く得る必要があること、さらに、当社では至近の木曽福島町に所在する遺跡である川合遺跡や板敷野遺跡から出土した縄文土器の胎土分析を薄片作製観察により行っていることなどから、本報告では、これらのデータとの比較も考慮し、同様の方法を用いる。処理過程を以下に示す。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断し、0.03㎜の厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡を用いて岩石学的手法で観察を行い、土器胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片や岩石片の種類構成を明らかにする。また、孔隙度など素地土に関する特徴の観察も行う。

３．結果

結果を表１に示す。板敷野遺跡から出土した縄文土器の胎土分析の結果（2003, パリノ・サーヴェイ株式会社)、土器胎土中に含まれる岩石片の産状から、花崗岩片の有無から大きくＡ類とＢ類に分類した。本分析の結果を見ても、ほぼこの胎土分類を適用することができる。ただし、花崗岩の有無だけではなく、他の岩石片の産状も試料によっては比較的明瞭な特徴を示すことから、ここでは、板敷野遺跡のＡ・Ｂ類を発展させる形で、以下に示す胎土分類を設定した。また、各試料の胎土分類を表１に示す。

〈分類〉

Ａ１類：板敷野遺跡の報告でＡ類とした分類において、花崗岩片以外に岩石片をほとんど含まないものをＡ１類とする。試料によっては微量のチャートまたは流紋岩を伴うことがある。

Ａ２類：板敷野遺跡の報告でＡ類とした分類において、花崗岩片以外に微量のチャート、安山岩および火山ガラスを伴うものをＡ２類とする。試料によっては微量の砂岩または流紋岩を伴うことがある。

Ａ３類：上述のＡ１類の特徴にさらに結晶片岩を伴うものをＡ３類とする。これは、板敷野遺跡の報告でＡ'類とした分類に相当する。

Ｂ１類：板敷野遺跡の報告でＢ類とした分類において、チャートや頁岩および砂岩などの堆積岩類を比較的多く含むものをＢ１類とした。ただし、今回の分析では、堆積岩類を比較的多く含むという特徴に重点を置き、微量の花崗岩片を伴うものもＢ１類とした。なお、本類は微量の火山ガラスを伴う試料も多い。

Ｂ２類：Ｂ１類の特徴に加えて、さらに結晶片岩を伴うものをＢ２類とした。

Ｃ　類：岩石片の組成において、堆積岩も花崗岩も含まず、少量の軽石と微量の火山ガラスを特徴とする。

Ｄ　類：岩石片の組成において、堆積岩も花崗岩も含まず、少量の安山岩と微量の軽石または火山ガラスを特徴とする。

Ｅ　類：岩石片の組成において、花崗岩を含まず、堆積岩は微量のチャートが含まれるのみのもの。他に微量の火山ガラスを伴う。

Ｆ　類：岩石片がほとんど認められない。ただし、鉱物片の石英や斜長石は、花崗岩に由来すると考えられる粗粒な粒が多い。

〈時期・系統〉

上記の分類結果を土器の時期・系統毎にまとめると以下のようになる。

前期末葉：信州系とした４点の試料は全てＢ１類に分類され、関西系とした４点の試料は、No.5のみＢ１類で、他の３点はいずれもＡ１類に分類される。

中期初頭：信州系および北陸系とした試料（No.9、10）はいずれもＡ１類、一方、関西系とした２点の試料は、No.11がＡ３類、No.12がＢ１類に分類される。

中期中葉：２点の試料はいずれも信州系とされるが、胎土は、No.13はＡ１類、No.14はＣ類である。

中期中葉末：信州系とされた12点のうち、Ａ２類とＢ１類がそれぞれ４点ずつあり、残りの４点はＢ２、Ｄ、Ｆの各類に分類される。また、北陸系のNo.26はＥ類、岐阜系とされたNo.27はＡ２

類にそれぞれ分類される。

4．考察

今回設定したＡ１類からＦ類までの胎土分類と型式学的分類とは、上述のように１対１では相応しないが、対応関係は明らかに認められる。すなわち、小島遺跡から出土した縄文土器は、外見上の特徴が異なるものは、土器の素地土の由来や製作地が異なっていた可能性がある。なお、これら土器の素地土や製作地について、考古学的所見から推定されている関西や北陸地方などに求められるかが課題となる。そのためには、遺跡周辺の地質と胎土から推定される地質との比較を行う必要がある。本遺跡周辺の地質については、片田･礒見（1958）、竹内ほか（1998）および日本の地質「中部地方Ｉ」編集委員会（1988）の記載を参照とする。

Ａ類の特徴である花崗岩類は、本遺跡周辺の木曽川流域で広範に分布が認められる。特に、上松の市街地より下流の木曽川両岸の山地は、上松花崗岩、伊奈川花崗岩、木曽駒花崗岩などの中生代に貫入した角閃石黒雲母花崗岩あるいは角閃石黒雲母花崗閃緑岩により主に構成されている。一方、上松市街地より上流の木曽川流域および王滝川流域の両岸の山地を構成する主な地質は、美濃帯とよばれる中生代の堆積岩類からなる地質である。Ｂ類の特徴である堆積岩類であるチャート、頁岩、砂岩は、いずれも美濃帯を構成する主要な岩石となっている。王滝川と木曽川の合流点付近では、美濃帯の中に上松花崗岩の岩体の一部が分布しており、両者混在の地域と見ることができる。また、Ａ類およびＢ類に微量認められる安山岩および火山ガラスの給源としては、木曽御岳火山の噴出物を第一にあげることができる。

これらの地質背景を胎土の各分類の地域性に当てはめると、ほとんど花崗岩類のみしか認められないＡ１類は上松市街地より下流の木曽川流域、花崗岩にチャートや安山岩も混在するＡ２類は王滝川と木曽川の合流点付近、堆積岩類の卓越するＢ１類は王滝川と木曽川の合流点よりも上流の王滝川流域あるいは木曽川流域というそれぞれの地域性が想定される。

次に、Ａ３類およびＢ２類の特徴である結晶片岩の由来について検討する。川合遺跡（2002，パリノ･サーヴェイ株式会社）や板敷野遺跡（前出）の胎土分析結果でも結晶片岩を含む胎土が認められたが、結晶片岩として記載された地質を上述の文献の中で認めることができず、その由来は不明としている。しかし、今回の胎土分析結果でも認められ、結晶片岩を含むこと以外の特徴は、それぞれＡ類やＢ類の特徴と変わらないことから、これらが由来する地質は木曽川流域にある可能性が高い。ここで、片田･礒見(1958)の記載の中に、上松付近の木曽川右岸に片状ホルンフェルスと記載された変成岩の分布を認めることができる。これは、日本の地質「中部地方Ｉ」では、領家帯を構成する雲母片岩という記載になっている。このことから、Ａ３類およびＢ２類に認められた結晶片岩の由来は、この地質に由来する可能性がある。この場合、Ａ３類およびＢ２類の地域としては上松付近に想定される。

Ｃ類およびＤ類の特徴である軽石および安山岩の由来は、上述のように木曽御岳火山の噴出物に求めることができる。花崗岩や堆積岩類がほとんど入ってこないことから、その地域性としては、西野川右岸に広がる御岳火山の東麓地域が想定される。

Ｅ類の岩石片の特徴は、微量のチャートと火山ガラスのみであるが、鉱物片では斜長石が比較的多く、カリ長石が認められない。また、他に含まれる鉱物が斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物のみである。これらの鉱物片の種類構成からは、その背景として安山岩質の火山噴出物が主体となっていることが窺える。したがって、Ｅ類の地域性もＣ類、Ｄ類と同様に御岳火山東麓に由来する可能性がある。

Ｆ類については、岩石片の特徴を捉えられないが、前述のように石英や斜長石は花崗岩に由来すると考えられる。また、黒雲母および角閃石を含むことも花崗岩に由来することを示唆する。したがって、その

地域性としては、Ａ１類と同様に上松より下流の木曽川流域を想定することができる。

以上、小島遺跡から出土した縄文土器は９種類の胎土に分類され、いずれの胎土も、包含される鉱物片や岩石片の種類は、王滝川流域から木曽福島～上松の木曽川流域および木曽御岳火山東麓地域という範囲に分布する地質の中に認めることができた。このことは、小島遺跡出土の土器が上記した比較的狭い地域内で製作された、あるいは素地土の材料となる粘土や砂が採取・利用されたことを示唆している可能性がある。

一方で、型式学的特徴から推定された関西や北陸といった遠方地域からの搬入については、現時点ではそれを積極的に支持する結果は得られなかったといえる。関西系とされる６点の土器は、他の信州系とされる試料から特に区別される特徴は見出せず、これら６点は３種類に分類された。また、北陸系とされる２点の土器は、それぞれが異なる特徴を示し、１点は信州系とされた試料と同様の特徴、他の１点は信州系とされる試料中には類似した特徴を認めることはできないが、周辺の地質と比較して特異な鉱物、あるいは岩石が含まれる試料ではなかった。

ただし、遠方地域からの搬入について検証するためには、それぞれの故地と考えられる地域で出土した同型式・系統の土器を対象とした胎土分析例との比較や、当地域における標準試料の作成、すなわち、素地土の材料となりうる粘土・砂を採取し、これまでに実施した胎土分析結果との相関性を検討することが重要である。現段階では、本分析結果から搬入の可能性を言及することはできないが、今後はこれら分析調査例を蓄積し、あらためて評価したいと考えている。

Ⅱ．Ｘ線回折分析

１．試料

試料は、縄文土器（MOJ　SB14－22）内面に認められた赤褐色付着物である。この付着物について、必要最小限を土器内面から採取し、分析試料とする。

２．分析方法

試料を105℃で２時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕した。この微粉砕試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、Ｘ線回折測定試料とした。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立，1980；日本粘土学会，1987）。

検出された物質の同定解析は、Materials　Data，Inc．のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装　置：理学電気製MultiFlex	Divergency　Slit：１°
Target：Cu（Kα）	Scattering　Slit：１°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving　Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning　Speed：２°/min
Current：40mA	Scanning　Mode：連続法
Detector：SC	Sampling　Range：0.02°
Calculation　Mode：cps	Scanning　Range：３～45°

３．結果および考察

Ｘ線回折図を図１に示す。一般に遺跡などで検出される代表的な赤色顔料にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite[α－Fe２O３]）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]）、鉛丹（鉛丹；minium[Pb_3O_4]）な

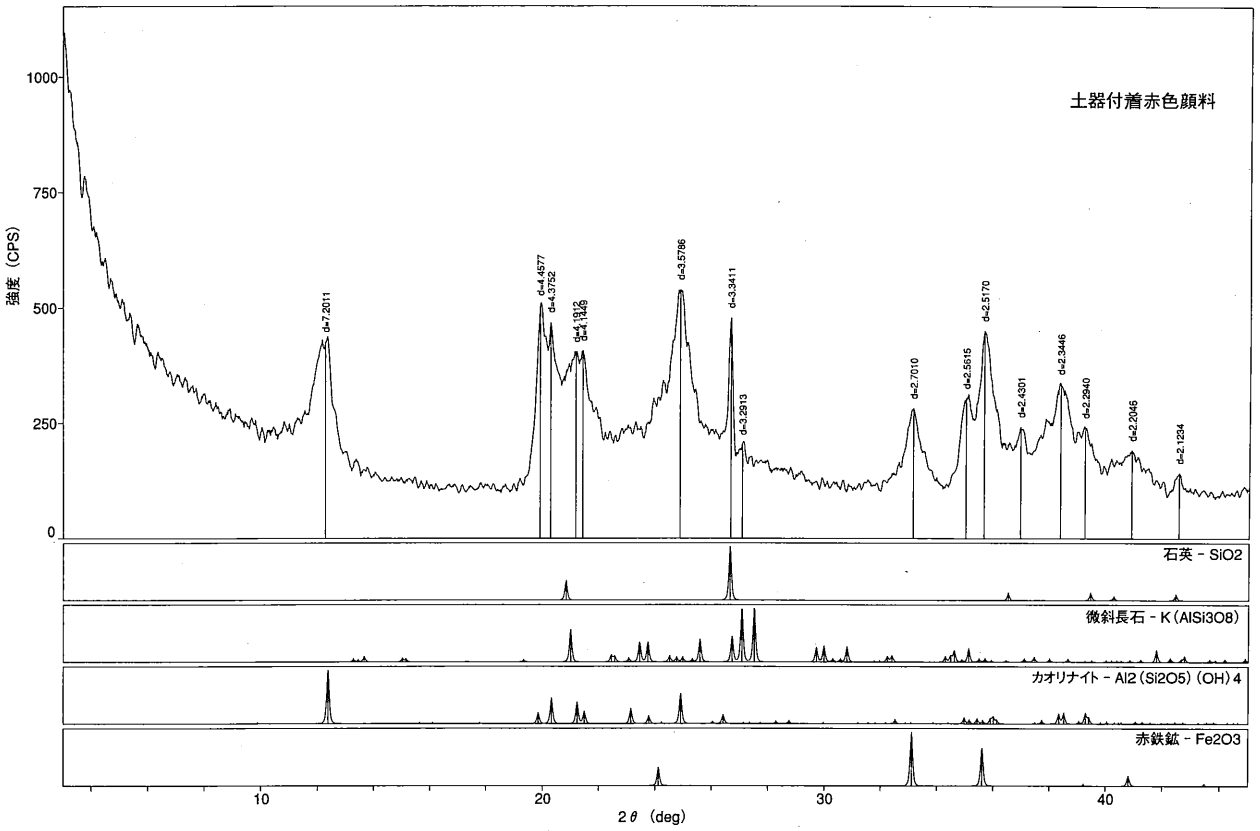


図１　土器付着赤色顔料のＸ線回折図

どがある。

縄文土器内面の付着物からは、代表鉱物として赤鉄鉱（hematite）の回折線が明瞭に認められた。このことから、付着物は「ベンガラ」に属すると考えられる。なお、赤鉄鉱のほかに、石英（quartz)、微斜長石（microcline)、カオリナイト（kaolinite）などの鉱物も相当量検出されている。これらは、試料採取時に混入した土器胎土に由来する鉱物と推察される。

引用文献

足立吟也　(1980)「６章　粉末Ｘ線回折法　機器分析のてびき３」．ｐ．64-76，化学同人．

片田正人・礒見　博（1958）上松地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅），38ｐ．，地質調査所．

日本粘土学会編（1987)「粘土ハンドブック　第二版」．1289ｐ．，技報堂出版．

日本の地質「中部地方Ｉ」編集委員会（1988）日本の地質４　中部地方Ｉ．330ｐ．，共立出版．

竹内　誠・中野　俊・原山　智・大塚　勉（1998）木曽福島地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅），94ｐ．，地質調査所．

パリノ・サーヴェイ株式会社（2002)「第Ⅴ章　胎土分析　分析の結果」『川合遺跡』木曽福島町教育委員会

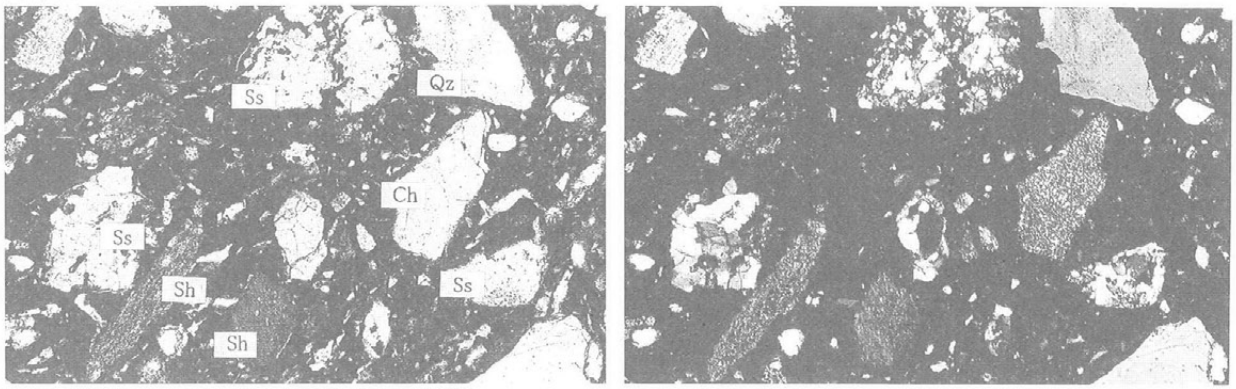
パリノ・サーヴェイ株式会社（2003)「第７章　各種の分析　３　板敷野遺跡出土土器の胎土分析」『板敷野遺跡』木曽福島町教育委員会

表1　胎土薄片観察結果

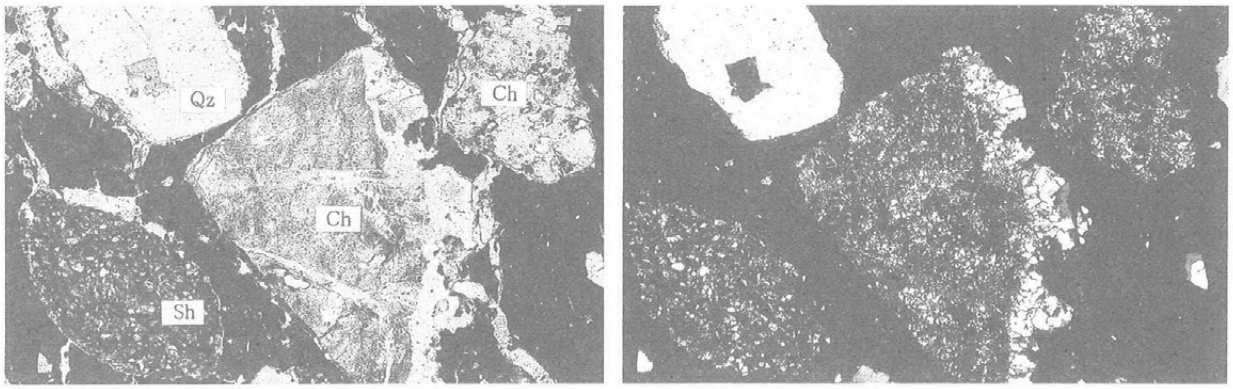
No	出土位置	掲載個体No	時期	系統	胎土	砂粒			砂粒の種類構成																									孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	備考
									鉱物片															岩石片														
						全体量	淘汰度	最大径	石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	白雲母	黒雲母	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	ジルコン	電気石	緑廉石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	流紋岩	安山岩	花崗岩類	結晶片岩	軽石	火山ガラス	植物珪酸体					
1	SB9	39	前期末葉	信州	B1	○	×	1.4	○	+	+	+		+		+						+	△	△	△		+						×	×	△	+	
2	SB9	36	前期末葉	信州	B1	○	×	1.4	○	+	+	+		+	+	+						+	△	△	△						+	+	×	△	△	+	
3	SB9	53	前期末葉	信州	B1	○	×	1.1	△	+	+	+		+		+						+	+	△	△		+				+	+	×	×	△	+	
4	SB9	57	前期末葉	信州	B1	○	×	2.1	△	+	+				+						+	+	+	△	△			+				+	△	△	○	+	
5	SB9	73	前期末葉	関西	B1	○	×	2.0	△	+	+	+	+	+								+	○	△	+			+			+		△	△	+	+	
6	SB9	6	前期末葉	関西	A1	○	×	1.4	○	+	+										+	+						+					×	×	+	+	
7	SB9	5	前期末葉	関西	A1	○	×	2.1	○	△	+			+	+	+				+	+	+						+				+	×	×	△	+	
8	SB9	85	前期末葉	関西	A1	○	×	1.5	○	△	+			+	+							+	+					+					△	×	+	+	
9	W26	323	中期初頭	信州	A1	◎	×	1.5	△	+	+	+		+	△	△						+						○					×	×	○	+	
10	U19	320	中期初頭	北陸	A1	○	×	1.7	○	+	△				+	+		+			+	+				+		+					△	×	△	△	
11	SQ2	24	中期初頭	関西	A3	○	×	2.8	△	+	+					+					△	+	+					+	○		+		×	○	○	+	結晶片岩は黒雲母または緑廉石を含有する。鉱物片の緑廉石は結晶片岩由来。
12	X18	164	中期初頭	関西	B1	○	×	2.1	○	+	+			+	+	+						+	+	+	△			+			+		△	△	+	+	
13	SB8	2	中期中葉	信州	A1	○	×	1.8	○	+	△				+	+					+	+						△					△	×	○	+	
14	SB8	1	中期中葉	信州	C	○	×	2.6	○	+	△				+	+					+	+								△	+		△	×	○	+	火山ガラスは軽石型。
15	SB14	17	中期中葉末	信州	D	○	△	1.3	○	+	+	+	△			+					+	+	+				△				+	+	△	×	△	+	火山ガラスは軽石型。安山岩はガラス質安山岩。
16	SB14	20	中期中葉末	信州	B1	○	×	2.3	○	+	+	+	+			+	+	+			+	+	+	+	△						+	+	△	×	△	+	
17	SB14	7	中期中葉末	信州	A2	○	×	2.8	△	+	△				+	+	+				+	+	+		+		+	○			+	+	△	△	△	+	安山岩はガラス質安山岩。
18	SB14	14	中期中葉末	信州	A2	○	×	2.1	○	△	+				+	+						+	+				+	△			△		△	△	○	+	火山ガラスはバブルウォール型。
19	SB14	12	中期中葉末	信州	B1	○	×	1.9	△	+	+	+	+			+						+	+	△	△		+	+			+	+	×	△	○	+	安山岩はガラス質安山岩。
20	SB14	13	中期中葉末	信州	B1	○	△	1.3	○	+	△	+	+		+	+					+	+	+	△	△		+				+	+	△	×	△	+	安山岩はガラス質安山岩。
21	SB14	8	中期中葉末	信州	B1	○	×	1.6	○	+	+	+	+			+						+	+	+	△		+				+	+	△	△	○	△	安山岩はガラス質安山岩。火山ガラスはバブルウォール型。
22	SB14	9	中期中葉末	信州	B2	○	×	1.3	○	+	△	+	+		+	+					+	+	+	+	+		+		+		+	+	△	×	△	+	安山岩はガラス質安山岩。火山ガラスはバブルウォール型。
23	SB14	11	中期中葉末	信州	A2	○	×	2.5	○	+	+			+	+	+						+	+				+	△			+	+	×	×	△	+	安山岩はガラス質安山岩。
24	SB14	10	中期中葉末	信州	A2	◎	×	2.1	△	+	△				○	+					+	+	+			+	+	+		+	+	+	△	△	○	△	
25	SB14	22	中期中葉末	信州	D	○	△	1.1	+	+	+	+	+			+	+					+					△			+		+	△	×	△	+	
26	SB14	23	中期中葉末	北陸	E	○	○	0.9	△		○	+	+									+	+								+		△	○	○	+	中～粗粒砂サイズの砂粒が主体で粒径は均質。素地は粘土質。火山ガラスはバブルウォール型。
27	SB14	166	中期中葉末	岐阜	A2	○	×	1.3	○	+	+		+	+	+				+			+	+			+	+	+			+		×	△	○	+	
28	SB14	18	中期中葉末	信州	F	◎	×	1.9	△	+	○				△	+					+	+											△	△	○	+	花崗岩由来の粗粒な石英・斜長石が主体であるが、花崗岩岩片は認められない。

量比　◎：多量　○：中量　△：少量　＋：微量　　程度　◎：強い　○：中程度　△：弱い　×：なし

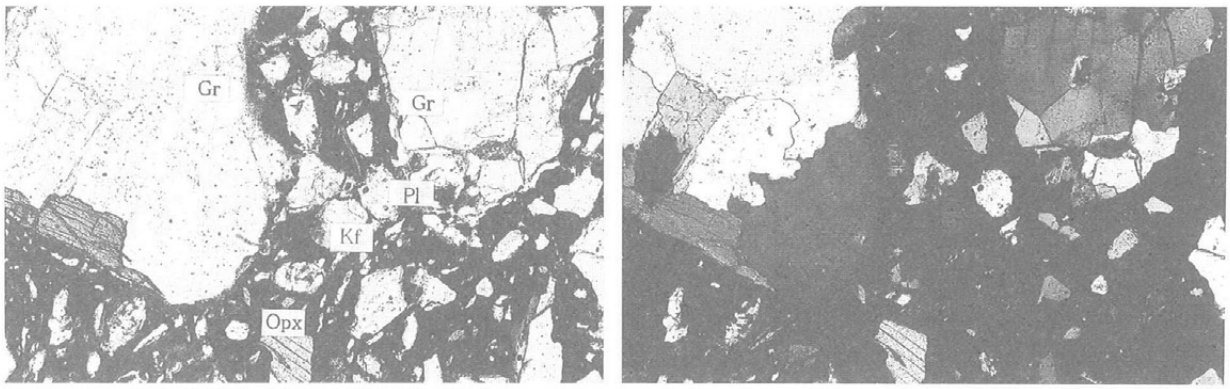
図版１　胎土薄片（１）



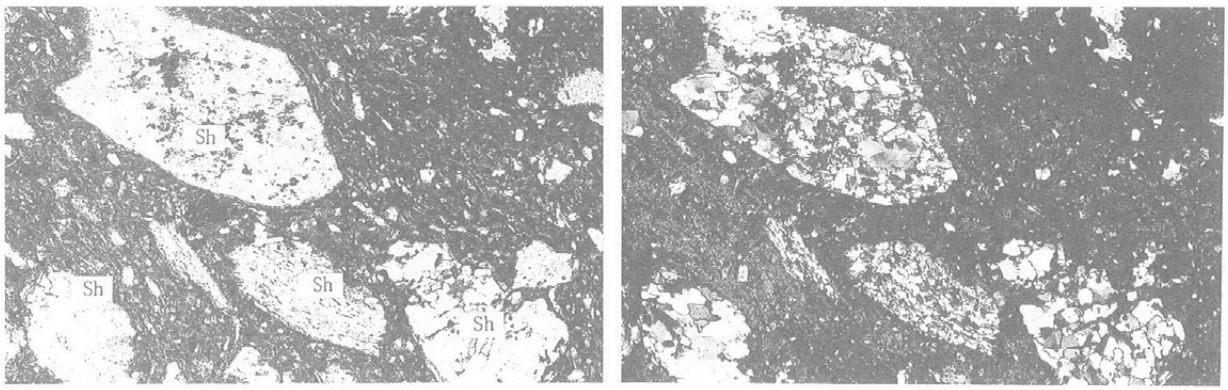
1．No.1　SB9　掲載No.39　前期末葉　信州



2．No.5　SB9　掲載No.73　前期末葉　関西



3．No.9　W26　掲載No.323　中期初頭　信州

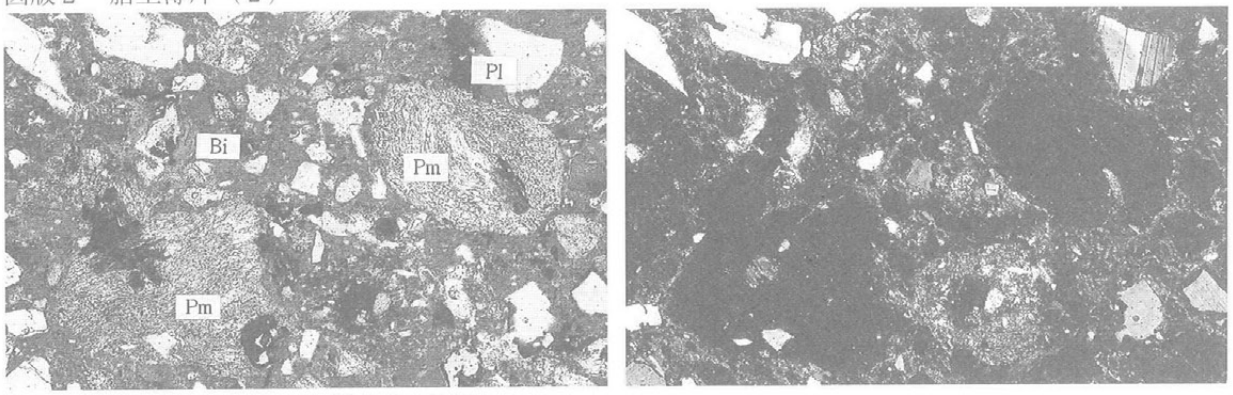


4．No11　SQ2　掲載No.24　中期初頭　関西

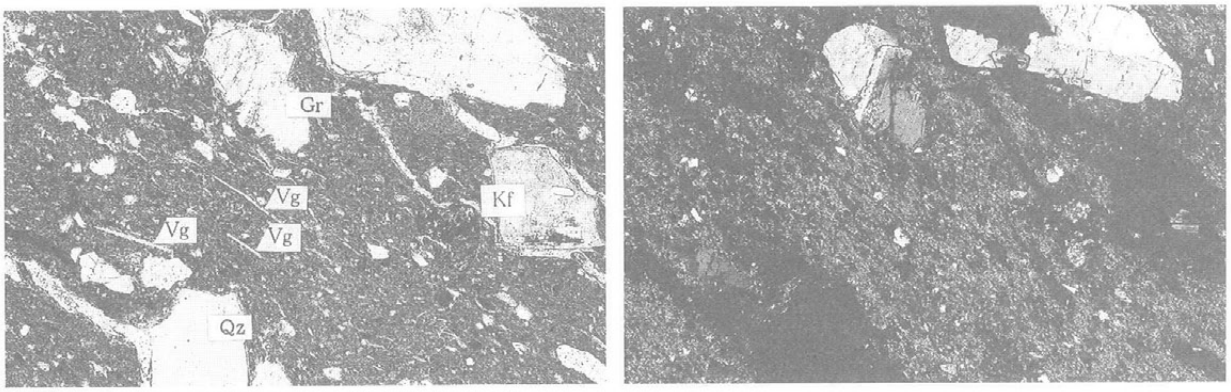
0.5mm

Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Opx：斜方輝石．Ch：チャート．Sh：結晶片岩．
Ss：砂岩．Gr：花崗岩．写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

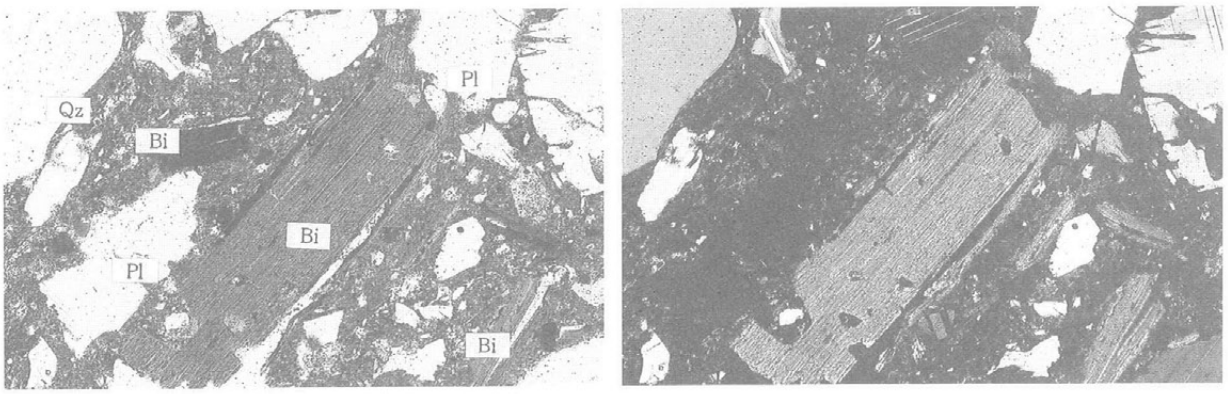
図版２　胎土薄片（２）



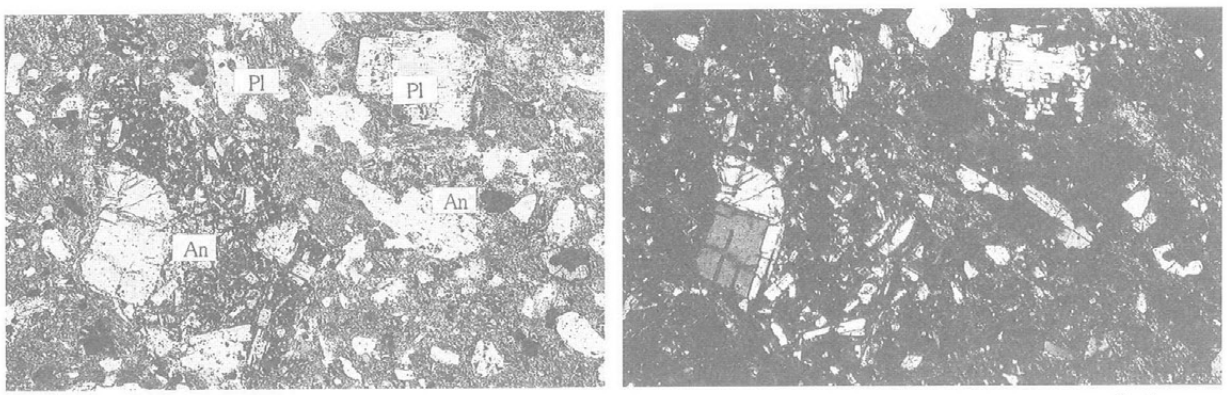
5. No14 SB8 掲載No１ 中期中葉 信州



6. No18 SB14 掲載No14 中期中葉末 信州



7. No24 SB14 掲載No10 中期中葉末 信州

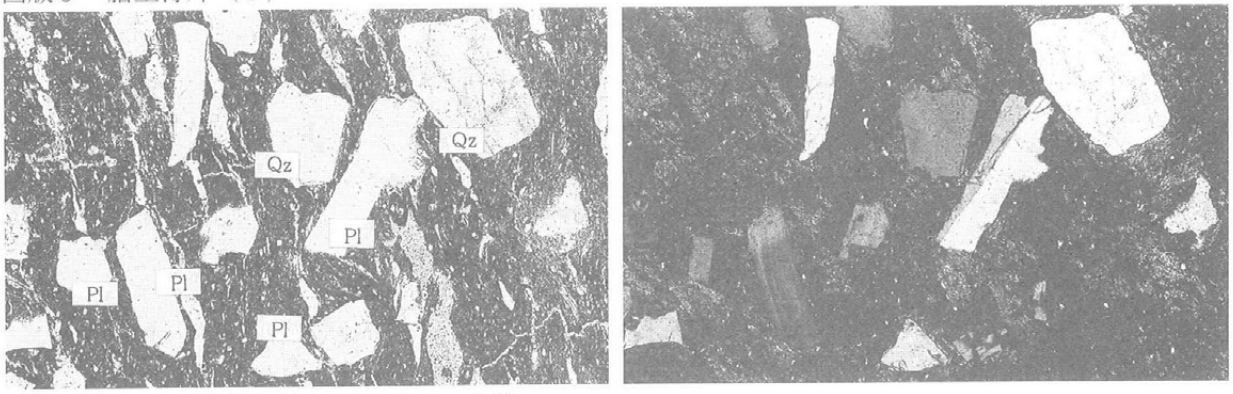


8. No25 SB14 掲載No22 中期中葉末 信州

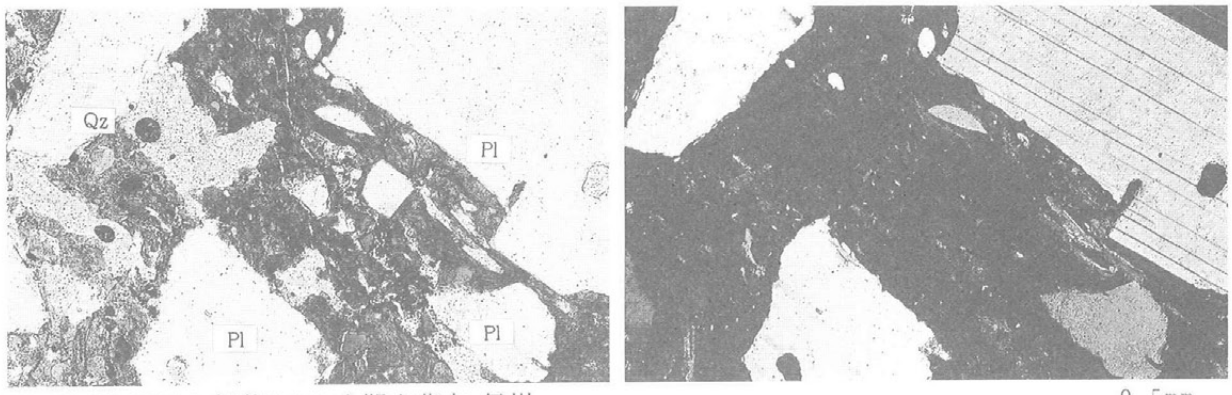
0.5mm

Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Bi：黒雲母．An：安山岩．Gr：花崗岩．
Vg：火山ガラス．Pm：軽石．写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図版３　胎土薄片（３）



9．№26 SB14 掲載№23 中期中葉末 北陸



10．№28 SB14 掲載№18 中期中葉末 信州

0.5mm

Qz：石英．Pl：斜長石．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第２節　黒曜石の産地同定分析

ここで報告する本遺跡出土黒曜石に対する産地同定分析は、石器の総合的な分析と資料化を委託した㈱アルカを通じ、望月明彦氏（沼津工業高等専門学校）が行った分析の結果である。

以下、本文は同氏から提出された分析レポートの要点を本書編集者が抜粋したものであり、図・表については分析データをそのまま掲載した。

分析法　エネルギー分散蛍光X線分析法（EDX）

分析装置　セイコーインスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計　SEA－2110L

分析条件　管電圧　50V　管電流　自動設定　測定時間　240sec
雰囲気　真空　照射径　10㎜　検出器　Si（Li）半導体検出器

測定元素　Al（ｱﾙﾐﾆｳﾑ）、Si（ｹｲ素）、K（ｶﾘｳﾑ）、Ca（ｶﾙｼｳﾑ）、Ti（ﾁﾀﾝ）、Mn（ﾏﾝｶﾞﾝ）、Fe（鉄）、Rb（ﾙﾋﾞｼﾞｳﾑ）、Sr（ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ）、Y（ｲｯﾄﾘｳﾑ）、Zr（ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ）

産地推定法　下記の二つの方法で産地推定を行う。

①判別図法：遺跡出土資料を蛍光X線分析し、指標を計算。指標を図にプロットし、重なった原石産地（試料と２次元的に最も距離が近い）を推定結果とする。

②判別分析：①の距離を数学的にn次元で計算し、試料と最も距離（マハラノビス距離）が近い産地を推定結果とする。この距離から各産地に属する確率を計算する。

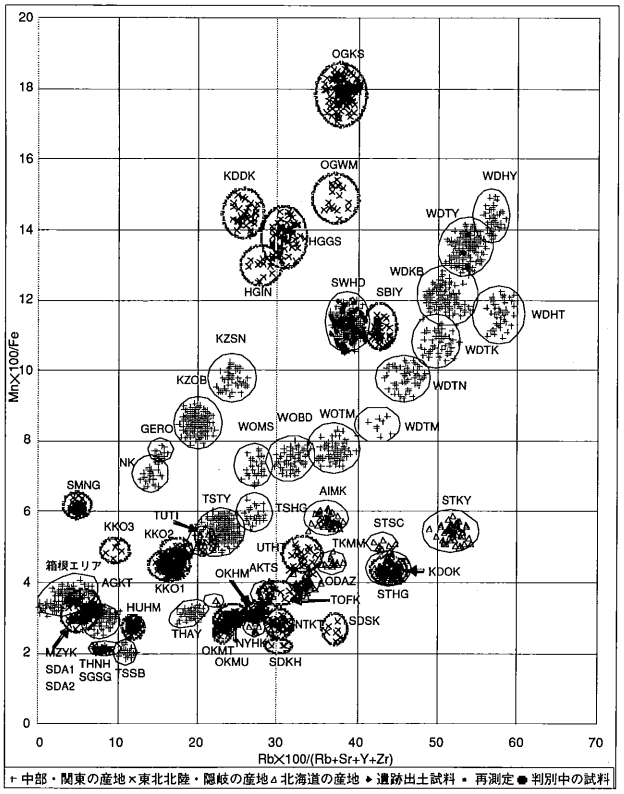
木曽三岳村小島遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果

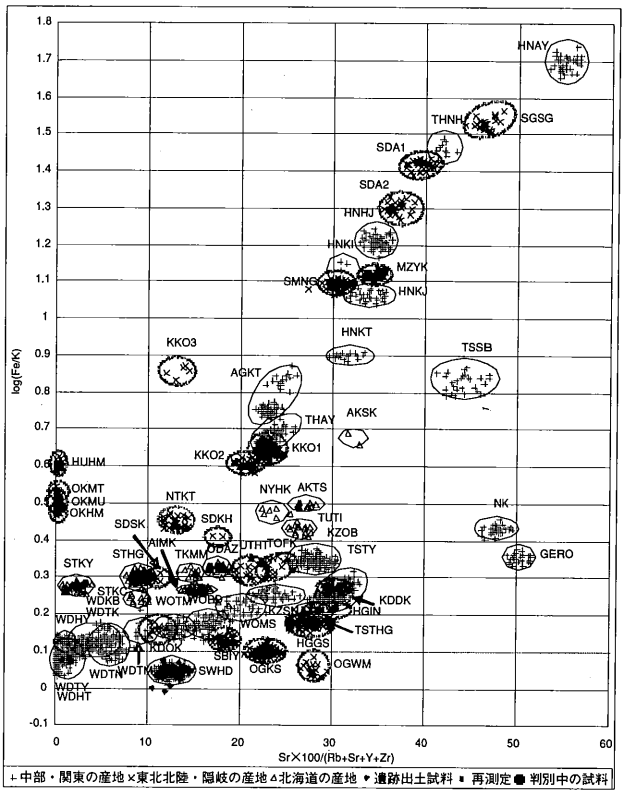
判別図法・判別分析からの最終推定結果

研究室年間通番	分析番号	遺物番号	推定産地	写真
MKO２－１	MKJ－１	1	諏訪星ヶ台群	
MKO２－２	MKJ－２	2	諏訪星ヶ台群	
MKO２－３	MKJ－３	3	諏訪星ヶ台群	
MKO２－４	MKJ－４	5	諏訪星ヶ台群	
MKO２－５	MKJ－５	6	諏訪星ヶ台群	
MKO２－６	MKJ－６	7	諏訪星ヶ台群	
MKO２－７	MKJ－７	8	諏訪星ヶ台群	
MKO２－８	MKJ－８	10	諏訪星ヶ台群	
MKO２－９	MKJ－９	12	諏訪星ヶ台群	
MKO２－10	MKJ－10	11	諏訪星ヶ台群	
MKO２－11	MKJ－11	9	諏訪星ヶ台群	
MKO２－12	MKJ－12	4	諏訪星ヶ台群	
MKO２－13	MKJ－13	13－１	諏訪星ヶ台群	
MKO２－14	MKJ－14	13－２	諏訪星ヶ台群	
MKO２－15	MKJ－15	13－３	和田鷹山群	
MKO２－16	MKJ－16	13－４	諏訪星ヶ台群	
MKO２－17	MKJ－17	13－５	諏訪星ヶ台群	
MKO２－18	MKJ－18	13－６	諏訪星ヶ台群	
MKO２－19	MKJ－19	13－７	諏訪星ヶ台群	
MKO２－20	MKJ－20	13－８	諏訪星ヶ台群	
MKO２－21	MKJ－21	13－９	諏訪星ヶ台群	
MKO２－22	MKJ－22	13－10	諏訪星ヶ台群	
MKO２－23	MKJ－23	13－11	和田鷹山群	
MKO２－24	MKJ－24	13－12	諏訪星ヶ台群	
MKO２－25	MKJ－25	13－13	諏訪星ヶ台群	
MKO２－26	MKJ－26	13－14	諏訪星ヶ台群	
MKO２－27	MKJ－27	13－15	諏訪星ヶ台群	
MKO２－28	MKJ－28	13－16	和田鷹山群	
MKO２－29	MKJ－29	13－17	諏訪星ヶ台群	
MKO２－30	MKJ－30	13－18	諏訪星ヶ台群	
MKO２－31	MKJ－31	13－19	諏訪星ヶ台群	
MKO２－32	MKJ－32	13－20	諏訪星ヶ台群	
MKO２－33	MKJ－33	13－21	諏訪星ヶ台群	
MKO２－34	MKJ－34	13－22	諏訪星ヶ台群	
MKO２－35	MKJ－35	45	諏訪星ヶ台群	
MKO２－36	MKJ－36	46	諏訪星ヶ台群	
MKO２－37	MKJ－37	51	諏訪星ヶ台群	
MKO２－38	MKJ－38	52	諏訪星ヶ台群	
MKO２－39	MKJ－39	53－１	諏訪星ヶ台群	
MKO２－40	MKJ－40	53－２	諏訪星ヶ台群	
MKO２－41	MKJ－41	53－３	諏訪星ヶ台群	
MKO２－42	MKJ－42	53－４	諏訪星ヶ台群	
MKO２－43	MKJ－43	326	諏訪星ヶ台群	
MKO２－44	MKJ－44	373	諏訪星ヶ台群	
MKO２－45	MKJ－45	374	諏訪星ヶ台群	
MKO２－46	MKJ－46	58	諏訪星ヶ台群	
MKO２－47	MKJ－47	59－１	諏訪星ヶ台群	
MKO２－48	MKJ－48	59－２	諏訪星ヶ台群	
MKO２－49	MKJ－49	59－３	諏訪星ヶ台群	
MKO２－50	MKJ－50	59－４	諏訪星ヶ台群	
MKO２－51	MKJ－51	120	諏訪星ヶ台群	
MKO２－52	MKJ－52	137	諏訪星ヶ台群	
MKO２－53	MKJ－53	337	諏訪星ヶ台群	
MKO２－54	MKJ－54	156	諏訪星ヶ台群	
MKO２－55	MKJ－55	158－１	諏訪星ヶ台群	
MKO２－56	MKJ－56	158－２	諏訪星ヶ台群	
MKO２－57	MKJ－57	158－３	諏訪星ヶ台群	
MKO２－58	MKJ－58	158－４	諏訪星ヶ台群	
MKO２－59	MKJ－59	158－５	諏訪星ヶ台群	
MKO２－60	MKJ－60	354	諏訪星ヶ台群	
MKO２－61	MKJ－61	157	諏訪星ヶ台群	

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

判別図判別群	判別分析					
	第１候補産地			第２候補産地		
	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
SWHD	SWHD	1.37	1	SBIY	76.74	0
SWHD	SWHD	16.05	1	SBIY	56.21	0
SWHD	SWHD	4.78	1	SBIY	101.5	0
SWHD	SWHD	10.81	1	WDTN	113.6	0
SWHD	SWHD	5.17	1	SBIY	87.69	0
SWHD	SWHD	3.97	1	SBIY	120.5	0
SWHD	SWHD	6.88	1	SBIY	62.78	0
SWHD	SWHD	4.4	1	SBIY	99.93	0
SWHD	SWHD	2.26	1	SBIY	69.33	0
SWHD	SWHD	4.3	1	SBIY	99.54	0
SWHD	SWHD	6.49	1	SBIY	93.62	0
SWHD	SWHD	7.04	1	SBIY	79.43	0
SWHD	SWHD	5.65	1	SBIY	86.85	0
SWHD	SWHD	6.33	1	SBIY	115.3	0
WDTY	WDTY	1.22	1	WDHY	27.75	0
SWHD	SWHD	5.2	1	SBIY	108.9	0
SWHD	SWHD	5.42	1	SBIY	120	0
SWHD	SWHD	6.75	1	SBIY	88.28	0
SWHD	SWHD	8.08	1	SBIY	106.2	0
SWHD	SWHD	3.48	1	WDTN	96.72	0
SWHD	SWHD	9.44	1	SBIY	99.89	0
SWHD	SWHD	7.34	1	SBIY	96.53	0
WDTY	WDTY	2.87	1	WDHY	16.78	3E-04
SWHD	SWHD	3.55	1	SBIY	61.82	0
SWHD	SWHD	7.34	1	SBIY	75.23	0
SWHD	SWHD	5.19	1	SBIY	112.4	0
SWHD	SWHD	1.34	1	SBIY	82.88	0
WDTY	WDTY	4.53	1	WDKB	26.92	0
SWHD	SWHD	3.21	1	SBIY	112.3	0
SWHD	SWHD	1.83	1	SBIY	67.84	0
SWHD	SWHD	9.61	1	WDTN	103.9	0
SWHD	SWHD	6.25	1	SBIY	122.7	0
SWHD	SWHD	4.14	1	WDTN	111.6	0
SWHD	SWHD	2.31	1	SBIY	94.02	0
SWHD	SWHD	5.55	1	SBIY	64.55	0
SWHD	SWHD	10.79	1	SBIY	130.6	0
SWHD	SWHD	5.39	1	SBIY	71.79	0
SWHD	SWHD	7.43	1	SBIY	88.02	0
SWHD	SWHD	3.57	1	WDTN	109.7	0
SWHD	SWHD	1.17	1	SBIY	95.35	0
SWHD	SWHD	5.46	1	SBIY	86.06	0
SWHD	SWHD	8.7	1	SBIY	124.4	0
SWHD	SWHD	8.09	1	SBIY	71.12	0
SWHD	SWHD	5.12	1	SBIY	104.2	0
SWHD	SWHD	2.99	1	WDTN	81.66	0
SWHD	SWHD	6.17	1	SBIY	119.4	0
SWHD	SWHD	13.15	1	SBIY	98.16	0
SWHD	SWHD	5.88	1	SBIY	97.44	0
SWHD	SWHD	3.52	1	SBIY	76.28	0
SWHD	SWHD	10.9	1	SBIY	99.93	0
SWHD	SWHD	2.02	1	SBIY	104.3	0
SWHD	SWHD	1.34	1	SBIY	79.56	0
SWHD	SWHD	7.5	1	SBIY	88.51	0
SWHD	SWHD	5.68	1	WDTN	72.86	0
SWHD	SWHD	16.38	1	SBIY	141.7	0
SWHD	SWHD	6.04	1	WDTN	92.28	0
SWHD	SWHD	6.91	1	WDTN	90.31	0
SWHD	SWHD	7.6	1	SBIY	129.8	0
SWHD	SWHD	5.75	1	WDTN	121.3	0
SWHD	SWHD	1.79	1	SBIY	90.63	0
SWHD	SWHD	3.2	1	SBIY	68.49	0



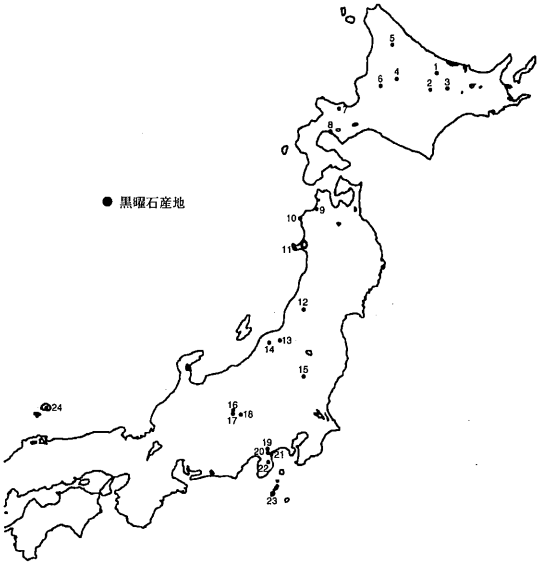


産地原石判別群（SEIKO　SEA-2110L蛍光X線分析装置による）

都道府県	地図No	エリア	新判別群	IH判別群	新記号	IH記号	原石採取地（分析数）
北海道	1	白滝	八号沢群		STHG		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(31)、八号沢(79)、黒曜の沢(6)、幌加林道(4)
			黒曜の沢群		STKY		
	2	上士幌	三股群		KSMM		十三ノ沢(16)
	3	置戸	安住群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)
	4	旭川	高砂台群		AKTS		高砂台(6)、雨紛台(5)、春光台(5)
			春光台群		AKSK		
	5	名寄	布川群		NYHK		布川(10)
	6	新十津川	須田群		STSD		須田(6)
	7	赤井川	曲川群		AIMK		曲川(25)、土木川(15)
	8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉(16)
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎浜(40)
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸(98)
			脇本群		OGWM		脇本海岸(16)
山形	12	羽黒	月山群		HGGS		月山荘前(30)、朝日町田代沢(18)、褥引町中沢(18)
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大網川(5)
新潟	13	新津	金津群		NTKT		金津(29)
	14	新発田	板山群		SBIY		板山牧場(40)
栃木	15	高原山	甘湯沢群	高原山1群	THAY	TKH1	甘湯沢(50)、桜沢(20)
			七尋沢群	高原山2群	THNH	TKH2	七尋沢(9)、自然の家(9)
長野	16	和田(WD)	鷹山群	和田峠1群	WDTY	WDT1	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライト(87)、古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、土屋橋南(68)、丁字御領(18)
			小深沢群	和田峠2群	WDKB	WDT2	
			土屋橋北群	和田峠3群	WDTK	WDT3	
			土屋橋西群	和田峠4群	WDTN	WDT4	
			土屋橋南群	和田峠5群	WDTM	WDT5	
			芙蓉ライト群		WDHY		
			古峠群		WDHT		
		和田(WO)	ブドウ沢群	男女倉1群	WOBD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)
			牧ヶ沢群	男女倉2群	WOMS	OMG2	
			高松沢群	男女倉3群	WOTM	OMG3	
	17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ峰系	SWHD	KRM	星ヶ塔第1鉱区(36)、星ヶ塔第2鉱区(36)、星ヶ台A(36)、星ヶ台B(11)、水月霊園(36)、水月公園(13)、星ヶ塔のりこし(36)
	18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山(33)、麦草峠(36)、麦草峠東(33)、渋ノ湯(29)、美し森(4)、八ヶ岳7(17)、八ヶ岳9(18)、双子池(34)
			双子山群		TSHG		双子池(26)
			擂鉢山群		TSSB		擂鉢山(31)、亀甲池(8)
神奈川	19	箱根	芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
	20		畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)
			黒岩横群	箱根系A群	HNKI	HKNA	黒岩横(9)
	21		鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)
			上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)
静岡	22	天城	柏峠群	柏峠	AGKT	KSW	柏峠(80)
東京	23	神津島	恩馳島群	神津島1群	KZOB	KOZ1	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)
			砂糖崎群	神津島2群	KZSN	KOZ2	砂糖崎(40)、長浜(5)
島根	24	隠岐	久見群		OKHM		久見パーライト中(30)、久見採掘現場(18)
			箕浦群		OKMU		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸浜(35)
			岬群		OKMT		岬地区(16)
その他			NK群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡試料)、原石産地は未発見

佐々木繁喜氏提供試料（まだ地図には入れていない）

青森	小泊	折腰内群	KDOK	小泊市折腰内(8)
岩手	北上川	北上折居1群	KKO1	水沢市折居(36)、花巻日形田ノ沢(36)、雫石小赤沢(22)
		北上折居2群	KKO2	水沢市折居(23)、花巻日形田ノ沢(8)、雫石小赤沢(2)
		北上折居3群	KKO3	水沢市折居(5)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	宮崎町湯ノ倉(54)
	色麻	根岸群	SMNG	色麻町根岸(48)
	仙台	秋保1群	SDA1	仙台市秋保土蔵(17)
		秋保2群	SDA2	仙台市秋保土蔵(35)
	塩竈	塩竈群	SGSG	塩竈市塩竈漁港(22)



木曽三岳村小島遺跡出土黒曜石産地組成

エリア	判別群	記　号	試料数	%
和田（WO）	ブドウ沢	WOBD	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0
	高松沢	WOTM	0	0
和田（WD）	芙蓉ライト	WDHY	0	0
	鷹山	WDTY	3	4.92
	小深沢	WDKB	0	0
	土屋橋北	WDTK	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0
	土屋橋南	WDTM	0	0
	古峠	WDHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	58	95.08
蓼科	冷山	TSTY	0	0
	双子山	TSHG	0	0
	擂鉢山	TSSB	0	0
天城	柏峠１	AGKT	0	0
箱根	畑宿	HNHJ	0	0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0
	上多賀	HNKT	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0
神津島	恩馳島	KZOB	0	0
	砂糠崎	KZSN	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0
	七尋沢	THNH	0	0
新津	金津	NTKT	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0
	脇本	OGWM	0	0
羽黒	月山	HGGS	0	0
	今野川	HGIN	0	0

エリア	判別群	記　号	試料数	%
北上川	折居１群	KKO１	0	0
	折居２群	KKO２	0	0
	折居３群	KKO３	0	0
宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0
仙台	秋保１群	SDA１	0	0
	秋保２群	SDA２	0	0
色麻	根岸	SMNG	0	0
塩竈	塩竈港群	SGSG	0	0
小泊	折腰内	KDOK	0	0
魚津	草月上野	UTHT	0	0
高岡	二上山	TOFK	0	0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0
	金井二ッ坂	SDKH	0	0
隠岐	久見	OKHM	0	0
	岬地区	OKMT	0	0
	箕浦	OKMU	0	0
白滝	８号沢	STHG	0	0
	黒曜の沢	STKY	0	0
	赤石山頂	STSC	0	0
赤井川	曲川	AIMK	0	0
豊浦	豊泉	TUTI	0	0
置戸	安住	ODAZ	0	0
十勝	三股	TKMM	0	0
名寄	布川	NYHA	0	0
旭川	高砂台	AKTS	0	0
	春光台	AKSK	0	0
不明産地１	NK	NK	0	0
下呂石		GERO	0	0
合　　計			61	100

不可など	0	
総　　計	61	

第Ⅵ章　成果と課題

ⅰ　小島遺跡は県営中山間総合整備事業―優良農地の確保と保全を目的としたいわゆる圃場整備事業の対象地に指定されたことを契機に発見され、記録保存のための緊急発掘調査が行われた遺跡である。そうした意味で、埋蔵文化財保護事業をめぐる開発行為の功罪を図らずも浮き彫りにすることになった本遺跡では、今回の発掘調査によって縄文時代から平安時代、さらに中・近世にまで及ぶ人間活動の一端が明らかになるなど、学術的に大きな成果をあげることができた。もちろん、未調査区域の問題を含めて全体像の解明に関しては今後の調査に多くを委ねざるをえないが、以下、現時点で判明した遺跡の輪郭を抽出し、将来の解明作業に向けた基礎資料を提供しておきたい。

ⅱ　小島遺跡で確認できる現段階で最も古い人間活動の痕跡は、平安時代の竪穴住居跡（SB18）の覆土中に混在して出土した特殊磨石によって知ることができる。伴出遺物を欠き時期の特定は困難であるが、既知の出土事例に照らしてみるならば、縄文時代早期の遺物であった可能性が高い。

本遺跡に一定程度の定着的な集落が形成されはじめるのは縄文時代前期末葉以降のことと考えられる。今回の調査ではＳＢ９をはじめとする当該期の竪穴住居跡５軒と土坑群などが検出されている。遺構はＩ区中央南寄り、中位段丘内に形成された上下２段の平坦面のうち、上段から下段へと移る縁辺部に沿って営まれており、南へと続く調査区外を含めて南北に連なる帯状の集落景観が想定される。また、同下段東側縁辺部近くに検出された複数の土坑のあり方からすれば、東側調査区外にも段丘縁に沿った居住空間が上記に平行して帯状に展開していた可能性も考慮される。

こうした当該期の集落構成で注目されるのは、各住居跡に付属するように出土した土坑（群）のあり方であり、調査所見によれば円筒状あるいは袋状の断面形態などから貯蔵穴としての機能が推定されている。住居に付属する貯蔵穴については、本遺跡から南へ20km余り木曽川を下った大桑村万場遺跡の当該期集落に特徴的に認められた屋内貯蔵穴を有する竪穴住居跡との対比が可能である。貯蔵の対象となった物が何であったのか、また両遺跡で対象物に相異はあるのかといった生業基盤にかかわる問題については不明な点が多いが、当地方の縄文時代前期末葉段階（万場遺跡では前期前～末葉）に、屋内と屋外という差異はあるにせよ、おそらくは食料資源を各住居単位で個別に貯蔵・管理する社会システムが取り入れられていた可能性が想定されることは、きわめて重要な意味をもつものと考える。

さらに、石器群の分析から導かれた動物資源の獲得と処理に偏る生業形態のあり方は、植物質など動物質以外の資源利用に高い比重が置かれていた可能性が示唆された中期との対比、ならびに上述した食料資源の管理システムとの相互関係において、当該地域および当遺跡の生業基盤に係る実相の一端を指し示していると考えられる。

出土遺物に関しては、土器の組成比率において一定度が東海および関西系土器等の特徴を示す一方で、胎土分析の結果からは、それらが文様等に見られる在地的・非在地的属性に係りなく遺跡周辺の比較的狭い地域内で製作された可能性が示された。また、石器においても黒曜石の産地推定分析の結果から、同石材が前期～中期を通して諏訪星ヶ台群の原産地からほぼ限定的に供給されていた事実が明らかとなった。これは近年、木曽郡下において積極的に進められてきた同種分析の成果を改めて追認するデータといえ、先述の土器とともに、当地域における物資の需要と供給、製作あるいは受容と消費のプロセスやネット

ワークといったものを解き明かすための基礎資料を積み上げることとなった。

ⅲ　中期初頭～前葉段階では、遺物包含層を形成していたと考えられる遺構外から同時期の若干量の遺物が出土しただけにとどまり、今回の調査地点で見る限りにおいて、本遺跡に対する人間の働き掛けは弱かったものと思われる。しかし、続く中期中葉～後葉段階では、断続的ながらも集落の形成が確認されるなど、中位段丘東半部を中心とする区域に活発な人間活動の痕跡を見出すことができる。SB８・14・22など中期中葉新道式～藤内式期および井戸尻Ⅲ式最末期の竪穴住居跡が散在的な分布を示す一方、時期の特定に困難な点を残すものの、東に向いた半円状あるいは環状の分布をみせる土坑群のあり方が特に注意される。これらは円形や楕円形の平面形態を呈し、上部に磨痕礫や石皿に擬制して埋納された可能性をもつ偏平円礫を伴うものを含むなど、墓壙群としての性格が強く考慮される。

しかし、本文中の記述に詳しい通り、複数の礫と多数の土器片を遺存させていたSK347や打製石斧６点が折重なるように出土したSK527など、祭祀的な様相を垣間見せる土坑はなお少数派にとどまっていたことも事実である。したがって、集落内における土坑群の性格や成立要因に関してはより今後に多くの検討課題を残していることは否定できないが、その上で注目しておきたい点は、以上の土坑群が集落内で一定の“場”を占拠しつつ、特定の形態を維持・展開していたことであり、ここには今回の調査区域を越えた広がりが推定される当該期の集落の形態や構造を考えるための多くの示唆が与えられていたということができる。さらに中期後葉の所産と推定される掘立柱建物跡群が、東西あるいは南北に主軸を揃えて規則的な分布をみせていたことも、集落構成上の大きな特徴点としてあげることができる。

また、時間的に不確定な要素を残すとはいえ、居住域に隣接して検出された性格不明遺構SX１が有用植物の管理あるいは栽培痕跡であるとの推測も示されている。動物資源とは異なる、植物質資源の利用に高い比重を置いた生業活動が当該期の本遺跡において活発に行われていたという石器群の分析に基づく仮説との関連においても、非常に興味深い事例であることは間違いない。

ⅳ　後・晩期については、掘立柱建物跡の存在が１棟のみ推定できるほか散在的な土坑と遺物の分布が確認されただけであるが、急激な遺跡数の減少が知られる当該期にあっては、遺跡の立地を含めて貴重なデータを加えることができた意義は小さくない。とりわけ出土土器に関して、既出資料が少なく類例に乏しい資料を少数とはいえ資料化できたことは、当地方における社会変化を他地域との関わりのなかで把握しうる契機をもたらすものといえる。

また、表面採集という単発的な出土資料とはいえ、１点のみ確認された弥生時代後期の土器についても、今後の研究作業に際して同様の意義を見出される可能性があろう。

ⅴ　平安時代も９世紀後半になると、それまでの無住状態を打ち破るように集落が形成される。中位段丘面に相当するⅠ区のなかでも南東寄りに出土したSB15・16・18などの竪穴住居跡や掘立柱建物跡（ST１）、土坑群ならびに柵列状遺構がそれであり、上記３軒の住居跡は主軸をほぼ同じくして併存していた可能性が高い。また、SB19を含めて住居跡の重複や新旧カマドの存在などから、複時的な住居変遷があったことが窺える。この段階での突如とした集落形成は木曽地域全体に認められる現象であり、当該期における政治的あるいは経済的な社会情勢を反映した結果であったと思われる。

遺物では、未確定資料を含めて３例が出土した墨書「芳蘭」の文字が象徴的である。現代において「芳」は“かんばしく、すぐれて美しい様子。あるいは、そうした事物に対する美称”とされ、「蘭」もまた美しく香りの良い花の象徴的存在でもある。古代“小島集落”において、如何なる“表象”をこの文字が

担っていたのか非常に興味深い事例の一つであるが、その解釈をめぐっては周辺地域を含めた資料の蓄積と詳細な検討に委ねたい。

10世紀前半～後半代になると、集落域をⅠ区北側へ移す（SB３～５・20など）とともに上位段丘上のⅣ区へと広がりをみせる（SB１・２など）。この集落域の遷移ならびに拡張が如何なる要因に基づいて起ったのかは定かでないが、水稲栽培が困難であったと推定される当地域の生業基盤などにもかかわる、すぐれて社会的な出来事であったことだけは確かであろう。

11世紀代については少量の遺物が出土した点を除いて資料を提示できないが、集落規模が著しく縮小したであろうことは想像に難くない。12世紀代においてもⅠ区南端部付近で竪穴住居跡１軒（SB17）が検出されたとはいえ、土坑その他や遺構外遺物の出土が皆無に等しい状況などからは、継続的に安定した集落が営まれ続けた景観を推定するのは困難である。

ⅵ　中世、とりわけその後～末期においては、第Ⅱ章第２節で触れた通り、木曽義仲の後裔と目される木曽家19代義昌(1540～1595)の家臣であった「小島氏」が当遺跡に居館を構えていたとされる。また、地区内には該期の所産と推定される形態を示す五輪塔２基が現存する。今回の発掘調査では、ほぼ同時期の陶器類がわずかに出土したのみであり、居館跡を含めて同氏にかかわる資料を得ることは出来なかった。しかし、考古学と文献史学などとの交錯によっては、新たな地域史の構築を可能とする史料が“発掘”されることも予想されるところであり、今後に続く作業に期待したい。

ⅶ　ところで、小島遺跡における今回の発掘調査は、すでに詳しく述べられているように、長野県木曽地方事務所を原因者とし、三岳村教育委員会が事業主体者となって行われた。その過程で広域的な調査指導を受け持つ木曽広域連合が地元教育委員会の委託を受けて参画し、さらに長野県教育委員会の指導の下に(財)長野県埋蔵文化財センター職員が技術指導業務担当者という名目で実質的な調査担当者に就任するなど、いわば共同作業的な体制で進められることになった。

今回の報告書作成にあたっても、その前半段階については㈶長野県埋蔵文化財センター職員が引き続き技術指導担当者の役にあたり、その指導の下に遺構図面および写真類の整理、遺構台帳の作成、遺物の水洗い・注記・接合・復元等々の基礎的な整理作業が行われた。しかし、その後半段階については、諸般の事情から技術指導機関および業務担当者を変更した上で、遺構・遺物にかかわる本文原稿や図版類の作成、考察のとりまとめ等々の作業が進められることになった。

以上の経緯にかんがみ、後任として技術支援業務に当たることになった担当者としては、こうした変則事態に伴う無用の混乱を避けるためにも、極力、作業の一貫性・継続性に留意し、前任者による現地発掘調査段階における記録や観察を忠実に復元しようと努めたが、遺構図面や台帳などには記述洩れや記述ミス等々が少なからず存在しており、遺構の性格・内容にかかわる所見にも明らかに事実誤認と思われるものが散見された。このため、明らかに誤りと思われる記録や記述については可能な限りで修正を試みたが、記述洩れが甚だしく、修正・復元のまったく困難なものについては、やむをえず不完全な形で報告せざるをえなかったことをご了解いただきたい。

引用・参考文献

青沼博之他　1988『三岳村誌』下巻　三岳村誌編さん委員会

百瀬忠幸他　2001「第６章　万場遺跡」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会

写　真　図　版

図版 1

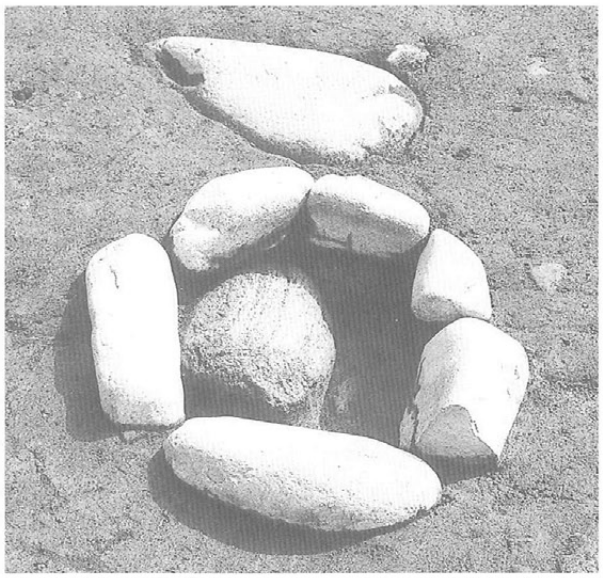
遺跡遠景

遺跡遠景

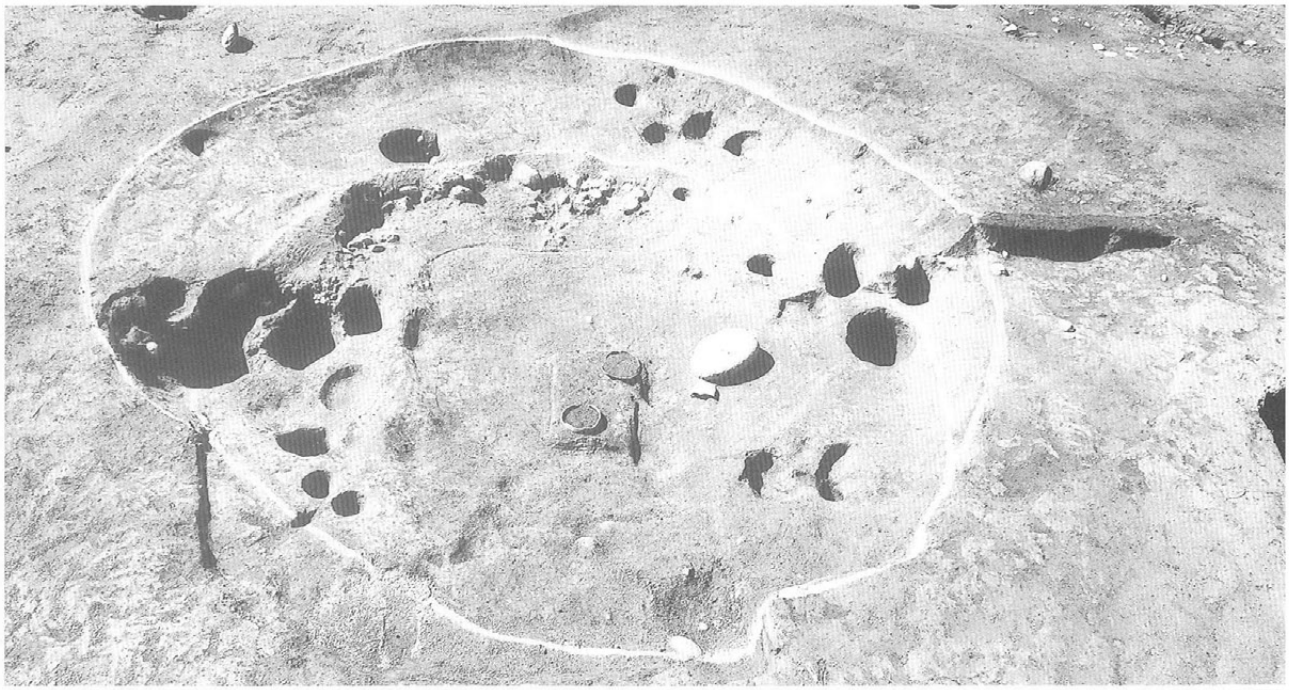
調査区近景

SB 6

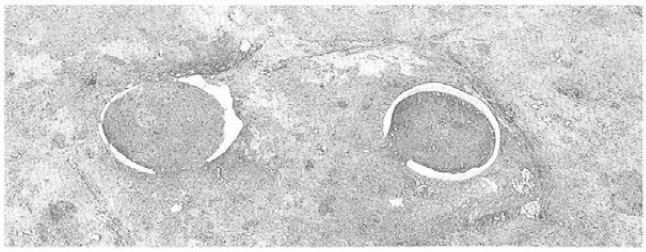
SB 8

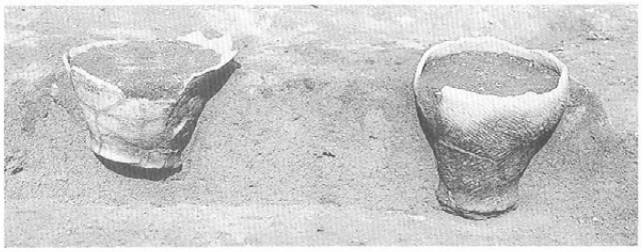


左：SB 8 炉址
右：SB 8 遺物
出土状態



SB 9 ・12





左：SB 9 炉址
右：同断面

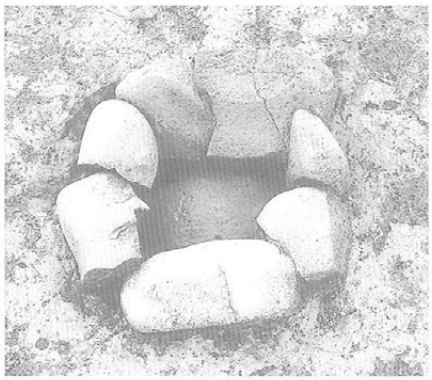
SB11

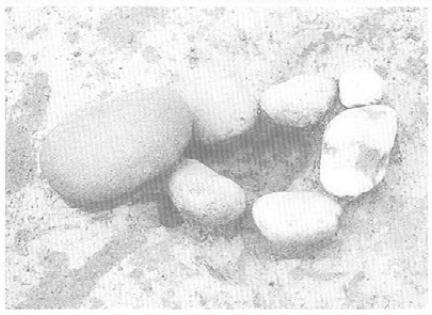
SB13

SB14

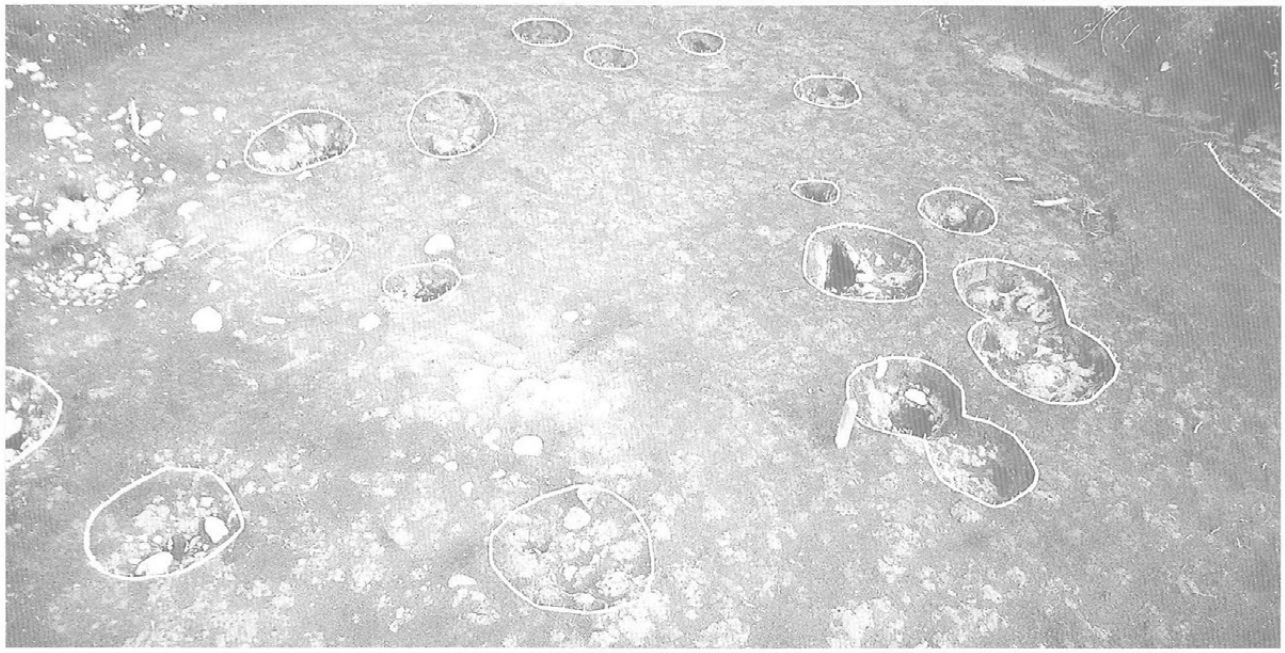
左上：SB14炉址
左下：SB14遺物
出土状態
右：SB22

図版 5

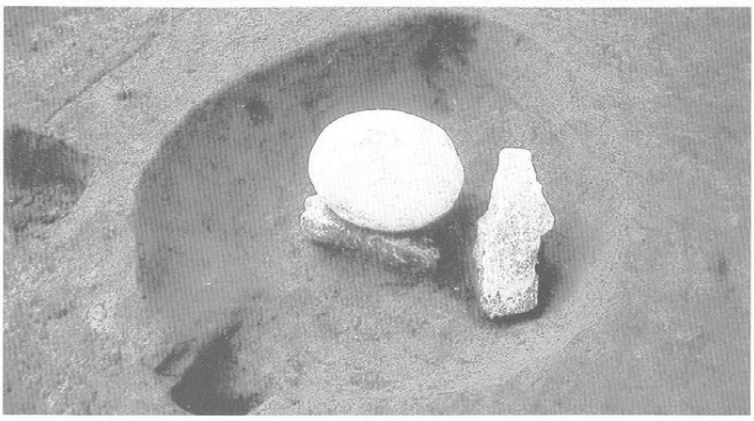




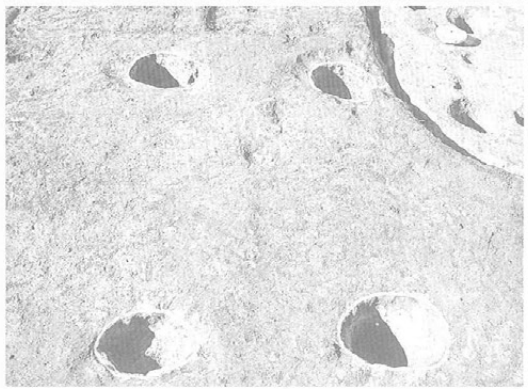
左上：SB22炉址
左下：SB23炉址
右：SB23



SB25



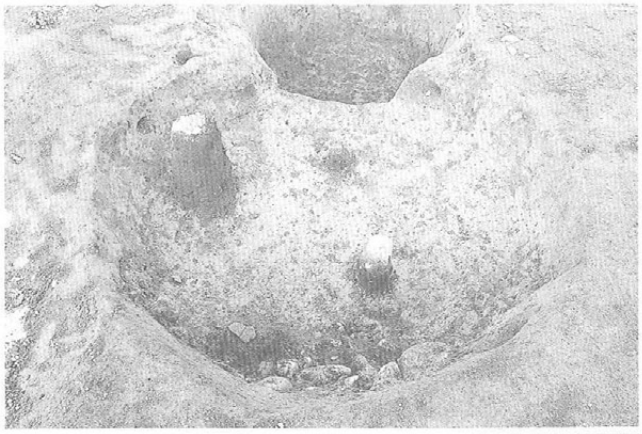
左：ST 2
右：ST 2 遺物
出土状態



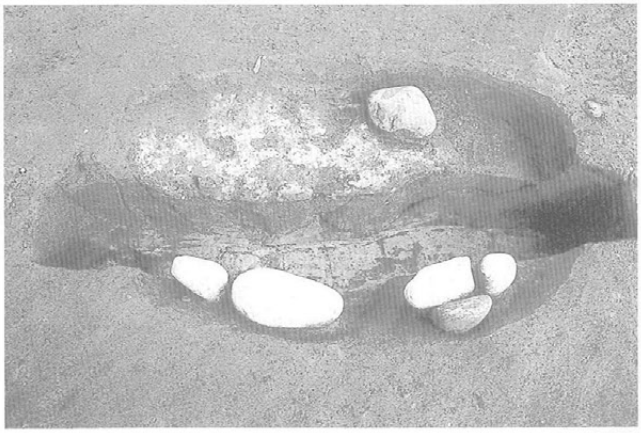
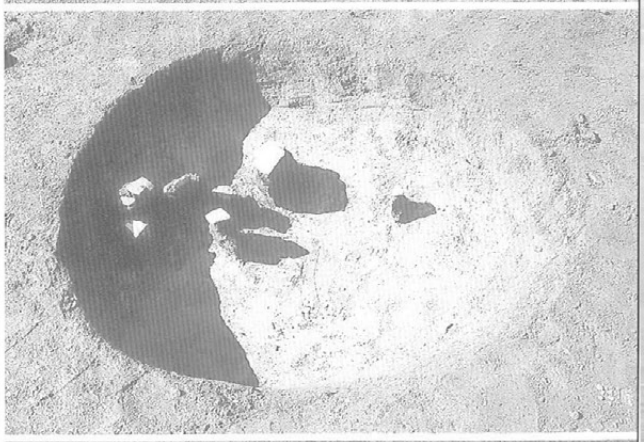
左：ST 3
右：ST 4

左：ST 5
右：SK141

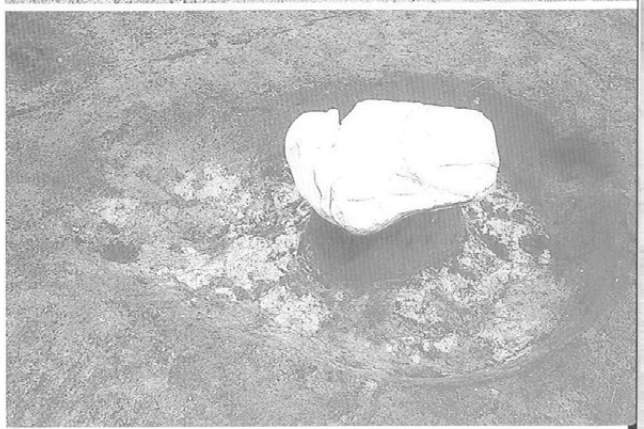
左：SK142
右：SK148



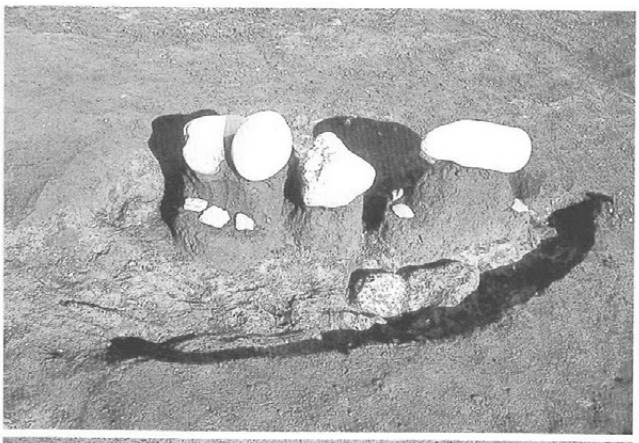
左：SK149
右：SK151

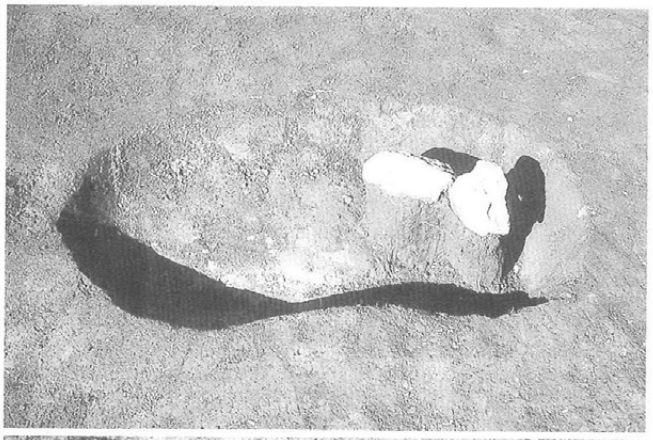



左：SK156
右：SK340

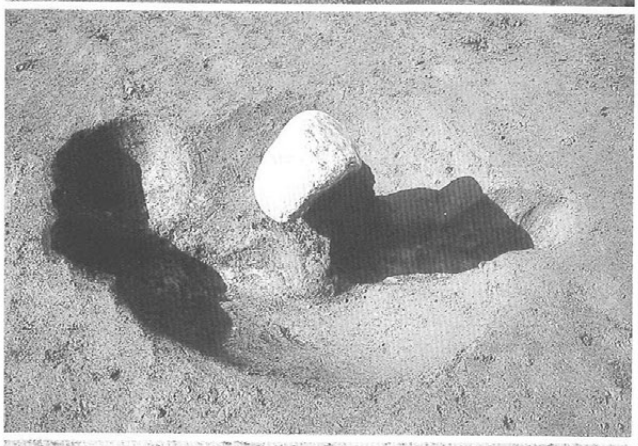


左：SK342
右：SK343

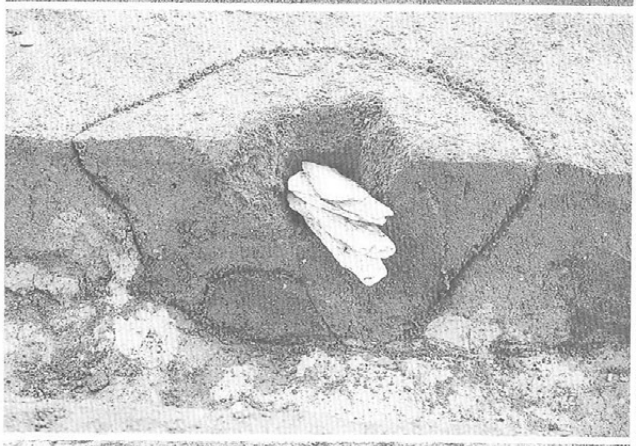


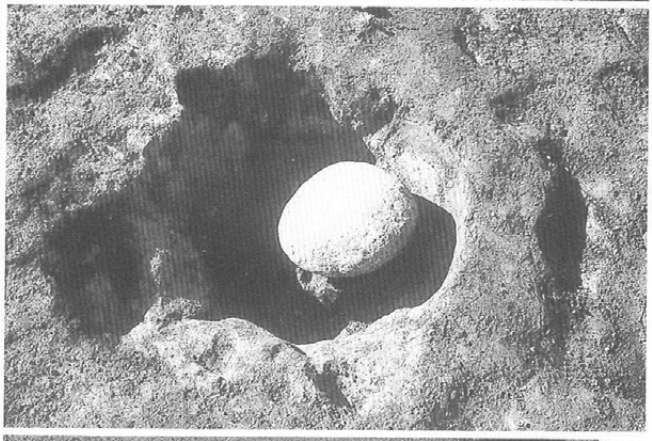


左：SK347
右：SK434

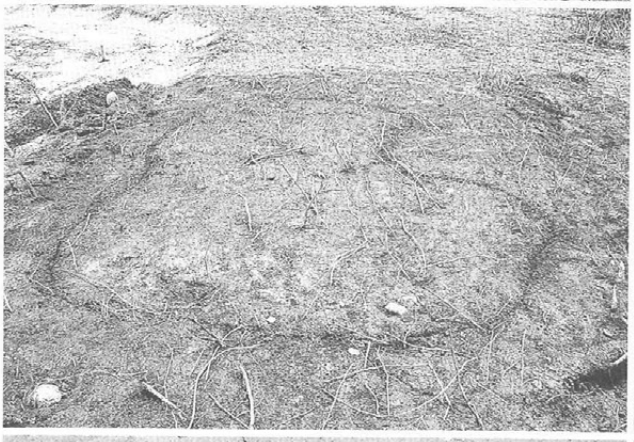


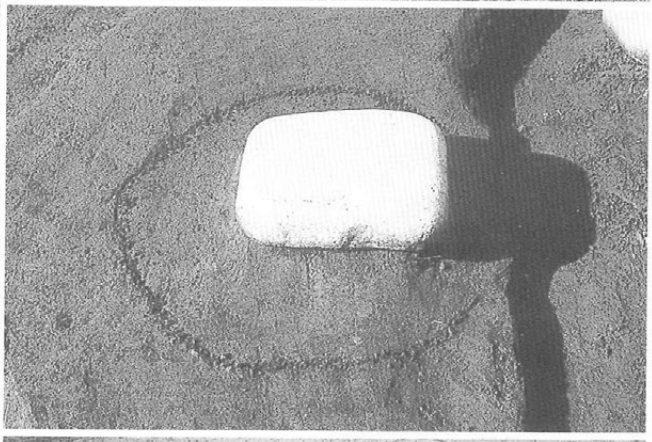
左：SK473
右：SK486



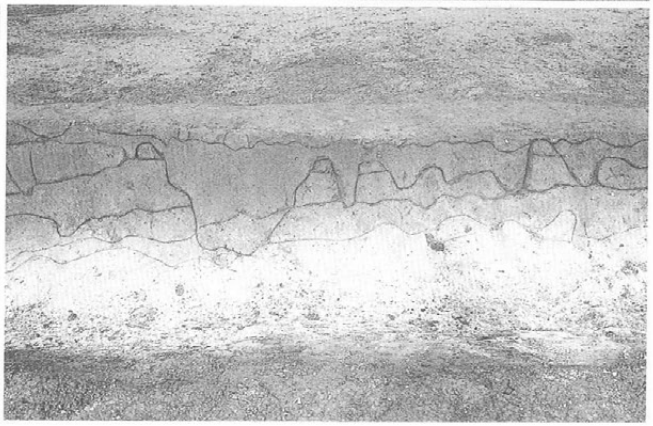


左：SK527
右：SK538





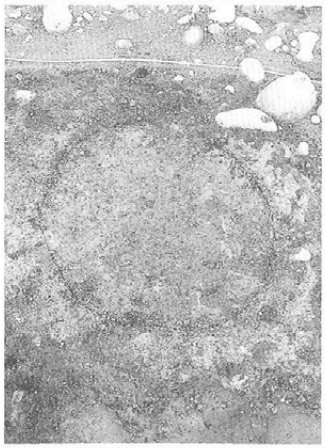
左：SF 1
右：SF 4

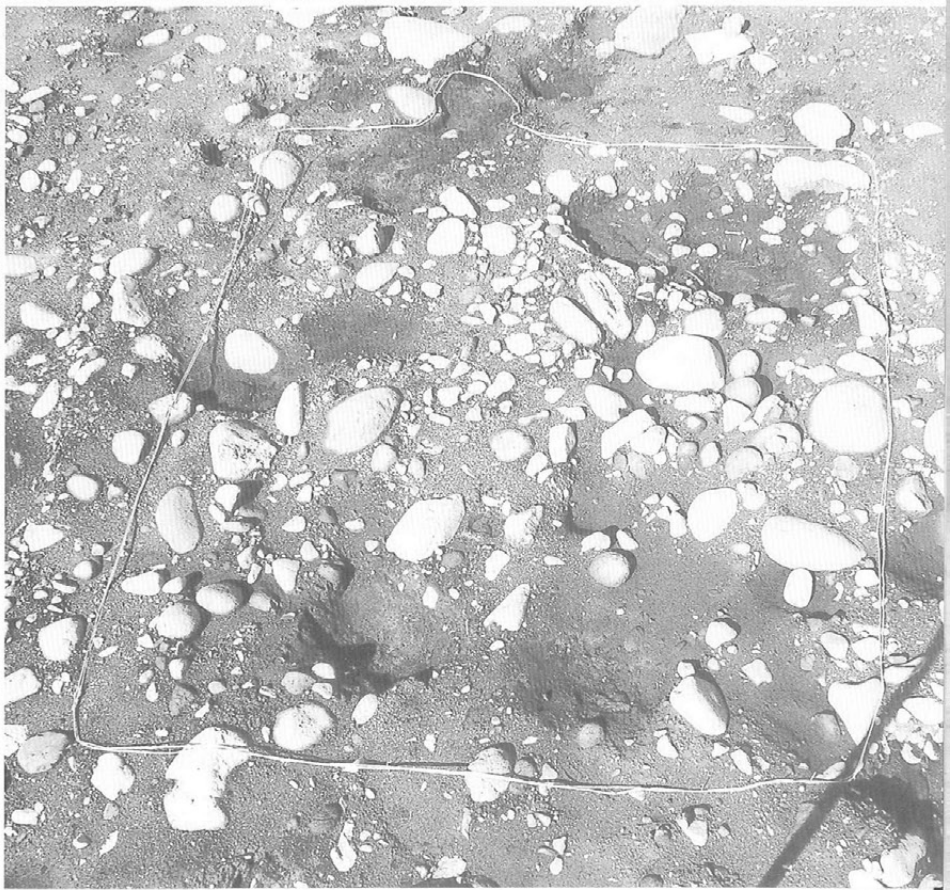


性格不明遺構

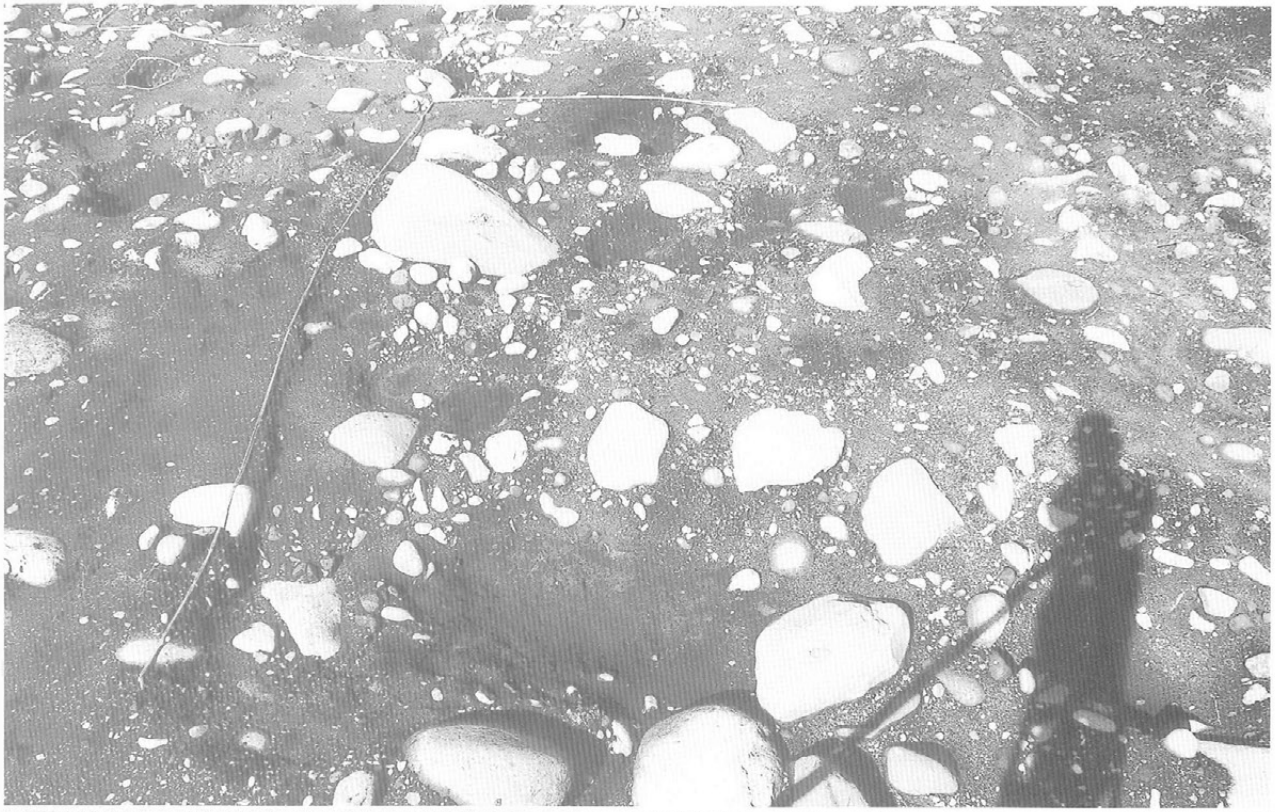
SB 1

SB 3





左上：SB 3 カマド
左下：SB 4 カマド
右：SB 4

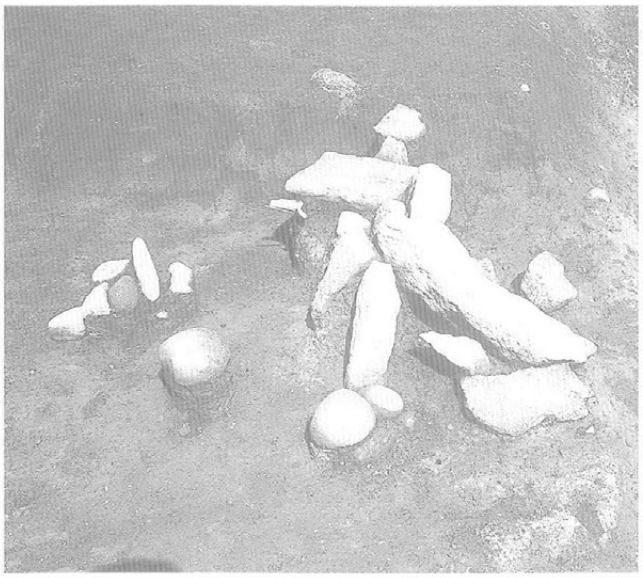


SB 5

SB15

左：SB15
新カマド
右：SB15
旧カマド

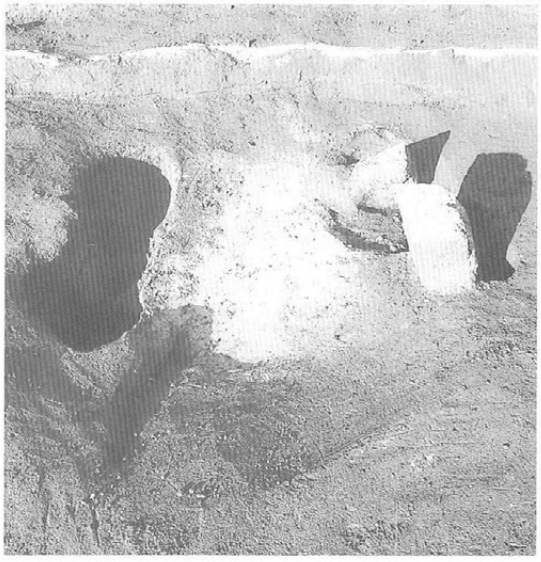
SB16



左：SB16カマド
右：同下部

SB17

SB18



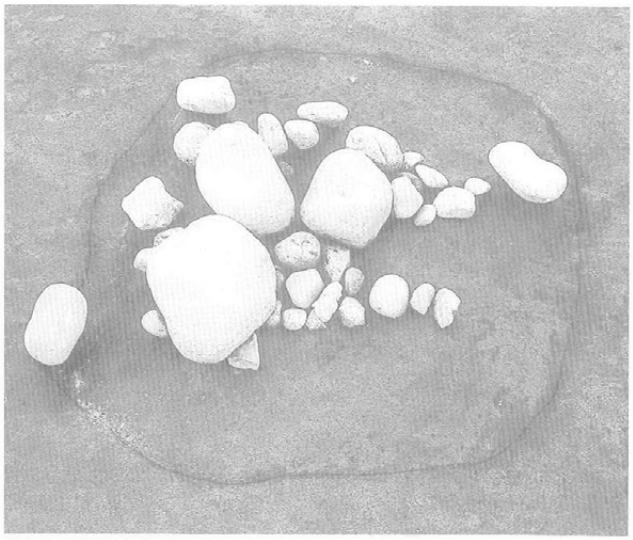
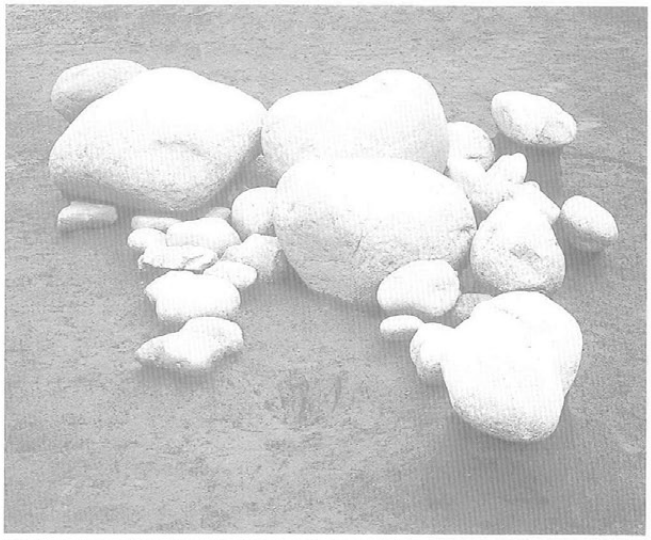
左：SB18北カマド
右：SB18西カマド

SB19

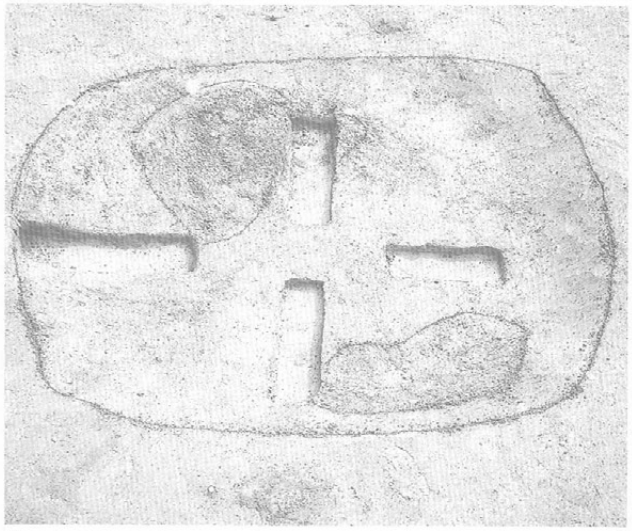
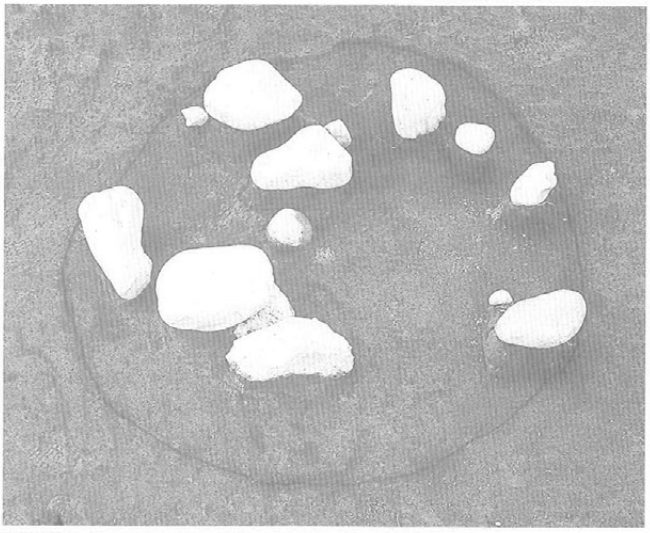
SB20

SB24

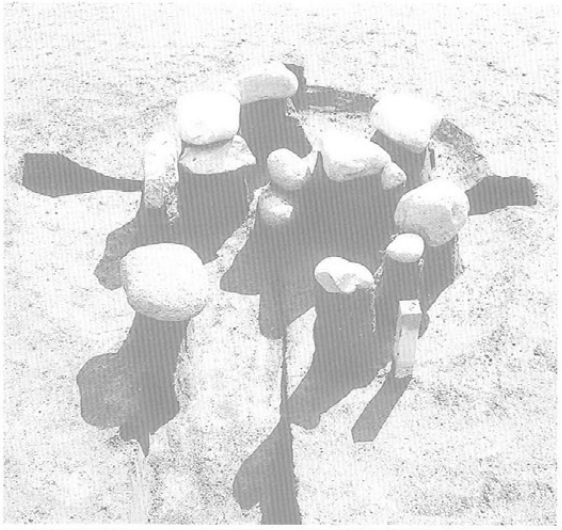
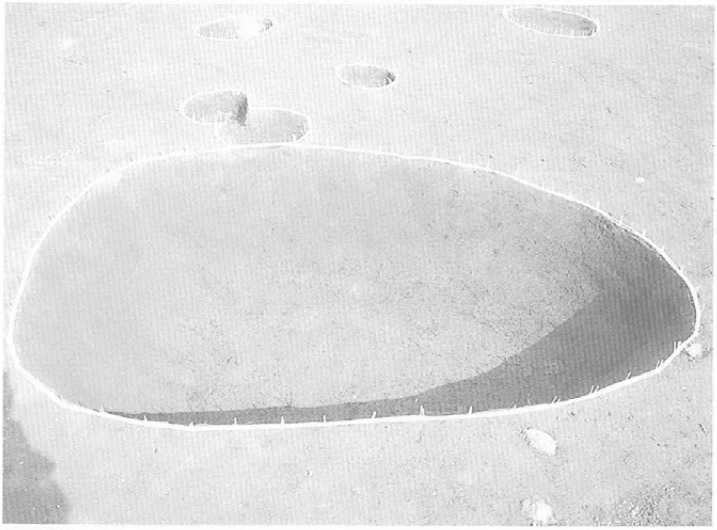
ST 1

SK146

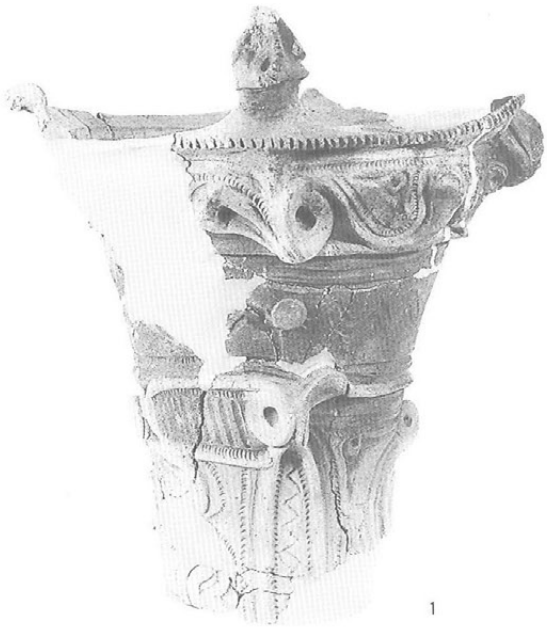



左：SK146炭化物
出土状態
右：SK147

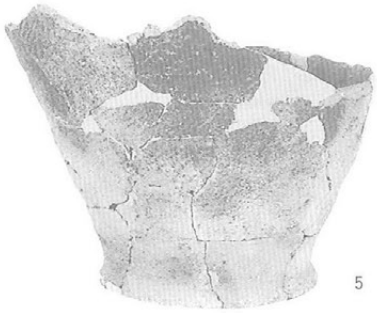
左：SK147
右：SK155

左：SK173
右：五輪塔


1

1

2


5

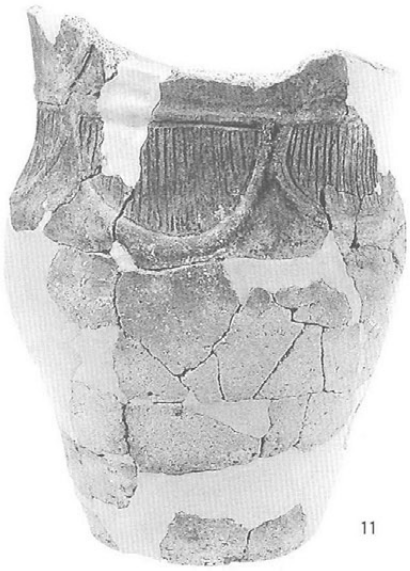
6

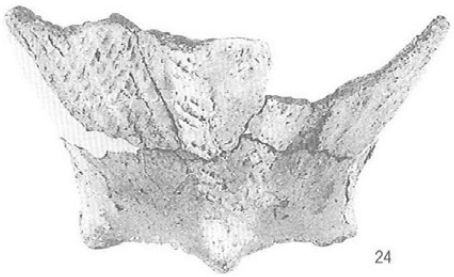
12

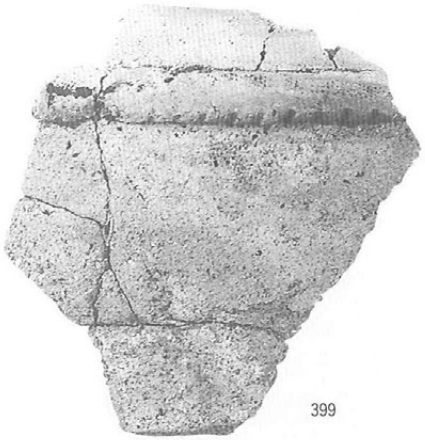
15

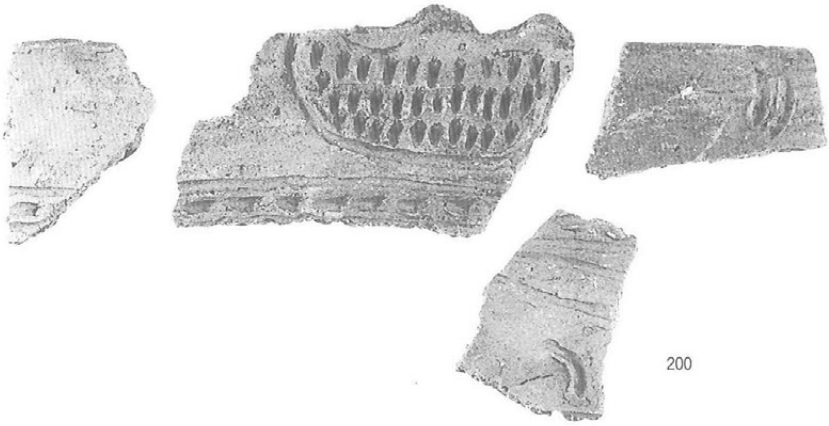
1・2：SB 8 出土
5・6：SB 9 出土
12・15：SB14出土

10


11


24


399


200

201

391

392

393

10・11：SB14出土
24：SQ 2 出土
200・201：SK340
出土
391～393・399
：遺構外出土

あ と が き

三ヶ年度にわたった小島遺跡の埋蔵文化財調査も、多くの学術的成果を積み上げることとなった本書の刊行をもって、一応の終りを告げようとしている。まずもって、地元関係者の方々のご理解と関係各機関のご努力に対し、心からの謝意を表させていただきたい。筆者は、行政上の学術担当者の立場から当初よりその経過に係り続けてきた者として、幾ばくかの安堵感を覚える。と同時に、一連の経過のなかで図らずも露呈することとなった埋蔵文化財保護行政に係るもう一つの“負の成果”についても、余白を借りて書き留めておかねばならない責務を負っている。

では、もう一つの“成果”を膿み出すこととなった背景とは何であったのか。それは最終章にも記された技術指導体制に起因しており、「記録保存」を最大の目的として行われたはずの今回の発掘調査によって残された記録類が、その“成果”なるものの実態を余すこと無く物語っている。調査所見および個別台帳等、報告書執筆に際して大きなウエートを占めるこれらの記録類は、発掘調査現場を見ることの無かった第三者にとってきわめて重要な情報源となるはずのものである。にもかかわらず本報告に限っていえば、発掘調査に際して技術指導業務を担った調査機関、同技術指導担当者ならびに業務管理責任者によって作成され、委託者に成果物として納品されたその記録にこそ、軽視しえない問題点が孕まれていたと言わざるを得ない。

現場調査段階における遺構確認と遺構プラン確定作業の曖昧さ、床面やカマドの構造に対する無理解等々がもたらすことになった混乱の幾つかについては本文でも簡単に触れられているが、同様の問題点は覆土および標準土層説明の混乱、長軸方向と主軸方向の混同ならびに計測方法の混乱等々をめぐっても指摘されるのであり、発掘調査から整理作業の段階に至るまで、そこでは遺跡の記録・資料化と解釈がきわめて恣意的かつ場当たり的に行われていたことが容易に推測される。このため、報告書の作成にあたっては、調査記録と所見の検証に立ち返って作業を開始しなければならない事態に陥ってしまったのであるが、本来、発掘調査段階から整理作業初期において整備されているべき台帳類に著しい不備が認められたこと、視覚的な検証作業に必須な写真記録がきわめて不充分であったこと、整理段階で書き加えられたと思われる根拠不明な表記など原図類と所見記録との間に少なからぬ齟齬が認められたこと等々が、さらに問題を複雑化させ、報告書作成作業をなお一層困難にしたことを付け加えなければならない。

報告書そのものは指導業務担当者を変更する形でようやく刊行にまでこぎつけることができたが、本報告書に記載された調査記録に一定の限界と制約が内在している実態を明らかにせねばならないことは甚だ残念であり、その責任の一半は充分な監理義務を果たし得なかった筆者の側にもあることは否めない。この点、最大の当事者の一人であった自らの不明を重く受け止め、率直に遺憾の意を表明する次第であるが、今日、激動期にあるといわれる埋蔵文化財行政にとって、今回の調査事例が投げかけることになった問題点もきわめて大きかったと言える。

「埋蔵文化財を取り巻く社会情勢」が激しく変化する中、文化庁在籍者を含む全国の埋蔵文化財行政の実状に精通した多数の実務経験者によって執筆され、「幅広い国民の視点に立った新たな埋蔵文化財保護理念の構築」を提言することになったニュー・サイエンス社刊行の『激動の埋蔵文化財行政』は、「自らの矛盾に十分な対策を講ずることなく、考古学ブームに少々浮かれ過ぎて」きた埋蔵文化財行政に激しく批判を加えるとともに、「サラリーマン発掘に流されていることが多い行政内研究者」の現状に強い警鐘を鳴らしている。期せずして今回の調査が顕在化させた埋蔵文化財行政をめぐる今日的課題に対して、自己改革の余地は皆無なのか。このような状況下にあっては、県と地方、公と民の別を問わず、どの機関・どの団体が行う埋蔵文化財調査においても第三者による相互指導、相互管理支援システムの確立が、組織ならびに担当者個々の責任ある自覚と持続的な問題意識とともに不可欠であり、そうした真に互助的な共同体制の構築こそが、公益的な埋蔵文化財保護にとって有意な方向性を生み出す一つの契機と成りうるのではないだろうか。同じく公的機関に身をおき、埋蔵文化財行政の一端に携わる者の一人として、今回の調査の反省点を踏まえ、自省・自戒の念を深く込めつつ、以上の考えを提起するものである。

（文責：百瀬忠幸）

報告書抄録

ふりがな	おじまいせき
書名	小島遺跡
副書名	中山間総合整備事業<木曽中部地区>に伴う発掘調査報告書
著者名	畑中弥寿之　三原良文　今井千恵　百瀬忠幸
編集機関	三岳村教育委員会
所在地	〒397－0101　長野県木曽郡三岳村6311
発行年月日	2003年9月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小島遺跡（おじまいせき）	長野県木曽郡三岳村小島（ながのけんきそぐんみたけむらおじま）	204285	27	35度49分57秒	137度38分00秒	2002.6.11～2002.12.6	13,335㎡	土地改良事業に伴う緊急事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	発見された遺構	発見された遺物	特記事項
小島遺跡 Ⅰ～Ⅳ区	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 中・近世	竪穴住居跡　25軒 掘立柱建物跡　5棟 土坑　453基 柵列状遺構　8条 焼土址　6基 遺物集中区　2箇所 性格不明遺構　1箇所	縄文土器（前～晩期） 弥生土器（後期） 灰釉陶器　土師器 須恵器　陶磁器類 縄文時代の石器類 平安時代の砥石 鉄製品　銭貨など	縄文時代前期末葉および中期中葉～後葉にかけての集落跡。縄文時代中期中葉末段階土器の住居一括資料。縄文時代後期～晩期の土坑群。平安時代の集落跡。特徴的なカマド形態と3時期にわたる集落変遷。配石を伴う土坑。

小島遺跡

— 中山間総合整備事業〈木曽中部地区〉に伴う発掘調査報告書 —

発行日　2003年 9月30日

編　集　三岳村教育委員会
〒397－0101　長野県木曽郡三岳村6311

発　行　三岳村教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社
〒381－0012　長野県長野市柳原2133－5
TEL　(026) 244－0235㈹